関西大学東西学術研究所研究叢刊27

道教・民間信仰における元帥神の変容

二階堂善弘著

関西大学出版部

ISBN4-87354-435-1
C3014 ¥2500E
定価（本体2,500円＋税）

関西大学東西学術研究所研究叢刊二十七

道教・民間信仰における元帥神の変容

二階堂善弘著

関西大学出版部

道教・民間信仰における元帥神の変容
二階堂善弘著
関西大学出版部

関西大学東西学術研究所研究叢刊27

道教・民間信仰における元帥神の変容
二階堂善弘著

関西大学東西学術研究所研究叢刊27

道教・民間信仰における元帥神の変容

二階堂善弘著

関西大学出版部

関西大学東西学術研究所研究叢刊二十七
道教・民間信仰における元帥神の変容
二階堂善弘著
関西大学出版部

関西大学東西学術研究所研究叢刊27

道教・民間信仰における元帥神の変容

二階堂 善弘

関西大学出版部

序

われわれ日本人は八百万の神々を祀り、様々な機会を捉えて祈りを捧げる。中国の人々もまた、それに勝るとも劣らず多くの神々を祀り、様々な形でその信仰を表明している。

中国の道教や民間信仰に表れる神々は複雑多岐にわたり、その神々の由来や来歴を探り、永い時の流れの中での変遷を跡付け、その実像について体系的に語ることはそう生易しいことではない。それには、多彩な道教の経典や文献の精査・体系化と、民間信仰について語る白話小説や戯曲の綿密な分析・検証などが求められる。そのため、この方面の研究に手を染める日本の研究者は非常に少なかった。しかし、ここに、その困難な研究に携わり、緻密な文献の検証と明晰な分析によってわれわれに中国の神々について語る適任者を得、その研究成果の恩恵に浴することができることになった。

著者の二階堂善弘氏は、民間信仰や道教の研究を専門とするが、通俗文学にも造詣が深く、両面から中国における宗教の実像に迫る能力を具えている。さらに、中国大陸や台湾の現地調査も行い、現代の宗教・信仰の実態にも通暁しており、まさに鬼に金棒である。本書では、氏は武神である元帥神を取り上げ、それに関する基本資料として、道教側からは『道法会元』、『法海遺珠』を、民間信仰側からは『三教源流捜神大全』、また通俗文学の側からは『封神演義』、『西遊記』などを取り上げて多面的に論じ、この方面の研究に新境地を開いてみせた。その成果は斯界に裨益するところ大であると確信する。また、その成果のかなりの部分が東西学術研究所の研究員としての活動の中から生み出されたものであることは、研究所にとっても誠に喜ばしいことである。

平成18年９月

関西大学東西学術研究所

所長　橋　本　征　治

目　　次

前言 ——中国における神信仰の変容と元帥—— 1

第一章　通俗文学作品と元帥神 15

1．通俗文学作品に見える元帥神　15
2．『宣和遺事』と『武王伐紂平話』　15
3．『平妖伝』『三宝太監西洋記』における元帥神　19
4．四大奇書における元帥神　22
5．『四遊記』に見える元帥神　27
6．『封神演義』の二十四天君及び他小説に見える元帥神　33
7．元明の雑劇に見える元帥神　37
8．通俗文学作品に登場する元帥神の特色　41

第二章　『三教捜神大全』の構成 49

1．三種の「捜神」資料　49
2．三種の資料の成立について　50
3．三種の資料の影響関係　60
4．『三教捜神大全』増補の項目群　65
5．『捜神記大全』の項目群の編成　70

第三章　道教における元帥神 77

1．雷法の発展　77
2．神霄派の雷霆神　81
3．北極四聖について　83
4．天心法と浄明道系統の法術　90
5．宋元の儀礼書における神将　96
6．白玉蟾の論議について　105

7．清微派の経典における雷神　108
8．『道法会元』と雷法の系譜　110
9．『道法会元』における元帥（一）
——清微・神霄系法術　120
10．『道法会元』における元帥（二）
——神霄系諸派及び天心・地祇・酆都系など　135
11．『法海遺珠』に見える元帥神　147
12．その他の元帥に関わる経典について　154
13．道教における元帥神信仰の発展　154

第四章　元帥各神考 ——— 165
1．『三教捜神大全』の各神の項目　165
2．関元帥と解州塩池故事　165
3．雷部諸天君の姓名　171
4．殷元帥太子出身説話　176
5．馬元帥華光と五顕神　180
6．温元帥及び十太保　189
7．玄壇趙公明の記事について　200
8．王霊官と薩真人の故事　206
9．清源妙道真君について　216
10．呉客三真君と祠山張大帝　220
11．天妃に関する記事の特色　226
12．その他の元帥神について　230
13．儺戯と元帥神　232

結語 ——元帥神の起源と変容—— ——— 247

後記 ——— 253

前言 ——中国における神信仰の変容と元帥——

宗教信仰は、伝統を重んずる一方で、同時に絶えず変容を蒙るものである。

現在、中国各地の寺廟において祭祀される神々は、唐以前の記録には見えないものが多い。また唐より前の資料に見えるものであっても、現在ではその形象が大きく変容しているものが大半であると言ってよい。

例えば、関帝・八仙・媽祖・玄天上帝・二郎神などの神々は、唐以前に神として祭祀されていたとする資料はほとんどないか、あったとしても非常に少ない。これらの神の信仰が隆盛に向かうのは、元代以降のことである。また民間信仰に限らず、仏教の仏菩薩、例えば観音菩薩や弥勒菩薩なども、元代以降には大きくその姿を変えている。

それでは宋から元代にそういった形象が定着したのかと言えば、それも単純にそうと片付けられない。一例として八仙を挙げるなら、呂洞賓をはじめとする八仙は、元代においても人員が確定せず、結局は明末に至って始めて、現在も見られる姿となる。すなわち李鉄拐・漢鍾離・呂洞賓・張果老・韓湘子・藍采和・何仙姑・曹国舅の八名である。元代の記録では、何仙姑や曹国舅が抜けて、むしろ徐神翁や張四郎といった現在では知られていない神仙が入る場合が多い[1]。このように、明末に至ってようやく形象が固まるという例もある。

さらに、明末以降においても神々の形象は変化する。この点で大きな役割を果たしたのは小説『封神演義』である。この小説は神々の由来を説いたもので、小説自体よりも、語り物や芝居にアレンジされて、民衆の間に大流行した。そのために、現在の民間層における神々のイメージは、『封神演義』の影響を強く受けている。例えば哪吒太子は、現在の大半の廟では、風火輪に乗り、槍と輪と布を持つ姿を祀るのが一般的であるが、『封神演義』以前ではこのような形象はほとんど見られない[2]。『封神演義』が流行することにより、神像の形象までもが影響を受けて変化したのである。また『西遊記』

も、同じようにかなりの影響力を持った。台湾やシンガポールなどの各地の民間信仰で、孫悟空を斉天大聖として祀るのは、もちろん『西遊記』の流行以前にはなかったことである。

但し、『封神演義』がすべての神々のイメージに影響を及ぼしたかというと、これも一面的なものでしかない。例えば三目を持つことで有名な二郎神であるが、『封神演義』やそれ以前の形象では、二眼に描かれている。その衣冠も、現在のよく知られている姿と、『封神演義』のものとではかなり異なる。

また、華光神のように、元明代に関帝に勝るとも劣らぬほどの盛んな信仰を有しながら、清代において信仰が衰えた神もある。

つまり現代祭祀される神々の多くは、極めて大雑把に述べるならば、唐代以降に発生し、宋から元にかけて信仰を発展させ、明代にその形象を大きく変容させ、そして清代において定着していったものである。むろん、それぞれの神々の信仰の発展と変容については、当然のことながら大きな差異が存在する。

しかしその中でも特に重要なのは元から明代における信仰の変化であろう。多くの神々の信仰や形象は、この時期に大きく変化し、明末から清代へとつながっていく。

ところが、この時期の神々の変容については不明確な部分が多い。随筆や類書、また通俗文学作品などに見えるこれらの神々の記載は、断片的なものに過ぎないし、また道教経典においては、『道法会元』[3]など一部の資料を除いては非常に少ない。これは『正統道蔵』の編纂された明末までに、新興の神々が、まだ道教神としての十分な地位を獲得していないということが反映している。

神々の信仰に関しては、早期には清の趙翼が『陔余叢考』[4]において様々な角度から考察を行い、さらに黄裳黙が『集説詮真』[5]において、民間信仰に対して批判的な立場から、その由来や変遷について検討する[6]。これらの多くの研究を踏まえて出されたのが、呂宗力·欒保群両氏の『中国民間諸神』であった[7]。この書は『集説詮真』における文献蒐集と考証とを拡充する形

で神々の発展の過程を明らかにした画期的な著作であり、民間信仰研究の最も基礎的な資料となった。また王秋桂・李豊楙両氏の編になる『中国民間信仰資料彙編』[8]も、『集説詮真』などを含め、『神仙鑑』や『古今図書集成』の「神異典」など、重要な文献を網羅する。これらの書の出版によって、中国の民間信仰研究は飛躍的に進展する土台を得た。

しかし、『集説詮真』にしろ、『中国民間諸神』にしろ、多くの神々の考証において、最もその依拠していると考えられるのは『三教源流捜神大全』(以下『三教捜神大全』[9]と称す)である。何故なら、元から明という、その信仰が発展した最も重要な時期において、神々についてまとまった記載を残す書物は他にないからである。これは、『中華道教大辞典』[10]のような、道教サイドに重点を置いて編集された資料においても同様である。

むろん、一方で『三教捜神大全』に記載のない神も多く、また『封神演義』のような、より民間のサイドに傾斜した資料も存在する。それにしても民間信仰を研究する上での『三教捜神大全』の重要度は変わらない。

ただ、これまで『中国民間諸神』などの研究書においては、『三教捜神大全』より以前の資料との比較や、『三教捜神大全』記事そのものの形成については、あまり注意されてこなかった。特に、道教側に『道法会元』という重要な資料があるにもかかわらず、その関連性についてはこれまでほとんど検討の対象になっていない。

本書の目的は主として『三教捜神大全』などの資料に見られる神々のうち、特に「元帥」と呼ばれる一連の神格について、『道法会元』『封神演義』などの諸資料と比較することによって、その変容の過程を探るものである。また併せて『三教捜神大全』それ自体の性格について検討する。何故なら、元帥神が後に発展した関帝や趙玄壇や王霊官といった神々は、現在でも多くの寺廟において盛んに信仰されており、その信仰の変容について調査することは、現代の宗教文化を解明するためにも重要であると考えるからである。

ここでまず、元帥神という武神について考えてみたい。

「元帥」という称号は、一般的には軍隊における統率者を指し、民間信仰

においては、上位の武神を意味するものとされる。類似の称に「将軍」がある。

「将軍」の称については、すでに『上清金真玉皇上元九天真霊三百六十五部元録』[11]などの符籙類の経典に見えている。早期の道教経典においては、信者を守護する役割を担った神を「将軍」や「功曹」「使者」と称することが多い。また『四斗二十八宿天帝大籙』[12]などのやや後の符籙では、「功曹」「霊官」「将軍」「天丁」「力士」なども使われている。ただこれらの武神が「元帥」と呼ばれることは少ない。

「元帥」の称号自体は『春秋左氏伝』[13]にも見え、既に軍隊の上位者を指す称として使用されている。『新唐書』の「百官志」には官名としての「元帥」が見え、隋唐以後では、多く官名として使用されるようになる。特に金と元における事例が著しい[14]。このような傾向を受けてか、元明の雑劇においては、漢初の韓信にしろ、三国の孫堅にしろ、歴史事実を無視した形で、軍の統率者を「元帥」と称する[15]。民間信仰における元帥号の発展は、恐らくこういった通俗文芸の傾向とも無関係ではないだろう。

ただ元帥神の発展は、宋代以降に発展した雷法と密接な関わりを持つ。すなわち、雷法によって使役される神々をもっぱら「元帥」と呼び、またその法術を「元帥法」と称することが多いからである。むろん、雷法においては雷神を使うことが中心となるが、雷神イコール元帥というわけではない。元帥神は「雷部」という天界の役所に所属することが多いが、この他にも火神の属する「火部」、水神の属する「水部」などの役所もある。これら火部や水部の神も、元帥神とみなすべきである。

またこの他にも、元帥神には、「霊官」「天丁」「天君」「使者」「大将」「太保」など様々な称がある。やはり武神にかかわる称であり、またこれらの称号はその神の職種と結びついている場合が多い。「天君」や「使者」は、天界において雷部に属する神々に対して使用される。但し、一つの神が二つの称号で呼ばれる場合も多く、「王霊官」は同時に「王元帥」と呼ばれ、「温太保」は同時に「温元帥」と称されることもある。

本書において「元帥神」と言う場合、これらの種々の名で呼ばれる武神をすべて含むものとする。すなわち、五代・宋以後に発展したと思われる、新しい種類の武神である。より具体的には、鄧天君・辛天君・張天君・陶天君・龐天君・劉天君・苟天君・畢天君・温元帥・関元帥・馬元帥・趙元帥・岳元帥・殷元帥・王霊官などの神格を指すものとする。

これらの元帥神の形象には特徴がある。例えば、王霊官や馬元帥などは三眼を持ち、また鄧天君などは鋭い爪と嘴と、背には羽を持つ。さらに幾つかの元帥神は、三頭六臂などの異形を有している。元帥神は特定の武器を有するのが一般的で、関元帥なら「青龍刀」、趙元帥なら「鉄鞭」、馬元帥なら「金磚」、温元帥なら「狼牙棒」という形である。また関元帥は赤兎馬、趙元帥は黒虎に座すなど、その騎獣も特徴的である。

鄧天君（武当山太和宮蔵）

いまでも各地で行われている道教や民間信仰の儀礼の諸処に、これらの元帥神は深く関わるようになっている。例えば、現在の台湾の道教儀礼においては、次のような元帥神を招請する[16]。

上清天枢院火急天蓬都大提挙元帥　尹元帥
副総管獬豸　呉元帥
北極駆邪院大聖天罡都統　趙元帥
大力天童副統　劉元帥
雷霆剡火律令大神炎帝　鄧天君
玉府大都督青帝判官　辛天君
先天一炁火雷使者暘谷　張天君
雷門　龐・劉・苟・畢四大元帥
三山木郎大神
嘶風舞雨大神廻転　轟使者
玉清　総召邵陽雷公八大秘将
五方斬勘使者
華・璧・蒋・雷・陳五大雷神
五方蛮雷使者
（略）
雷霆響報　劉元帥
洞玄奏告　劉天君
九州社令陽雷　康・劉・呂三使者
天神龍水社五大雷神
上清正一玄壇　趙元帥
酆都朗霊院誡魔上将　関聖帝君
泰山英烈　康元帥
三天持奏　謝・白二元帥
斗口魁神霊官　馬元帥
神威豁落玉壇総管　王元帥
地司太歳至徳武光　殷元帥
地祇翊霊昭武上将　温元帥
温・李・鉄・劉・楊・康・張・岳・孟・韋　十太保
火犀雷府管打不信道法　朱元帥

崔・盧・鄧・竇四大元帥
三元　唐・葛・周三大将軍
玄枢　楊・耿・方三使者
解呪詛使者　顓元帥
北斗　捲廉大将軍
糾察応報　曹使者
北斗君臣使者
九天魁罡黄龍奪命　金元帥
北魁玄範府升天入地　鉄牛大将
陰府　魯元帥
神虎　何・喬二大将軍
九天衛孩催生保産　鄧・趙二金剛元帥
監生　高元帥
青婁　陳大神
霊宝大法司天将天兵都司典史　趙大将
天医朗霊院　高・許・陶・趙四大元帥

また、例えば四川の道壇の儀礼においては、次のような元帥神を招請する[17]。

主壇三十二天雷霆大都督炎帝　鄧天君
副壇八十一天雷霆都総管青帝　辛天君
先天一炁火雷使者　張天君
（略）
八卦洞神　龐元帥
刷鞭走火　劉元帥
左伐魔使　苟元帥
得伐魔使　畢元帥
先天首将　王天君

斗口霊官　馬元帥
地神霄主令　趙元帥
地祇上将　温元帥
皇門太保　康元帥
地司太歳　殷元帥
西台御史　関元帥
火犀滅巫上将糾不信道法　朱将軍
風輪盪鬼　周元帥
（略）
風火如意　田元帥
（略）
斗中　楊・耿二大元帥

民間信仰系の儀礼でも、例えば四川省の「祭財神」の儀礼であれば、趙元帥を中心にし[18]、貴州省の儺戯では、秦天君・趙天君・董天君・袁天君・金天君・孫天君・柏天君・姚天君などの諸元帥の名が見える[19]。

儀礼面のみならず、道観や廟においても、これらの諸元帥を祀るところは多い。特に全真教の道観では、ほとんど必ずと言ってよいほど前殿に王霊官を配し、これを「霊官殿」と称す。また温・関・馬・趙の四大元帥は、武当山の諸宮観をはじめとする多くの廟に祭祀される。北京東嶽廟の後殿には、明代造とされる四大元帥像を配す。蘇州の玄妙観では、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢・岳・温・殷・朱の各元帥を三清殿に祭り、これを「十二天君」とする[20]。上海白雲観においても、南京の朝天観から移送された温・趙・殷・馬・岳・王の各元帥の像を祭祀する。これらの元帥神の像は、明代の遺構をよく保存する道観に祀られることが多い。

さらに、『西遊記』や『封神演義』といった文学作品にも、しばしばこれらの元帥神が登場する。これらの元帥神は、通常では「雷部三十六天将」と称され、三十六神があるとされる。ただ、『封神演義』においては二十四の神がいるとされ、「二十四天君」と称す。その二十四天君の名称は、次の通りである[21]。

鄧天君忠・辛天君環・張天君節・陶天君栄・龐天君洪・劉天君甫・苟天君章・畢天君環・秦天君完・趙天君江・董天君全・袁天君角・李天君徳・孫天君良・栢天君礼・王天君変・姚天君賓・張天君紹・黄天君庚・金天君素・吉天君立・余天君慶・閃電神（即金光聖母）・助風神（即菡芝仙）

このように現在の道教・民間信仰において重要な地位を占める「元帥」であるが、しかし元来は道教の神体系の中には存在しなかったものと推察される。

例えば、六朝期における道教の神体系を示す『真霊位業図』[22]においては、元帥神に該当する神はほとんど存在しないと言ってよい。

北宋期に編纂された『雲笈七籤』[23]には、宋代以前の道教における神体系が詳しく示されているが、その中には元帥神に関する記載はほとんど見えない。また『道門科範大全集』[24]などの総合的な儀礼書にも元帥神らしき神はあまり登場しない。すなわち、元帥神の興起は北宋より後のことであり、また道教の体系においてはさほど重視されていなかったことが窺える。

もっとも、例えば『雲笈七籤』に「天蓬上将、太帝之大元帥也」との記載があるように、天蓬神と天猷神は、古くから「元帥」という呼称を有していた[25]。『道門科範大全集』巻七十七に見える諸神一覧においては、多くの神と共に元帥の名称も見えている。しかしここでは、特にどの元帥であるかという記載はない。

虚無元始天尊・太上大道君・太上老君・昊天玉皇上帝・勾陳天皇大帝・北極紫微大帝・南極注生上帝・東極救苦青玄上帝・承天效法后土皇地祇（略）五嶽五天聖帝・酆都地祇合干元帥・太歳土火温司（略）

唐代以前の道教においては、道教儀礼の醮において、これらの元帥神が登場

することはなかった。そもそも、元帥神の登場する「発表科儀」自体が新しいものとされる。これについては丸山宏氏の指摘がある[26]。

> 発奏儀すなわち発表科儀は、唐末の杜光庭の時代にはまだ存在しなかったものであり、南宋においても、地方ごとに挙行の仕方が一定していなかった新しい科目であった。（略）それらの起源は、古い霊宝斎にはもとめることができず、むしろ法官の儀礼において城隍や土地に牒を発出したり、死霊の変化した陰兵のような存在を駆邪に援用する場合に帖を発出したりする、基層的な民間信仰の客体に多く働きかけるために新しい道法が作り出した儀礼方法に由来する。

しかし一方で『道法会元』になると、一転して元帥神に関して膨大な記録が見られるようになる。『道法会元』の正確な成立年代は不明であるが、『道蔵提要』などでは、書中に第三十九代張天師の張嗣成や趙宜真や王玄真などに言及する記載が見えることから、元末明初に成立したとみなす[27]。すなわち、元末明初の時期には、元帥神は道教神として認識されていたことになる。

そして『三教捜神大全』である。この書には多くの元帥神に関する記載がある。『三教捜神大全』の項目で、元帥神に関すると考えられるものは、以下の通りである[28]。

巻三　義勇武安王
　　趙元帥
巻四　王元帥
　　謝天君
　　混炁龐元帥
　　李元帥
　　劉天君

　　王高二元帥
　　田華畢元帥
　　田呂元帥
巻五　党元帥
　　石元帥
　　副応元帥
　　楊元帥
　　高元帥
　　霊官馬元帥
　　孚祐温元帥
　　朱元帥
　　張元帥
　　辛興苟元帥
　　鉄元帥
　　太歳殷元帥
　　斬鬼張真君
　　康元帥
　　風火院田元帥
　　孟元帥

前にもふれたが、民間信仰における諸神の由来について述べた『集説詮真』や『中国民間諸神』では、その考察の多くを『三教捜神大全』の記事に依拠している。中でも、武神である元帥神については、研究文献の大半が『三教捜神大全』の記事を最も早いものとみなし、その記載を典拠としている。

しかし『三教捜神大全』の記事は、他書からの抜き書きの寄せ集めであることが多い。恐らくこれらの元帥神に関する記事も、本来は別の書籍からの引用であったと推察される。しかしその原典は散逸しており、現在元帥神について考察する場合は、『三教捜神大全』に残された記事に依拠せざるを得ないのが現状である。

ここで注意すべきは、『三教捜神大全』が、必ずしも当時信仰のあった元帥神のすべてを網羅しているわけではない、ということである。実際に『西遊記』や『封神演義』と比較しても、元帥神のうち、有名なものの幾つかは『三教捜神大全』にその名が見えない。例えば、雷部の首座といえば、必ず「鄧天君(鄧元帥)」が想起されるが、この神に関する項目は、『三教捜神大全』には立てられていない。つまり『三教捜神大全』のみに依拠するわけにいかない状況があるのである。しかし、これまでの研究ではこういった点については見過ごされてきたようだ。

さらに『封神演義』の流行という問題がある。

『封神演義』の物語は、『西遊記』と並んで民間に大きく広まった。それは文字を通してのものではなく、もっぱら演劇や語り物を通じて流布していったものである。しかしそれだけに、広範囲に民衆の間に浸透していった。

しかしあまりにも『封神演義』の説話が広まることによって、かえってこれが標準として扱われ、その結果それまでの神々の説話をねじ曲げていくことになった。現在、道士階層に属する者たちであっても、元帥神について「殷の太師・聞仲の配下の二十四天君である」などといった『封神演義』の説を主張する者が多いのはこのためである。

本書は、このような元帥神に関する資料の複雑さを考慮に入れた上で、道教側の資料として『道法会元』『法海遺珠』を、民間信仰側の資料として『三教捜神大全』を、さらに通俗文学の資料として『封神演義』『西遊記』などを取り上げ、その性格の違いに留意しながら、元帥神の変容について考察するものである。

注

1) 拙稿「『八仙東遊記』における「過海」故事の変容」(『東方学の新視点』五曜書房・2003年) 343～368頁参照。

2) 拙稿「哪吒太子考」(『道教の歴史と文化』雄山閣出版・1998年) 167～196頁参照。

3) 『道法会元』(『正統道蔵』正一部S. N. 1220) なお、本書の『道蔵』の表記には、すべてS. N. (シッペールナンバー) を用いた。

4) 趙翼『陔余叢考』(河北人民出版社・1990年)

5) 黄斐默『集説詮真』(王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編第一輯』台湾学生書局・1989年)

6) また、早期の重要な著作として、アンリ・ドレ (Henri Doré) 著『*Researches Into Chinese Superstitions*』(Kennelly訳・リプリント1987年・原版1914年刊)、ウェルナー (E. T. C. Werner) 著『*Myths and Legends of China*』(Dover・1994年リプリント・原版1922年刊) などがある。

7) まず1986年に一冊本の宗力・劉群『中国民間諸神』(河北人民出版社・1986年) が出され、その後、上下二冊本の呂宗力・欒保群『中国民間諸神』(河北人民出版社・改訂版・2001年) が出版された。この改訂版においては多くの記事が追加され、また画像なども写真を使用している。

8) 王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編第一輯』(台湾学生書局・1989年)

9) 胡孚琛主編『中華道教大辞典』(中国社会科学出版社・1995年)

10) ここでは主に『絵図三教源流捜神大全 (外二種)』(上海古籍出版社・1990年) を使用。

11) 『上清金真玉皇上元九天真霊三百六十五部元録』(『正統道蔵』正一部S. N. 1388)

12) 『四斗二十八宿天帝大籙』(『正統道蔵』正一部S. N. 1397)

13) 『春秋左氏伝』僖公二十七年の条に、「作三軍、謀元帥。趙衰曰、郤穀可」とある。ここでは台湾中央研究院「漢籍電子文献 (http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/)」を使用して検索。

14) 前掲台湾中央研究院「漢籍電子文献」の「二十五史」の検索結果では、『金史』と『元史』における事例が多い。

15) 『孤本元明雑劇』(台湾商務印書館・1977年) 第一冊『張子房圯橋進履』、第二冊『虎牢関三戦呂布』など。

16) 大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼——仏教・道教・民間信仰』(福武書店・1983年) 247～248頁。

17) 段明編著『四川省江津市李市鎮神霄派壇口科儀本 (上)』(『中国伝統科儀本彙編3』新文豊出版公司・1999年) 231～232頁。

18) 王躍『四川省江北県舒家郷上新村陶宅的漢族「祭財神」儀式』(『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1993年) 33頁。

19) 王秋桂・庹修明『貴州省徳江県穏坪郷黄土村土家族衝寿儺調査報告』(『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年) 28頁。

20) 趙亮・張鳳林・負信常『蘇州道教史略』(華文出版社・1994年) 128頁。

21) 『封神演義』（人民文学出版社・1979年）992～993頁。
22) 陶弘景『洞玄霊宝真霊位業図』（『正統道蔵』洞真部S. N. 167）
23) 張君房『雲笈七籤』（『正統道蔵』太玄部S. N. 1032）、また蒋力生等注『雲笈七籤』（華夏出版社1996年）。
24) 杜光庭『道門科範大全集』（『正統道蔵』正一部S. N. 1225）
25) 前掲蒋力生等注『雲笈七籤』753頁。
26) 丸山宏『道教儀礼文書の歴史的研究』（汲古書院・2004年）276頁。
27) 任継愈主編『道蔵提要』（中国社会科学出版社・1991年）961～962頁。
28) 前掲『絵図三教源流捜神大全』目次参照。

第一章　通俗文学作品と元帥神

1．通俗文学作品に見える元帥神

元から明にかけての通俗文学作品の多くに元帥神が登場する。これらの作品において幾つかの元帥神は、八仙・玄天上帝・二郎神や哪吒太子などと並び、道教の代表的な神格の一つと見なされている。もっとも、大半の作品ではあまり主要な役割は果たしておらず、むしろ脇役の一つとして登場することが多い。例えば『西遊記』では孫悟空と戦う天将の一部として登場し、『封神演義』では太師聞仲配下の天君として現れる。その役割は、天界の護衛や妖怪討伐の将であることが多い。むろん、『南遊記』のように、元帥神を主役とする小説も存在するが、これは例外的なものと言える。

ここでは、元明の雑劇や『西遊記』『封神演義』『三宝太監西洋記』などの通俗小説を中心に、そこに見られる元帥神の特色について考えてみたい。

2．『宣和遺事』と『武王伐紂平話』

まず道教や民間信仰との関連で、元代の成立と思われる『宣和遺事』と『武王伐紂平話』の二つの小説について見る。

『宣和遺事』は、また『大宋宣和遺事』とも呼ばれ、『水滸伝』以前の水滸説話を伝えるものとして有名な小説である。その内容は主に北宋徽宗代の歴史故事を描く。その作者や正確な成立年代は不明であるが、恐らく元代の成立であることは間違いないと思われる[1]。

『宣和遺事』については、専ら水滸説話との関連から、宋江とその仲間について述べた部分のみが注目されるが、それはこの小説全体からすればむしろ一部分に過ぎない。この小説の主眼は、むしろ徽宗がいかに国を誤って宋をほとんど亡ぼすに至ったか、その過程を描くことにあると言える[2]。ところで『宣和遺事』の文体は、『宋史』からの転用をはじめ、文言体で書かれる部分が圧倒的に多いが、時に白話体を交える。そして水滸故事を描いた箇

所はほとんど完全に白話体を使用する。このように、文体においてこの小説は著しい不統一を呈する。

さて『宣和遺事』の前集には、張虚靖が関元帥を神将として使役し、蚩尤を退治したという有名な話が見えている[3]。

> 徽宗皇帝が言う。
> 「卿はいかなる神を使われたのか。願わくは朕も見てみたい。また神の労苦を労いたい。」
> 張継先が答える。
> 「神は聖駕の起居に従っております。」
> すると忽ちのうちに二柱の神が殿前の庭に姿を現した。一人の神は絳衣に金の甲を着け、青巾に美髯という姿。もう一人の神は甲冑を身につけている。張継先は金甲の将を指して言う。
> 「こちらがすなわち三国蜀の将の関羽にございます。」[4]

この話は『道法会元』[5]の「地祇祓魔関元帥秘法」にも見えており、また『三教捜神大全』の「義勇武安王」の項にも見えている。

また次に王文卿を招いて祈雨の法を行わせたことを記す。この小説で最も重要な役割を果たすのは、林霊素である。しかしながら『宣和遺事』においては林霊素に対して、随所に批判的な言辞が目立つ。

> このとき、温州に方士の林霊素なる者がいた。林霊素は始め名を霊噩、字を歳昌といった。その家は貧しかった。遠く遊んで蜀に至り、道術を趙昇に学ぶこと数年にして、妖術をよく行うようになった。そして五雷法をもってその補とした。宿・亮・淮・泗などの各州を往来し、寺にて乞食して食を得ていた。政和三年に京師に至り、東太乙宮に寓居することになった。その時徽宗皇帝は宮中におり、夢を見た。誰か知ろう、その一場の夢こそが、この妖術方士を宮中に引き入れる要因となったのである。[6]

張継先や王文卿に対しては『宣和遺事』では、ほとんど否定的な評価はしていない。それだけに霊素に対する厳しい態度が際だっている。むろんこの林霊素に対する評価は、ほとんど『宋史』における見方を踏襲しただけのものと考えられる。一方で、雷法それ自体にはそれほど悪い評価を与えていない。

宋江らの水滸故事を描くところでは、後に『水滸伝』においても語られる九天玄女の故事が見られる程度で、それほど神怪的な要素は見られない。

ただ『宣和遺事』において、水滸の豪傑たちを「天罡院三十六員猛将」[7]と称していることは、もっと注意を払うべきであろう。後に『水滸伝』において天罡三十六星・地煞七十二星という名称が定着するために、「天罡地煞星」が元来の水滸説話にあったものと考えてしまいがちであるが、これは、本来は三十六名の豪傑の説話であったものが、水滸説話が発展し、豪傑の数が百八名になったために作り出されたものである。『宣和遺事』では、この三十六将は星神であるとは言っていない。恐らくこれは、『道法会元』などの道教経典の記載にしばしば見られるような「天罡大聖と三十六将」を指すのであり、その意味からすれば、より古い神体系を反映するものであると考えられる。天罡院の将の人数は、そういう意味からは本来は三十七名でよいことになる。『宣和遺事』においては、宋江を天罡大聖とみなしている可能性も高い。

『武王伐紂平話』は、『封神演義』の源流となった作品で、『三国志平話』などと共に残った元代の『全相平話』五種の一つである。この小説自体は殷周の興亡を描いた歴史小説であるが、中には神怪的な要素が色濃く反映されている。

中でも、殷郊、すなわち殷元帥が物語中で重要な役割を果たすことは重要である。そしてこの説話は、『三教捜神大全』に見える殷元帥の記事と共通する部分が多い[8]。

> ある日、紂王の后である姜皇后が太子を産んだ。名を景明王といい、号して殷交（殷郊）といった。これは紂王が泥神を打ったこと

により、天が罰を与えるためにこの者を降したのである。すなわち、この者こそが太歳神であった。[9]

太歳神殷郊が殷の紂王の太子であったこと、その後母を妲己に殺されたことから、紂王に反して周に味方し、紂王や妲己を討ち果たしたとする説話は、『武王伐紂平話』と『三教捜神大全』に共通するものである。ただ『三教捜神大全』では肉球として生じたために、郊外に捨てられ、そのために殷郊という名となったと伝える。『道法会元』にはこの説話に類するものは見えず、また『封神演義』ではこの話は結末を逆にして書き換えられている。

『武王伐紂平話』には、また多くの武神が登場する。殷周が争う戦乱の時代に、天から数多くの凶神が降っているという物語上の設定によるものである[10]。

> 紂王は上奏を聞いて、心中大いに怒る。そして勅命を降して、左将軍の鰕吼に兵五百を率いさせ、太子ならびに胡蒿を追わせる。この者は遊魂神であり、鰕吼は大耗神であった。右将軍の佶留、この者は小耗神であった。紂王はまた四方の門において警備を行わせた。媿鬼と媿歳の二将が任に当たったが、この二人は剣殺の二神であった。[11]

この他、物語中では白虎神・青龍神・豹尾神・夜霊神などの神が下界に降りていることになっている。これらの神の名は『道法会元』などにも見えるが、所謂元帥神とは些か異なる位置づけである。そもそも、『宣和遺事』においても『武王伐紂平話』においても、関元帥や殷元帥が登場するにもかかわらず元帥神という呼称は使用されない。性格が『武王伐紂平話』に近いと思われる『三国志平話』においては、関羽は「関公」と書かれ、神として扱われていることは間違いないと思われるが、元帥という位置づけではない。

ただこれらの作品中では、「元帥」という呼称が軍における最高位を現していることが多い。これは「将軍」に比して、やや高い位置であると考えられているようだ。この傾向は、元明の雑劇においても顕著である。

3.『平妖伝』『三宝太監西洋記』における元帥神

『平妖伝』は、北宋王則の乱を描いた神怪小説である。大別して、二十回の羅貫中作と称する『三遂平妖伝』、及び馮夢龍の増補になる四十回の『北宋三遂平妖伝』の二種類が存在する[12]。いずれも明代の成立になるものであるが、二十回本の方は、神怪的な要素こそ濃厚であるものの、登場する神については印象的なものが少ない。それに比べて、四十回本の方は他の小説と共通する神々が多く現れる。元帥に関しては、第十三回に聖姑姑や蛋子和尚などの妖術使いが、雷法を使って神将を使役する段に次のような記載がある[13]。

> さて壇を設置した次の日には、まず紙・墨・筆・硯などを六甲壇の下に置く。聖姑姑がまず始めに魁罡の二字を踏み、左手には雷印を、右手には剣訣の印を結ぶ。東方の生気を吸って、通霊呪を一度唱え、符を一枚焼く。蛋子和尚と左黜は聖姑姑に倣って同じ動作をする。（略）かくのごとく四十九日にして、紙・墨・筆・硯はすべて霊験を持つようになったので、神将を召す相談をする。（略）聖姑姑が言う。
> 「まさにそのことをそなたらに話そうとしていたところじゃ。実は内部の神将を整えてはじめて外部の神将を召すことができる。鄧・辛・張・陶・苟・畢・馬・趙・温・関、これが外の神将である。眼・耳・鼻・舌・意・心・肝・肺・脾・腎、これが中の神将じゃ。」[14]

雷法と内丹の修養法がここでは密接に結びついており、その意味では『道法会元』巻七十の『玄珠歌』に見える白玉蟾などの説を、別の観点から敷衍したものと言える。ただここで重要なのは、呼び出される神将として「鄧·辛·張·陶·苟·畢·馬·趙·温·関」という十元帥の名が挙げられていることである。鄧天君から畢天君までは雷部の代表的な六天君であり、馬·趙·温·

関は四大元帥とされるものである。明代のこの時点においては、この十元帥を神将の代表的なものとみなす傾向があったことを示す記載であると言えよう。

また『平妖伝』第十五回では、関元帥について以下のような記載がある[15]。

> たちまち皇太子の背後から一人の神が出現する。それはどのような姿であったか。臨江仙の歌があって証となる。
> すなわち「眉は臥蠶に似て丹鳳眼、面は重棗の如くして通紅。鋼刀偃月は青龍を舞わせ、戦袍は緑錦を穿つ、美号してこれ髯公とす。一片の丹心日月に懸け、劉を扶け漢を佐け功を成す。神霊千古英風を播く、馘魔上将と称し、護国神通を顕す」と歌う。
> この尊神は正にこれ、義勇武安王馘魔上将の関聖であった。そもそも聖天子については百神が加護しており、この日は関聖の番であり、虚空にて聖駕をお守りしていたのであった。[16]

ここでは関帝を「義勇武安王馘魔上将」と称していることについては注意すべきであろう。義勇武安王の号については『三教捜神大全』に記載があり、また馘魔上将と称することについては、『道法会元』に記述がある。この記事は、この時期の関帝の称としてこの称号が使われたことを示している。なお、『平妖伝』においては、あまり元帥神という呼称は使用されていない。

『三宝太監西洋記』は、明の羅懋登によって書かれた小説である。明の鄭和の西洋行を題材にしているものの、『西遊記』同様、その内容は神怪的なもので占められている。鄭和の西洋行には、燃灯仏の化身である碧峰長老と、当時の張天師とが付き従っている設定となっているが、元帥神は張天師が使役する神将としてしばしば登場する。『三宝太監西洋記』第十三回には、次のような記載がある[17]。

> 張天師は七七、四十九個の机を並べる。（略）そして剣をかまえ、罡を踏み、斗を歩み、訣を組み、呪文を唱える。（略）その文句に言う。
> 「一撃して天門開き、二撃して地戸裂け、三撃して馬・趙・温・関、壇に赴く。」（略）
> 大音響が鳴り響くところ、四名の天神が中空に出現した。すべて同じ身の丈で、その長さは三十六丈、同じような身体の大きさで、十八かかえほど。その一人目は顔が白く、まるで雪のような白さ。（略）二人目は黒く、鉄のような黒さ。（略）三人目は青く、まるで藍のような青さ。（略）四人目は赤く、血のような赤さ。（略）顔が白いのは馬元帥で、顔が黒いのは趙元帥で、顔が青いのは温元帥で、顔が赤いのが関元帥であった。この四名の元帥神は、揃って天師に向かって礼を行い、揃って同じ問いを発する。
> 「天師が命を下して我々をお呼びになったのは、どのような御用のためでございましょうか。」[18]

ここでも呼び出した術者が張天師という高位者ではあるものの、元帥神が使役される存在であることは、『平妖伝』の場合とそう変わりはない。なお、ここではやはり元帥を代表するものとして、温・関・馬・趙の四大元帥が考えられている。その姿も、ほとんど現代におけるこれら元帥の一般的なイメージと異なるところは無い。例えば馬元帥の描写などは、「一に元帥と称し、二には華光と言う。眉の間に三眼が生じて天堂を照らす」と書かれており、完全に一般的な華光神の形象と同じものになっている。

また第四十九回では、同様に張天師が王霊官などを使役する場面がある[19]。

> 言い終わらないうちに、張天師は剣の先において一枚の符を焼く。そして口の中で呪文を唱え、「来たれ」と叫ぶ。
> すると真南の中空から一名の天神が現れる。その顔は赤きこと赤炭のごとく、髪は朱砂に似て、渾身の上下、すべて火が燃えさかるよ

うであった。眼を怒らせ眉がそびえ立ち、手には金鞭を執る。天神は天師の方に向かって礼をして、言う。
「天師が小神を呼び出したるは、何のご命令あってのことでしょうか。」
天師が目を上げて見ると、それは赤胆忠良の王元帥であった。(略)
天師は急いで何枚もの符を焼く。すると天から何名かの神が現れた。天師が顔を起こして見ると、それは龐・劉・苟・畢の四名の元帥であった。[20]

すなわちここでは始めに王霊官、次に龐・劉・苟・畢の四天君が現れて、張天師の命令に従うこととなる。

『三宝太監西洋記』の作者である羅懋登は、同時に『三教捜神大全』と同類の書である『捜神記大全』の編者でもある。だが奇妙なことに、『捜神記大全』の方には元帥神の項目がほとんど無い。これは例えば八仙など『三宝太監西洋記』に登場する他の神々についても同様である。恐らく『捜神記大全』と『三宝太監西洋記』では、その編集の方針がそもそも異なっているため、このように差が生じたものであろう。

4．四大奇書における元帥神

『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』、すなわち明の四大奇書の記載には、明の小説の中でも比較的古い伝承が反映されているものが多い。

この中で『三国志演義』は、むろん全編にわたって関羽が活躍するわけであるから、関元帥についての重要な資料であると言える。ただ、『三国志演義』には神怪的な要素が少ないため、実際には元帥神に関連する記載はあまり無い。関羽はこの書の中では、「関公」と呼ばれ、一貫して神としての扱いを受けているのが特徴的である。

これに比して、神怪小説である『西遊記』には、元帥に関する豊富な記載が残されている。もっとも、『西遊記』では猪八戒が天蓬元帥の下凡とされているため、まず元帥神の中でも天蓬元帥に関する記載が圧倒的に多い。

ところで『西遊記』においては、雷部の元帥たちは、何故か四天王の配下にあって天界の門を守護している場合が多い。すなわち、第四回には次のような記載がある[21]。

孫悟空が太白金星より先に南天門の外に到着し、まさに雲を収めて進もうとすると、突然増長天王が龐・劉・苟・畢・鄧・辛・張・陶の各元帥を率いて前に立ちはだかる。これら大力天丁たちは槍や刀や剣戟をかまえ、天門を塞ぎ、悟空をあえて進ませようとしない。[22]

ここでは雷部の天君たちは、増長天王の配下にあって南天門を守護する役目を与えられている。ここで元帥たちを「天丁」と称しているのは注意が必要である。『道法会元』などの多くの経典で、元帥と類似の呼称に「天丁」がある。

『西遊記』においては、反乱を起こした孫悟空を討伐するに際して、托塔李天王・哪吒三太子・二十八宿・巨霊神、それに二郎神などの神々が派遣され、その中心となっているが、四天王や多くの天君たちも天界の神将としては重要な存在である。また、太上老君の八卦炉から逃げ出した悟空を、単身防ぐのは王霊官である[23]。

孫悟空は暴れ回って通明殿の内、霊霄殿の外に至る。幸いにそこには佑聖真君の配下である王霊官が番をしていた。王霊官は孫悟空が縦横に暴れるのを見ると、金鞭をもって進み、その前に立ち塞がった。(略)
王霊官と孫悟空はひとかたまりになって戦うが、勝負はつかない。これに先んじて佑聖真君は、雷府に向かって命令書を送り、三十六名の雷部の神将全員を出動させ、一斉に孫悟空を囲ませた。[24]

ここで王霊官らを使役する将として、佑聖真君の名が挙げられている。「佑

聖真君」との号を持つ神は複数あるが[25]、ここでの佑聖は、恐らくは玄天上帝のことを指していると思われる。『西遊記』においては、雷部の神将は、時に四天王の将であり、時に雷声普化天尊の配下であり、また玄天上帝の部下となるが、これは定義が厳密でないのはもとより、幾つかの伝承が複合されているものと考えられる。南天門に龐・劉・苟・畢・鄧・辛・張・陶などの諸天君を配するのは、この他『西遊記』第三十一回・五十五回にも見えている。

この他、広目天王の配下に温・関・馬・趙の四大元帥が置かれるという記載もある。すなわち『西遊記』第五十一回には次のような記載がある[26]。

> 孫行者はまっすぐ南天門外に至る。頭を上げてみれば、早速広目天王が出迎え、長揖の礼をして言う。
> 「孫大聖はどちらにおいでで。」
> 孫行者は答える。
> 「ちょっと用事があって玉帝にお目にかからなければならんのだ。おぬしはそこで何をしておるのか。」
> 広目天王は言う。
> 「今日はそれがしが南天門を巡視する当番でござる。」
> その言葉が終わらぬうちに、また馬・趙・温・関の四大元帥が出てきて、礼をして言う。
> 「これは孫大聖、お迎えもいたさず失礼しました。まずはお茶でもどうぞ。」[27]

第五十一回のこの段では、孫行者の要請により、天界の将に下凡している者が無いかどうかを玉帝に調査してもらうこととなる。時に「雷霆の官将」として、「陶・張・辛・鄧・苟・畢・龐・劉」の各天君の名前が挙げられている。この後、哪吒太子と鄧・張天君に孫悟空への加勢が命じられるのであるが、そこでは鄧天君の名前を「鄧化」とし、張天君の名を「張蕃」としていることは注意すべきであると思われる。道教経典の多く、例えば『道法会元』などでは、鄧天君は「鄧伯温」、張天君は「張元伯」という名前であるとするのがほとんどである。

なお、広目天王の下に温・関・馬・趙四大元帥がいるとすることは、この他、第五十四回にも見えている。

一方で『西遊記』第八十七回では、孫悟空が雷部の神々を出動させるため、九天雷声普化天尊に願い出ることになっている。恐らくこの場合は降雨のことを司るため、本来の役職に則ったものとなったのであろうが、雷部の神々の役割の多面性を示す例と言えよう。なおこの段で呼び出される天君は、「鄧・辛・張・陶」の四名と、それに雷母にあたる「閃電娘子」である。

天界の門を守護する四天王の配下に雷部の元帥が配置されるというのは、『西遊記』に目立った特色であるが、他ではあまりこのような例を見ない。これは四天王の配下に三十二将があり、増長天王の下に韋駄天など八将軍がいる、といった仏教における神将の配列を、そのまま雷部の三十六将に置き換えたものと推察される。

『水滸伝』においては、豪傑たちの形容に、李天王や天蓬元帥などの天界の将の名を挙げる場合が多い。第十三回において楊志と索超が戦う場面に次のような記載がある[28]。

> こちら社稷を扶持する毘沙門托塔李天王のようであり、あちら江山を整頓する掌金闕天蓬大元帥のようである。（略）
> かたや巨霊神の憤怒して、大斧を揮って西華山を切り開くがごとく、かたや華光蔵の怒りを生じて、金鎗によって鎖魔関を突き抜くがごとくである。[29]

ここでは華光すなわち馬元帥の名も挙げられている。同様の記載は、第三十八回の李逵と張順が争う場面にも見える[30]。

> かたや馬霊官の白蛇に托化するがごとく、かたや趙元帥の黒虎に投胎するがごとし。[31]

ここでは馬・趙の二元帥を取りあげている。天蓬元帥や李天王は、『西遊記』においても重要な天界の武将であるが、この後の小説ではむしろあまり目立たない存在となる。

『水滸伝』第七十一回において百八名の豪傑が勢揃いし、斎醮を行う場面があるが、「崔・盧・鄧・竇」の四将の名がそこに見えているのは注意すべきであろう[32]。同様の記載は『金瓶梅』にも見えている。すなわち、第三十九回で西門慶が玉皇廟において道士に祭祀を行わせる段に、次のような記述がある[33]。

> これは早朝開啓にして、無佞太保康元帥と九天霊符監斎使者に請う。斎儀を厳禁ならしめよ。この一枚は、正法馬・趙・温・関の四大元帥と、崔・盧・鄧・竇の四大天君に請う。壇を監し門を監せよ。[34]

ここでは康元帥や四大元帥の他、崔・盧・鄧・竇といった、他の作品にあまり見られない天将の名が見えている。恐らく『水滸伝』と同様に、当時の儀礼の様子を反映しているものと思われる。

さて、『水滸伝』には、容与堂本などの百回本の他に、田虎・王慶故事が追加された百二十回本がある。この増補部分の故事については、明末の風潮を反映してか、神怪な要素が非常に強くなっている。特に公孫勝と喬道清の法術合戦の部分などにその傾向が顕著に現れている[35]。この増補部分の登場人物の中で、河北の将である馬霊は、妖術を使い、金磚を使い、風火の二輪に乗り、また戦の時は三眼になるなど、完全に馬元帥を模したものとなっている。そもそも、馬霊なる名前からして「馬霊官」から取ったものであろう。このような武将が登場することは、本来の『水滸伝』の流れからすれば違和感があるが、増補者は、あまり深くは考えなかったようである。これはまた当時馬霊官信仰が盛んであったことの反映であるとも考えられる。

総じて、四大奇書においては、陶・張・辛・鄧・苟・畢・龐・劉の雷部の天君と、温・関・馬・趙の四大元帥が天界の武神の代表的なものと考えられ

ているようだ。ただ、『水滸伝』で「霊官」といえばすぐに馬霊官を指すのに対し、『西遊記』では王霊官を指していることは、その作られた年代の相違を反映するものである可能性が高い。

5．『四遊記』に見える元帥神

『四遊記』は幾つかの出自の異なる小説をまとめたもので、『八仙東遊記』『北遊記』『南遊記』と、それに節略本の『西遊記』から構成されている。

呉元泰の『八仙東遊記』は、『上洞八仙伝』ともいい、八仙信仰に大きな影響を与えた小説である[36]。叙述の中心となるのは当然のことながら八仙であるが、物語の終盤に八仙と龍王が争い、玉帝が元帥神を派遣することから、四大元帥が登場する[37]。

> 報告を聴いて玉帝は大いに怒り、即座に関、温の二元帥に対し、天兵二十数万を率いて、空に満ち野を埋めるほどの陣を配し、龍華会に赴いて八仙を捉えるように命じた。また同時に馬、趙の二元帥には、二十万あまりの兵を率いて助勢するように命じた。[38]

やはりここでも真っ先に討伐のために派遣されるのは、温・関・馬・趙の四大元帥である。

『南遊記』は、『五顕霊官大帝華光天王伝』とも称し、華光、すなわち馬元帥を主とした小説である[39]。このような小説が存在すること自体が、明末における馬元帥信仰の隆盛を物語るものであろう。作者は明の余象斗であるが、恐らく先行する何らかの資料に基づき、また『西遊記』や『八仙東遊記』などの内容を踏まえた上でこの小説を書いたものと推察される。

その内容は、もと釈迦如来の弟子であった妙吉祥が罪を得て下凡し、投胎を繰り返しながら、天界や地獄などで大暴れをし、最後には華光天王として天界の武将として封じられるというもので、やや荒唐無稽な話が展開する。この華光の説話は、『三教捜神大全』の馬元帥の話とよく似ており、恐らくは同源の説話に取材しているものと考えられる。またそれは亡失した戯曲

『華光顕聖』にも共通するものであり、可能性としては『華光顕聖』劇の説話を『三教捜神大全』馬元帥の項目と『南遊記』が共に引き継いでいるものと思われる[40]。

『南遊記』は馬元帥を主とするものであるから、当然のことながら、元帥神に関する豊富な記載が見られる。ここでの華光の姿は、三眼で、火の化身であり、金磚と火鎗を武器とし、風火輪に乗るというものである。

ところで『南遊記』では、雷部の三十六元帥は完全に玄天上帝の配下であると考えられている[41]。

> 華光は逃げて天界の北方の地に来る。ここはすなわち、玄天上帝が守護する場所であった。華光は玄天上帝を一目見るや、話をしようともせず、いきなり手の金磚で打ちかかった。玄天上帝は手に持っていた七星黄旗を使って、金磚を巻き取ってしまう。（略）華光は身体を全く動かすことができず、泣いて玄天上帝に懇願する。
> 「わたしは鄧化に陥れられてこのような事態になったので、やむを得なかったのです。今日こうして玄天上帝さまに捉えられた以上、慈悲心をおこしていただき、助けていただけませぬか。」
> 玄天上帝は言う。
> 「そなたが本当に邪悪な行いを改めて正に帰すというならば、許してやらぬでもない。わしの部下はいま三十五名の大将がおる。そなたがわしに帰順するというなら、すべてで三十六名となる。」[42]

これと同じような考え方は、同じ余象斗撰の『北遊記』にも見えるが、『四遊記』の中でも『八仙東遊記』や『西遊記』においては明確には示されていない。恐らく明末のこの時期における玄天上帝信仰の隆盛と無縁ではないと考えられる。

なおこの物語では、鄧天君は悪役に近い形で登場し、その名を「鄧化」とする。これは『西遊記』などと同様である。恐らく民間においては、鄧天君の名は鄧化であるという伝承があったものと推察される。

『南遊記』では後半部において、地獄に落ちた母親のために酆都へ赴くところがあるが、ここで酆都の番人として登場するのは関元帥と韓元帥である。これにより、関元帥が酆都すなわち地獄と縁の深い神であるという考えがまだ残っていることが分かる。ところで、ここに「韓元帥」とある元帥神は、ほとんど『道法会元』などにも記載が無いものである。

『北遊記』は、『北方真武祖師玄天上帝出身全伝』と称するように、玄天上帝が中心となった小説である[43]。なお『南遊記』と『北遊記』については、それぞれ南方と北方に縁の深い神が関わるというだけであり、『西遊記』と異なり、物語中に旅などが設定されているわけではない。

『北遊記』では、前半が玄天上帝の出身伝に当てられているものの、後半は三十六元帥を玄天上帝が配下に収めていく過程を描く。そのため、元帥神に関する記述はかなり多い。

まず巻二の「祖師下凡収黒気」の段では、趙公明すなわち趙元帥を服す[44]。

> 玄天上帝が言う。
> 「この黒気はどうしてこのように集まっているのですか。」
> 三清のうち、上清が答えて言う。
> 「この気はすなわち、黒煞神が世にあって乱をなしているために起こったものじゃ。黒煞神は黒面大王と号し、その手下には七名の将がいる。一人目は名を李便といい、二人目は白起、三人目は劉達、四人目は張元伯、五人目は鍾士貴、六人目は史文恭、七人目は范巨卿。そして黒煞神は姓を趙といい、名は公明という。文明とも号しておる。」[45]

この記述は幾つかの点で興味深い。すなわち、瘟神として趙公明と共にあった鍾士貴などの将の名が見えること、また張元伯の名や、『道法会元』「正一玄壇趙元帥秘法」において趙公明の部下とされる白起などの名も見えている。またここでは、黒煞神と趙公明を完全に混同している。

巻三の「祖師遇着金刀難」では、関羽の刀が精となっているのを、関羽の力を借りて服するという説話が語られる。その功績によって玉帝は関羽を関元帥に封ずる[46]。

> 玉帝の勅旨が至る。それによれば、関羽を崇寧王道太真君・朗霊関元帥の職に封ず。日中は天門を守護し、夜は酆都地獄を管理する。世を巡察するに当たっては、左手に金烈沙刀を執り、右手に紫微大帝の勅印を執り、左足には一擂神を踏み、右足には一火車を踏み、玄天上帝を補佐して魔を降すよう。[47]

ここでの関元帥は、『西遊記』に見られたような天の門を管理する性格と、『道法会元』に見られるような酆都治獄の管理の性格とを併せ持つように設定されている。恐らく幾つかの伝承を折衷させた結果、このような神格になったのであろう。関元帥に限らず、『北遊記』や『南遊記』における元帥神は、その多くが幾つかの伝承を統合した結果、かえってその性格が曖昧になってしまっている。なお、ここで関元帥が王霊官の如く火車を踏む形象になっていることは興味深い。

このように多くの元帥神を配下に加えていき、最後には三十六員の元帥がすべて揃うことになる[48]。

> 万法教主神功妙済許（遜）真君、海瓊白（玉蟾）真君、果厳教主済微伝教祖（舒）元君、洞玄教主辛真君、清微教主魏（華存）元君、混元教主路（時中）真君として封ずる。
> 趙公明を都掌金輪如意趙元帥に、関羽を顕霊関元帥に、龍興王と田華を苟、畢の二元帥に、亀蛇を水火二将に封ずる。張健を尽忠張元帥に、龐喬を混炁龐元帥に、副応を糾察副元帥に、華光を正一霊官馬元帥に、朱彦夫を管打不信道朱元帥に封ずる。催、盧二将軍の位を与える。李伏龍を先鋒李元帥に、両田を降妖辟邪両元帥に、鄧成、辛江、張安をそれぞれ鄧、辛、張元帥に封ずる。

> 汪無別、寧世誇はそれぞれ汪、寧二太保に封ずる。劉俊は玉府劉天君に、雷瓊は威霊瘟元帥に、石成は神霄石元帥に、広沢は風輪周元帥に、謝仕栄は火徳謝元帥に封ずる。離婁、師曠は聡明二賢とする。康席は仁聖康元帥に、高員は降生高元帥に、孟山は酆都孟元帥に封ずる。
> 王鉄、高銅は虎丘王、高二元帥に封ずる。王忠は九州豁洛王元帥に封ずる。雷公は九天霹靂大将軍とし、楊彪は楊元帥に封じ、殷高は地司太歳殷元帥とする。鉄頭を猛烈鉄元帥に、朱佩娘を雷都電母に、朱孛娘を月孛天君に封ずる。[49]

実際には三十六名以上の神が記載されている。この記述も、多くの問題を含んでいる。

まず、冒頭に許遜・白玉蟾・祖舒・魏華存・路時中といった祖師たちの名を挙げている点は注意すべきであろう。これは第三章で後述する通り、『道法会元』などの清微系の文書に多く見られる形である。恐らくはこの記載の元になった資料では、これらの祖師を分けていたはずだが、ここでは封ぜられる元帥たちと区別が無くなってしまっている。どうやら『道法会元』のような、「主法」があり「神将」がいるといった法術の形式の意義は、この時点ではかなり薄くなっているのであろう。

元帥の名前であるが、例えば鄧天君は「鄧成」となっている。これは同じ余象斗が作ったはずの『南遊記』の「鄧化」とも異なっている。恐らく余象斗は、『南遊記』と『北遊記』をそれぞれ別の資料に取材して作成したものであろう。例の「韓元帥」が『北遊記』には登場しないのも、同じ理由によるものと考えられる。

また、ここに見られる三十六元帥の名称については、その鄧天君など一部を除いて、ほとんど『三教捜神大全』に見えている。「温瓊」が「雷瓊」になるなど、若干名の異なる部分もあるが、『三教捜神大全』と『北遊記』では、ほぼ一致する。もともと三十六元帥といった場合は、その数が多いこともあって、人員の変動も激しい。玄天上帝の他に、保生大帝もその部下に三十六

元帥を置くという。幾つかの資料で挙げる「三十六元帥」とは、次のような人員である[50]。

> 蒋光、鍾英、金游、殷郊、鄧郁光、辛漢臣、張元伯、陶元信、龐煜、劉吉、苟雷吉、畢宗遠、趙公明、関羽、馬勝、温瓊、王善、康応、朱彦、呉明遠、李青天、梅天順、熊光顕、高克、石遠信、孔雷結、陳元遠、林大華、周青遠、紀雷剛、崔志旭、江飛捷、賀天祥、呂魁、方角、耿通

この中の鄧・辛・張・陶天君や、温・関・馬・趙などの著名な元帥は一致するが、他はあまり共通性が無い。これは後述する『封神演義』の二十四天君なども同様である。なお、ここには『道法会元』に見られた神将の名が幾つか見える。

しかし、『三教捜神大全』と『北遊記』では、人員及び名称の一致する率がかなり高い。これは恐らく、余象斗の基づいた資料の中に『三教捜神大全』があったためであると推察される。むろん、神の名や説話の不一致など、それだけでは片づけられない問題も多いが、少なくとも『三教捜神大全』に類した書を見ていたことは間違いないと思われる。以下に、『三教捜神大全』と『北遊記』の元帥についての対照表を掲げる。

『三教捜神大全』	『北遊記』
太歳殷元帥・殷郊	太歳殷元帥・殷高
	鄧元帥・鄧成
辛興苟元帥	辛元帥・辛江・苟元帥・新興王
張元帥・張純	張元帥・張安
混炁龐元帥・龐喬	混炁龐元帥・龐喬
劉天君・劉後	玉府劉天君・劉俊
田華畢元帥・田華	畢元帥・田華
趙元帥・趙公明	金輪如意趙元帥・趙公明

義勇武安王・関羽	顕霊関元帥・関羽
霊官馬元帥	正一霊官馬元帥・華光
孚祐温元帥・温瓊	瘟元帥・雷瓊
王元帥・王悪	九州豁洛王元帥・王忠
康元帥	仁聖康元帥・康席
朱元帥・朱彦矢	朱元帥・朱彦夫
高元帥	降生高元帥・高元帥
石元帥	神霄石元帥・石成
	風輪周元帥・広沢
田呂元帥・呂雨	
謝天君・謝仕栄	火徳謝元帥・謝仕栄
李元帥・李封	李元帥・李伏龍
王高二元帥・王鉄・高銅	王元帥・王鉄・高元帥・高銅
党元帥	党元帥・党帰藉
副応元帥	糾察副元帥・副応
楊元帥・楊彪	楊元帥・楊彪
鉄元帥	猛烈鉄元帥・鉄頭
斬鬼張真君・張巡	尽忠張元帥・張健
風火院田元帥	田元帥・田乖
孟元帥・孟山	酆都孟元帥・孟山
	雷都電母・朱佩娘
	催盧将軍
	両元帥・両田
	汪太保・汪無別
	寧太保・寧世誇

6．『封神演義』の二十四天君及び他小説に見える元帥神

『封神演義』は『西遊記』と並び、明の代表的な神怪小説であり、芝居や講談を通じて民間信仰に与えた影響は非常に大きなものがある。

ただ一方で『封神演義』はその影響力から、かえって民間信仰の説話をねじ曲げることがあったことも事実である。例えば、『三教捜神大全』を見れ

ば、趙元帥は秦の時代の人であると書いてあるにもかかわらず、『封神演義』に登場することから、これを殷周代の人と考えてしまうこととなった。また哪吒太子も、本来は唐以後に中国で信仰が盛んになった仏教神であるにもかかわらず、『封神演義』で活躍するために、これを周代の人物と考えるようになった。このような例は、『封神演義』に関しては枚挙にいとまがない[51]。

元帥神に関しては、殷元帥や趙元帥が『封神演義』では非常に目立つ存在となっている。しかしいずれも截教側に味方し、非業の最期を遂げることになってしまった。これに限らず、『封神演義』においては、説話の書き換えがかなり恣意的になされている。

雷部の天君に関して、『封神演義』ではこれを明確に雷声普化天尊（聞仲）の配下とする。『封神演義』には玄天上帝が登場せず、また作者は時に過剰に道教経典を意識するため、このような配置になったものと考えられる。また雷部の神は三十六元帥ではなく、二十四天君とされている。その二十四天君については次の通りである[52]。

鄧天君忠
辛天君環
張天君節
陶天君栄
龐天君洪
劉天君甫
苟天君章
畢天君環
秦天君完
趙天君江
董天君全
袁天君角
李天君徳
孫天君良

栢天君礼
王天君変
姚天君賓
張天君紹
黄天君庚
金天君素
吉天君立
余天君慶
閃電神（即金光聖母）
助風神（即菡芝仙）

ここに始めに名が挙げられている鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢の諸天君については、これまでの多くの資料に名が見えるもので問題は無い。しかし、秦天君から余天君までと、金光聖母などは、どのような資料に基づいているのか不明である。諸天君の中には、『道法会元』の中に見える姓の者もいるが、鄧天君を「鄧忠」とするなど、名自体を書き換えてしまっているので、確認しにくい。

『封神演義』において、雷部の神がこの二十四天君とされてしまったことの影響は大きく、現在行われている儀礼の中にも、この説をそのまま援用している場合が多い。例えば、貴州省徳江県の儺戯の儀礼文書では、まさにこの二十四天君が登場する[53]。

元帥神についての記載は、その他の小説においても随所に見えている。

『警世通言』巻十五の「金令史美婢酬秀童」では、まず挿話として、蘇州玄都観の道士張皮雀の話を引く[54]。

張皮雀は玄都観にあること五十余年であった。（略）
皮雀は呵呵大笑したために、雷部の天将の怒りに触れ、雷に打たれて死んだ。後にある人が徽州の商家にて扶鸞を行ったところ、皮雀が降った。その自ら言うに、「わしはもと天上の苟元帥であった。

俗界の縁がすでに満ちたので、雷部の他の将に請われて天に戻り、将班に帰ったというわけじゃ。」[55]

この話は幾つかの点で興味深い。まず蘇州の玄都観、すなわち玄妙観において雷法が盛んに行われていたこと[56]、次に苟元帥がこのように下凡する存在として考えられていたこと、また当時扶乩が行われ、そこに雷部の神が姿を現すことがあったことなどである。苟元帥が登場するのも興味深い。

明代にはまた道教の教えを小説で宣揚しようとした一連の作品群がある。鄧志謨の『飛剣記』『呪棗記』『鉄樹記』などである[57]。このうち、『飛剣記』は呂洞賓を中心にその故事を描いたもの、『呪棗記』は薩真人と王霊官の説話を説いたもの、『鉄樹記』は許真君の龍退治の話を中心としたものである。

ただ『呪棗記』は王霊官の話が大きいとはいえ、あまり元帥そのものに関する説話は見えない。この小説は、後半部の地獄の様相を描くところに異様に力を注ぐ。恐らくは人に向かって悪行を行わぬようにしむけるのが目的であったと思われる。

王霊官は、ここでは始めは悪行を行う霊であったものが、薩真人によって調伏され、法を守る善神になったとされる。始め王悪という名であったものが、王善と改めたとも記される。この話自体は、ほぼ同じものが『三教捜神大全』の「薩真人」の項目と『北遊記』の中にも見えている。

なお、『楊家府演義』にも、楊家将の面々が元帥神に扮して陣を破るという記述が見える[58]。

孟良装関元帥、焦賛扮殷元帥、岳勝扮趙元帥、張蓋扮温元帥、劉超扮馬元帥。

ここで名が見えるのは、関元帥・殷元帥・趙元帥・温元帥・馬元帥である。すなわち、四大元帥に殷元帥を加えた配置となっている。

7．元明の雑劇に見える元帥神

元明代の雑劇の中にも元帥神はよく登場する。ここでは、『元曲選』『孤本元明雑劇』などの資料に見える元帥神について見てみたい。

元帥神が登場するのは雑劇の中でも、神仙や道士などが妖怪や魔物などを退治する「駆邪劇」であることが多い。ここでの元帥神は、『平妖伝』や『三宝太監西洋記』と同様に、神仙などに使役される性格を持つ。

例えば、雑劇『薩真人夜断碧桃花』では、張珪という人物が、状元に及第した息子に取り憑いた妖精の件で悩み、その依頼を受けた薩真人が、五雷法を駆使して妖魔を退治するという劇である[59]。

われは太上老君の急急如律令を奉るなり。一たび撃てば天清く、二たび撃てば地霊たり、三たび撃てば五雷至る。速かに真の姿を現せ。（略）老君は我に駆邪の剣を賜う。（略）わが持つこの水は凡水にあらず、九龍が吐き出して天地を浄めしものなり。[60]

ここで直符使者が現れ、そして命を伝えたあと、温・関・馬・趙の四大元帥が登場する。すなわちこの劇においても、駆邪の神将としては四大元帥をその代表と見なしていたと考えられる。

また雑劇『太乙仙夜断桃符記』[61]の第四折では、法術の使用場面で太乙仙がほとんど同じ呪文を使って五雷法を駆使する。そしてその場面に見られる神の名は、次の通りである。

上界元始天尊
三清四帝
五師六神
侍香金童
伝言玉女
南斗六星
北斗七星

東斗五星
西斗四星
十二宮辰
二十八宿星君
雷公電母
風伯雨師
雷霆大将
主行利兵
鄧・辛・張・陶四大元帥
龐・劉・苟・畢四大元帥
神霄雷符馬元帥
金輪如意趙元帥
神霄無拘温元帥
馘魔上将関元帥
本壇摂令城隍
土地等神

やはり雷部の神将として考えられているものは、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢と、温・関・馬・趙の各元帥であることが分かる。『時真人四聖鎖白猿』[62]でも、駆邪の中心となるのは、温・関・馬・趙の四大元帥である。なお、『辺洞玄慕道昇仙』[63]では、鍾離権・呂洞賓の二仙と四大元帥が共に登場する。

ただこれらの雑劇に見られる神将の体系は、時に明の小説に見られるものと、若干性格や人員において異なる面もある。例えば、多くの雑劇においては、『道法会元』などに見られる「北極駆邪院」を非常に重視し、その主帥である駆邪院主を神将の元締めと見なす。『二郎神酔射鎖魔鏡』[64]『二郎神鎖斉天大聖』[65]『灌口二郎斬健蛟』[66]などにおいて、その傾向が特に顕著である。『二郎神鎖斉天大聖』においては、以下の記述のように、「北極駆邪院主は玄天上帝である」と明確に示されるが、その他の資料では若干曖昧な点

もある。

駆邪院主は言う。
「(略) 父は浄楽国王、母は善勝婦人。胎内にあること十四ヶ月、すなわち太上老君の八十二番目の変化、母の左脇から生じた。(略) 玉帝は貧道の功績あるを称え、勅して九天採訪遊奕使・北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝に封じ、北極駆邪院都教主とした。」[67]

駆邪院主の命により派遣される神将は、二郎神趙昱と梅山七聖・哪吒三太子などの他、巨霊神、天丁神などがある。「天丁」の称号も『道法会元』に見えているが、「霊官」と同様に、武神の一種として考えるべきであろう。

『二郎神酔射鎖魔鏡』劇は、二郎神と哪吒太子が中心となる話である。二郎と哪吒の両神が宴会のさなか、誤って天界の宝物である鎖魔鏡を壊してしまうことから、その鏡に縛り付けられていた牛魔王と百眼鬼が逃げ出し、これを北極駆邪院の命により連れ戻す、というものである。この劇で北極駆邪院主の配下として登場するのが韓元帥である。先に見たように、『南遊記』にもこの韓元帥は関元帥の同僚として登場する。むろん『道法会元』には夥しい数の神将が登場することから、姓が韓である元帥もいないわけではない。ただ、この戯曲や『南遊記』での韓元帥がいかなる出自を持つかについては、不明な点が多い。或いは漢初の三傑の一人韓信が元帥神になったものであろうか[68]。

馬元帥華光が活躍する劇も多い。作者不明の『釈迦仏双林坐化』[69]は、釈迦如来が入滅するにあたって邪魔をしようとたくらむ妖怪を、華光が主となって退治する劇である。この劇に登場する神のほとんどは四天王や摩利支天・韋駄天など、仏教系の神であるが、天蓬と天猷の二元帥も活躍する。そして華光は五顕神と千里眼・順風耳を引き連れて登場する。この記載からすると、この劇が書かれた時点では華光と五顕神は別の神と考えられていたようだ。この他、楊景賢の『西遊記雑劇』[70]においても、華光は目立つ存在

である。『宝光殿天真祝万寿』[71]では、華光と共に東華帝君・鍾離権・呂洞賓・白玉蟾・王重陽といった神仙も登場する。

『許真人抜宅飛升』[72]では、許真君の蛟退治を描くが、ここでは天蓬元帥と天丁神が駆邪の役割を担う。

『争玉板八仙過滄海』[73]は、『八仙東遊記』の元となった戯曲である。この作品に登場するのは太上老君・八仙・斉天大聖・四海龍王、それに三官大帝などであるが、あれほど『八仙東遊記』で活躍する元帥神は、この劇にはほとんど出てこない。

この他、恐らく明代に書かれた慶賀劇と称すべき作品群がある。いずれもストーリー性はほとんど無く、多くの神々が現れてお祝いをするというものであるが、めでたい場などで盛んに上演されたようだ。この一連の作品群には夥しい数の神仙などが登場するが、その神体系は明末の小説に見られたものとかなり異なっている。ただ、天下太平を意識する劇が多いためか、討伐など血なまぐさい話に関わる元帥神はあまり登場しない。

『西遊記雑劇』の中に見られる神体系は、小説『西遊記』と共通する部分も多いが、全体としてはかなり異なった面があると考えられる。ここで観音菩薩によって指名される、三蔵法師を守護する「十大保官」は以下の通りである[74]。

> (観音菩薩が言う)「第一の保官はわたしがつとめましょう。第二の保官は李天王、第三の保官は哪吒三太子、第四の保官は灌口二郎神、第五の保官は九曜星辰、第六の保官は華光天王、第七の保官は木叉行者、第八の保官は韋駄天尊、第九の保官は火龍太子、第十の保官は迴来大権修利にそれぞれお願いしたい。」[75]

仏教系の神がほとんどであるが、二郎や華光や九曜の神々も加わっている。第十の保官である大権修利は、大権修利菩薩、また招宝七郎とも呼ばれる神で、日本では禅宗系の寺院に祀られるものである。この神については第四章において述べる。

なお、ここでの華光は『華光顕聖』などの説話を踏まえているようで、次のように歌う[76]。

> 玉皇殿の金磚は我がものであり、后土祠の瓊花は我が賞するものである。天宮をさわがせた一場においては、鎗にて四揭帝神を打ち負かし、金磚で八金剛を打ち倒した。多くの神々はただ降参するだけ。[77]

おそらく華光については、こういった説話が民間では一般に広く知られていたものであろう。『水滸伝』にしばしば華光の名が見られるのも、その反映であると思われる。

とはいえ、『西遊記雑劇』では李天王の配下としては二十八宿、雷雲風雨の四将などが見える程度で、華光以外の元帥神はそれほど目立つ存在ではない。ただ、火焔山の段で、水部の諸将が名乗りを上げる場面に、次のような台詞がある[78]。

> われは世々東南巽を守護する神、箕水豹の飛簾大将軍である。(略)
> われは太乙真人の部下の謝仙火伴、霹靂将軍五雷使者である。(略)
> われはすなわち畢星屏翳の神、玄冥先生赤松子これなり。[79]

これは後の『西遊記』に見られる神体系とも、『道法会元』に見られるような体系とも異なるものである。恐らく、まさに変容しつつあった民間信仰の神体系の一過程が反映されたものであろう。

8．通俗文学作品に登場する元帥神の特色

このように通俗文学の作品における元帥を見るに、多くの作品に共通するのは、すでに元帥が天界の代表的な神であると考えられていることである。そしてその人員は、温・関・馬・趙の四大元帥、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢の各天君、それに王霊官でほとんど占められている。中でも『北遊記』

だけは例外的に多くの元帥神を入れるが、これは『三教捜神大全』に基づいているために起こった特殊な現象であると考える。ただ『封神演義』の二十四天君は、基づくところがあるとはいえ、作者が恣意的に作り出した面が強い。

現在道観や廟などに見られる元帥の像も、ほとんどは四大元帥か雷部の八天君である。むろん王霊官は、全真教系の道観の前殿に必ずと言ってよいほど配置されている「霊官殿」の主である。例を挙げるなら、北京東嶽廟では温・関・馬・趙の四大元帥を後殿に配し、もと南京朝天宮にあり、現在は上海白雲観にある明の塑像は、趙元帥・殷元帥・馬元帥・王霊官・岳元帥・温元帥である。蘇州玄妙観の三清殿にある像は、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢・岳・温・殷・朱の十二天君である[80]。

この中で、岳天君だけはやや系統を異にする。岳元帥は『道法会元』などの道教経典では類似した神格が無い。ただ、東岳大帝の配下とされる十太保の中には「岳太保」が存在する。しかしこれと岳元帥との繋がりについては若干疑念がある。何故なら、恐らくは南宋の武将、岳飛が元帥神とされたものであると考えられるからである。そうであれば他の元帥神と比べて、神祇の列に加わった時期が遅く、『道法会元』などの道教経典には反映されていないものと推察される。ただ現在では、関帝として地位が高くなった関元帥を抜いて、別に四大元帥として温・岳・馬・趙の組み合わせとする例もある。『南遊記』などに見られた韓元帥もそうであるが、民間信仰の側で別に神を作り出したりする場合もあったと考えられる。

もっともこの流れは道教側でもあり、後述するように『無上黄籙大斎立成儀』[81]などにおいて、清微派によって神の体系化がなされる中、神将はその数を減じていった。そして民間信仰からの影響もあり、有形無形に元帥神の体系は変化していったのである。

また、次章で検討するが『三教捜神大全』に見られる元帥神の集合は、『無上黄籙大斎立成儀』と、明末の通俗小説における体系の中間に位置するものと考えられる。恐らく『三教捜神大全』の基づいた元帥神の資料には、もっと多くの元帥の伝があったと推察される。その資料の中から、編者が特定の

元帥の伝をピックアップして収録したのであろう。しかし、禅師の伝において見られたのと同様、かなり恣意的な選択が行われたものと考えられる。『捜神広記』には関元帥（義勇武安王）と趙元帥の項目はすでに存在したが、四大元帥として揃えるためには、温元帥と馬元帥の項目は必要であった。さらに龐・劉・苟・畢などの雷部の天君の伝も加えた。しかし何故か鄧天君の伝は漏れた。そしてまた、康元帥や孟元帥などの地祇系の元帥も重要と思われたので採録した。

とはいえ、この作業があまり深い配慮のもとになされた処置で無いのはもちろんである。また元帥神の民間における信仰を正確に反映したものとも言えないであろう。しかし、この作業によって、恐らく当時まさに行われつつあった元帥神の変容の過程が、この『三教捜神大全』には記録されることになったものであろう。

注

1）蕭相愷『宋元小説史』（浙江古籍出版社・1997年）89～90頁。
2）『宋元平話集』（上海古籍出版社・1990年）所収。
3）前掲『宋元平話集』282頁。
4）原文：帝曰、卿用何神、願獲一見、少労神庶。継先曰、神即当起居聖駕。忽有二神現於殿庭、一神絳衣金甲、青巾美鬚髯、一神乃介冑之士。継先指示金甲者曰、此即蜀将関羽也。
5）『道法会元』（『正統道蔵』正一部S. N. 1220）
6）原文：是時温州有方士林霊素、初名霊噩、表字歳昌。家世寒微、遠遊至蜀、学道於趙昇道数載、善能妖術、輔以五雷法、往来宿、亮、淮、泗等州、乞食於諸僧寺。政和三年、至京師、寓居東太乙宮。徽宗在大内、得一箇夢、誰知那一場夢、引得一箇妖術方士的来。
7）前掲『宋元平話集』305頁。
8）前掲『宋元平話集』411頁。
9）原文：有一日、姜皇后降生一太子、名之曰景明王、号為殷交。因王打泥神、天降此人、此人便是太歳也。
10）前掲『宋元平話集』430頁。

11） 原文：紂王聞奏、心中大怒、敕令左将軍鰕吼領兵五百、趕太子并胡蒿。此人是遊魂神。鰕吼是大耗神。右将軍佶留、此人是小耗神。紂王又教四門都検点。媿鬼、媿歳、此二人是剣殺二神也。

12） 太田辰夫訳『平妖伝』「解説」（『平妖伝』中国古典文学大系・平凡社・1967年）399頁。

13） 『平妖伝』（上海古籍出版社・1996年）99頁。

14） 原文：且説安壇次日、先将各人合用紙墨筆硯等、排於六甲壇下。婆子起首、脚踏魁罡二字、左手雷印、右手剣訣。取東方生気一口，念通霊呪一遍、焚符一道。蚤子和尚和左黜都依着婆子行事。（略）如此七七四十九日、紙墨筆硯倶霊、然後商議召将。（略）婆子道、正要与你細講。有内将、方可召外将。鄧、辛、張、陶、苟、畢、馬、趙、温、関、此外之十将也。眼、耳、鼻、舌、意、心、肝、肺、脾、腎、此内之十将也。

15） 前掲『平妖伝』114頁。

16） 原文：忽見皇太子背後閃出一尊神道。怎生模様。有臨江仙為証。眉似臥蠶丹鳳眼、面如重棗通紅。鋼刀偃月舞青龍、戦袍穿緑錦、美号是髯公。一片丹心懸日月、扶劉佐漢成功。神霊千古播英風、鹹魔称上将、護国顕神通。這尊神正是義勇武安王鹹魔上将関聖。従来聖天子百神加護、這日正輪着関聖虚空護駕。

17） 羅懋登『三宝太監西洋記通俗演義』（上海古籍出版社・1985年）167～168頁。

18） 原文：天師再上七七四十九張卓児上去。（略）仗着剣、蹑着罡、歩着斗、捻着訣、念着咒（略）喝声道、一撃天門開、二撃地戸裂、三撃馬、趙、温、関赴壇。（略）響処吊下了四位天神。同是一様児的長、長有三十六丈長、同是一様児的大、大有一十八囲。只是第一位生得白白的、白如雪。（略）第二位生得黒黒的、黒如鉄。（略）第三位生得青青的、青如靛。（略）第四位生得赤赤的、赤如血。（略）原来面白的是個馬元帥、面黒的是個趙元帥、面青的是個温元帥、面赤的是個関元帥。這四位元帥斉斉的朝着天師打了一個恭、斉斉的問声道、適承道令宣調吾神、不知那廂聴用。

19） 前掲『三宝太監西洋記通俗演義』628頁。

20） 原文：道猶未了、剣頭上焼了一道飛符。天師口裏喝上一声、到。只見正南上吊下一個天神、臉如赤炭、髪似朱砂、渾身上下、恰如火燎的一様。睜眉怒眼、手執金鞭。朝着天師打個恭。説道、天師呼喚小神、何方使令。天師起眼一看、原来是個赤胆忠良王元帥。（略）連忙的一連焼了幾道飛符、天上一連吊下了一千天将。天師抬頭一瞧、原来是龐、劉、苟、畢四位元帥。

21） 『李卓吾評本西遊記』（上海古籍出版社・1994年）45頁。

22） 原文：先至南天門外。正欲収雲前進、被増長天王領着龐、劉、苟、畢、鄧、辛、

張、陶、一路大力天丁、鎗刀剣戟、攔住天門、不肯放進。

23） 前掲『李卓吾評本西遊記』82～83頁。

24） 原文：直打到通明殿裡、霊霄殿外。幸有佑聖真君的佐使王霊官直殿、他見大聖縦横、掣金鞭近前攔住。（略）他両個闘在一処、勝敗未分。早有佑聖真君又差将佐発文到雷府、調三十六員雷将、斉来把大聖囲在垓心。

25） 例えば『三教源流捜神大全』で「佑聖真君」として挙げられているのは茅盈である。

26） 前掲『李卓吾評本西遊記』679頁。

27） 原文：直至南天門外。忽抬頭見広目天王当面迎着、長揖道、大聖何往。行者道、有事要見玉帝。你在此何幹。広目道、今日輪該巡視南天門。説未了、又見那馬、趙、温、関四大元帥作礼道、大聖、失迎、請待茶。

28） 『容与堂本水滸伝』（上海古籍出版社・1988年）178頁。

29） 原文：這個是扶持社稷、毘沙門托塔李天王。那個是整頓江山、掌金闕天蓬大元帥。（略）一個似巨霊神忿怒、揮大斧劈砕西華山、一個如華光蔵生嗔、仗金鎗搠透鎖魔関。

30） 前掲『容与堂本水滸伝』555頁。

31） 原文：一個是馬霊官白蛇托化、一個是趙元帥黒虎投胎。

32） 前掲『容与堂本水滸伝』1040頁。

33） 『金瓶梅詞話』（中国図書刊行社・1986年）487頁。

34） 原文：此是早朝開啓請無佞太保康元帥、九天霊符監斎使者、厳禁斎儀。此一張、是請正法馬、趙、温、関四大元帥、崔、盧、鄧、竇四大天君、監臨壇監門。

35） 『一百二十回的水滸』（商務印書館・1969年）1493～1498頁。

36） 八仙とそれに関連する文学作品については、王漢民『八仙与中国文化』（中国社会科学出版社・2000年）や、拙稿「『八仙東遊記』における過海故事の変容」（『東方学の新視点』五曜書房・2003年）343～368頁参照。

37） 『四遊記』（華夏出版社・1994年）54頁。

38） 原文：玉帝大怒、即命関、温二将、統領天兵二十余万、漫空布野、望龍華会来擒捉八仙。又命馬、趙二将統兵二十万余助陣。

39） 華光神については、黄兆漢「粤劇戯神華光是何方神聖」（『中国神仙研究』台湾学生書局・2001年）49～87頁に詳しい。

40） 『華光顕聖』劇については、沈徳符『万暦野獲編』の中でふれられている。

41） 前掲『四遊記』71～72頁。

42） 原文：華光走到北方地界、乃是玄天上帝守把。華光一見上帝、更不答話、丢起金磚打来、玄天上帝用手上七星黄旗、将金磚巻了。（略）華光四肢不能動得、大哭曰、弟子因鄧化所逼、出於無奈、只得如此、今日被上帝捉拿、可発慈悲之心、救我可也。

上帝曰、你若肯改邪帰正、我部下前有三十五員大将、你若帰順我、湊成三十六員。

43) この小説については、グレイ・シーマンの英訳本があり（Gray Seaman『*Journey to the North*』University of California Press・1987）、そこでは『北遊記』自体、扶乩の影響下に書かれたものだとする（39頁）。しかし内容から見るに、この書は一般の通俗小説とそれほどの差異は無い。道教を宣揚する小説という意味からすれば、後述する『呪棗記』の方がその性格が強いと思われる。むろん『北遊記』の最後部には武当山における信仰の反映があると思われるが、扶乩の影響についてはそれほど深いとは考えにくい。

44) 前掲『四遊記』210頁。なお記載の一部を、影印本などを参照して改めている。

45) 原文：祖師曰、何乃聚有此気。上清曰、此気乃黒煞神在世間作乱。自称黒面大王、手下有七員将。一名李便、二名白起、三名劉達、四名張元伯、五名鍾士貴、六名史文恭、七名范巨卿。煞神自己姓趙、名公明。号作文明。

46) 前掲『四遊記』213頁。

47) 原文：玉帝旨到、封関羽為崇寧王道太真君朗霊関元帥之職。照旧日把天門、夜管酆都地獄、巡游抄察、左手執金烈沙刀、右手執紫微勅印、左脚一擂神、右脚一火車、助上帝降魔。

48) 前掲『四遊記』231～232頁。

49) 原文：万法教主神功妙済許真君、海瓊白真君、果厳教主済微伝教祖元君、洞玄教主辛真君、清微教主魏元君、混元教主路真君、都掌金輪如意趙元帥、関羽封為顕霊関元帥、龍興王、田華封為苟、畢二元帥、亀、蛇封為水火二将、張健封為尽忠張元帥、龐喬封為混炁龐元帥、副応封為糾察副元帥、正一霊官馬元帥、朱彦夫封為管打不信道朱元帥、催、盧二将軍、李伏龍封先鋒李元帥、両田封降妖辟邪両元帥、鄧成、辛江、張安封為鄧、辛、張元帥、汪無別、寧世誇、封為汪、寧二太保、劉俊封為玉府劉天君、雷瓊封為威霊瘟元帥、石成封為神霄石元帥、広沢封為風輪周元帥、謝仕栄封為火徳謝元帥、離婁、師曠封聡明二賢、康席封為仁聖康元帥、高員封為降生高元帥、孟山封為酆都孟元帥、王鉄、高銅封為虎丘王、高二元帥、王忠封九州豁洛王元帥、雷公封為九天霹靂大将軍、楊彪封為楊元帥、殷高封為地司太歳殷元帥、鉄頭封為猛烈鉄元帥、朱佩娘封為雷都電母、朱孛娘為月孛天君。

50) 馬書田『華夏書神・道教巻』（雲龍出版・1993年）190頁、同様の説は、また『武当神仙大観』（武漢出版社・2000年）64頁などにも見える。

51) 『封神演義』の民間信仰に対する影響に関しては、拙著『封神演義の世界』（大修館書店・1998年）参照。

52) 『封神演義』（人民文学出版社・1979年）992～993頁。

53) 王秋桂・庹修明『貴州省徳江県穏坪郷黄土村土家族衝寿儺調査報告』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年）28頁。

54) 馮夢龍『警世通言』（人民文学出版社・1956年）201～202頁。

55) 原文：張皮雀在玄都観五十余年。（略）皮雀呵呵大笑、触了天将之怒、為其所撃而死。後有人於徽商家扶鸞、皮雀降筆、自称、原是天上苟元帥、塵縁已満、衆将請他上天帰班。

56) 蘇州玄妙観と雷法の関係については、拙論「蘇州玄妙観の十二天君像について」（『東洋大学中国哲学文学科紀要』第12号・2004年）147～158頁参照。

57) いずれも『明代小説輯刊』第一輯第四冊（巴蜀書社・1993年）所収。またこれらの小説については、李豊楙『許遜与薩守堅——鄧志謨道教小説研究——』（台湾学生書局・1997年）において詳細に研究されている。

58) 『楊家府演義』（上海古籍出版社・1980年）170頁。

59) 臧晋叔『元曲選』（中華書局・1958年）1684頁。

60) 原文：吾奉太上老君急急如律令、摂。一撃天清、二撃地霊、三撃五雷。速変真形。（略）老君賜我駆邪剣。（略）我持此水非凡水、九龍吐出浄天地。

61) 『孤本元明雑劇』（台湾商務印書館・1977年）第十冊所収。

62) 前掲『孤本元明雑劇』第十冊所収。

63) 前掲『孤本元明雑劇』第九冊所収。

64) 『元曲選外編』（中華書局・1959年）961～970頁。

65) 前掲『孤本元明雑劇』第十冊所収。

66) 前掲『孤本元明雑劇』第十冊所収。

67) 原文：駆邪院主云、（略）父乃浄楽国王、母乃善勝婦人。腹孕一十四月、則太上八十二化、産母左脅降生。（略）玉帝見貧道有功、勅封九天採訪遊奕使、北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝、正授北極駆邪院都教主。

68) 韓元帥については、漢初の功臣韓信の他、南宋抗金の武将、韓世忠も想定されうる。いずれも通俗文学の作品中で「韓元帥」と称されることが多く、その来歴からも元帥神の一人と民間信仰上で見なされることは十分あり得る。

69) 前掲『孤本元明雑劇』第九冊所収。

70) 前掲『元曲選外編』633～694頁。

71) 前掲『孤本元明雑劇』第十冊所収。

72) 前掲『孤本元明雑劇』第九冊所収。

73) 前掲『孤本元明雑劇』第十冊所収。

74) 前掲『元曲選外編』652頁。

75） 原文：第一箇保官是老僧、第二箇保官李天王、第三箇保官那吒三太子、第四箇保官灌口二郎、第五保官九曜星辰、第六箇保官華光天王、第七箇保官木叉行者、第八箇保官韋駄天尊、第九箇保官火龍太子、第十箇保官迴来大権修利。

76） 前掲『元曲選外編』653頁。

77） 原文：玉皇殿金磚是我蔵、后土祠瓊花是我賞。炒閙天宮這一場、鎗撞番四揭帝、磚打倒八金剛、衆神祇索納降。

78） 前掲『元曲選外編』684頁。

79） 原文：吾世守東南巽二之神、箕水豹飛簾大将軍是也。（略）吾太乙真人部下謝仙火伴、霹靂将軍五雷使者也。（略）吾乃畢星屏翳之神、玄冥先生赤松子是也。

80） 拙論「蘇州玄妙観の十二天君像について」（『東洋大学中国哲学文学科紀要』第12号・2004年）147～158頁参照。

81） 『無上黄籙大斎立成儀』（『正統道蔵』洞玄部S. N. 508）

第二章　『三教捜神大全』の構成

1．三種の「捜神」資料

『三教捜神大全』の各記事は、明代に編纂されたもので、当時における神の信仰状況を示す資料として非常に重要なものである。ただ、その記事の多くは元代に成立した『捜神広記』に基づいている。そのため、記事の書かれた時代は項目ごとに異なっている。またさらに、各記事の記載自体が、それまでに存在した史書や類書、経典などからの抜き書きとなっている。この書を総体として論ずるのは、甚だ困難であると言ってよい。

さて『三教捜神大全』の記事の数は百三十余に及ぶが、そのうち「儒氏源流」から「紫姑神」までの五十八項目については『捜神広記』をほぼ踏襲している。そのため、幾つかの記事においては、『三教捜神大全』の書かれた明代ではなく、『捜神広記』が書かれた元代の状況を記すことがむしろ主となっている。例えば関帝については、明代の「関聖帝君」という称号を用いるのではなく、元時の「義勇武安王」をもって記される。二郎神も、「清源妙道真君」と称される。この五十八項目に含まれる神々については、元代にすでに有力な信仰があったと想定され、その記事にも比較的古いものが残されていると考えられる。しかしこれらの神々が、明代においても盛んな信仰を有していたとは限らない。これも個々の神ごとに事情は異なる。

さらに同類の書として、明代には『捜神記大全』が編纂されている。この書においては、『三教捜神大全』と同様に『捜神広記』の記事のほとんどを踏襲しているものの、各神の項目をその性格ごとに再編集し、順序をほぼすべて入れ替えている。増加された神の記事については、『三教捜神大全』と一致する部分も見える。

本章では、このような相違が何故生じたかについて、『捜神広記』『三教捜神大全』『捜神記大全』の三種の資料を比較することによって考えてみたい。

2．三種の資料の成立について

『捜神広記』の正式な題名は、『新編連相捜神広記』である。この書は李豊楙氏の指摘にある通り、元の秦子晋の編になるものである。しかし、この秦子晋の事跡についてはほとんどわからない。一部資料では明人とするが、これは誤りであろう。李豊楙氏は『捜神広記』について次のように記す[1]。

> 『新編連相捜神広記』前後二集は、「淮南秦子晋」の撰と題す。いま北京図書館に一本を蔵す。しかしこの撰者、秦子晋の生平については分からない。この本の刊刻や流通の状況についてもほとんど不明である。『捜神広記』の早期の版本として知られているのは、毛晋（一五九七～一六五九）の汲古閣旧蔵本である。毛晋の子の毛扆（一六四〇～一七一〇）はかつて『汲古閣珍蔵秘本書目』の子部類に、注を施して言う。
>
> 「凡そ三教の聖賢及び世の奉ずるところの諸神について画像を付し、おのおのその姓名や称号、郷里や封爵・諡号などについて詳細に記す。また奇書というべきである。」
>
> 汲古閣の蔵書が散佚してよりは、この珍奇なる書もまた行方がわからなくなった。その後、葉徳輝及びその友人の金蓉鏡が北京の書肆においてこの本を見た時には、その巻首には毛氏の印があった。これにより、この本がまさにかつて汲古閣に旧蔵された元版の『画像捜神広記前後集』（『重刊三教捜神大全』序及び後序による）であることがわかる。
>
> 現在北京図書館に蔵される本は、これと同一の版であると思われる。鄭振鐸はこれを元版とした。しかし傅増湘は秦子晋を明代の人とする。（略）この『捜神広記』が編纂され、流通した時代については、元朝あるいはそれに近い時期であるとされる。その論拠としては、記事の中に見られる封号や諡号がすべて元時のものにとどまり、かつ元朝を一律に「聖朝」と称していることが挙げられる。

葉徳輝がこの『捜神広記』を北京で発見した経緯については、『三教捜神大全』の序に詳しい。葉徳輝は汲古閣旧蔵の『捜神広記』をいったん得たものの、その後これを失い、代わりにその後得た類書の『三教捜神大全』を復刻したものである。

『捜神広記』の編纂が元代であることは問題ないと思われるが、その項目の幾つかについては、宋代に遡ると見なしてもよいであろう。特に「聖祖尊号」の記事の存在は重要である。ここで扱われている保生天尊は、宋の皇室の祖先とされた神である。記事の中身であればともかく、項目名に「聖祖」を使用するのは、この書の体裁の一部分が宋代に既に成立していたことを示唆するものと推察される。

『三教捜神大全』の編者については、現時点では「不明」とするより他はない。葉徳輝の指摘によれば、「慧遠禅師」「鳩摩羅什禅師」など幾つかの僧侶の伝については、永楽年間の『神僧伝』から抄録したものであり、ほとんど内容が一致する。李豊楙氏は『三教捜神大全』については、次のように記す[2]。

> 『三教捜神大全』七巻は、題名を『三教源流聖帝仏祖捜神大全』と称す。日本の内閣文庫に明刊本を蔵す。その巻末には、「西天竺蔵版」の文字がある。この七巻本が最も早期の版であると考えられる。（略）
>
> その内容は葉徳輝が宣統元年（一九〇七）に復刻した郎園校刊本とほぼ同じである。この復刻本は、江陰の繆荃孫旧蔵の「明刻絵図本」に依拠したものである。（略）この他、日本の宮内庁書陵部には四知館楊麗泉の晩明刊本が蔵する。これもまた七巻本である。（略）

また葉徳輝は『三教捜神大全』復刻版の後序において次のように述べる[3]。

> 元の『捜神広記』については、昔これを京師の書肆において見たことがある。その版は毛氏汲古閣旧蔵本であり、毛氏の印があった。

（略）この『三教捜神大全』は明人が元版の『捜神広記』の記事を増加して翻刻したものであろう。
書中にしばしば「皇明」の年号を称することから、そのことが判明する。また多くの僧侶の伝については、永楽年間の『神僧伝』の記事を写したものであり、その部分の文章についてはほとんど変更が加えられていない。[4]

すなわち『三教捜神大全』は、『捜神広記』の記事をほぼ踏襲しつつ、さらに多くの記事を追加して編纂されたものである。この書が永楽年間以降に成ったものであるのは間違いなく、恐らく明の後期であることは推察可能だが、その時期が何時なのかは具体的にはわからない。

また『捜神記大全』は、序文によれば羅懋登が編纂を行ったものと推察される。羅懋登は明の万暦年間に活躍した人士で、通俗小説『三宝太監西洋記』の著者として知られている。これについても李豊楙氏の解説がある[5]。

『新刻出像増補捜神記大全』六巻は、日本内閣文庫に所蔵する金陵唐氏富春堂の刊による明刊本がある。この書は羅懋登が書いた万暦二十一年（一五九三）の序がある。
それによれば、三山富春堂の『捜神記大全』は、「不備であると思われるところを増加」したのだと言う。また「巻ごとに整理し、分類を改め、絵図を付した」とする。すなわちその前に存在した「捜神」類書を整理したものである。
張国祥が勅令を奉じて『続道蔵』を編纂した時、この『捜神記大全』を収録した。ただその題名は『捜神記』としている。この『続道蔵』本には伝のみあって図がない。『続道蔵』に収録されたのは万暦三十五年（一六〇七）である。

これによれば、『捜神記大全』はほぼ明の万暦年間の編集と推察される。さらに別に『続道蔵』に収録されたものは、序文はあるものの、羅の署名が省

かれている。また『捜神記』という題名からか、これを晋の干宝の『捜神記』と混同することもあった。

『捜神記大全』と『三教捜神大全』の関係は、直接には明らかではない。『捜神記大全』と『三教捜神大全』に幾つかの共通する記事があるのは確かであるが、それは『捜神記大全』が『三教捜神大全』から取ったとは考えにくい点もある。

このことについて考えるために、三種の資料にどの神が収録されているかについて、以下に表をもって示す。なお、この表にある番号は項目ごとに出現順に便宜的に付したものである。

『捜神広記』	番号	『三教捜神大全』	番号	『捜神記大全』	番号
儒氏源流	1	儒氏源流	1	儒氏源流	1
釈氏源流	2	釈氏源流	2	釈氏源流	2
道教源流	3	道教源流	3	道教源流	3
聖母尊号	4			(附)聖母尊号	
玉皇上帝	5	玉皇上帝	4	玉皇上帝	4
聖祖尊号	6	聖祖尊号	5	(附)聖祖尊号	
聖母尊号	7	聖母尊号	6	(附)聖母尊号	
東華帝君	8	東華帝君	7	東華帝君	6
西王母	9	西霊王母	8	西王母	7
后土皇地祇	10	后土皇地祇	9	后土皇地祇	5
玄天上帝	11	玄天上帝	10	玄天上帝	23
梓潼帝君	12	梓潼帝君	11	梓潼帝君	25
三元大帝	13	三元大帝	12	上元·中元·下元大帝	8, 9, 10
東嶽	14	東嶽	13	東嶽	11
至聖炳霊王	15	至聖炳霊王	14	至聖炳霊王	32
佑聖真君	16	佑聖真君	15	佑聖真君	33
南嶽	17	南嶽	16	南嶽	12
西嶽	18	西嶽	17	西嶽	13
北嶽	19	北嶽	18	北嶽	14
中嶽	20	中嶽	19	中嶽	15

四涜	21	四涜	20	四涜神	16
泗州大聖	22	泗州大聖	21	泗州大聖	54
五聖始末	23	五聖始末	22	五聖始末	31
万迴號国公	24	万迴號国公	23	万迴號国公	79
許真君	25	許真君	24	許真君	27
宝誌禅師	26	宝誌禅師	25	宝誌禅師	51
盧六祖	27	盧六祖	26	盧六祖	52
三茅真君	28	三茅真君	27	三茅真君	29
薩真人	29	薩真人	28	薩真人	39
袁千里	30	袁千里	29	袁千里	35
傅大士	31	傅大士	30	傅大士	55
崔府君	32	崔府君	31	崔府君	85
普庵禅師	33	普庵禅師	32	普庵禅師	53
呉客三真君	34	呉客三真君	33	呉客三真君	26
昭霊侯	35	昭霊侯	34	昭霊侯	107
義勇武安王	36	義勇武安王	35	義勇武安王	74
清源妙道真君	37	清源妙道真君	36	灌口二郎神	56
威恵顕聖王	38	威恵顕聖王	37	威恵顕聖王	77
祠山張大帝	39	祠山張大帝	38	祠山張大帝	30
掠刷使	40	掠刷使	39	掠刷使	144
沁江遊奕神	41	沁江遊奕神	40	沁江遊奕神	60
常州武烈帝	42	常州武烈帝	41	常州武烈帝	71
揚州五司徒	43	揚州五司徒	42	揚州五司徒	72
蒋莊武帝	44	蒋莊武帝	43	蒋莊武帝	70
蠶女	45	蠶女	44	蠶女	128
威済李侯	46	威済李侯	45	威済李侯	83
趙元帥	47	趙元帥	46	趙元帥	80
杭州蒋相公	48	杭州蒋相公	47	杭州蒋相公	87
増福相公	49	増福相公	48	増福相公	145
嵩里相公	50	嵩里相公	49	嵩里相公	88
霊泒侯	51	霊泒侯	50	霊泒侯	84
鍾馗	52	鍾馗	51	鍾馗	149

神荼鬱塁	53	神荼鬱塁	52	神荼鬱塁	148
五瘟使者	54	五瘟使者	53	五瘟使者	142
司命竈神	55	司命竈神	54	司命竈神	150
福神	56	福神	55	福禄財門	146
五盗将軍	57	五盗将軍	56	五盗将軍	143
紫姑神	58	紫姑神	57	厠神	151
		五方之神	58	五方之神	17
		南華莊生	59		
		観音菩薩	60	南無観世音菩薩	44
		王元帥	61		
		謝天君	62		
		大奶夫人	63	順懿夫人	136
		天妃娘娘	64	天妃	127
		混炁龐元帥	65		
		李元帥	66		
		劉天君	67		
		王高二元帥	68		
		田華畢元帥	69		
		田呂元帥	70		
		党元帥	71		
		石元帥	72		
		副応元帥	73		
		槃瓠	74	槃瓠	126
		楊元帥	75		
		高元帥	76		
		霊官馬元帥	77		
		孚祐温元帥	78		
		朱元帥	79		
		張元帥	80		
		辛興苟元帥	81		
		鉄元帥	82		
		太歳殷元帥	83		

		斬鬼張真君	84		
		康元帥	85		
		風火院田元帥	86		
		孟元帥	87		
		慧遠禅師	88		
		鳩摩羅什禅師	89		
		仏陀耶舎禅師	90		
		曇無竭禅師	91		
		仏馱跋陀羅禅師	92		
		杯渡禅師	93		
		宝公禅師	94		
		智璪禅師	95		
		大志禅師	96		
		玄奘禅師	97		
		元珪禅師	98		
		通玄禅師	99		
		一行禅師	100		
		無畏禅師	101		
		金剛智禅師	102		
		鑑源禅師	103		
		嬾残禅師	104		
		西域僧禅師	105		
		本浄禅師	106		
		地蔵王菩薩	107	地蔵王菩薩	46
		知玄禅師	108		
		青衣神	109	青衣神	129
		九鯉湖仙	110	九鯉湖仙	65
		張天師	111	張天師	28
		王侍辰	112	王侍辰	34
		盧山匡阜先生	113	盧山匡阜先生	67
		黄仙師	114	黄仙師	95
		北極駆邪院	115	北極駆邪院左判官	24

		那叱太子	116		
		五雷神	117	雷神	21
		雷母神	118	電神	22
		風伯神	119	(附) 風伯	
		雨師神	120	(附) 雨師	
		海神	121	海神	66
		湖神	122	(附) 湖神	
		水神	123	(附) 水神	
		波神	124	(附) 波神	
		洋子江三水府	125	洋子江三水府	59
		蕭公爺爺	126	蕭公	57
		晏公爺爺	127	晏公	58
		開路神君	128	開路神	152
		法術呼律令	129	(附) 律令	
		門神二将軍	130	門神	147
		天王	131	天王	45
				太乙	18
				(宗三舎人)	
				(楊四将軍)	
				肩吾	19
				燭陰	20
				張果老	36
				西嶽真人	37
				太素真人	38
				寿春真人	40
				負局先生	41
				律呂神	42
				劉師	43
				金剛	47
				十大明王	48
				十地閻君	49
				十八尊阿羅漢	50

				洞庭君	61
				湘君	62
				巣湖太姥	63
				宮亭湖神	64
				蘇嶺山神	67
				新羅山神	68
				射木山神	69
				西楚覇王	73
				零陵王	75
				恵応王	76
				金山大王	78
				彭元帥	81
				潤済侯	82
				陸大夫	86
				祖将軍	89
				花卿	90
				華山之神	91
				聶家香火	92
				広平呂神翁	93
				黄陵神	94
				江東霊籤	96
				協済公	97
				霊義侯	98
				張昭烈	99
				張七相公	100
				耿七公	101
				孫将軍	102
				張将軍	103
				順済王	104
				横浦龍君	105
				道州五龍神	106
				仰山龍神	108

				黄石公	109
				石神	110
				楚雄神石	111
				石亀	112
				鐘神	113
				馬神	114
				青蛇神	115
				金馬碧雞	116
				金精	117
				火精	118
				陳宝	119
				黒水将軍	120
				木居士	121
				磨嵯神	122
				黄魔神	123
				向王	124
				竹王	125
				白水素女	130
				馬大仙	131
				聖母	132
				温孝通	133
				孝烈将軍	134
				霊沢夫人	135
				寨将夫人	137
				誠敬夫人	138
				姚娘	139
				曹娥	140
				二孝女	141
				翁仲二神	153

現在、『捜神広記』については、王秋桂・李豊楙両氏の編になる台湾学生書局発行の『中国民間信仰資料彙編』と上海古籍出版社の『絵図三教源流捜

神大全(外二種)』にそれぞれ収録されており、その影印を見ることができる。

また『三教捜神大全』については、『中国民間信仰資料彙編』に内閣文庫所蔵の明刊本の影印が収録され、『絵図三教源流捜神大全（外二種)』には清末の復刻版を収録する。『捜神記大全』については、『中国民間信仰資料彙編』には同じく内閣文庫所蔵の明刊本を収録し、『絵図三教源流捜神大全（外二種)』には『続道蔵』に収録される版を収録する。いずれにしても『中国民間信仰資料彙編』の方が版本としては優れる。

3．三種の資料の影響関係

ここでは、三種の資料の各項目における差異と相互の影響について考察してみたい。

まず『三教捜神大全』も『捜神記大全』も、「儒氏源流」から「紫姑神」までの項目は、ほぼ『捜神広記』を踏襲している。ただ『捜神広記』においては、「道教源流」直後の「聖母尊号」の項目は独立しているのに対し、『三教捜神大全』『捜神記大全』ではそうなっていない。また『三教捜神大全』が、『捜神広記』の項目の順序までをほぼ踏襲し、「儒氏源流」から「紫姑神」までがほぼ一致しているのに対し、『捜神記大全』の方は順序をかなり入れ替えている。

しかし『捜神広記』の項目の構成をほとんど忠実に踏襲している『三教捜神大全』にも、一つだけ明らかに異なる部分が存在する。それは「聖母尊号」の記事である。

「聖母尊号」という記事は、『捜神広記』では「道教源流」の直後と、「聖祖尊号」の後と、二箇所に存在している。『三教捜神大全』では、その二項目を一箇所にまとめて、「聖祖尊号」の後に置いている。そのため、『捜神広記』における記事の数は「儒氏源流」から「紫姑神」まで五十八項目あるのに対し、『三教捜神大全』の同じ箇所では、一つ減じて五十七項目となっている。

ところが、この処理には大きな問題があると言わねばならない。実は「聖母尊号」の記事の内容は、次のようなものである。

•「聖母尊号」

唐の則天武后の光宅二年（六八五）九月甲寅に、聖母に追尊して「先天太后」とする。その祖殿は亳州の太清宮がこれである。[6]

『国朝会要』に言う。天禧元年（一〇一七）三月六日に、聖祖の母に「元天大聖后」との尊号を奉る。これに先んじて大中祥符五年（一〇一二）に聖母に侯を号し、兗州の太極観が落成のおりには、王旦などに命じ、詔を奉って封冊の礼を行った。[7]

明らかに、この二つは本来別の事柄を述べたものである。そもそも前者は唐代の話であり、後者は北宋でのことである。前者の「先天太后」については、『旧唐書』に次のような記載がある[8]。

（開元二九年・七四一）三月壬子、（玄宗は）玄元宮に拝謁された。聖祖の母益寿氏に「先天太后」との号を与えられた。[9]

また「元天大聖后」については、『宋史』に記載がある[10]。

（大中祥符五年・一〇一二）閏十月、九天司命保生天尊を号して、「聖祖上霊高道九天司命保生天尊大帝」とする。また聖祖の母を号して「元天大聖后」とする。[11]

すなわち、「先天太后」とは、唐代に「聖祖」とされた太上老君の聖母のことであり、「元天大聖后」とは、宋代に「聖祖」とされた保生天尊の聖母を指す。同じく「聖母」という称号を有するものの、実際には全く異なる神格である。

先天太后に関して、「祖殿」とされた亳州の太清宮は、現在、河南省鹿邑県にある太清宮のことである。太清宮の後殿は先天太后を祀り、洞霄宮と称す。殿前にある宋の真宗が建立した「先天太后賛」の碑文が有名である。

『捜神広記』においては、「道教源流」の項目で太上老君の事跡を述べた後に、その母たる「先天太后」の封号を掲げる。そして「聖祖尊号」で保生天尊の封号を記した後、「元天大聖后」の封号を掲げる。これは、紛らわしいところがあるとはいえ、記述としては首尾一貫していて問題はない。

しかるに『三教捜神大全』においては、別神である両者をただ「聖母尊号」という項目名から単純に結びつけ、これを合わせて「聖祖尊号」の後に置いている。これはその内容を全く理解しない上での改変であり、誤った処理と言わねばならない。このような改変をあえて行ったところに、『三教捜神大全』の編集者の教養レベルが露呈していると言えるかもしれない。

一方で『捜神記大全』の方は、『捜神広記』と同様にこの項目を二箇所に配置し、特にこれを改変することはしていない。ただ、文中の「光宅二年」を誤って「光宅三年」とする。これについては、かえって『捜神広記』と『三教捜神大全』の間で「光宅二年」としており一致する。ちなみに、『続道蔵』本でもここを「光宅三年」としており、『続道蔵』本は富春堂本に基づいている可能性が高い。

さてこのような「聖母尊号」の記載から、『捜神記大全』の編者が『三教捜神大全』を参照したのではないことは、確実であると考えられる。何故なら『三教捜神大全』のような形に改変された「聖母尊号」の記事について、再びこれを分離して、より原形に近い記載に戻すことは不可能だからである。これより、『捜神記大全』は『捜神広記』か、或いはそれを引き継いだ「捜神」類書の記載をそのまま襲っていることが看取される。

それではその逆、『三教捜神大全』が『捜神記大全』を参照した可能性についてはどうであろうか。幾つかの記載からは、その可能性も低いことが分かる。

例えば二郎神について、『捜神記大全』はこれを「灌口二郎神」という項目名で収録する。しかし、『捜神広記』『三教捜神大全』では共に「清源妙道真君」とする。これも、『三教捜神大全』の側が、後に原形に近い形に戻したと考えるのは無理である。

では『捜神広記』に見えず、『三教捜神大全』と『捜神記大全』の両者においてのみ、共通する記事が幾つか存在することについてはどうかというと、これはむろん、相互における影響を想定した方がよい。しかしこれも例えば、「雷神」「風伯」「雨師」などの項目では一致する文章が多いものの、「天妃」の項目などは『三教捜神大全』の方の文章量が圧倒的に多く、その内容もかなり異なっている。

このような事情を勘案すると、『三教捜神大全』と『捜神記大全』の間には、直接の関係は無く、むしろ『捜神広記』の後に、これとは別に編纂された「捜神」類書が存在したと想定する方がよい。『三教捜神大全』と『捜神記大全』とは、おそらくその「捜神」類書に基づいて、それぞれ勝手に改変を行ったものであろう。

このことについては、李献璋氏がすでに詳しい考察を加えている。なおこの考察中において、李氏は『捜神記大全』を『増補捜神記』、『三教捜神大全』を『三教捜神』とそれぞれ称している[12]。

> 第一に問題なのは、『増補捜神記』と『三教捜神』における記事の異同と、相互の間にどんな関係が認められるか、のことである。それについて、双方に共通する神々をみると、神の名称は前者に西王母とあるのが、後者に西王霊母、四涜神が四涜、灌口二郎神が清源妙道真君、厠神が紫姑神、または順懿夫人が大奶夫人となっているものもあるが、どちらかと言えば、同じものが多い。しかし記事の内容になるとまちまちで、例えば、釈氏源流の東華帝君や南嶽・西嶽・北嶽・中嶽・四涜神、及び地蔵王菩薩などは完全に一致するけれども、儒氏源流では終の方の「高皇帝過魯、以大牢祀孔子。有詩賛曰…」、道教源流では同じく「宋仁宗御讃…」、玉皇上帝では最後の「格聯…」が、また后土皇地祇では「真宗皇帝封曰…」云々の、『増補捜神記』にない文句が、『三教捜神』に載せられてある。（略）
> 要するに、記事が違っているのは総体的に言って、『増補捜神記』よりも『三教捜神』の方が細かくなっているのが多いので、これだけで考えると両者の関係は自明のように見られる。しかし、全書の

うちの幾らかの記事の繁簡だけをもって、直ちに両書の全体的関係とすべきでないばかりでなく、『増補捜神記』の記事が逆に『三教捜神』のより複雑なものもあり、そう俄かに断定はできない。（略）さすれば一方において、『三教捜神』に『増補捜神記』を潤色・補足したとすべき記事が載せられ、他方では、却って後者が前者を敷衍したらしい、やや細かく、または年代の降る記事が見えるのでは、それは両書の相互間に縦の関係がなくて、むしろこれ以前にできていた共通の種本が存在したことを予想せしめるものである。種本が果たして元板の『捜神広記』というものであるかどうかは断定しかねるが、そうでなくても、捜神関係の類書に違いないことは、いま考察して来た書物の内容からも推知せられよう。そのような類書の系統をひきつぎながら、別々に増刷したのが『増補捜神記大全』と『三教源流捜神大全』であろうと思われる。

李献璋氏は元版の『捜神広記』を見ていなかったようで、この考察には若干の問題もあるが、概ね首肯できるものである。

なお、いま『捜神広記』の内容を見るに、李氏の指摘する「儒氏源流」「道教源流」などの項目は、『捜神記大全』においては『捜神広記』をそのまま踏襲しており、『三教捜神大全』の方では、かなり記事を増補していることが分かる。つまりその相違は、『三教捜神大全』『捜神記大全』両者の編集態度の違いよるものである。恐らく『三教捜神大全』と『捜神記大全』については、李氏の指摘するように直接の影響関係は無く、『捜神広記』のさらに後に編纂された別の「捜神」類書があり、それに基づいて各々編集が行われたと考えるのが妥当であろう。

さて、さらに『三教捜神大全』の項目名で問題だと思われるのが、「北極駆邪院」である。この項目は、『三教捜神大全』では「北極駆邪院」という名になっているが、実際にはこの項目は、駆邪院それ自体ではなく、その左判官である顔真卿について述べただけの記事である[13]。

（北極駆邪院）左判官は唐の顔真卿である。（略）（真卿の死後）顔家の子孫が真卿の書を得て驚いて言う。
「これはわが先の太師の親筆である。」
そこで塚を掘り、棺を開けてみたところ、中は空であった。後に白玉蟾が言った。「顔真卿どのは北極駆邪院の左判官になられたのである。」[14]

これについて、『捜神記大全』の方は、その項目名自体を正確に「北極駆邪院左判官」としている。完全に『三教捜神大全』の編者の認識が誤っており、『捜神記大全』の編者の態度が妥当なものである。そもそも、北極駆邪院を司る神格であれば、北極紫微大帝や玄天上帝などの、もっと高位の神が想定されるはずである。恐らく『三教捜神大全』の編者は、時として記事の内容を理解しないまま、かなり恣意的に各項目の編集作業を行ってしまったものと思われる。

しかし一方で、『三教捜神大全』の編者には、なるべく民間信仰で使用されている呼称をそのまま使おうとする傾向がみられる。例えば、『捜神記大全』の方が「天妃」「蕭公」「晏公」といった形で項目名を記すのに対し、『三教捜神大全』の方は、より一般的な呼称、すなわち「天妃娘娘」「蕭公爺爺」「晏公爺爺」を用いる。これに関しては、『捜神記大全』の編者は通俗的な名称をむしろ意図的に避けようとしているのではないかと推察される。

これらの点からも、『三教捜神大全』と『捜神記大全』とでは、その編集に対する姿勢がかなり異なっており、またお互いに影響を与えている可能性が少ないことが看取できよう。

以下では、『三教捜神大全』と『捜神記大全』のそれぞれの増補の特色について考察してみたい。

4．『三教捜神大全』増補の項目群

『三教捜神大全』においては、「聖母尊号」を除いたほぼ『捜神広記』の全項目が、そのまま踏襲されていることについてはすでに述べた。ここでは

『三教捜神大全』に特有である項目について考えたい。

まず、もっとも特徴的なのは、「王元帥」から「孟元帥」までの元帥神に関わる項目群であろう。次に「慧遠禅師」「鳩摩羅什禅師」から「本浄禅師」「知玄禅師」などに至る一連の禅師たちに関わる項目群である。葉徳輝の指摘によれば、この項目群は永楽年間の『神僧伝』から引用されたものである。ただこの他にも幾つか、「那叱太子（哪吒太子）」など、『三教捜神大全』にしか見られない項目が存在する。

まず、禅師たちに関わる項目群について考えてみたい。

この項目群は『捜神記大全』には存在しない。おそらく、『三教捜神大全』の編者が独自の判断で加えたものであろう。しかしこれらの項目群が追加された理由については不明であるとするしかない。むろん、編者はその必要性を考慮していたと考える。憶測するに、『三教捜神大全』はその書名に「三教」を謳うものの、収録される神々は道教系或いは民間信仰系のものが圧倒的に多い。この欠を補うために、編者は他の仏書から禅師の項目をそのまま取り入れたのではないだろうか。

もっとも『三教捜神大全』では、そもそも儒教系の神の項目が「儒氏源流」のみしか存在しない。この点からしてすでに、「三教」の題目が所詮名目的なものに過ぎないことが露呈してしまっているが、これについては、儒教の聖人は当時孔子を除いてはほとんど信仰の対象となっていなかったという状況を勘案すべきであろう。ましてや、民間信仰系の神がかなり主要な部分を占める『三教捜神大全』では、儒教の聖人が入る余地は少ないし、またおそらく編者の側も、その必要性を認めなかったのであろう。もっともこれはこれで、別の意味で儒教と民間信仰との間の「意識」の乖離を示唆するものである。

ところで、そもそも『捜神広記』において仏教系の神仏の項目が立てられているものは、僅かに「釈氏源流」「泗州大聖」「宝誌禅師」「盧六祖」「傅大士」「普庵禅師」がある程度にすぎない。これは確かに、当時の信仰状況から考えてもバランスを欠くものであると考えられる。『三教捜神大全』『捜神記大全』が共に基づいたと考えられる「捜神」類書は、これに「観音菩薩」「地蔵菩薩」「天王」などの項目を加えているが、それにしても仏教関連の神仏伝の少なさは際だっている。そのため、この欠を補うために『三教捜神大全』の編者は、『神僧伝』から禅師たちの伝記を追加したものであろう。

ところで『三教捜神大全』において、『神僧伝』から引用されたと思われる項目は、「慧遠」「鳩摩羅什」「仏陀耶舎」「曇無竭」「仏駄跋陀羅」「杯渡」「宝公」「智璪」「大志」「玄奘」「元珪」「通玄」「一行」「無畏」「金剛智」「鑑源」「嬾残」「西域僧」「本浄」「知玄」の各禅師の伝記である。いまこれを『神僧伝』と比べると、その巻二から巻七までの範囲からピックアップされていることがわかる。各禅師の伝の本文はかなり一致する[15]。

しかし、『三教捜神大全』の編者が、いかなる基準でこれらの禅師を選び出したのか、いまひとつ判然としない。

例えば『神僧伝』の巻二を見るに、そこに含まれるのは「道安」「曇猷」「曇翼」「曇始」「法顕」「法曠」「慧遠」「鳩摩羅什」「法安」「曇邕」「僧朗」「仏陀耶舎」「曇無竭」「仏駄跋陀羅」「曇邃」「宝通」「慧紹」「悟詮」の各禅師の伝である。ここから、『三教捜神大全』は「慧遠」「鳩摩羅什」「仏陀耶舎」「曇無竭」「仏駄跋陀羅」のみをピックアップしている。しかし、慧遠や鳩摩羅什を選ぶのは当然としても、道安や法顕などの他の著名な僧侶の伝をことさらに省いた理由は不明である。ところで、「宝誌」の項目においては、『捜神広記』にもともと存在していたためか、『三教捜神大全』は、そこだけは『捜神広記』の文章を踏襲し、『神僧伝』の「宝誌」の伝とは内容が異なるものとなっている。

いずれにせよ、これらの部分においては、単に『神僧伝』からの引用というだけで、独自性に乏しい部分である。また『三教捜神大全』の性格からしても、そぐわない面がある。例えば、やはり神仏の伝を集めた明の『仙仏奇蹤』のような性格の書物であれば、こういった禅師の伝があるのは不自然ではないと思われる。

その『仙仏奇蹤』は明の洪応明の撰になるものであり、袁了凡が序を付している[16]。この書は大きく二部に分かれる。前半に採録されているのは「老君」や「東王公」「西王母」に始まり、「白玉蟾」や「魏伯陽」に至る仙人た

ちの伝であり、後半は「釈迦牟尼仏」「摩訶迦葉尊者」から「慧遠禅師」「仏図澄」などに至る仏や僧侶たちの伝である。その内容から、『四庫全書総目提要』ではこの書を小説家類に類別する。但しいまこの書の構成を見るに、『三教捜神大全』のような雑多な寄せ集めといった印象はなく、非常に首尾一貫した姿勢が感じられる。またそのためか逆に民間信仰において有力な神はほとんど収録されていない。

むろん『仙仏奇蹤』と『三教捜神大全』の双方に共通して収録される神仏も若干存在するが、両書の記事の性格はかなり異なる。ただ『仙仏奇蹤』と比べた場合、『三教捜神大全』に収録される禅師の伝の配列は、明らかにかなり恣意的と言えよう。この項目群に関して言えば、独自の資料としての価値も少なく、着目すべき点はあまりないと思われる。この項目の不統一さは、『三教捜神大全』の雑多な性格の一端を示すものであるとは言えよう。

次に元帥神に関わる項目群を見てみたい。

元帥神は、元明代の民間信仰においてかなり特異な地位を占める神である。唐以前の民間信仰や道教において、これらの神はほとんど現れない。その多くは武神であるが、おそらく仏教の密教神の影響を受けて成立したものであると考えられる。また元帥神は、宋以降に盛んになった雷法と密接な関連を有している。元帥神は、時に元帥という呼称でなく、「何々天君」と称することも多い[17]。

元帥の中には、現在の道教や民間信仰においても盛んに祭祀されているものも多い。例えば、関元帥は後に「関聖帝君」となり、清代以降その信仰は他に並ぶものがないほどの発展を見せる。趙元帥は、趙玄壇の名称で広く財神として祀られる。王元帥は、王霊官として道観に必ずと言ってよいほど神像が置かれる神である。温元帥も、泰山の神として著名である。しかし一方で、元帥神には、清代以降ではその信仰が衰えたものも多い。例えば、馬元帥は元明代にはおそらく関帝に比肩するほどの信仰を有していたが、その後何故か信仰が衰え、現在では広東一帯を除いてはこれを祀った廟宇は少なくなっている。

元帥神は現代の道教儀礼や、また儺戯の中においても重要な地位を占めており、儀礼面に関しては、その影響は現在でも大きい[18]。

『三教捜神大全』においては、元帥神に関わるものとして、「義勇武安王」「趙元帥」「王元帥」「謝天君」「混炁龐元帥」「李元帥」「劉天君」「王高二元帥」「田華畢元帥」「田呂元帥」「党元帥」「石元帥」「副応元帥」「楊元帥」「高元帥」「霊官馬元帥」「孚祐温元帥」「朱元帥」「張元帥」「辛興苟元帥」「鉄元帥」「太歳殷元帥」「斬鬼張真君」「康元帥」「風火院田元帥」「孟元帥」などの項目がある。このうち「義勇武安王」と「趙元帥」については、『捜神広記』にも見えている。その他の項目については、『捜神広記』にも『捜神記大全』にも記載がなく、ここは『三教捜神大全』独自の記事となっている。ただ、『捜神記大全』には「彭元帥」という項目が見えるが、これが所謂元帥神に属するものかは、いささか判断しにくい。

これらの元帥神については、道教側の資料では『道法会元』に多くの記載が見えるものの、その由来に関しては不明な部分が多い。『集説詮真』にしても、『中国民間諸神』にしても、元帥神については、すべてこの『三教捜神大全』の記事を典拠としているのである。そういった意味では、これら元帥神に関する記述は、重要なものと言える。

しかし一方で問題も多い。ここに挙げられている元帥神の記事をどのような基準でピックアップしているのか、その姿勢が明確でない。

例えば、雷部の神であれば、まず鄧天君が必ずと言ってよいほど筆頭に挙げられ、これと辛天君を併置するのが常であるが、『三教捜神大全』には鄧天君の伝が見られず、ただ「辛元帥」の記事があるのみである。同様に一般的に「謝・白元帥」と併称される二元帥については、「謝天君」の伝しかない。つまり主要な元帥神の幾つかは、『三教捜神大全』には全く収録されていないのである。おそらく『三教捜神大全』は、元帥神についても、『神僧伝』の場合と同様に別種の資料からこの部分を引用したと考えられる。しかし、その項目の選択においては、またもこれをかなり恣意的に行った可能性が高いのである。

そもそも『三教捜神大全』には不思議なことに、当時民間で信仰のあった多くの神々の伝が見えない。典型的な例は八仙である。『三教捜神大全』編

纂時においては、八仙の人員がまだ固定していなかった可能性は高いが、それにしても道教でも民間信仰でも、当時最も著名であった仙人といえば八仙であったはずである[19]。実際、先に見た『仙仏奇蹤』には、八仙の伝がほぼ収録されている。『捜神記大全』にも八仙の伝はほとんど見えないが、「張果老」だけは何故か項目が立てられている。しかし他の八仙、例えば呂洞賓も鍾離権も韓湘子も何仙姑も、その伝は『捜神広記』『三教捜神大全』『捜神記大全』いずれにも収録されていない。これについてはやや奇異な感も覚え、またその原因も不明である。ただひとつ考えられるのは、全真教系の神仙については、あまりこれを重視しなかったかものかとも疑われる。

これも『三教捜神大全』の雑多で恣意的な性格を示すものと言えよう。しかし一方で、この元帥神に関する一連の項目は、他書にはほとんど見えないもので、非常に重要な記録であることは間違いない。

5.『捜神記大全』の項目群の編成

先にも見たとおり、『捜神記大全』は、おそらく明の万暦年間ごろに編集されたものだと考えられる。『捜神記大全』が『捜神広記』『三教捜神大全』と著しく異なる点は、その項目の配列にある。『三教捜神大全』が『捜神広記』の配列をほぼそのまま踏襲するのに対し、『捜神記大全』ではこれを大幅に入れ替えて編集を行っている。

その編集方針については、各神格の性格に注意した、かなり周到なものとなっている。この点では雑多な性格を持つ『三教捜神大全』とは異なっているといえよう。

以下に、巻ごとの構成について記す。

巻一

「儒氏源流」「釈氏源流」「道教源流（附聖母）」「玉皇上帝（附聖祖尊号・聖母尊号）」「后土皇地祇」「東華帝君」「西王母」「上元一品大帝」「中元二品大帝」「下元三品大帝」「東嶽」「南嶽」「西嶽」「北嶽」「中嶽」「四涜神」「五方之神」「太乙」「肩吾」「燭陰」「雷神」「電神（附風伯・雨師）」

巻二

「玄天上帝」「北極駆邪院左判官」「梓潼帝君」「呉客三真君」「許真君」「張天師」「三茅真君」「祠山張大帝」「五聖始末」「至聖炳霊王」「佑聖真君」「王侍辰」「袁千里」「張果老」「西嶽真人」「太素真人」「薩真人」「寿春真人」「負局先生」「律呂神」「劉師」

巻三

「南無観世音菩薩」「天王」「地蔵王菩薩」「金剛」「十大明王」「十地閻君」「十八尊阿羅漢」「宝誌禅師」「盧六祖」「普庵禅師」「泗州大聖」「傅大士」

「灌口二郎神」「蕭公」「晏公」（「宗三舎人」「楊四将軍」）「洋子江三水府」「泌江遊奕神」「洞庭君」「湘君」「巣湖太姥」「宮亭湖神」「九鯉湖仙」「海神」「蘇嶺山神」「盧山匡阜先生」「新羅山神」「射木山神」

巻四

「蔣荘武帝」「常州武烈帝」「揚州五司徒」「西楚覇王」「義勇武安王」「零陵王」「恵応王」「威恵顕聖王」「金山大王」「万廻虢国公」「趙元帥」「彭元帥」「潤済侯」「威済李侯」「霊泝侯」「崔府君」「陸大夫」「杭州蒋相公」「嵩里相公」「祖将軍」「花卿」「華山之神」「聶家香火」

巻五

「広平呂神翁」「黄陵神」「黄仙師」「江東霊籤」「協済公」「霊義侯」「張昭烈」「張七相公」「耿七公」「孫将軍」「張将軍」「順済王」「横浦龍君」「道州五龍神」「昭霊侯」「仰山龍神」「黄石公」「石神」「楚雄神石」「石亀」「鐘神」「馬神」「青蛇神」「金馬碧雞」「金精」「火精」「陳宝」「黒水将軍」「木居士」「磨嵯神」「黄魔神」「向王」「竹王」「槃瓠」

巻六

「天妃」「蠶女」「青衣神」「白水素女」「馬大仙」「聖母」「温孝通」「孝烈将軍」「霊沢夫人」「順懿夫人」「寨将夫人」「誠敬夫人」「姚娘」「曹娥」「二孝女」

「五瘟使者」「五盗将軍」「掠刷使」「増福相公」「福禄財門」「門神」「神荼鬱塁」「鍾馗」「司命竈神」「紫姑神」「開路神」「翁仲二神」

明らかに、これは各神格の性格に基づいて分類を行ったものである。

巻一は「玉皇上帝」「西王母」など、天界の最も重要な神々が占めており、巻二は「玄天上帝」や「許真君」など、比較的地位の高い主要な神仙を多く収録する。巻三は、始めの「南無観世音菩薩」から「傅大士」までが仏教系の神々を集めており、「灌口二郎神」から「射木山神」までは、水神や海神や山神など、自然物に関わる神を集める。巻四から五は、生前に功績のあった者が死後神となったものと、有力な地方神、また動物などが神となったものを収録する。巻六の前半は、「天妃」から「二孝女」までが女性の神をもっぱら扱い、後半の「五瘟使者」から「翁仲二神」までは、疫神や財神、また門神や竈神など、一般生活に関わりの深い神々を集めている。

むろん、各項目の性格はそれほど截然と分かれるものではないため、やや分類が不適当と思われるものもあるが、『三教捜神大全』の雑多さに比して、『捜神記大全』の方がより整然と配列されていることは間違いない。

なお、『捜神記大全』においては、各神の生誕日を記しているのがまた大きな特色となっている。

ところで、「宗三舎人」「楊四将軍」の二項目については、項目名だけがあって記事がない。これは『続道蔵』に所収の版本では、目次に項目名が記してあるのみであるが、富春堂の刊本を見るに、両神ともに画像を附し、本文のみが切り取られたように失われている。この部分が何故無くなったかについては分からない。

宗三舎人はまた「鬚三爺」とも呼ばれる神で、水神とされる[20]。「楊四将軍」は黄芝崗氏が詳しく考証しているように[21]、湖南地方において有名な水神であった。また「楊泗菩薩」などとも称される。楊四将軍は、二郎神や許真君と同様に、悪龍を退治して水害を治めたという伝説がある。この神の生誕日は旧暦の六月六日であるが、『捜神記大全』富春堂本ではこの日付をわざわざ記載しながら、記事だけが削り取られるようになくなっている。しかし、記事の内容に不都合があったために削除されたようには思えない。おそらく伝本自体の欠損によるものであろう。

ただ万暦年間に編纂された『続道蔵』に所収の『捜神記大全』においても、この項目はやはり項目名だけがあり、記事がない。よって『続道蔵』本は完全にこの富春堂本に拠っていることは明らかである。ただ、『続道蔵』本では、羅懋登の序文については羅の署名を削って採録している。

『捜神記大全』において増補されている項目を見るに、『三教捜神大全』との相違がより鮮明になる。『捜神記大全』では、歴史上の人物が地方神として祀られているものを取り上げる。「西楚覇王」は項羽、「零陵王」は唐閔、「恵応王」は欧陽祐、「金山大王」は霍光、「彭元帥」は彭廷堅のことであり、それぞれ特定の地方で神として祭祀されるものである。楊四将軍も含め、これらの神は現在でも廟が残っているものがある。例えば、上海にある城隍廟は、もとは金山大王・霍光を祭祀したものであった。この廟は明代に城隍廟としての性格を強めていく。また「黄陵神」「江東霊籤」「協済公」「霊義侯」「張昭烈」「張七相公」「耿七公」「孫将軍」「張将軍」「順済王」などの神は、いずれも地方色の強いものである。

ただ、こういった地方神を採録することは、そもそも『捜神広記』において行われていた。「威恵顕聖王」「祠山張大帝」「掠刷使」「沁江遊奕神」「常州武烈帝」「揚州五司徒」「蔣荘武帝」「威済李侯」「杭州蔣相公」「増福相公」「嵩里相公」「霊泓侯」などの項目がそうである。そして『捜神記大全』と『三教捜神大全』に共通する項目、すなわち、「九鯉湖仙」「王侍辰」「盧山匡阜先生」「黄仙師」「洋子江三水府」「蕭公」「晏公」などにもそういった傾向が見られる。すなわち『捜神記大全』は『捜神広記』の項目をかなり入れ替えているとはいえ、各項目の採録については、『捜神広記』の地方神重視などの方針を忠実に踏襲していると言えるのである。それに比して『三教捜神大

全』において増補されている項目には、地方神は少ないように思える。それは『神僧伝』などから材料を採取していることからも感じられる。『三教捜神大全』の方は、この面では若干作為的なものが目立つ。そういった意味では『三教捜神大全』よりも、『捜神記大全』の方が、元明期の民間信仰の状況をよく反映するものであろう。

注

1） 王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編』第一輯（台湾学生書局・1989年）「提要与総目」1頁。
2） 前掲李豊楙『中国民間信仰資料彙編』第一輯「提要与総目」3頁。
3） 『絵図三教源流捜神大全（外二種）』（上海古籍出版社・1990年）351頁。
4） 原文：元板画像捜神広記前後集、昔在京師廠肆所見者、毛氏汲古閣旧蔵、巻首毛氏印記。（略）此書明人以元板画像捜神広記、増益繙刻。即可以書中皇明年号証之。而諸僧記載、悉本永楽御製神僧伝一書、文句都無所改竄。
5） 前掲李豊楙『中国民間信仰資料彙編』第一輯「提要与総目」4頁。
6） 原文：唐武后光宅二年九月甲寅、追尊聖母曰先天太后。祖殿在亳州太清宮是也。
7） 原文：国朝会要曰、天禧元年三月六日、冊上聖祖母尊号曰元天大聖后。先是大中祥符五年、制加上聖祖母号侯、兗州太極観成、択日奏上至是、詔王旦等行冊礼。
8） 『旧唐書』礼儀志四（中華書局版）926頁。ここでは台湾中央研究院「漢籍電子文献」http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/を利用。
9） 原文：三月壬子、親謁玄元宮、聖祖母益寿氏号先天太后。
10） 『宋史』礼志七（中華書局版）2542頁。前掲中央研究院「漢籍電子文献」を利用。
11） 原文：制九天司命保生天尊号曰聖祖上霊高道九天司命保生天尊大帝、聖祖母号曰元天大聖后。
12） 李献璋『媽祖信仰の研究』（泰山文物社・1979年）63～64頁。なお、この引用文においては旧仮名遣いと括弧について、若干の変更を加えている。書名は二重括弧とした。
13） 前掲『絵図三教源流捜神大全』328頁。
14） 原文：北極駆邪院、左判官唐顔真卿。（略）顔家子孫得書、驚曰、先太師親筆。発塚開棺、已空矣。後白玉蟾云、顔真卿為北極駆邪左判官。
15） 『大正新修大蔵経』第五十冊 No. 2064『神僧伝』ここでは「漢文電子大蔵経系列」http://www.buddhist-canon.com/の電子テキストを利用。
16） ここでは影印本『仙仏奇蹤』（江蘇広陵古籍刻印社・1993年）を使用した。
17） 雷法については、松本浩一「宋代の雷法」（『社会文化史学』第17号・1979年）45頁参照。
18） 道教儀礼中に見える元帥神については、大淵忍爾『中国人の宗教儀礼――仏教・道教・民間信仰――』（福武書店・1983年）247頁、また儺戯については、王秋桂・庹修明『貴州省徳江県穏坪郷黄土村土家族衝寿儺調査報告』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年）28頁、また王躍『四川省江北県舒家郷上新村陶宅的漢族「祭財神」儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1993年）81頁などを参照。
19） 八仙の人員の異同などについては、拙論「『八仙東遊記』における過海故事の変容」（『東方学の新視点』五曜書房・2003年・343～368頁）参照。
20） 姚福均『鋳鼎余聞』（『中国民間信仰資料彙編』第一輯所収）410頁。
21） 黄芝崗『中国的水神』（上海文芸出版社影印本・1988年）1頁。

第三章　道教における元帥神

1．雷法の発展

『道法会元』[1]は、『道蔵』の中でも屈指の大部の儀礼書であり、清微や神霄など、雷法を中心とした諸派の道法、すなわち法術を集大成したものである。ただ、集大成だけあって、その内容はかなり雑多である。系統で言えば、清微・神霄・天心・酆都など、かなり性格の異なる法術が一緒になってしまっている。こういった法術は、「神霄雷法」や「五雷法」をもってその代表とすることも多いが、ひとまず総称して「雷法」運動として考えることにする。また本章では、ある流派の道士や法師が駆使する術を「法術」とする。これらの法術は「何々法」と称されることが多く、また「呪法」「道術」「方術」とも呼ばれる。

さて北宋代に興起し、その後徽宗の庇護のもと、大きく発展した雷法については、すでに多くの研究者による考察がある。例えば松本浩一氏は次のように述べる[2]。

> こうした新しい伝統の発生という一連の現象の中に位置づけられるものに、古来の伝統の中には見られなかったいくつかの特徴的な呪法の登場がある。『道法会元』等の呪法の書に説かれている。雷法、天心法、酆都法などと呼ばれるこれらの呪法は、その多くが唐末五代にその起源をもつとされているが、この時代になって、民間で活躍していた宗教者たちの間で発達を見ることになった。それが北宋末徽宗の崇道と林霊素の活躍とによって歴史の舞台に登場することになり、全中国的規模で冥界のヒエラルキーが確立されていく動きに対応した道教教団の動きもあって、教団、特に正一教団の手によって正式に採用されるに至ったのである。そしてこの教団による正式採用の過程において、雷法と呼ばれる、雷の力を呪術力の源泉と

し、雷呪によって雷部の神将・神兵を使役して駆邪等を行う呪法が、特に精緻な理論づけや依拠の経典を与えられて、道教の呪法中重要なものに数えられるようになった。

また劉枝萬氏は、雷法について、それが道教に本来あったものではなく、あくまで民間の巫者たちの法術が源流になったものだと指摘し、次のように述べる[3]。

要するに雷法は、林霊素の出現によって整理集成され、画期的発展期を迎えたのであるが、煎じ詰めれば、雷法は彼にとって、栄達への踏台になったが、逆にそれなるがゆえに、今まで地下潜行の隠微な妖術の補助法が、一躍して地上における、公然たる正法への輝かしい脱皮をとげたと称しても、恐らく過言ではなかろう。『道法会元』は、『上清霊宝大法』と共に、宋代に集大成された呪法儀礼書の双璧として有名である。後者は編者を異にする両書を合計しても一一〇巻だが、前者は全書二六八巻にも及ぶ浩瀚なものである。しかしてその内容は、ほとんどが雷法が核心になっている観があり、含まれている種類はおびただしい。

ただ、北宋における徽宗の並外れた崇道に強く関わり、北宋の亡国の一因を担った者として、林霊素の評判は芳しくない。そのためか、雷法は南宋期において、金允中のような正統派を任ずる道士たちから厳しく非難されている。そのことについて、ミシェール・ストリックマン氏は次のように言う[4]。

上清霊宝大法の著者である金允中にとって、神霄運動は許しがたいほどに異端であり、真の道教の啓示という土台を全く欠いているものであった。「正」でないものは何であろうと必然的に「邪」に違いなく、一旦正統派道教の慣習の輪からはみ出したとして規定されると、神霄の祭司たちは正統派道士から現実として本質的に悪魔的であると見なされた。

しかしながら、林霊素個人への批判はさておき、南宋以後も多くの有力な道士が雷法を受け入れ、発展させていったのは確かである。そして最後には、龍虎山の正一派自身が雷法を受け入れることになった。ストリックマン氏は、白玉蟾と雷法の密接な関係について論じた後、次のように述べる[5]。

正統派という問題は、宋代に道教徒の集団の中でますます強く前面に押し出されてきた。この問題への関心の高まりは、再び姿を現した正一派が公的な援助を得、他のすべての道教教団の上にその正統性を確立しよう、という試みと関係がある。正一派の中に五雷法が出てきたのは、神霄の有害な儀式、それは悪魔的雰囲気の漂うものと見られていたが、それに対抗するためであった。これが、林霊素の雷呪への天師の反応であった。正一派では、五雷法は初代の天師張道陵にまで遡ると主張するけれども、それが実際は神霄運動という挑戦を受けたために出てきたものであることは明らかである。特徴的なことであるが、神霄派への対抗のために、天師は敵自らの武器を使った、すなわち、雷に対して雷で戦ったのである。

また『中国道教史』の第八章六節「南宋の三山符籙道派の流伝：内丹派南宗と浄明道の形成：東華・神霄・天心正法・清微等新符籙派別の興起」[6]では、南宋から元にかけて、多くの優れた道士が雷法を修得し、普及させていった結果、雷法が隆盛になっていく状況について詳しく述べられている。恐らく元代には、雷法はすでに道教の正統な法術と認識されていたと考えられる。

さて雷法の系譜について述べた『道門十規』[7]には、次のような記載がある。

神霄の法は、汪・王の二祖師から始まり、張・李・白・薩・潘・楊・唐・莫などの諸師に伝わり、発展したのである。

ここでは、汪守貞・王文卿の二人の祖師を強調し、あまり林霊素についてはふれず、神霄を継ぐ者としては張継先・白玉蟾・薩守堅・莫月鼎を挙げている。もちろん、後世雷法の祖師として尊崇されるのも、これらの道士たちである。

ただ、正一派における雷法の受け入れは、ストリックマン氏の指摘よりも、若干早い時期を想定してもよいと思われる。例えば、徽宗朝において有名な第三十代張天師である張継先は、『明真破妄章頌』[8]において、次のような言葉を残している。

> すべての法は一処に帰すものだ。正一だとか清微だとか殊更に分ける必要があるのか。[9]

張継先は、崇寧四年（一一〇五）に徽宗に召され、「虚靖先生」の号を賜ったとされている。ただ、恐らくは徽宗の信任は林霊素に遠く及ばず、「張天師」それ自体の地位も元の時代に比べればそれほど高いものではなかった。南宋期には留用光のように、正一派においても五雷法で著名になった者も現れている。張継先は歴代張天師の中でも、やや特殊な地位にあるのは間違いないが[10]、それにしても雷法に対して、早くから融合的な志向を持っていたものと思われる。

その後の神霄派の発展においては、王文卿と薩守堅の役割が重要である。『道法会元』巻六十七に収録される二種の『雷説』は、雷法の理論面を支える重要な文章である。さらに著名な道士白玉蟾も雷法を兼修し、『玄珠歌注』において内丹説と雷法との融合を図っている。

雷法は元代には莫月鼎に引き継がれて発展し、明代においては、世宗嘉靖帝の崇道に大きな影響を与えた陶仲文によって雷法が広まった。

明代の通俗小説において、雷法がしばしば「正統な法術」として扱われるのは、主にこのような元明における風潮を受けてのことであろう。例えば『水滸伝』では、梁山泊の豪傑の一人で、道士である公孫勝に対し、その師の羅真人が次のように告げる[11]。

> 羅真人は言った。
> 「弟子よ、そなたがいままで習ってきた法術は高廉の使うものとそう変わりはせぬ。いまわしはそなたに五雷天心正法を伝授しよう。この法術を行い、宋江を助け、国を守り民を安んじ、天に替わって道を行うのじゃ。」[12]

この他、『警世通言』や『平妖伝』などにも、「五雷天心正法」を使う道士が登場し、その正統性を幾度となく強調する記載がある。この時期においては、雷法は完全に道教の正統な法術とみなされるようになっている。

清代においては、雷法はそれほど注目を集めなくなったようであるが、正一派の本拠地である龍虎山と、蘇州玄妙観などでは、引き続き雷法が行われたようである[13]。また道教や民間信仰の儀礼の中に、数多くの元帥神が登場することからも分かるように、雷法は各種の儀礼に影響を与えている。

2．神霄派の雷霆神

ところで、林霊素の時期に、神霄派などにおいて元帥神が重視されていたかというと、これについては疑問な点も多い。例えば、『無上九霄玉清大梵紫微玄都雷霆玉経』[14]は、北宋末の神霄雷法に関する重要な経典であるとされるが、そこに見える雷霆神は、後の元帥神とはかなり異なるものである。

> 東方雷霆風雨雲電之神　呼風亜　咄遮黎　乂鳩羅
> 南方雷霆風雨雲電之神　氷鳩鷓　煖炎寮　石阿雄
> 西方雷霆風雨雲電之神　栄耀霊　朗重延　閃鳩陀
> 北方雷霆風雨雲電之神　盧刑猛　横天覇　釗振鳩
> 中央雷霆風雨雲電之神　孫真耳　多伯言　旭執圭

さらに、この経典の後半部、各神の職種を記したところにも、「紫微大帝・天蓬君・天猷君・翊聖真君・玄武君・天罡神・河魁神・火鈴大将軍・天丁力

士・六丁玉女・六甲将軍」などの名称は見えるものの、元帥神につながるようなものは少ない。

> 北極紫微大帝は三界を統括し、五雷を掌握する。天蓬君・天猷君・翊聖君・玄武君は分司領治とする。天罡神・河魁神は召雷檄霆の司となす。九天流金火鈴大将軍・天丁力士・六丁玉女・六甲将軍は、節度雷霆の使とする。九天嘯命風雷使者・雷令使者・火令大仙火伯・風令火令風伯・四目皓翁・蒼牙霹靂大仙は摂轄雷霆の神とする。火伯風霆君・風火元明君・雷光元聖君・雨師丈人仙君は雷霆風雨の主とする。中に三五邵陽雷公火車鉄面の神あり、また中に負風猛吏銀牙耀目欽火律令大神あり。狼牙猛吏大判官・五雷飛捷使者・五方雷公将軍・八方雲雷大将・五方蛮雷使者・三界蛮雷使者・九社蛮雷使者、実にその命令を司り、その権を用いよ。[15]

また『高上神霄玉清真王紫書大法』[16]は、全十二巻のうち、前三巻が北宋末の成立と言われている[17]。例えばその巻六の「大将軍部」に見える神将の人員は次の通りである。

> 総監大将軍　王文宣　統兵大将軍　丁仲珪　主水大将軍　王藩
> 主火大将軍　趙仲明　主風大将軍　馮浩　主雲大将軍　童隆
> 主炁大将軍　瞿徳　主雨大将軍　丁宗成　主殺大将軍　蒋徳交
> 主生大将軍　劉通　主病大将軍　丁宗厳　捉鬼大将軍　馬勝
> 縛邪大将軍　陳猛　考鬼大将軍　荘徳降　破廟大将軍　趙侯
> 伏魔大将軍　元真　縛龍大将軍　応宿元　捜奸大将軍　丁友忠
> （後略）

この他にも巻七においては「捉邪霊官部」があり、そこにも多くの霊官の名が見えるが、ほとんどが後の元帥神とは異なるものである。かろうじて馬元帥（馬勝）と劉天君（劉通）の名は一致するが、これは同名異神である可能性もある。趙仲明は趙公明を指すか。

恐らく後に付加されたと思われる巻九の「玉府聖位」においては、「玉府上卿五雷使・陶伯成」に始まる多くの仙卿・霊官の名を掲げる。数百にのぼる神々の名が挙げられているが、ここで後の元帥とおぼしき名称を持つ神は、「欽火大神・鄧伯温」、すなわち鄧天君くらいである。

この他、この『高上神霄玉清真王紫書大法』には、密教の陀羅尼に似せた呪文があまり見えない点も重要である。但し、巻九の「神霄玉清王府三十六天嶽神符」においては、ほとんどの密呪は陀羅尼系のようである。

また同様の傾向は『道法会元』巻五十六「上清玉府五雷大法玉枢霊文」また、巻五十七から巻六十までの「上清玉枢五雷真文」においても見られる。すなわち『道法会元』の中でも、神霄系の呪法には、『三教捜神大全』に見られるような、温・関・馬・趙といった元帥が出てくることは少ない。

但し、巻六十一「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」においては、王文卿の序を引き、なおかつ将帥として、「鄧伯温・辛漢臣・張元伯」すなわち鄧・辛・張の三天君が中心になっている。王文卿の頃では、一応この三天君を雷部の中心とする法術が行われていた可能性が高い。

また他に、古い神霄派の経典と考えられるものとしては、『九天応元雷声普化天尊玉枢宝経』[18]や『太上説朝天謝雷真経』[19]などがあるが、このどちらにも、後の元帥神らしき名称が見えない。やはり中心になるのは、普化天尊とその部下の雷霆神たちである。

これらのことから、『三教捜神大全』や『封神演義』などに見える元帥神の多くは、北宋期の神霄派においては、あまり重視されていなかったのではないかと推察されるのである。

3．北極四聖について

事実、この時期における駆邪の武神として重視されていたのは、天蓬・天猷・真武・翊聖真君からなる北極四聖、及びその配下の天罡大聖や六甲六丁神などであった。先に見た『無上九霄玉清大梵紫微玄都雷霆玉経』においても、北極紫微大帝を主とし、その下に北極四聖、さらにその下に六甲六丁神

を配している。

これらの神々と、神霄派の関係について、李遠国氏は「鄧紫陽と北帝大法」[20]において、次のように述べる。

> 北帝派は初唐の道士鄧紫陽が開創したものである。北極紫微大帝すなわち北帝を尊崇する派である。「北帝録」などの経録を授け、「酆都」の六天の鬼神を退治するという術に長けており、また辟邪や禍を祓う術で著名であった。（略）これらは、この「北帝大法」が唐代に隆盛であったことの証左である。（略）その後、唐末五代の杜光庭、宋代の張継先・王宗敬・呉道顕・柳伯奇・鍾明真・盧養浩・徐必大・劉玉・黄公瑾などは、みな「北帝大法」を修得しており、また、それと「神霄雷法」を結合していたのである。この流れから、新しい一つの道法が現れた。それは「神霄金火天丁大法」である。

すなわち、唐代にあった北帝派の流れが、宋代には神霄派と結合して発展したという。

実際には、北帝を駆邪神とする信仰は、早期の道教にすでに見られる。『真誥』[21]の中にある「北帝煞鬼之法」がそれで、北帝派はこの流れに沿って発展したものであろう。

> 世の人、酆都に六天宮門の名があることを知れば、すなわち百鬼はあえて害をなすことはない。眠ろうとするとき、常にまず北を向き、呪を三たび唱えよ。その音は微ならしめよ。その呪文とは、「われは太上の弟子なり。下は六天を統ず。六天の宮は、われに部するものである。ただ部するものでなければ、太上が司るところである。われは六天の門の名を知る。このゆえに長生を得ている。あえて犯すものがあれば、太上はそなたたちを斬に処するであろう（略）」とある。
>
> これがいわゆる北帝の神呪、煞鬼の良法である。鬼が三たびこの法を受ければ、みな自ら死んでしまう。[22]

また「天蓬呪」も駆邪の法として古くから用いられるものである。ただ、この北帝を北極紫微大帝とし、下に四聖を配して駆邪の府、すなわち「北極駆邪院」を構成するのは、やはり北宋以後になってからのことであると考えられる。特に、四聖のうち翊聖真君と真武は、唐末五代から興起したものであり、道教に取り入れられた時期は、紫微大帝や天蓬神よりもずっと遅いものと推察される。もっとも、「北帝」が明確に「紫微大帝」と意識され、「天蓬神」が「天蓬元帥」として認識されるのは、若干後になってからのことである。先に見た『雲笈七籤』の記事で、天蓬神が「大元帥」と呼ばれるのは、むろんこのことを反映しているものである。もっとも『道法会元』を見るに、北極駆邪院の神格は、あまり明確にはされていない場合も多い。駆邪院を含め、天枢院などの性格も、法術によって様々である。ここで示す駆邪院の構成も、あくまで一部の法術にしか当て嵌まらないものである。

さて劉枝萬氏によれば、天蓬神については、神自体に関する信仰と、「天蓬呪」などに関する信仰との乖離が目立つという[23]。

> 要するに天蓬神信仰は、神自身の影が薄くて、むしろその呪文と法器が重視され、換言すれば天蓬元帥をさしおいて、天蓬呪と天蓬尺が一人歩きをしているという、信仰形態面における特異性が注目を引くのである。

南宋から元にかけては、恐らく天蓬元帥の信仰はそれなりの勢力があったと推察される。しかし、明代の小説などでも天蓬元帥は一部の『水滸伝』や『西遊記』を除けば、それほど目立った存在ではない。さらに『西遊記』では、猪八戒が天蓬元帥の化身とされているため、ますますそのイメージがねじ曲げられてしまった。『三教捜神大全』に天蓬元帥の独立の項目が無いのは、この時期の天蓬元帥の民間における地位の低下を反映したものとしてよいであろう。

また四聖のうち、翊聖真君については、北宋の始め道士張守清がこの神の神託を受けて、王室に働きかけたことがその信仰が隆盛になったきっかけであった。これにも劉枝萬氏の指摘があって言う[24]。

> 黒煞神の起源は不詳だが、早くから五代の道士譚紫霄に黒煞神君として信奉され、北宋では開宝九年(九七六)、「天の尊神、玉帝の輔」だと自称する黒殺大将軍が、宋朝を衛護するために張守真に降下して、帝室に取り入り、崇信された史実は有名である。その出自は巫覡の守護神だと考えられるが、称号に「黒」の字を冠しているとおり、五行に配した北方の辟邪神なるがゆえに、同じく民間信仰より萌芽した北天の辟邪神たる天蓬と結合しやすかったのであろう。

黒煞神については、その性格が曖昧であるためか、後世他の神との混同を招きやすい面もあった。まず四聖のうち真武との混同がある。また、趙玄壇、すなわち趙公明（趙元帥）と同一視されることもあった。さらに、趙玄壇が趙氏の始祖神である保生天尊・趙玄朗と名称が酷似しているため、それとの混淆もあった。ただ、その性格からして、やはり五代の巫覡の守護神が道教の中に流入したものと言えよう。エドワード・デイビス氏は、この黒煞神の信仰の道教への流入を非常に重視している[25]。

さて四聖の真武は、後世「玄天上帝」として非常に重視された神である。それが古来四獣として信仰のあった玄武であり、亀と蛇で現されるものが、唐末五代の時期から徐々に人格神に変容したものであることは、拙論でも詳しく論じた[26]。王光徳・楊立志両氏は玄武について次のように述べる[27]。

> 玄武は、元は青龍・朱雀・白虎・玄武の四象崇拝の一つであったものが、後に道教の神系に加えられたものである。玄武は四方の守護神の中で北方守護をその任とした。（略）後、北方星神である北宮玄武は、五代の前には北極紫微大帝の神系に属するとみなされるようになった。そして徐々に四象崇拝を脱し、紫微大帝の四大神将の一つとなった。（略）玄武は道教の神系において地位を向上させていったが、これは中天北極紫微大帝の信仰と密接な関係がある。（略）恐らく六朝時代には北極大帝、略して北帝という神格が成り立っていた。また唐代の道教には北帝派という派が存在していた。（略）北帝の四将とは、すなわち天蓬・天猷・黒煞・玄武の四将である。このように宋代以降は専ら四聖と称するようになった。この時点での「将軍」という職は天帝の侍従に対する称呼であり、神格の地位は決して高くはない。時間の推移とともに玄武は四象の系統を脱し、星神から転化して具体的な人格を有する神となった。そして後には北極崇拝と融合し、道教の「大神」となる基礎を築き上げたのである。

このように、紫微大帝の配下の将軍であった真武は、北宋より後その位階を上げ、元代以降は「玄天上帝」と称されることになった。むろん、真武のみを尊崇することは、徐々に行われていったようである。唐代劍氏の指摘によれば、南宋の孝宗・理宗より、四聖の中でも特に真武を崇拝する傾向が強まるとされる[28]。その後、玄天上帝となった真武は、むしろ北帝の役割を紫微大帝、或いは酆都北陰大帝に代わって受け持つことになる。拙論で論じたように、『元始天尊説北方真武妙経』[29]が、『太上元始天尊説北帝伏魔神呪妙経』[30]を模して作られたのも、北帝の役割が真武に受け継がれたために発生した現象であると考えられる。明代には、特に永楽帝の尊崇が甚だしく、玄天上帝の聖地である湖北の武当山においては、膨大な国費を投入しての宮観の造築が行われた。今にも残る武当山の建築群の大半は、このときに作られたものである。

さて『三教捜神大全』が基づいた『捜神広記』の前集においては、玉皇上帝や聖祖・東華帝君・西王母などに続き、玄天上帝の記事が載せられている。このことから、すでに玄天上帝の地位は、これらの神に次ぐものとみなされていることが分かる。一方で、紫微大帝や北極四聖に関する記事は、特に独立の項目を立てられていない。すなわち、『捜神広記』の書かれた元代にお

いては、完全に玄天上帝こそが、かつての北帝神、すなわち駆邪院の主たる神格と考えられるようになっているのである。

これを端的に示すのが、雑劇『二郎神鎖斉天大聖』である。第四折に登場する駆邪院主は、次のように述べる[31]。

> 駆邪院主は言う。
> 「(略) 父は浄楽国王、母は善勝夫人。胎内にあること十四ヶ月、すなわち太上老君の八十二番目の変化、母の左脇から生じた。(略) 玉帝は貧道の功績あるを称え、勅して九天採訪遊奕使・北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝に封じ、北極駆邪院都教主とした。」[32]

ここでは北極駆邪院主は、紫微大帝や或いは酆都北陰大帝ではなく、完全に玄天上帝であることになっている。

そして、このような民間における玄天上帝の地位の変化は、他の神格にも波及することになった。まず、北極紫微大帝の地位は、玉帝などと並んでやや形式的な上位神へと追いやられ、甚だ存在感を欠くものとなった。また、真武以外の四聖、すなわち天蓬・天猷・翊聖真君が真武に比しては目立たぬ神格となる。『三教捜神大全』に天蓬・天猷元帥の独立の項目が立てられていないのも、このような玄天上帝の地位向上に伴っての現象と思われる。また同時に、玄天上帝は紫微大帝のみならず、天蓬神が持っていた役割を担うことにもなった。

そもそも、三十六員の天将を配下に持つ、という特色も元来は天蓬元帥、或いは天罡大聖のものであった。すなわち『道法会元』巻一五六「上清天蓬伏魔大法」に言う。

> 祖師の九天尚父・五方都総管・北極左垣上将都統大元帥・天蓬真君は、姓を卞、名を荘という。三頭六手にして、手に斧・索・弓箭・剣・戟の六種の武器を執る。黒衣玄冠にして、三十万の兵を率いる。

> 北斗の破軍星の化身であり、また金眉老君の後身である。(略)
> 三十万の兵と、三十六の天将を率いる。[33]

むろんこのような考え方も、数多くの派がある道教や民間信仰においては、地域差もあり、必ずしも統一されていたわけでない。先にも少し言及したが、道教の神系は、甚だしい時は、ある経典ごとに、いや特定の経典の内部ですら異なる場合がある。

ただ極めて大雑把に、宋から明にかけての北極駆邪院の性格を見るならば、元来は北極紫微大帝の配下に四聖があり、その下にまた三十六の天将がいるという構成が、後に駆邪院主・玄天上帝の下に三十六の元帥が配される、という考え方に変化する。『北遊記』など、明代の小説に見える三十六の元帥神は、恐らくこのような考え方に基づいて構成されているものと考えられる。但し、元帥神の主神は、時には雷声普化天尊とみなされることもあった。『封神演義』などでの考え方は、これに近いものである。

『三教捜神大全』における元帥神の記事の多くは、恐らくは、この「玄天上帝と配下の三十六元帥」という考え方に基づいているものと考えられる。例えば、「霊官馬元帥」の記事には「勅により玄天上帝の部下となり」[34]という記述があり、さらに「鉄元帥」の項目にも、「玄天上帝が悪気を治めた時に協力した」[35]という記載がある。

但し、『道法会元』中には、この両者の考え方が併存している。これは『道法会元』が諸法の集大成であることを考慮すれば、当然ありうることである。むろん『道法会元』は、そもそも様々な方術が雑多に集められており、幾つもの神体系が混在しているものであり、厳密な定義は難しいということを考慮する必要はある。

さて、『道法会元』中には、明確に紫微大帝を主とする幾つかの法術がある。すなわち巻一五六から一六八の「上清天蓬伏魔大法」、巻百六十九から巻百七十までの「混元飛捉四聖伏魔大法」においては、北極紫微大帝を中心とし、四聖や、天罡大聖などの三十六天将が駆邪の役割を担っている。また、これとはいささか性格が異なるが、巻二百十一の「天罡生煞大法」及び

「中皇総制飛星活曜天罡大法運用秘訣」では天罡大聖が主となり、巻二百十三の「広霊宣化陳将軍秘法」などでは、紫微大帝が法の中心となる。巻二百十七の「紫庭追伐補断大法」では天蓬元帥を「北極法主天蓬都元帥蒼天上帝」として首座に据える。

そして、同時に巻百三十の「北真水部火飛撃雷大法」では、玄天上帝を主法とする。これは水部を中心とした法なので、いささか系統が異なっているが、巻二百二十七の「太一火犀雷府朱将軍考附大法」では、玉帝・紫微大帝を主法に据えるものの、「法主」となっているのは「玉虚師相玄天上帝」である。

総じて『道法会元』においては、紫微大帝と北極四聖を中心とする法術の体系が中心となっているものの、玄天上帝を主とする法術も多く混入していると考えられる。

4．天心法と浄明道系統の法術

紫微大帝と四聖を中心とする北極駆邪院を重視する姿勢は、神霄雷法よりも、天心法において、より顕著である。

もっとも天心法は、先に見た『水滸伝』のように、後には「五雷天心法」と称せられることも多く、神霄の雷法と結合して、雷法の代表的な法術とみなされるものである。このため、両者にはかなりの共通点があり、神系においてもそれが現れているものと考えられる。もっとも、神霄雷法と天心法では、神霄法が雷を重視するのに対し、天心法は光を重視するのなどの性格の違いがある。

さて、天心法は五代の譚紫霄を祖師とするのが常であるが、松本浩一氏の指摘によれば、馬令『南唐書』の譚紫霄の伝には、特に天心法についての記載は見えず、その後陸游の『南唐書』においてそれが現れてくるとのことである[36]。恐らく譚紫霄が天心法の祖だということ自体、後から考えられたものであろう。その後天心法は、饒洞天がこれを受け継ぎ、華蓋山に登って大いにその法術を顕したという。華蓋山における信仰については、ロバート・ハイムズ氏がこれを重視しているが、その影響については今ひとつ不明確な

点が多い[37]。その後、両宋期の著名な道士路時中が、「天心正法」を行ったことが知られている。ただ、実際の天心法の伝授については不明な点が多いと言わざるを得ない。

天心法の経典として知られているのは、『太上助国救民総真秘要』[38]『上清天心正法』[39]『上清北極天心正法』[40]『無上玄元三天玉堂大法』[41]などがある。

『太上助国救民総真秘要』は、政和六年（一一一六）の元妙宗の自序があり、宋代の成書であることが分かる[42]。その巻二などに見える神は、三清や玉帝や張天師などの名も見えているが、やはり中心になるのは、北極紫微大帝・天蓬・天猷・真武・黒殺・天剛大聖（天罡大聖）と三十六将などの神々である。さらに六甲六丁神と唐・葛・周の三将軍などが見える。総じて、道教の伝統に則った神が多い。また『太上助国救民総真秘要』には、陀羅尼系の呪文的な呪文が総じて少ないのであるが、巻五の「五嶽符」には幾つかそれが見える。また「軍吒利」が土星神の諱であるとされている。巻六の記載には、次のようにある。

> 上帝が天枢院に奏上し、四天王・十二大神・八金剛・六丁六甲・天蓬・天猷・火鈴大将軍・五雷風雨の神をして、天門より出さしむ。[43]

巻七には、神将の名が具体的に挙げられている。

捉将　崔舒宣
縛将　盧機権
枷将　竇楊捶・楊光
黄頭将　陳鎮
蓬頭将　劉仲
牢頭将　楊政
五方追鬼将　趙公明

左右急捉将　姚端
火輪将　宋無忌
考鬼将　鄧行文
斬頭瀝血将　劉炎
薬叉将　陳守忠
霊官五郎　馬勝

その役職名から推察するに、これらの神は、治獄を担当するかなり下位の神将であると思われるが、ここに趙公明（趙元帥）と馬勝（馬元帥）の名が見えることは注意してよい。また、馬元帥の「霊官五郎」という名称は、後に「五通」「五顕大帝」との混同を招く要因であった可能性がある。なお宋無忌は、『捜神記大全』の中にこれを「火精」とする記載がある。

『無上玄元三天玉堂大法』は、撰者を記さないが、巻一の末に路時中の署名があり、南宋の始めの成書と考えられる[44]。この巻二十八に、駆邪院の神将として見えているのは、次の通りである。

天罡殺鬼大将軍
上元将軍　唐宏
中元将軍　葛雍
下元将軍　周武
三元麒麟使者　武剛中
雷公猛吏　辛漢臣
急摂将　鄧子信
急縛将　毛当信
斬鬼頭瀝血将　劉炎
斬鬼頭瀝血将　劉志
斬鬼頭瀝血副将　章自明
（略）

ここでは、天罡将軍（天罡大聖）の他に、唐・葛・周の三将軍、さらに雷部の神として、辛元帥の名が見えている。

『上清天心正法』は、鄧有功の序文を付す。鄧有功は、南宋の人であり[45]、饒洞天がこの法を地中より得てより五伝の上、これを得たという。

その呪法においては、やはり黒煞神などの北極四聖が重視されているが、特に天罡大聖と三十六将を重視し、その職と姓名をすべて挙げている。『上清天心正法』の巻二に見える、三十六将の一部について次に示す。

都天捉鬼大将　陳希
雲路追捉大将　孫常
天司検会大将　王和柔
飛天捷疾大将　許遜
駆遣精邪大将　趙充
天医治病大将　周洪
断除瘡痢大将　趙剛
解禳呪擔大将　王国賢
保護患人大将　由夔挙
直日捉邪大将　元廷臣
（略）

多くは、邪鬼などを捉える役割をもった神将であり、先にみた『無上玄元三天玉堂大法』の駆邪院の将と似たような性格を持つものが多い。ただ、ここには『三教捜神大全』に見える元帥神とは、ほとんど名称の一致するものはない。

『上清北極天心正法』の成立年代は不明である。ただ内容的には、『上清天心正法』と近い部分がある。ここでは北極四聖よりも、天罡大聖と部下の神将たちの方により重きが置かれている。その「天心法部将吏服色姓諱」には、次のようにある。

都天執邪大将　張廷申（披髪大紅袍、金甲仗剣）
横天殺神大将　朱子真（披髪青袍、金甲執索）
衝天摂神大将　蘇成力（披髪黄袍、金甲持剣）
金天火輪大将　鄭天英（披髪皁袍、金甲持杖）
飛空金聖大将　趙天正（披髪白袍、金甲執枷）
炎空飛輪大将　王火光（披髪緋袍、金甲持火輪）
飛霄滅邪大将　劉次神（披髪紫袍、金甲握刀）
丹青聖神大将　胡中元（披髪皁袍、金甲執杖）
安神定魂大将　居子鎮（披髪緋袍、金甲仗剣）
追魂帰魂大将　杜剛志（披髪青袍、金甲執刀）
禁法神通大将　姚竟真（披髪緑袍、金甲仗剣）
追魑捉魅大将　許天信（披髪黄花袍、金甲持刀）
跳山入海大将　袁通霊（披髪青袍、金甲仗剣）

このように天心法の法術で神将として扱われる神々は、北極四聖や、天罡大聖と三十六将の組み合わせの事例が圧倒的に多い。これらの記載から窺えることは、南宋期までの天心法の体系では、『三教捜神大全』に見えるような温・関・馬・趙・鄧・辛などの元帥神をほとんど重視していなかったということである。

また『上清天心正法』の収録される『道蔵』洞玄部・方法類には、浄明道系統と思われる経典が続けざまに配置されている。すなわち、『上清天枢院回車畢道正法』[46]『許真君受錬形神上清畢道法要節文』[47]『天枢院都司須知令』[48]『霊宝浄明天枢都司法院須知法文』[49]『霊宝浄明黄素書釈義秘訣』[50]『太上霊宝浄明入道品』[51]『霊宝浄明院真師密誥』[52]『太上霊宝浄明法印式』[53]『霊宝浄明大法万道玉章秘訣』[54]『太上霊宝浄明秘法篇』[55]『霊宝浄明新修九老神印伏魔秘法』[56]である。

これらの経典の正確な成立年代は不明であるが、恐らくその中には、南宋期に浄明道を盛んにした周真公に関わるものが多く含まれているものと思われる。

ここで重んじられているのは天枢院である。天枢院の性格も駆邪院同様、経典により異なるところがあり、複雑であるが、古くは「天枢」の字義通り、玉皇上帝や紫微大帝などが中心となる「天界の中心」を指すことがあった。また一方では、仙界の宰相府のようにこれをとらえ、初代天師張道陵をその主とする場合もあった。一部の経典では、駆邪院も天枢院の一部に属すとする。

しかし、ここに挙げた経典においては、許遜を始めとする「六真」によって主催される天の役所を指す場合が多いようだ。黄小石氏の指摘によれば、許真君信仰においては、もともと十二真君を尊崇することが行われてきたが、宋代の浄明道においては、六真崇拝が盛んになる[57]。

なお、『鋳鼎余聞』には次のような記載がある[58]。

> 国朝の陸鳳藻の小知録に言う。三天門下に泰元都省があり、張天師がここにいる。また天枢省には許真君がいる。天機省には葛仙翁がいる。[59]

むろん、ここに見える天枢省は、一般に考えられているものとは異なると思われる。しかし、このように「天枢」と許真君を結びつける考え方があったことは注意に値する。

さて、これらの浄明道系の経典のうち、幾つかは『高上神霄玉清真王紫書大法』や『上清天心正法』に類似した形式を持っている。特に『上清天枢院回車畢道正法』などは、「火鈴」「雷公」「黒殺」「天罡」などの符呪が見えており、雷法の影響を感じさせる内容を持っている。但し、ここでも元帥神に類する名称はほとんど見られない。また、これらの法術においては、陀羅尼系の呪文を使用することが少ないという特色がある。

いずれにせよ、『道法会元』や『三教捜神大全』に見える元帥神の多くが、宋代の神霄派・天心派、また浄明道系統の経典においてそれほど重視されていないことは、これらの元帥神の性格について考える上で注意すべきことであると考える。

5．宋元の儀礼書における神将

南宋期の儀礼文献として重要なものに、『道蔵』正一部に収録される二つの『上清霊宝大法』がある。一つは「寧全真授、王契真纂」とする六十六巻の『上清霊宝大法』[60]であり、もう一つが、金允中による四十四巻の『上清霊宝大法』[61]である。ここでは、それぞれ王氏『霊宝大法』、金氏『霊宝大法』と称することとする。

王氏『上清霊宝大法』に見える神体系は、かなりオーソドックスなものである。その体系は『雲笈七籤』に見えるものとよく似ている。王氏『霊宝大法』巻十には、天界の様相について書かれた一段があるが、そこでは、元始天尊・霊宝天尊・道徳天尊の三清に続き、昊天上帝・救苦天尊・北極大帝・天皇大帝などの中心となる神々の名が挙げられ、三十二天帝・五斗・五天魔王などから、様々な霊官や真人が記される。また多くの儀礼文書の中には、三官や五嶽から、城隍神に至るまで、多くの神々の名が見える。

巻二十八には、三官について記した後、四聖について次のような記載がある。

> 北極天蓬都元帥真君蒼天上帝
> 北極天猷副元帥真君丹天上帝
> 北極翊聖儲慶保徳真君皓天上帝
> 北極佑聖真武霊応真君玄天上帝

北極四聖を、それぞれ帝号をもって称するが、依然として駆邪の神としては四聖を重んじていることが推察される。

王氏『霊宝大法』には、やはり天蓬・天猷の二元帥を除いては、元帥神に関する記載は少ない。また雷法については、これをあまり重視していないように思える。ただ、巻三十八に「神虎玄範門」があり、そこでは駆邪の神将として、趙公明の名が見えている。また、この法術については、『道法会元』に見られるものとかなり類似する面がある。或いはこの部分は、後世の付加であるかもしれない。さらに、巻三十九においては、駆邪の将として「元始上帝招真君霊大夫武卿崔文子・発放三界功曹所金闕上佐史珪璋」が挙げられている。

金氏『霊宝大法』が当時の儀礼文献の中でも特殊な性格を持つことについては、丸山宏氏の指摘がある[62]。その姿勢を反映してか、金氏『霊宝大法』においては、かなりオーソドックスな神体系に依拠しているのが看取できる。ただ武神としては北極四聖、及び唐・葛・周の三将軍などを重視している。

金氏『霊宝大法』巻三十九においては、「黄籙大斎醮謝真霊三百六十位」として金允中の想定した神々の体系を記している。ここでは、三清や玉皇上帝・紫微大帝・天皇大帝といった上位の神々に始まり、下位の城隍神や土地神に至るまでが階位に従って詳細に記されている。

しかし、ここには雷部の神々については、「五方五雷使者」「雷公電母大神」などと、非常に無個性な書き方をしており、雷部の神に固有なものとしては、せいぜい「社令雷神五雷直符張使者」の名が見える程度である。駆邪院に関しても「北極駆邪院官将吏兵」とあるだけで、具体的にどのような神を指すのかは不明である。両部の『上清霊宝大法』において、王契真はあまり意識せずに、そして金允中の方は恐らく意図的に、元帥神についてはほとんどこれを重視しない姿勢を示していると推察される。

『霊宝領教済度金書』[63]は、三百二十巻にも及ぶ『道蔵』の中でも屈指の浩瀚な儀礼書である。この書は「寧全真授、林霊真編」とされ、元の大徳六年（一三〇二）の序文を有する。しかし、時に「大明国」とする記述があり、明代の修訂を経ていることは間違いない[64]。とはいえ、宋から明にかけての様々な儀礼を集大成したものとみられ、内容は非常に複雑でありかつ豊富である。

その巻二の「壇信経例品」では、それぞれの斎醮においてどのような神に上奏すべきかを述べる。そしてこの部分自体が、当時の道教における膨大な神体系を示すものとなっている。巻三から巻七までの「聖真班位品」においては、各神をどの位置に祀るかを示し、これにも夥しい神の名が記載されている。

ただ、巻十二から始まり、巻二百五十九まで延々と続く「科儀立成品」では、ある一定形式の奏文中に、神の名が記されるようになっている。例えば、巻十七では次のような神を挙げる。

太上无極大道虚无自然元始天尊妙无上帝
虚皇玉晨大道君靈宝天尊妙有上帝
万変混沌玄元老君道徳天尊至真大帝
玉皇大天尊玄穹高上帝
紫微中天北極大帝
紫微上宮天皇大帝
高上神霄玉清真王長生大帝
東極青玄上帝
后土皇地祇
十方靈宝天尊
九天生神上帝
三十二天上帝
五方五老上帝
東華上相木公道君
西靈太真金母元君
日宮太陽鬱儀帝君
月宮太陰結璘皇君
南辰六闕上真道君
北極九府上真道君
五方五徳上真道君
周天二十八宿真君
天地水三官帝君
泰玄枢機三省上相天君
九天諸司真君
天曹諸司真君

三天化主玄中大法師真君
三天大聖都天大法天師真君
靈宝経籍度師真君
靈宝監斎大法師真君
北極四聖真君
三天門下三元真君
三天門下上章詞表靈官
十方无極飛天神王
五天三界大魔王
三洞四輔経籙法科上聖
高真神仙将兵
本靖諸省府院司将吏兵馬
五嶽五帝真君
五天聖帝
洞天福地靖廬治化名山洞府得道真仙
祖玄真師列位真人
経籍度師列位真人
北陰玄天酆都大帝
東霞丹林扶桑大帝
地水職司城隍社令里域土地監察神祇
侍衛宣通无鞅聖衆三界官属一切真靈

上は三清四御から、下は城隍土地神まで、かなりオーソドックスな神体系が示される。文書によっては、太乙救苦天尊や雷声普化天尊など、中心になる神は変わるものの、一貫してこれらの神々の名を連ねる。例えば、巻四十一では冥界の十王が中心となるものの、やはり「法位」においてほぼ同じ神名を列挙する。

また多くの儀礼文書の中で、北極駆邪院と上清天枢院・五雷院・功徳院などが併称される。ただ、神将の中でも重視されるのは、「北極駆邪院四聖」

の他、「九天普度院守雄抱雌二大将」などもある。巻九十九の記載によれば、「九天普度院」の下にも三十六将軍が配置されている。普度院について、ここでは駆邪院と同じような性格と見なされているようであるが、その詳細についてはよく分からない。

『霊宝領教済度金書』の内容は、巻二百六十からは符呪とそれに関連する法術が中心となる。これより「唵吽吽波吒吒」などの陀羅尼系の呪文の呪文も目立つようになる。但し、この傾向は巻二百八十一までは濃厚に見られるものの、巻二百八十二の「存思玄妙品」からはまたその傾向が薄くなる。

そして奇妙なことに、これだけの膨大な記事が存在する中で、元帥神に関する記載はほとんど無いに等しい。天界の神将が挙げられているところにも、ほとんどその名は見えない。ただ、全く存在しないわけではなく、若干元帥の登場する部分もある。例えば、巻十二においては、天界の兵馬についての記述があり、その中では次のように述べている。

天欶火律令大赤元帥　鄧将軍
九天遊奕北極正一魁神純真元帥　馬将軍
護道崇寧威烈　関将軍
昭武翊霊正佑　温将軍

すなわち、鄧天君・馬元帥・関元帥・温元帥の名が見えている。この記載が後に加えられたものかどうかは判定しにくいが、『霊宝領教済度金書』の神体系の中では、若干系統の異なるものであると考えられる。この他では、鄧・辛・張の三天君の名はまれに登場する。しかし総じて、この経典においても元帥神の影は薄いと言ってよいであろう。

また注意すべきは『無上黄籙大斎立成儀』[65]である。この書は「留有光伝、蒋叔輿編」と伝えられ、その多くは南宋期に成立したと考えられるものの、一部明人による付加があるともされ、各部の成立年代はいまひとつ判然としない[66]。

巻三の「予告門」などにおいては、むしろ両部の『上清霊宝大法』などに

似て、オーソドックスな神体系が記される。すなわち、三清や玉皇上帝や紫微大帝、太乙救苦天尊や三十二天帝といった上位の神から、五嶽や水府などの中位の神を経て、城隍神などに至るものである。また巻五に見える、天枢院などの性格づけには注意が必要であろう。

上清天枢院天将天兵
北極駆邪院神将神兵
玉枢五雷院雷将雷兵

すなわち、天枢院・駆邪院・五雷院の三種を並置している。むろん、雷法を非常に重視しているのは明らかである。

但し、『無上黄籙大斎立成儀』巻十二の儀礼文書に「大明国某布政使司某府州」とあることから見れば、この書は明人による付加があるのは間違いないと思われる。そのため、この書においては、南宋期と明期の神体系が併存していると考えられる。巻三十一に見える長生大帝配下の神将は次の通りである。

運陽化陰大将軍　楊元光
混景大将軍　丁忠
合元大将軍　丁遷善
会霊大将軍　陳志元
陰陽大将軍　王先之
変霊大将軍　張同
運化大将軍　李淵
陽光大将軍　申孚（略）

しかし、この書における最も特徴的な記事は、巻五十一から巻五十六に見える、膨大な数の神を記載した「神位門」であろう。これだけの神体系を明確に記した経典は少ない。ただこの記載に関しては、全真教において重視され

る神仙を多く含んでいることから、恐らくは元代以降に付加されたものであると考える必要があろう。

とはいえ、その巻五十二に記す元帥神の記載は、道教の神譜に明確に元帥神を位置づけたものとして非常に重要であろう。「神位門左二班」には、まず多くの神仙を列記する。

清微宗主真元妙化上帝
太初天君紫宸太華天帝
（略）
浄明道師九州都仙大使神功妙済真君
（略）
正一嗣師真君
正一系師真君
正一左侍　王真人
正一右侍　趙真人
（略）
神霄五師真君
雷霆教主　火師真君
（略）
眉山混隠　南真人
丹山雷淵　黄真人
西山真息　熊真人
泰智冲和　彭真人
武当五龍雲莱葉　張真人
太極北霊内輔　鄭真人
稚川抱朴仙翁　葛真人
南海　鮑仙姑
全真大教　東華少陽帝君
正陽　鍾離帝君

純陽　呂仙帝君
海蟾　劉帝君
重陽　王帝君
（略）
神霄得道輔教宗師　林真人
玉府上宰神霄左掌雷　王真人
金鼎妙化執法　申真人
玄都御史神烈　呉真君

張真人・葛真人などの伝統的な道教の神仙に、東華帝君・呂洞賓・鍾離権・王重陽といった全真教系の真人、さらに王文卿や林霊素などの神霄派の者まで、およそ宗派の異なるものでもすべて並置している。このような統合的な配置が可能であるということ自体、元代の全真教や正一教の発展を反映しており、この部分の成立が遅いことを示していると言えよう。恐らくこの部分については、『道法会元』と編纂時期が近いか、やや遅れるのではないかと推察される。

さて、『無上黄籙大斎立成儀』巻五十二では、これに続いて多くの元帥神が列挙される。

清微三炁九霄符章経道雷帝天君
雷霆欽火律令　鄧天君
雷霆正令都督尚書　辛天君
雷霆行令飛捷応報　張天君
三山木郎皓畢　荀天君
火鈴督雷　宋将軍
雷霆枢機　竇天君
霆首大神　馬天君
神烈陽雷　苟天君
神化陰雷　畢天君

洞神主副　龐・劉二天君
神霄枢機　程・雍二元帥
洞玄主帥蒼牙鉄面　劉天君
神霄妙帥金火　張天君
天医　趙・許二元帥
雷霆風雷昌陽大将軍
雷霆火令舎陰大将軍
九天烈雷昭真　楊符使
九天捷疾焚炎　楊符使
雷霆三五火車鉄面雷公　王元帥
神霄駆雷霹靂　程元帥
統轄社雷　蒋大将
南宮琰摩羅　朱将軍
正一霊官　馬・陳・朱・蕭・鄭五大元帥
都天太歳至徳　殷元帥
遣瘟滅毒　翁元帥
九天雷路神捷上将玄壇　趙元帥
雷火符使　曲元帥
清微　周・厳二元帥
三光符使　温・耿二元帥
九天考不信道法　朱将軍
北方風輪蕩邪　周元帥
天医院　趙・馬・黄三元帥
神霄玉部翻解　顔・張二使者
神霄普倒　趙金剛
捷疾黒面　雷元帥
五丁都司　何元帥
酆都主将　楊元帥
巨天力士　孟元帥

朗霊義勇　関元帥
地祇上将　温元帥
急報無佞　康元帥
英雄猛烈　鉄元帥
地祇忠烈　王・張二元帥
天心雷霆諸階法中雷帥官君
玉枢三十六雷君
雷霆諸司諸部雷神
神霄内外台諸部雷神（略）

ここでは、『三教捜神大全』に記載のある元帥神のほとんどの名が見える。『道法会元』では幾つかの神系統が入り交じっているが、この『無上黄籙大斎立成儀』では、これを一つの体系にまとめており、当時の神体系を知る上で貴重なものといえる。ただ、恐らくは同書の儀礼文の中に「大明国」とあるのと同様、この部分も明代に造作されたものであろう。これをもって南宋期の元帥の体系とみなすことは難しい。ただ、元帥神がこのように見事に体系づけられているのは珍しく、その上では重要な資料であると考える。

6．白玉蟾の論議について

白玉蟾は、『海瓊白真人語録』[67]の中において、法術や神将についてやや詳しい議論を行っている。これは南宋当時の神体系についての興味深い説であると言える。『海瓊白真人語録』巻一に、弟子との対話があって言う。

> 真師（白玉蟾）が言う。「北極駆邪院はもと、ただ崔・盧・鄧・竇の四名の神将があるにすぎなかった。いまはそれに四名の神将を増やしている。梅仙考召院は、もとは、潘・耿・盧・査の四名の神将だけであったものが、いままた四名を増やしている。これは後人が勝手にやったものだ。本来の法術には、このようなものは無かったはずである。」[68]

真師が言う。「古の法官は、黄・劉の二神将を用いた。そしてまた高・丁の二将、焦・曽の二将を用い、さらに桑・何の二将、許・謝の二将がある。その師から受けたものであれば、霊験は必ずある。」[69]

真師が言う。「いにしえには酆都法というものは無かった。これは唐の末に、大円呉先生が始めてこの法を世に伝え、鬼神を使役したのである。しかしこの法には元来は八将・三符・四呪の法、及び酆都総録院印の法があるだけであったはずだ。ところがまた後人が勝手に法術を増やして、非常に煩瑣なものになった。これがどうして正法と言えるだろうか。」[70]

真師が言う。「法において北極駆邪院と明言しているのは、天機院のことを言うのである。南極に天枢院があるのは、天上の左に天枢省があり、右に天機省があるようなものである。天機とは北極の内院であり、駆邪院は外院である。かの天枢とは、南極の内院のことである。南極にはまた進奏院があり、これも外院である。」[71]

これらの論の当否はともかく、この論議は、白玉蟾の当時において、それまでの法術にさらに様々な神々が付加され、法術ごとの神体系が変化していく過程がまさに進行中であったことを示すものであろう。

注意したいのは、ここで崔・盧・鄧・竇の四名の神将を、白玉蟾がかなり古いものと見なしている点である。これら四将は後にその地位が曖昧になった面もあるが、本来は唐・葛・周の三将軍と同様、古い来歴を持つ神将であった。『水滸伝』は、最終的には明代の成立とはいえ、かなり宋元の民間信仰の古い層を反映している部分があるが、その第七十一回で陣没した晁蓋のための斎醮を営むところ、監壇の神将としてその名が見えているのが、崔・盧・鄧・竇の四将である[72]。むろん、この四将については、現在の道教儀礼の文書中にもよくその名が見えているという面もある。

そしてここで白玉蟾の言及する神将のほとんどは、温・関・馬・趙といった元帥神ではない。

また天枢院については、白玉蟾はこれを南極にあるものとし、「南極天枢院」と称する。別の意味からすれば、このような議論をせねばならなかったほど、天枢院の性格は明確でなかったのであろうか。またここで「天枢省」と「天枢院」を別のものとしているのは、注意すべき点である。ただ、『無上黄籙大斎立成儀』と同じように、天枢院を北極駆邪院と対をなすものと見なしているのは明らかである。それにしても、白玉蟾が「後人が付加した」と強調する神将にも元帥神らしき名称が少ないということは、この時期に数多くの神将が考え出され、そして消滅していった過程が垣間見えているように思える。

また『海瓊白真人語録』巻二には、次のような記載がある。

祖師（玉蟾）が言う。「わたしはこのように聞いている。漢の陸賈は玉清元始法師総仙上真領黄籙院事となり、また辛漢臣は、いま雷霆都司狼牙猛吏となっている。そして晋の陶弘景は、いま蓬莱都水司監となっている。また唐の褚遂良は、いま五雷使者となっている。顔真卿は、いま北極駆邪院左判官となっている。李陽冰は、いま北極駆邪院右判官になっている。李白は、いま東華上清監清逸真人となっている。白楽天は、いま蓬莱長仙主となっている。また晋の女仙である魏華存は、いま紫虚元君領秩仙公となっている。唐の女仙謝自然は、いま東極真人となっている。」[73]

この説の一部、顔真卿に関する記述は『三教捜神大全』巻七の「北極駆邪院」に引用されている。注目すべきは、辛漢臣、すなわち辛天君の名が明確に雷部の神将として見えていることである。しかしこの説は、総体としてみれば、史上の人物に適当に仙界の役職を割り振った感があるのは否めない。

『道法会元』巻七十に引く『玄珠歌』は、「王文卿撰、白玉蟾註」とされている。ここでは内丹思想と雷法の融合が図られているが、その意図は成功し

ているとは言い難い。ただ、白玉蟾の註に言う。

> 三帥とは、鄧・辛・張の三元帥のことである。心は鄧元帥、肝は辛元帥、脾は張使者である。意が誠ならば張使者が肝に至り、怒れば辛元帥が心に臨む。火が大いに発すれば、すなわち欸火が降る。これが「三帥化形」ということである。[74]

むろん鄧・辛・張などの雷部の天君については、早くから既に道教に取り入れられていた可能性が高いので、この記述は白玉蟾の説をそのまま反映しているものとしてよい。これらの記載から、南宋期にどの元帥が有力であったかを推察することは可能であろう。

7．清微派の経典における雷神

さらにもう一つ、雷法において重要な派に清微派がある。『清微仙譜』[75]では、第十代とされる黄舜申までの系譜を強調するが、実際に派として盛んに活動を始めたのは黄舜申以降のことであるとされる[76]。清微派の経典としては、『清微元降大法』[77]『清微神裂秘法』[78]などがある。もっとも後述するように、『道法会元』も実際には清微派、及び正一教の強い影響下のもとに作られたものである。

『清微神裂秘法』は、特に選者を記していないが、張守清や張守一の名が見えることから、元末のものとされる[79]。その巻上の「雷奥秘論」では、神霄と清微の共通性を強調している。「師汎」においては、魏華存・張道陵・許遜・祖舒などの仙師を列挙する。これはむろん、雷法の諸派と正一系の融合を意識した配置であると思われる。

この『清微神裂秘法』で重視されている雷部の神は、苟天君と畢天君である。法を司る神としては、歴代の祖師と普化天尊を中心に据えるものの、実際の法術で重視されるのは、あくまで苟・畢の二神将である。巻上には次のように記す。

清微主帥上清神烈陽雷神君　苟留吉
清微主帥上清神烈陰雷神君　畢宗遠

この他に見える神将としては、「清都策命符使田仲・九天雷火法令符使陳栄臣・捷疾符使楊傑」などがある。

『清微元降大法』では夥しい数の神将が存在する。例えば、巻十三には次のような記載がある。

帥班
太乙端霊洞耀炎光霹靂風雷元帥　許彦昌（天冠王者状　金甲朱衣執節朱履）
将班
追風使者　虞仲
追雲使者　郭阜臣
追雷使者　儲烈
追電使者　張臣元
追雨使者　師鋳
追龍使者　湯堅
追催使者　方俊（並交脚幞頭青面朱髪　金甲朱衣皂靴）
太乙月孛流光冲元符使　朱興（金兜鍪面碧三目　金甲朱衣紅履執戟）
太乙五雷伝令符使　丘亮（玄冠面赤　金甲緑衣朱履執戟）

この他、巻十三には、「辛漢臣・江赫冲・秀文英・方道彰・陳華夫・馬鬱林・郭元皇・田元宗・鄧拱辰・方仲高・張元伯」、「劉彦昌・朱龍延・康春・師亮・李大淵・尚方」、巻十四には「竇霹初・鄧伯温・辛漢臣・張元伯・劉明・朱興・苟敷演」などの神将の組み合わせが見える。これらの天君の名が見えるのは重要であるが、ただあくまで将班の一部を構成するにすぎないことについては、留意する必要があろう。

また巻『清微元降大法』十七の「上清西禁大法」においては、その主とな

る神将として「趙公明」の名が見られ、鉄鞭に黒虎に跨るという形象が見られる。趙公明は、この他にも多くの法術で主帥となる。また同じく巻十七の「天罡火雷大法」にはその主帥として、「天罡大聖節度真君」の名が見える。

これらの記載から見るに、鄧天君や趙元帥などの元帥神の多くは、清微派において一定の地位を得ていることは間違いないと思われる。

興味深いのは、時に仏教の神仏が「大元帥」として見られることである。巻十三の「西極真梵大覚慧妙五雷上経」の部分には、以下のような記載が見える。

> 神班
> 主帥　金吒大聖覚皇上帝能仁智聖天君　壮（即釈迦）
> （略）
> 副帥　円明威神大元帥通済法海天君　摩尼羅（即龍樹）

すなわちここでは、釈迦仏と龍樹が、道教の神将として元帥神と同じ機能を果たしている。

また『清微元降大法』においては、神将たちの形象に、仏教からの影響を受けたと推察されるものが多くなってきている。まず「三目」や「五目」の神将が多く見られるようになり、また例えば、巻十四の「霹靂使者」には「風輪を背にする」「水輪を背にする」「火輪を背にする」というような姿が特徴的になる。もっとも清微派の想定する神体系については、むしろ『道法会元』の前半の記載を見るべきであると考えられる。

8．『道法会元』と雷法の系譜

さて『道法会元』は、神霄・天心派などから清微・霊宝派に至るまでの、多くの諸派の法術を集大成したものである。そして前にもふれたように、ここでは多くの元帥神が法術の中心的な地位を占めるに至っている。

『道法会元』は二百六十八巻もの分量を擁する『道蔵』中でも屈指の大部の経典である。この書の正確な編書年代は不明であるが、第三十九代張天師の張嗣成などの名が見えることから、元末明初に編纂されたものとされる[80]。

『道法会元』においては、『清微元降大法』よりも進んで、仏教、特に密教の濃厚な影響が見られるのが特徴である。例えば、巻六の「玄一碧落大梵五雷秘法」においては、主法に元始天尊・霊宝天尊・道徳天尊の三清を置きながら、将班に「観音大士化身」を配する。巻二百三十の「上清馬陳朱三霊官秘法」には、軍荼利明王や、哪吒太子の名が見える。また「唵吽吒唎」といった陀羅尼系の呪文は、随所で使われるようになり、さらに神将には、「三面六臂」などといった姿が顕著に見られるようになる。雷法が密教から受けた影響について、李遠国氏は次のように論ずる[81]。

> 道教の雷法の中には、仏教の唐代密教の修養法が大量に入り込んでいる。（略）道教の神霄派は大量に密教の真言梵呪を採用し、修真達霊といった目的に用いている。例えば『先天雷晶隠書』に収録する真言密呪は二十余種ほどであり、その中でも最も重要と思われるのは「天母心呪」だが、それは一字も違わず、密教流伝の「摩利支天真言」と一致するものである。その主法の神に擬せられているのは、一つは高上神霄玉清真王長生大帝であり、もう一つは、斗母摩利支天大聖である。前者は道教の神であり、後者は密教の神である。その主神から、呪文や修法や法術に至るまで、すべてここでは密教と道教を双方ともに修めるといった姿勢が貫徹している。これはすなわち、当時においては道教と密教が互いに融合していることを示すものと考えられる。

密教との融合のみならず、『道法会元』においては、正一・霊宝・清微・神霄・天心・地祇・酆都など、様々な法術の融合が図られている。ただそれらはあまり整理されない形のまま取り込まれているため、一見、この経典は非常に煩雑であるという印象を受ける。

以下に『道法会元』各巻とそこに収録される法術の一覧を掲げる。

巻数	編名
1	清微道法枢紐
1	道法九要
2	清微応運
3	清微帝師宮分品
4	清微宗旨
5	清微符章経道
6	玄一碧落玄梵五雷秘法
6	清微妙道雷法
6	霹靂駆蝗大法
7	上清洞明協神五応大法
7	上清鎮霊福祥大法
7	上清司禁興道大法
8	清微祈祷内旨
9	清微梵炁雷法
10	清微法職品格
11	清微天宝玄経上
12	清微天宝玄経下
13	玉宸登斎符籙品
14	玉宸登斎内旨
15	玉宸錬度符法
16	玉宸錬度符法
17	玉宸錬度内旨
18	清微発遣儀
19	玉宸錬度諸符簡儀
20	玉宸経法錬度儀
21	玉宸経錬返魂儀
21	分胎破穢儀
22	清微玉宸錬度文検
23	清微玉宸錬度文検
24	清微灌斗五雷大法
25	清微灌斗五雷奏告儀

26	玄霊解厄品
27	玄霊解厄文検
28	清微紫光奏告符法
29	清微祈祷奏告大法
30	紫極玄枢奏告大法
31	玄枢玉訣秘旨
32	上清龍天通明錬度秘法
33	上清龍天明錬度科
34	清微龍天内錬秘旨
35	清微通明錬度文検
36	正一霊官馬元帥大法
36	神捷勒馬玄壇大法
36	地祇上将陰雷大法
36	蓬玄摂正雷書
37	上清武春烈雷大法
38	上清紫庭秘法
38	霊佑忠烈大法
39/40	清微伝度文検
41	清微言功文検
42	清微仕進文検
43	清微保生文検
44	清微禳疫文検
45	清微禳兵劫文検
46	上清神烈飛捷五雷大法
47	神捷五雷祈祷文検
48/49	神捷五雷祈祷検式
50	清微祈晴文検品
51	清微祈雪文検
52	清微駆蝗文検品
53	清微禳郤蛟虎文検品
54	清微謝雷文検品
55	清微治顛邪文検品

56	上清玉府五雷大法玉枢霊文
57/60	上清玉枢五雷真文
61/62	高上神霄玉枢斬勘五雷大法
63	玉枢斬勒五雷祈祷大法
64	玉枢斬勒五雷大法
65	三炁雷霆諸部聖位
66	雷霆綱目説
67	雷霆玄論
67	雷説
68	雷霆三司祈祷秘訣
69	王侍宸祈祷八段錦
70	玄珠歌
71	虚靖天師破妄章
72	雷霆黙朝内旨
73	天書雷篆上
74	天書雷篆中
75	天書雷篆下
76	汪火師雷霆奥旨序
77	雷霆妙契
78	雷霆妙契
79	雷霆契勘
80	欶火律令鄧天君大法
81	負風猛吏辛天君大法
82	先天一炁火雷張使者祈祷大法
83/87	先天雷晶隠書
88	雷晶使者祈祷行検
89	九天雷晶元章
90	先天一炁雷法
91	雷霆六乙天喜使者祈祷大法
92	先天六一天喜使者大法
93	雷霆三要一炁火雷使者法
94	雷霆欶火張使者秘法

95	雷霆飛捷使者大法
96	太乙捷疾使者大法
97	上清飛捷五雷祈祷大法
98	九天碧潭雷祷雨大法
99	昊天金闕五雷祈祷秘法
100	雷霆鉄劄召龍致雨符法
101	五雷祈祷行持秘法
102	五雷祈祷符法
103	五雷祈祷大法
104/108	高上景霄三五混合都天大雷琅書
109	混沌玄書
110	混沌玄書大法
111/113	帝令宝珠五雷祈祷大法
114/120	太極都雷隠書
121	南宮火府烏暘雷師秘法
122/123	太上三五邵陽鉄面火車五雷大法
124	上清雷霆火車五雷大法
125	九州社令蛮雷大法
126	九州社令雷法
127	九州社令陽雷大法
128	九州社令陽雷祈祷検式
129	雷霆箭煞年月枢機
130	北真水部飛火撃雷大法
131	石匣水府起風雲致雨法
132	雷霆祈祷秘訣
133/134	太乙真雷霹靂大法
135/141	太一天章陽雷霹靂大法
142/143	太一天章陽雷霹靂大法行遣部
144/145	太一天章陽雷霹靂大法
146	正一忠孝家書白捉五雷大法
147/153	洞玄玉枢雷霆大法
154	混元六天妙道一炁如意大法

155	混元六天如意大法
156/166	上清天蓬伏魔大法
167	上清天蓬伏魔大法補遺
168	上清天蓬伏魔大法
169/170	混天飛捉四聖伏魔大法
171	上清童初五元素府玉冊正法
172/173	元応太皇府玉冊
174	元景丹天府玉冊
175	元照霊虚府玉冊
176	元和遷教府玉冊
177	元素元輝府玉冊
178	五府冊文正法後序
179/187	上清五元玉冊九霊飛歩章奏秘法
188	太乙火府五雷大法
189	太乙火府奏告心文
190	太乙火府五雷大法
191	太乙火府通神内殿秘法
192	太乙火府通神内殿祈祷秘法
193	太乙火府内旨
194	太乙火府五雷大法行移
195/196	混元一炁八卦洞神天医五雷大法
197	九清太皇府天医八卦洞神五雷大法
198	神霄金火天丁大法
199	金火天丁神霄三炁火鈴歌
200	金火天丁鳳炁紫書
201	金火天丁玉神解関雲篆
202	神霄金火天丁大法
203	金火天丁摂召儀
204	金火天丁起霊受錬儀
205	金火天丁陽茫錬度儀
206	金火天丁召孤儀
207	太極葛仙翁施食法

208	太極玉陽神錬大法
209	玉陽祭錬文検品
210	丹陽祭錬内旨序
211	天候生煞大法
212	中皇総制飛星活曜天罡大法
213	広霊宣化陳将軍秘法
213	神霄黒虎劉元帥秘法
214	玉音乾元丹天雷法
215	元皇月孛秘法
216	九天玄女竈告秘法
217	紫庭追伐補断大法
218	紫庭追伐補断大法
219	神霄断瘟大法
220	神霄遣瘟送船儀
221	神霄遣瘟治病訣法
222	正一吽神霊官火犀大仙考召秘法
223	上清都統馬元帥駆邪秘法
224	金臂円光火犀大仙正一霊官馬元帥秘法
225	火犀大仙馬霊官大法
226	正一霊官馬帥秘法
227	太一火犀雷府朱将軍考附大法
228	雷府朱帥考邪大法
229	霊官陳馬朱三帥考召大法
230	上清馬陳朱三霊官秘法
231	上清正一三景霊官秘法
232	正一玄壇趙元帥秘法
233	玄壇趙元帥秘法
234	正一龍虎玄壇金輪執法如意秘法
235	正一玄壇飛虎都督趙元帥秘法
236	正一龍虎玄壇大法序
237	玄壇如意大法
238	清微西霊崇明丹華大法

239	上清沖和妙道昭元五雷玄壇大法
240	正一玄壇元帥六陰草野舞袖雷法
241	雷霆三五火車霊官王元帥秘法
242	豁落霊官秘法
243	南極火雷霊官王元帥秘法
244/245	玉清霊宝無量度人上道
246	天心地司大法
247	北帝地司殿元帥秘法
248	地部金官如意潘将軍秘法
249/250	太上天壇玉格
251/252	太上混洞赤文女青詔書天律
253	地祇法
254	東嶽温太保考召秘法
255/256	地祇温元帥大法
257	東平張元帥秘法
258	東平張元帥専司考召法
259	地祇馘魔関元帥秘法
260	酆都朗霊関元帥秘法
261	酆都車夏二帥秘法
262/263	酆都考召大法
264	北陰酆都太玄制魔黒律収摂邪巫法
265/266	北陰酆都太玄制魔黒律霊書
267/268	泰玄酆都黒律儀格

膨大かつ蕪雑に見える『道法会元』の内容であるが、その編纂に対しては、それなりに一定の傾向があるように感じられる。

まず、清微系の法術の重視が挙げられる。すなわち、『道法会元』巻一の「清微道法枢紐」から巻五十五の「清微治癩文検」に至るまでは、題名に「清微」と冠するものが多く、ここからは清微系の法術を特別視する姿勢が窺える。

巻五十六からは、「神霄」「雷霆」「上清」を冠した法術が多くなる。また巻六十五から巻七十九までは、主として雷法の理論について述べたものが大

半を占めている。特に巻六十八から巻七十七までは、王文卿・張虚靖・薩守堅などの雷法の祖師たちの言辞を収めており、その資料的な重要性は高い。また後半、特に巻二百以降においては、天心・地祇・酆都などの諸派の法術が収録されており、ここは民間系の法術を特に配したように思える。例えば、巻二百四十六の「天心地司殿元帥秘法」や巻二百五十三の「地祇温元帥大法」、それに巻二百六十一の「酆都孟元帥秘法」などがそれである。

雷法のうち幾つかは、その名称から系譜が伺える場合がある。

例えば、林霊素の傾向を直接継ぐと思われるのは、「金火天丁」と称される幾つかの法術である。この流派は、林霊素－張如晦－陳道一という系譜で伝えられた[82]。

また「先天雷晶隠書」は、王文卿から上官真人を経て、鄒鉄壁に伝えられたとする[83]。さらに「九州社令」は、万鼎新－王宗伯－青陽鼎－梁天津－蕭道淳－劉徳清－王一玄－王明渭と伝授された[84]。同様に「太乙火府」「八卦洞神」なども、それぞれ法術の伝授が想定される。これらについては、ストリックマン氏の示唆した系譜をより緻密にする形で、李遠国氏が整理を行っている。それによれば、神霄派は、南宋から元において膨大な数の流派を産み出して発展していった。その多くは、現在では伝統が失われてしまっているようである。

これらの流派を担う者たちが、すべて道士の階層に属した者であったかどうかは疑わしい。例えば、『道法会元』巻二百五十三に「地祇法」及び「地祇諸余論」があり、その中で、地祇法を伝える流派が数多く存在したことを述べる[85]。

> 地祇一司の法は、実にその教を虚靖天師から始める。次に顕化したのは、天宝洞主王宗敬真官であり、次に青城呉道顕真官、青州柳伯奇仙官、果州威恵鐘明真人と、相継いで宗師となられた。その後は、江・浙・閩・蜀・湖・広などの地方で法を嗣ぐ者多く、その姓名も福・寧の幾人に限られるわけではない。そもそも伝書には石碑に基づいたものがあり、継いで数多くの流派に流伝していった。す

なわち、鉄林府地祇・原公夫人廟地祇・五雷地祇・五虎地祇・索子地祇・十字地祇・四凶地祇・聖府地祇などである。さらに後に蘇道済派・温州正派・李蓬頭派・過曜卿派・玄霊続派などの流派があった。これらのごときは数えきれるものではなく、多くの支派が存在したのであった。[86]

これによれば、地祇法はすなわち第三十代張天師とされる張虚靖から伝えられたもので、王宗敬・呉道顕・柳伯寄などが宗師となり、伝授せられた。しかしその後数多くの支派が出現し、「鉄林府地祇・原公夫人廟地祇・五雷地祇・五虎地祇・索子地祇・十字地祇・四凶地祇・聖府地祇」などの諸派が独自に法を伝えていた。これらの流派の名称を見るに、いかにも民間信仰的な呼称も目立つ。ある種、これらの法術を使っていたのは、むしろ民間系の術者であろう。

これらの数多く存在した流派の全容について把握することは不可能であろう。よってここでは、あくまで元帥神の記載を中心に、『道法会元』に現れる神の体系について見ていくことにする。

9.『道法会元』における元帥（一）——清微・神霄系法術

さて『道法会元』巻三の「清微帝師宮分品」においては、清微派の神々の位階表が特に設けられている。ここではまず三清・玉皇上帝・紫微大帝・天皇大帝・救苦天尊・普化天尊などの道教の正統的な神々が列挙されている。続けて、北斗・南斗や十一曜などの星神、そして三官大帝・四聖などの名が見える。当然ながら、中でも「清微宗主真妙化大帝」は中心的な位置を占めている。そして「帥将」の部分では、鄧天君をはじめとする元帥神の名が見える。

元始北極天王天雷轟元　鄧雷君
北極安景令王地雷鎮玄　辛雷君
暘谷太霞霊王水雷環運　張雷君

九斗陽芒流金火鈴威雷浮光　劉天君
三山木郎大神皓霊　苟神君
上清璇天刑令大神枢機　竇真君
神霄玉都陽雷陰霆西極上将神変　留真君
沖天明道執法仁聖応元真君飛捷　楊符使
飛天妙道威化聖仁神烈真君焚炎　楊符使
妙道沖儀聖仁通華真君雷霆捷疾　朱符使
景霊通道仁聖元妙真君飛捷　楊符使
承天沖和保生聖元明道真君九天沖虚飛雷　安符使

すなわち、鄧・辛・張・劉・苟・竇・劉・楊・朱・安の各天君や使者である。この後には東嶽大帝はじめ、五嶽の神や四海の神が配される。すなわち、これらの天君は、天界の最後列に位置する。この組み合わせは『清微元降大法』巻十四にあった竇・鄧・辛・張・劉・朱・荀の諸天君の配列に近い。また、巻十七では苟・畢二将を重視する。この考え方は『清微神裂秘法』に近い。

巻二十二「清微玉宸錬度奏申文検」においては、三清・玉帝・紫微大帝などに上奏し、神将の助力を請うが、そこに挙げられる神将名は次の通りである。

陽雷神君　苟留吉
陰雷神君　畢宗遠
火鈴大将　劉明
焚炎符使　楊傑（略）
解冤符使　顓悪
陽神　何昌
陰神　喬苟（略）
酆都追摂元帥　関羽
地祇上将　温瓊

苟・畢二天君のほか、関元帥や温元帥の名がある。巻二十三では、魏華存と祖舒を主法とし、温・関の二元帥を中心とする法が幾つか見られる。

一方で、巻二十六の「清微道法·玄霊解厄品」においては、次のような神々が中心となる。

主法
清微宗主真元妙化天帝
帥班
北極闔陽掌善使者　楊汝明
北極啓陰察悪使者　耿妙真（略）
掌急奏太一天君　王震（略）
枢霊大神　劉洪
総真使者　龔徳（略）
北極循璇霹靂灌斗暘谷神君　張霊（略）
五都飜解冤結使者　顓悪

清微の主たる妙化天帝に、楊・耿などの二使者が中心となる。ここに見える顓使者などについては、『無上黄籙大斎立成儀』にもその名が見えている。

巻二十九の「清微祈祷奏告道法」には、「主将陳元帥」「副将石元帥」とあり、『三教捜神大全』に見える石元帥が登場している。石元帥については、他の儀礼文献でもあまり記載が無いため、その性格はやや捉えにくいものとなっている。

巻三十六「正一霊官馬元帥秘法」は、馬元帥を中心とした法術である。馬元帥は、道教の儀礼文書では、名を「馬勝」とされることが多い。四大元帥（温・関・馬・趙元帥）の一であり、五顕霊官・華光神と同一視される。ここでも主法となるのは、祖舒と魏華存であり、神将としては、正一霊官馬勝と、それから威光大将馬充とが帥班に当てられている。『道法会元』においては、「馬元帥」は馬勝と馬充の二者が存在する。『三教捜神大全』に見える馬元帥は、正一霊官馬勝の方を指しており、馬充ではない。

同じく巻三十六の「地祇上将陰雷大法」においては、主法を祖舒・魏華存とし、神将としては温元帥などが中心となっている。

地祇上将亢金昭武顕徳元帥　温瓊
鉄・畢・黒・方四雄上将
薛・徐・許・郝四大猛将
劉・張・趙・史・周五雷使者
聴令郎君小亭侯　張元帥
伝令直符　張使者

温元帥は、名を温瓊といい、やはり四大元帥の一である。『三教捜神大全』に記載がある。ここでは「地祇上将」としての性格が強調されている。同様に、巻三十六の「蓬玄摂正雷書」では、魏華存を主法として、神将は関元帥が中心となる。

轟雷摂正青霊上衛上将　関元帥（名羽）
副帥粛忠　趙将軍（略）
将佐
李貢・張端・劉昇・石盈　四大神将

関元帥は、言うまでもなく後の関聖帝君であり、三国の武将関羽である。四大元帥の一であり、『三教捜神大全』、及びその前身である『捜神広記』に記載がある。『道法会元』における関羽は、「酆都馘魔元帥」と呼ばれ、酆都法との関連が濃厚である。

巻三十七の「上清武春烈雷大法」は、太歳殷元帥を中心としたものとなっている。

上清武春猛吏太歳至徳尊神元帥　殷郊（略）
副将贊神　侯将軍

亜将鴟鵲　王将軍
通霊報応　蒋使者
毛・趙・耿・郭四大吏兵
神荼・鬱塁大神
黄旛・豹尾大神（略）

殷元帥は、やはり『三教捜神大全』に記載がある。殷元帥は『道法会元』中では猛吏太歳と称され、時を支配する神として現れる。その姿は「九つの髑髏を首に掛け、左手に金の鐘、右手に黄鉞を執り、九頭の金牛に乗る」というものである。

『道法会元』の巻三十八「上清紫庭秘法」では、清微妙化大帝を主に、その神将は「紫庭上将朗英・薛元」となっている。同じく巻三十八「霊佑忠烈大法」では、「霊佑滅殟忠烈元帥康徳」とあり、康元帥が中心になる。この康元帥も『三教捜神大全』に記事がある。

このように、清微系の法術においては、鄧・辛・畢などの雷部の諸天君に加え、温・関・馬・趙・殷などの多くの元帥が取り込まれていることが分かる。

巻四十の奏文には多くの神の名が記されているが、ここに見える神々が、恐らく清微系の法術で重視されている神将であると言えよう。

欻火律令大神　鄧天君
正令大神青帝　辛天君
行令大神暘谷　張天君
神烈　苟・畢二雷君
流金火鈴　劉天君
捷疾焚炎　楊符使
昌陽閃爍　呉・王二使者
太玄左右　烏・塗二神君
翻解冤結　顓使者（略）

主水主火　王・趙二将軍（略）
神虎　何・喬二大聖（略）
三元　五道大神
玉陽琰摩羅　朱将軍（略）
斗中　楊・耿二仙使
七元神君
掌急奏灌斗　張神君
玄枢　方符使
太一　王天君
枢霊　劉大神
総真　龔使者（略）
混元都統霊官　馬元帥
天医　許・趙二元帥
百薬　朱・李二仙官
攻炁院　馬・耿二元帥
小翻山　張賢聖
呂・丘・田・何・盧・路諸大功曹（略）
金輪執法　趙元帥
酆都馘魔　関元帥
地祇上将　温元帥
急報無佞　康元帥
地司猛吏　殷元帥
巨天力士　孟元帥（略）

ここでは、鄧・辛・張・苟・畢などの天君を中心として、『無上黄籙大斎立成儀』の神位門に近い体系が示されている。ただ、雷部の天君以外では、関・温・孟元帥などの、地祇法や酆都法系の神が目立っている。むろん、『清微神裂秘法』などで重視されている楊符使や顓使者の名も見えている。

巻四十六の「上清神烈飛捷五雷大法」の神将は、張亜・苟留吉・畢宗遠・

荘旻の各天君であり、巻四十八の「神捷五雷祈祷検式」の奏文では、張亜・苟留吉・畢宗遠・殷郊・温瓊・関羽となっている。この上奏を受ける側は、概して玉皇上帝・玄天上帝（或いは北極四聖）・三官大帝・東嶽大帝といった高位の神となっている。

ただ、『清微元降大法』『清微神裂秘法』などと、『道法会元』におけるこれらの清微法の神体系を比較するに、やはりそこには若干の変化があるように思われる。

その傾向を概括的に捉えるならば、『道法会元』では、元来清微系の法術で重視されていた神将、すなわち鄧・辛・張・苟・畢などの天君のみならず、酆都法系の神、すなわち地祇温元帥や、酆都関元帥・孟元帥、また太歳殷元帥などの元帥神を加えていることが挙げられる。すなわち、この法術が書かれた時点では、多くの系統の法術の融合がさらに進んでいるものと考えられる。

酆都系の法術については、先に白玉蟾が「いにしえは無し」と断定していたように、新しい、しかも民間系の法術であったと推察される。ただ『道法会元』の後半部には酆都系の法術と思われるものも多く収録されている。恐らく、元から明初にかけての清微派は、こういった民間出自の法術も取り入れた結果、このような雑然とした神体系に変化していったのではないかと思われる。酆都法と地祇法の関係は若干不明な点があるが、温元帥が東嶽大帝配下の武将であることなどを考えると、酆都、すなわち地獄と深い関連があるものと考えられる。横手裕氏の指摘によれば、地祇法はまた「小酆都」と呼ばれ、また酆都派は別名「酆嶽」派とも称されることがあった[87]。この「酆嶽」の「嶽」は、五嶽或いは東嶽大帝に関連するものである可能性もある。いずれにしろ、これらの法術は冥界に関係するものであった。温元帥・関元帥・孟元帥などは、本来は元帥神の中でも、冥界神としての役割を強く有するものであったのである。この点は、雷部の鄧・辛・張天君などとは性格を異にする。むろん後世では、このような性格の差異の意識は薄れていく。

もっとも、『道法会元』には性格を異にする様々な資料が混在していると思われ、その傾向も、実際には単純に論じることはできない。例えば、巻

五十から巻六十四までは、五雷法に関連する記載が中心となっており、ここに登場する神々の体系は、神霄法の系統を思わせるものである。例えば、巻五十五の奏文などに登場する神将は、苟・畢・鄧・辛・張の各天君と、王・呉の二使者のみ、その他の奏文でも、苟・畢二天君と劉天君と天丁力士、またこれに朱将軍などが加わるのみである。

巻五十六には、「雷霆神位」という神々の一覧表があるが、ここで示される雷神も、そのほとんどは伝統的な雷部の神々である。特に巻六十一から巻六十四を占める「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」は、王文卿の序文を有するもので、後世の編集があるとはいえ、恐らく古く神霄派の神体系を示すものであろう。そこには次のような神将の名が見える。

将班
无上玄皇至尊九天雷首欽火律令大仙都天元帥煙都炎雲帝君大忠大孝
火律令大神　鄧伯温
掌雷霆火光霹靂銀牙耀目提点三界鉄筆演法大判官　辛漢臣
太乙捷兵火雷報応使者　張元伯
総摂大将都雷　程曼卿（略）
雷公　江赫冲（略）
電母　秀文英（略）
風伯　方道彰（略）
雨師　陳華夫

そしてこの後にも五雷・十二功曹などの神が見えるが、あまり酆都系の神の名は見えないようである。先にも見たとおり、神霄派の経典においては、ほとんど温・関・馬・趙などの元帥神の名が見えなかった。この王文卿作と思われる「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」が、それらの経典と同じ傾向を有するのは、ある意味では当然と言えよう。

巻六十五の「三炁雷霆神位」においても夥しい数の神将の名が記されているが、ここにも元帥神の名は少なく、やや古い神体系が記されていることが

分かる。ここでは「玉枢院」の神として、揚雄と陶弘景の名が見えている。なお、この神霄系と思われる部分では、陀羅尼に類似した呪文が使われることが非常に少ない。

これらのことから、『道法会元』巻四十九までと、それ以降の巻五十から巻六十五までででは、神体系から見てもかなり内容に差があることが分かる。或いは、本来巻五十以降は別の経典であったものを、そのまま取り込んだ可能性も高い。その性格から言えば、巻五十から六十五までは、恐らくその法術はほとんど神霄系のものである。『道法会元』の編纂を行った過程で、清微派が自分らの経典類の後ろにあたる部分に挿入したか、或いは、もともと神霄派の経典があったところに、清微派の経典を前に付加したものかは判然としない。ただ、巻四十九までが清微派を中心として編集されたものであり、巻五十から巻六十五までの経典より、時代的に遅れるものであることは間違いないであろう。また清微派は、このような作業によって神霄派からの連続性を誇示しているものと推察される。

『道法会元』の巻六十六からは、主として雷法の理論面に関する記事が多くなる。巻六十七の「雷霆玄論」や王文卿の「雷説」、巻七十の「玄珠歌」などは重要な論説であるが、この部分は神体系についてはあまり記述が無い。またこの部分においても、陀羅尼系の呪文が少ないことが看取できる。

巻七十五「天書雷篆下」に含まれる奏文に見える神は、三清・玉帝・普化天尊・紫微大帝・天罡大聖・三官大帝・北極四聖など、非常にオーソドックスな体系である。ここで神将として登場するのは、鄧天君・辛天君・張天君・劉天君・閻元帥・竇元帥・任元帥・苟元帥・畢元帥などである。

『道法会元』の巻八十からは、一転してまた天君や元帥ごとの法術が多くなる。

巻八十は「欽火律令鄧天君大法」であり、その題名の通り、主帥となるのは鄧天君（鄧伯温）である。この法術は、「領籍上仙披雲楊耕常伝授」とある。楊耕常は、名を楊燮といい、福建延平の人。劉浩然・許志高の法術を受け継いだとされる[88]。ここで鄧天君は「赤髪金冠、三目青面」「背に肉翅あり」「手足みな五爪あり」とあるように、典型的な雷公の姿をしている。なお、いずれの経典でも雷部の主神とされる鄧天君については、何故か『三教捜神大全』に独立の項目が見えない。

巻八十一は「負風猛吏辛天君大法」である。この法は「括蒼鶴渓処然居士潘松年伝授」とある。辛天君（辛漢臣）は「牛耳噣頭、朱髪鉄面銀牙」とされる。配下の将兵には、蛮雷使者が配されるが、それは「馬鬱林・郭元京・方仲高・鄧拱辰・田元宗」である。これらの神々の名は、『清微元降大法』にも見えている。巻八十二は「先天一炁火雷張使者祈祷大法」である。張使者を中心とし、やはり蛮雷使者などを配下に置く。これは伝授者の名が無い。

『道法会元』の巻八十三から八十六までは「先天雷晶隠書」となっている。これは恐らく、単独の一つの経典として独立していたものと考えられる。李遠国氏の指摘によれば、この経典は鄒鉄壁を宗師として伝授されたもので、前の「先天一炁火雷張使者祈祷大法」とも関連があるとされる[89]。

「先天雷晶隠書」には様々な記事が含まれるが、まず主法としては、長生大帝と摩利支天がおり、師汎においては、汪守真・王文卿・白玉蟾といった祖師たちが並ぶ。神将としては、鄧天君・辛天君・張天君や、その配下として馬鬱林・郭元京・方仲高・鄧拱辰・田元宗などがある。ただ、ここでは張天君は、張珏・張雲・張亜の正副三将があるとされる。

巻八十から巻八十六までの幾つかの経典は、恐らく南宋期に由来するものが多いと考えられ、神体系も古いものをよく残している。ただ「先天雷晶隠書」の後半部、巻八十六のところには、奏文に示される神々の中には、「王元帥・殷元帥・朱将軍・趙元帥・関元帥・温元帥」があり、或いは後代の記事の補入があるかとも疑われる。

巻九十「先天一炁雷法」、及び巻九十一「雷霆六乙天喜使者祈祷大法」、そして巻九十二「先天六一天喜使者大法」は、巻八十二の「先天一炁火雷張使者祈祷大法」と同様、張天君が中心となった法術である。

巻九十三の「雷霆三要一炁火雷使者法」では、鄧・辛・張の三天君の前に、「天罡大聖主雷真君馬自奴」及び「河魁大聖節度真君董万春」の名が見える。天罡大聖の姿は特異で、「披紅髪紅面、三目」「跣足に火車を踏む」とあり、

また河魁大聖も、「首に十二の髑髏を下げ」「足に水輪を踏む」となっている。後世、火輪を踏むのは哪吒太子のみが強調されるが、『道法会元』における神将の多くは、火輪・水輪・風輪・雷輪など様々な「輪」を踏む者が多い。これらの形象は、恐らく密教の明王の影響を受けているものと考えられる。なお、これら巻九十四から巻九十七までの諸法は、多くは張天君を中心とするものである。巻九十八の「九天碧潭雷祷雨大法」では、鄧・辛・張の三天君に加え、陶天君の名が見えている。陶天君は「四翅龍爪」といった姿で示される。巻九十九から巻百三までは、五雷法に関するものが多い。巻百四から百八までの「高上景霄三五混合都天大雷琅書」では、再び雷部の神々の位階表や、様々な符が示される。

『道法会元』巻百九から百十までの「混沌玄書」「混沌玄書大法」はいささか法術系統を異にするようである。神将は星神が多いが、その神体系についてはよく分からない面がある。巻百十一から百十三までの「帝令宝珠五雷祈祷法」は、正一派の張宗演が伝授したものである[90]。この法術は、若干他の五雷法とは異なる性格を持つものと考えられる。巻百十四から百二十までの「太極都雷隠書」においては、様々な神が見えるものの、やはり神将の中心となるのは鄧・辛・張などの天君である。

『道法会元』は、巻百二十一の「南宮火府烏暘雷師秘法」からは、雷法としつつも、若干その性格が変わっていくと考えられる。「南宮火府烏暘雷師秘法」には次のような神将が見える。これを一連の「南宮火府」系統の法術と見ても問題は無いだろう。

主法
祖師烏暘雷師　呉真君
将班
南宮火府赤炎洞主烏暘雷師流金火鈴上将　呉元帥明達（略）
上部火輪神将　宋元帥無忌（略）
中部火輪神将　劉元帥炎真（略）
下部火輪神将　劉元帥択先（略）

流金火鈴大将　楊元帥昌孝（略）
軍師奴利趙侯　黒犬四聖使者（略）
大猪頭使者　劉居安（略）

このうち、一部の神は『無上黄籙大斎立成儀』にも記載があるが、その性格についてはよく分からない部分が多い。巻百二十二・百二十三の「太上三五邵陽鉄面火車五雷大法」も、辛天君の名はあるものの、その他は火車大将軍の「闍不斬・衛貞・任運力・邵陽公弼・鄭徹霊」などの火府の神が中心となる。但しここに見える「謝仙火」は、恐らく『三教捜神大全』に見える謝天君に該当するかと思われる。また宋元帥は、火部の神として重要な存在である。巻百二十三の「五嶽神位」には、五嶽の判官として、「銀牙猛吏辛漢臣」や「殺鬼大将軍馬勝」などの名も見える。

巻百二十五「九州社令蛮雷大法」、巻百二十六「九州社令雷法」、巻百二十七「九州社令陽雷大法」、巻百二十八「九州社令陽雷祈祷検式」は一連の「九州社令」系の法術である。これは万鼎新を祖師とする派が伝授したとされる[91]。その九州とは、例えば『上清霊宝大法』などの記載によれば、「冀州・兗州・青州・徐州・梁州・揚州・荊州・予州・雍州」の九つを指す。社令の神は、城隍神や土地神と同じような職責であると考えられる。「九州社令蛮雷大法」では、その主法を許遜とし、これを非常に重視する。神将の筆頭にいるのは、「社令陽雷総管康竜」「社令除雷総管劉徳」「九州社令撃剥使者呂魁」とある。すなわち康・劉・呂の三元帥である。巻百二十八の「九州社令陽雷祈祷検式」では、これらの諸将と温・関・馬・趙などの元帥を並べて記す。

雷首　鄧燮
霆首　辛漢臣
火雷　張珏
雷公　江赫冲
電母　秀文英

風伯　方道彰
雨師　陳華夫
雲吏　郭士秀
五方万雷使者　馬鬱林・郭元京・方仲高・鄧拱辰・田元宗
社令　楊・孫・洪・朱・馬
洞神　龐霊・劉通
神烈　苟狻・畢獬
霊官　馬勝
白蛇　馬冲
玄壇　趙朗
黒虎大神　皮明
馘魔　関羽
地祇　温瓊
社令　康堯・劉徳・呂魁

『道法会元』には、このように奏文の中において、ある特定の法術に関わる神将に、さらに温・関・馬・趙などの元帥神を並べるパターンも多く見られる。

巻百三十の「北真水部飛火撃雷大法」は、玄天上帝を主法とする、水部の神に関わる法術である。この法術においては、歴史上の人物が多く神として挙げられている。

主法
教主北極佑聖真君玄天上帝
将班
雷霆水部都大判官　張渤（即祠山大帝也）
都部押発使者　鄧禹
水部擒龍大神　壬真一
水部捜龍大神　呉昌

水部駆龍大神　李順
水部鞭龍大神　王禹臣（略）
興風激浪使者　姜維
鼓風波濤使者　屈平
蒸雲蒸霧使者　趙太平
搏雲作水使者　楽毅
散雲生風使者　蓋勝之
能雨能晴使者　樊世仁
飛霜凝氷使者　白起
剪水結雪使者　辛元礼
収陽降雨使者　孫勝
飛火撃雷使者　丁炳
掣電迅雷使者　呂宜
報事通達使者　龍武周

すなわち、屈原・楽毅・白起・鄧禹・姜維といった歴代の人物が玄天上帝の配下として、主に雲や雨や雪などを扱う神将として扱われている。さらに、祠山大帝張渤の名も見える。祠山大帝張渤については『三教捜神大全』にも記事がある。『道法会元』巻百三十一の「石匣水府起風雲致雨法」は、祠山大帝を中心とした降雨の法術となっている。

『道法会元』巻百三十二の「雷霆祈祷秘訣」では、「酆都行司関元帥・張李牛頭・嶽主東嶽温元帥・東平威烈通天大元帥・張蕭黄劉王五大元帥」といった記載があり、また巻百三十三・百三十四の「太乙真雷霹靂大法」では、雷部の神々の一覧が記載されているが、ここでは「使者」とされている趙元帥などを除いてはあまり他の元帥の姿が見えない。巻百三十二から巻百四十五までは、「霹靂大法」と題した法術の系統が続くが、三清や玉帝など、神の体系としてはややオーソドックスなものが示される。なお、ここの奏文で示される「天枢院」は、単に天界の中心を指している場合が多い。

巻百四十六の「正一忠孝家書白捉五雷大法」は、「霹靂大法」とは異なっ

た系統のものであると考えられる。ここでは元帥が重要な役割を担っている。

主法
祖師玉帝御前伏魔上相李真君　漸字清叔（略）
聖位
雷門左伐魔使知南極天枢院事総轄雷霆都司一府二院三司事　苟元帥（略）
雷門右伐魔使知北極駆邪院事主管雷霆都司軍轄事　畢元帥（略）
四直使者　陳安・劉吉・孫徳・張京（略）
三十六雷七十二考召合属官将
紫虚鬱秀壇合壇官将
雷霆欶火律令　鄧天君
雷霆都督猛吏　辛天君
雷霆飛捷使者　張神君
正一魁神霊官　馬元帥
東嶽地祇上将　温元帥
酆都馘魔朗霊　関元帥（略）

ここでは、苟天君が南極天枢院を、畢天君が北極駆邪院を統轄し、その下に多くの元帥神が呼び出されることになっている。これは先に見た『海瓊白真人語録』巻一における白玉蟾の論とよく重なる部分がある。また苟・畢の二天君を特別に重視することは、『清微神裂秘法』などの清微系の経典の考え方に近い。ここで主法とされている李清叔は、南宋期に神霄派の一派を形成した者である[92]。この「正一忠孝家書白捉五雷大法」はその法術の系統を伝えるものであるが、恐らくは李清叔当時のままではなく、後代に追加された記事があるものと考えられる。

巻百四十七から百五十三までの「洞玄玉枢雷霆大法」では、再び「雷霆大法」と題する。冒頭にこの法術が、白玉蟾に由来するものであることが示さ

れる。但し、李遠国氏の指摘によれば、これは元の時代に白玉蟾の系統を継ぐ者たちによって書かれたものであるとされる[93]。この法術の中で挙げられている神将は、鄧天君・劉天君・張天君・竇天君・任天君・謝天君・朱天君・馬使者・郭使者・方使者・鄧使者・田使者である。伝統的な雷部の神々が中心になっているが、『三教捜神大全』に見える謝天君や朱天君の名が、鄧天君らとともに記されていることは非常に興味深い。

10.『道法会元』における元帥（二）
——神霄系諸派及び天心・地祇・酆都系など

『道法会元』巻百五十四から巻百九十までの「混元六天妙道一炁如意大法」「上清天蓬伏魔大法」「混元飛捉四聖伏魔大法」「上清童初五元素府玉冊」「上清五元玉冊九霊飛歩章奏秘法」は、恐らく天心法系統の法術が中心となったものである。ここからそれまで中心であった清微系の法術とは明らかに異なる性格の資料が多くなる。

まず巻百五十四と百五十五の「混元六天妙道一炁如意大法」では、路大安・雷時中などの祖師を主法とし、その法術の中心に据えている。雷時中は天心法を駆使したことで知られた道士である[94]。この「混元六天妙道一炁如意大法」における神将は次の通りである。

主壇大都督青帝天君　辛漢臣
副壇都総管炎帝天君　鄧伯温
混元都総轄霊官元帥　馬勝
雷霆飛捷報応使者　張元伯
東方飛雲激電神王蛮雷使　馬鬱林
南方飛雲激電神王蛮雷使　郭元京
西方飛雲激電神王蛮雷使　方仲高
北方飛雲激電神王蛮雷使　鄧拱辰
中央飛雲激電神王蛮雷使　田元宗
雷公　江赫冲

電母　秀文英
風伯　方道彰
雨師　陳華夫
雷府管打不信道法大将軍　朱彦明
雷門忠孝査伐魔使　苟翌冲
雷門忠孝右伐魔使　畢山則
八卦洞神天蒐正将　龐霊
八卦洞神地鬼副将　劉通
混元行神布炁　馬居仁・耿居一
天医符炁薬針灸砭六職治病仙官
大威徳神通最上滅魔顕法小翻山　張賢聖
布炁功曹　閻丘釈・張大用・祝清・孫達・劉定光・張元毅・田輝・王元・趙欽・張明遠
捉縛枷栲四功曹　何鼐・何燾・何清・何淵
八卦天医主帥　趙邦英
八卦天医副帥　許仙英
直日五雷　田文仲・崔亜文・劉晏・陶公済・高刁
天医百薬退病　李紳・朱子栄

この法術では、奏文の中では玄天上帝を主法とする。蛮雷使者や雷公・電母などを重視することは、神霄・清微系と変わらないが、ここでは「天医院」を非常に重視しているのが特徴的である。巻百五十五においては、辛天君や馬元帥の他、「十大功曹」や「十大太保」などの配下の将も重視している。十大太保は、ここでは「温玉・李真・鉄勝・劉琦・姚正・張蘊・康応・岳勝・孟雲・韋彦」の各神将であることになっている。

『道法会元』の巻百五十六から百七十までを占める「上清天蓬伏魔大法」「混元飛捉四聖伏魔大法」においては、先に見た『太上助国救民総真秘要』『上清天心正法』『上清北極天心正法』などの天心系の経典と同様に、北極駆邪院と四聖・天罡大聖、及びその配下の三十六将などを重視する。

「上清天蓬伏魔大法」巻百六十二の符などで重視するのは、飛鷹大将や、走犬大将などの他、唐・葛・周の天門三将軍などがある。また同巻百六十四の北極駆邪院に対する奏文においては、北極駆邪院の天蓬・天猷・黒煞・真武の四聖などの神将が重視されている。そのため、ここで言う「四大元帥」とは、天蓬・天猷・黒煞・真武であり、温・関・馬・趙ではない。このような神体系は、その前に収録される「混元六天妙道一炁如意大法」とも性格を異にしており、恐らくはより古い神体系をそのまま残しているのではないかと推察される。ただ、巻百六十七の符など一部の記載には、殷元帥や趙元帥などの元帥神の名が見える。この部分には、真武を「玄天上帝」と記す場合もあり、後の記事の追補があるものと思われる。

巻百六十九・百七十の「混元飛捉四聖伏魔大法」では、北極四聖を中心として、「風・雷・水・火・四大神王」や「崔・盧・鄧・竇四大天丁神将」「温・李・呉・劉四大通天副将」などが見られ、ここで崔・盧・鄧・竇の四将を北極駆邪院の配下とすることは、先にみた白玉蟾の『海瓊白真人語録』における指摘と一致する。巻百八十一の「上清五元玉冊九霊飛歩章奏秘法」には、神々の一覧が採録されているが、ここに見える神も、唐・葛・周の三将軍などオーソドックスなものが多い。

『道法会元』の巻百八十八から巻百九十四までは、「太乙火府五雷大法」とそれに関連する法術によって占められる。これは劉浩然・許志高などの祖師が伝えた「太乙雷法」系統の法術である[95]。先に見た「南宮火府」と関連があるかもと思われる。巻百八十八の序文には、宋咸淳年間の記載がある。ここで示される火府の神将を見るに、清微や天心系ともやや異なった神体系を保持していると考えられる。

火府主将威光掌令総監大神　丘青（略）
副将震雷霹靂行令大神　王成之（略）
散雲飛霧掌令大神　陳一言（略）
運風変化青雷大神　李徳周（略）
誅魔殺鬼鉞伐大神　孔明輝（略）

火雷伐悪大神　崔実（略）
水雷洞耀誅伐大神　周明静（略）
電光普照飛火大神　紀茂卿（略）
駆雷致雨黒雷大神　劉道明（略）
飛雷急捉主律令大神　林康（略）
玄省直符駆雷大神　白伸（略）
三天持奏使者　謝祐（略）
東方雷公　朱靖（略）
西方雷神　劉漠祥（略）
南方雷神　朱徳茂（略）
北方雷神　張未公（略）
中央雷公　楊元昇（略）
雷公大神　孟勝（略）
雷母大神　黄法彰（略）
風伯大神　馬雀（略）
雨師大神　陳元慶（略）
移雲掩日四丁大神　丁文広・丁文義・丁文通・丁文瑩（略）
開壇聴令四大神将　高刀（略）・陶嗣（略）・崔亮（略）・趙公明（略）

ここに見える雷神や風伯・雨師などの神の名は、先に見た清微法や天心法系統のものとは異なるものである。例えば、「混元六天妙道一炁如意大法」においては、「雷公江赫冲・電母秀文英・風伯方道彰・雨師陳華夫」であり、これは他の資料にも共通することが多いが、ここではそれぞれ「雷公孟勝・電母黄法彰・風伯馬雀・雨師陳元慶」となっている。またここで主法となる丘青・王成之・陳一言といった神将も、後代の、特に民間の資料ではあまり見られない。この中では、僅かに趙元帥が開壇の神将として登場している。巻百九十四の「太乙火府五雷大法行移」に、「祖師中天天枢相伏魔許真君」とあるが、この許真君とは許伏魔、許志高のことである。ここでも、丘・王・孔・林・謝・白の各神将が中心となっている。

『道法会元』巻百九十五から百九十七までは、「混元一炁八卦洞神天医五雷大法」「九清太皇府天医八卦洞神五雷大法」の「八卦洞神」雷法系統の法術が採録されている。ここで重視される神将は、龐・劉・陶の三天君である。

主法
雷祖主法妙道上帝
神将
主帥　龐霊（略）
副帥　劉通（略）
主壇　陶公済（略）
八卦大神
乾宮捉鬼天丁　張宏
坎宮縛鬼天丁　黄甫
艮宮枷鬼天丁　丘志
震宮栲鬼天丁　李自明
巽宮斬鬼天丁　趙逢
離宮焼鬼天丁　徐永
坤宮冰鬼天丁　呂清
兌宮圧鬼天丁　余通

龐天君と劉天君については、『三教捜神大全』に記事がある。李遠国氏の指摘によれば、この「八卦洞神」雷法を奉じたのは張元真を宗師とする一派であり、三十代張天師の張虚靖を祖師とするという。この法術の巻百九十六の後序には、張継先の署名があるが、これは後人の手になるものであろう[96]。ここで示される他の八卦神については、他の資料には詳しい記載が無い。ただ、先に見た巻百五十四の「混元六天妙道一炁如意大法」においては、龐天君と劉天君がやはり「八卦洞神」の将となっていた。またここでは、「天医院」が非常に重視されている。

巻百九十八「神霄金火天丁大法」から巻二百六「金火天丁召孤儀」までは、

「金火天丁」系統の法術となっている。巻百九十八の序は陳道一の手によるもので、また巻百九十九においては、林霊素の撰と称する「金火天丁神霄三炁火鈴歌」を収録する[97]。そのため、この法術は林霊素の伝統を直接継ぐものと見なされ、これを非常に重視する向きもある。神将としては、ここで重視されているのは、「天丁」である張天君である。さらに配下の将として「火鈴童子」を配する。いずれも張姓である。またここでは、元聖天尊・救苦天尊・度命天尊の三天尊を主神とする。

巻二百七「太極葛仙翁施食法」と二百八「太極玉陽神錬大法」では、葛仙翁を重視するが、神将についてはそれほど目立つ記載が無い。巻二百九「玉陽祭錬文検品」では、様々な奏文を採録するが、三官大帝に対するもの、北陰酆都玄天大帝に対するもの、水府扶桑大帝に対するもの、東岳大帝に対するものなどがある。さらに地祇に対するものがあり、ここでは温元帥とその配下の将が重視されている。巻二百十の「丹陽祭錬内旨序」は王玄真の序文があり、また末尾には元末の道士張雨の署名がある[98]。

『道法会元』巻二百十一は、「天罡生煞大法」であり、天罡大聖を中心にした法術となっている。巻二百十二の「中皇総制飛星活曜天罡大法」は、「運用秘訣」を王文卿の述とする。主となるのは天罡大聖であるが、配下の神将に、「五方大神王」や「摩尼大力火輪金剛・万丈鳩羅大力火輪神将・乾羅飛天火車元帥・地軸希盧火馬猛将」などの名が見える。巻二百十三は「広霊宣化陳将軍秘法」で、陳元帥を主とした法術である。またこれには、劉元帥を主とした「神霄黒虎劉元帥秘法」が付されている。

『道法会元』巻二百十四の「玉音乾元丹天雷法」は、『道法会元』の中でも特異な性格を持つ法術であり、密教系呪術の影響が強く感じられるものである。まず「教主梵炁天皇天父大帝」は「人首蛇身にて紅髪金眼」であり、「法主帝釈阿伽地皇天母大帝」は「人首蛇身にて緑髪銀眼」であり、「法主雷祖大帝斗母紫光金尊」は「三頭六臂にて両手に日月を捧げ持ち、また別の両手には弓箭を持ち、また別の両手には降魔鈴杵を持つ」という形象である。また斗母は七頭の猪の牽く輦に乗る[99]。そして神将の「玉梵尊天嘍囉王」と「妙梵尊天伽囉王」はともに「西蕃人」であるとされ、これが鄧天君・辛天君・

張使者と併置されている。巻二百十五の「元皇月孛秘法」は月孛雷君を、巻二百十六の「九天玄女竈告秘法」は九天玄女をそれぞれ中心とした法術である。ただこれらの諸法と元帥神の関連は希薄である。

巻二百十七から巻二百十八の「紫庭追伐補断大法」では、天心系法術の色を強く打ち出したものとなる。

主法
北極法主天蓬都元帥蒼天上帝
華蓋祖師人天教主孚佑顕霊　浮丘真君
華蓋祖師妙道教主正佑妙霊　王仙真君
華蓋祖師克誠教主顕佑威霊　郭仙真君
主帥
紫庭追風神王天皇主法四目老翁　陳元帥（略）
紫庭追雷神王天皇主法高刁北翁　唐元帥（略）
紫庭追火神王天皇主法素梟三神　薛元帥（略）
紫庭追水神王天皇主法長顱巨獣　宋元帥（略）

すなわち、華蓋山の三真君に、陳・唐・薛・宋の各元帥を加えたものとなっている。副将には、趙元帥や馬元帥などの名も見える。法術では北極駆邪院と上清天枢院を重視する。

巻二百十九「神霄断瘟大法」と巻二百二十「神霄遣瘟送船儀」及び巻二百二十一「神霄遣瘟治病訣法」では、治瘟の神将たちがクローズアップされる。ここで重視されているのは、鉄・陳・姚・徐の各元帥である。ただ「神霄遣瘟送船儀」では、太歳殷元帥と副将の王・蒋二将などを主とする。

『道法会元』巻二百二十二「正一吽神霊官火犀大仙考召秘法」から、巻二百二十六「正一霊官馬帥秘法」までは、すべて霊官馬元帥が中心となった法術が集められている。

「正一吽神霊官火犀大仙考召秘法」における馬元帥の姿は、火神であり、金槍・金磚を持ち、足に火輪を踏むというもので、これは『三教捜神大全』

や後の小説類に見えるものと一致する。また呪の中に「華光五通」という文句も見え、華光や五顕神との同一視もすでに行われていることが推察される。ただ馬元帥それ自体の由来については、例えば『三教捜神大全』や『南遊記』に見えるような詳しい故事は語られていない。配下の将としては、別の法術にも見えていた白蛇大将の馬充、それに温賛・王靖・席言・黄用の四将がある。巻二百十五「火犀大仙馬霊官大法」では、馬元帥を中心として、その他に陳・朱・蕭・鄭の各元帥を併記する。朱元帥は続く巻二百二十七の「太一火犀雷府朱将軍考附大法」で法術の主となっているが、陳・馬・朱の三元帥を火府の霊官としてひとまとめに扱うことも多い。巻二百二十九の「霊官陳馬朱三帥考召大法」から巻二百三十一「上清正一三景霊官秘法」までは、まさにこの陳・馬・朱の各霊官を中心とした法術である。

「太一火犀雷府朱将軍考附大法」の「雷奥序」によれば、朱元帥はもと殷の紂王の時代の官吏であったが、太華山に隠れ、天界の将となった。朱霊官は、天下の「正道を信ぜざる者を打つ」とされ、別に「打不信道法」の称がある。この法術は盧埜の一派が伝えたもので、また盧はこれを張虚靖から得たとする[100]。盧埜は劉玉にこの法を伝えた。劉玉は先に見た「神霄金火天丁大法」の伝授にも関わっている。朱元帥については、『三教捜神大全』にも伝があるが、かなりその由来については異なっている。また朱元帥の名については、時に「朱彦」とし、時に「朱僧奇」とするなどして一致しない。

『道法会元』巻二百三十二「正一玄壇趙元帥秘法」から巻二百四十「正一玄壇元帥六陰草野舞袖雷法」までは、趙玄壇を中心とする法術である。「正一玄壇趙元帥秘法」の冒頭で、趙元帥について語られる。それによれば、趙元帥は名を朗、一名を昶、字は公明。終南山の人。秦の時に世を避けて山中に入って修養に努め、玉帝から元帥に封ぜられた。その姿は、虎に跨り、鉄の冠に鉄鞭を執るというものであった。初代天師張道陵が丹を錬っていた時にこれを守護したという。また龍虎山の守護にも当たる。ここをもって「正一」の称があるようだ。その配下の将には、「八王猛将」がいる。その八名とは、呉宛・唐開・譚超・王賓・雷轟・龔狠・張彪・何魁である。また別に配下として二十八将・六毒大神・五路大神・八猖大神などがいるとされる。このうち二十八将については、鄧禹や呉漢など、全く後漢の光武帝の二十八将が充てられている。また実在の将であった白起と伍員などもその配下とする。

趙元帥については、『三教捜神大全』に記載があるが、その由来などにそれほど差異は見られない。また、この中で特筆すべきは巻二百三十四の「正一龍虎玄壇金輪執法如意秘法」であろう。この法術中では和合神や招財童子・進宝郎君などが呼び出され、完全に招財のための法術となっている。趙玄壇はむろん財神としての性格を強く持っているが、『道法会元』の中でかくもその機能が強調されることは珍しいと言ってよい。これも恐らく、この法術が民間系出自であることを示していよう。

巻二百四十一から巻二百四十三までは、「雷霆三五火車霊官王元帥秘法」であり、王霊官を中心とした法術になっている。『三教捜神大全』には王霊官と薩真人の故事が見えているが、この「雷霆三五火車霊官王元帥秘法」でも、その主法となるのは師にあたる薩守堅である。王元帥の姿は、「左手に火車を持ち、右手に金鞭を執る」というものであるが、ここでは有名な三眼ではないことになっている。王霊官の配下の将としては、陳元帥・丘元帥・畢元帥などがある。

『道法会元』巻二百四十四と二百四十五の「玉清霊宝無量度人上道」は、具体的な法術ではなく、理論的な面に関する叙述となっている。まず霊宝派の系譜を示し、また寗全真・林偉夫の伝を記し、様々な訣を提示する。この部分においては霊宝派の非常にオーソドックスな体系が示される。またこの部分には陀羅尼系の呪文はほとんど見られない。

巻二百四十六の「天心地司大法」と巻二百四十七「北帝地司殷元帥秘法」は、太歳殷元帥を中心とした法術である。殷元帥については『三教捜神大全』に伝があるが、その「殷の太子であった」という伝承はここでは見えない。ただ、その師とされる申真人については、この「天心地司大法」においてもその主法とされている。この法術の序文には、南宋咸淳年間の彭元泰の署名がある。その序には北帝神の勅により殷元帥が妖邪を退治したことを述べる。主法となっているのは、申霞と廖守真の両真人である[101]。この法術では北帝神を重視することから、天心系統の性格を感じさせる。ただ他の天心系の

法術の記載とはやや齟齬する面もある。太歳神の配下には、「七十二候主将・二十四炁主将・金鐘黄鉞大将・黄旛豹尾大将」などがある。これらは太歳の部下らしく、時間に関係するものが多い。同じく殷元帥が主となった巻三十七の「上清武春烈雷大法」とも共通する点が若干存在する。巻二百四十八は「地部金官如意潘将軍秘法」である。この潘将軍は、或いは白玉蟾の言にあった潘元帥か。この法では、潘・許・鍾の三元帥が主となっている。

『道法会元』巻二百四十九から巻二百五十の「太上天壇玉格」は、神々の職種と規律について記す。次の巻二百五十一から巻二百五十二の「太上混洞赤文女詔書天律」においても、天界の規律についての記述がほとんどである。なお、ここでは天枢院と駆邪院の役割を非常に重視している。

巻二百五十三から巻二百五十六は地祇法系の法術であり、温元帥を中心とするものである。巻二百五十三の「地祇法」の序文には劉玉の署名がある。劉玉は先に見た「神霄金火天丁大法」や「太一火犀雷府朱将軍考附大法」の伝授にも関わるものである[102]。劉玉は地祇法を黄公瑾に伝えたとする。地祇法の後跋には黄公瑾の署名があり、南宋咸淳十年（一二七四）との記載がある。巻二百五十四「東嶽温太保考召秘法」によれば、温元帥は名を温瓊、東嶽大帝の部下である。温元帥の姿は、青面金眼の獰猛な様子であり、配下には、崔・盧・鄧・竇の四将がいるとされる。北極駆邪院の本来の神将である四将が、ここで温元帥の配下となっているのは興味深い。また、巻二百五十五の「地祇温元帥大法」では、その主法は張虚靖となっている。

『道法会元』巻二百五十七「東平張元帥秘法」と巻二百五十八「東平張元帥専司考召法」は、張元帥を中心とするものである。張元帥は、唐代の人で名は張巡。この法術で副帥となる許遠と共に『旧唐書』忠義伝に収録された人物である。またさらに、「東平張元帥専司考召法」で配下の神将とされる雷万春・南斉雲などもやはり忠義伝に記載がある。このほか、温・李・鉄・劉・楊・張・康・岳・孟・韋の十太保もその部下であるとされる。なおこの法でも主法は張虚靖であり、前の「地祇温元帥大法」との共通性を感じさせる。また張元帥の姿は、「青鬼面、朱髪」であり、狼牙棒を持つ姿で現される。ここで注意したいのは、狼牙棒を持つのは後世ではむしろ温元帥の特色であることだ。

巻二百五十九「地祇馘魔関元帥秘法」と巻二百六十「酆都朗霊関元帥秘法」は、それぞれ関元帥を中心とする法である。この「酆都朗霊関元帥秘法」においても、その主法となるのは張虚靖である。後でこれについては別途考察するが、張虚靖と関羽の関係は密接なものがあり、そもそも関羽が神として考えられるようになったのは、張虚靖が原因と言ってもよい。

関元帥の姿は、「重棗色面、鳳眼、三牙鬚、髯一尺八寸」であり、「大刀を持ち、赤兎馬に乗る」というものである。すなわち、後の関帝の形象とほぼ同じである。「地祇馘魔関元帥秘法」に付す「事実」には、張虚靖と関元帥の関係を記し、末尾には陳希微の署名がある。陳希微は『茅山志』巻十六によれば北宋徽宗の頃の人である[103]。関元帥の副将となるのは、「地祇馘魔関元帥秘法」によれば、「清源真君趙昊」及び「飛天八将」となっている。清源真君はまた「清源妙道真君」とも記される。すなわちこれは二郎神、すなわち「清源妙道真君趙昱」のことであると思われるが、これと「禁将趙旻」との関係がやや明確ではない。飛天八将は、先に見た白玉蟾の言にあった「八将」のことであると思われる。また関元帥の子である関平の名が見え、また後に関帝の従神として有名な周倉は、ここでは「周昌」と書かれる。或いはこれは漢初の臣である周昌を指すか。すると周倉自体が、周昌を来源とする神である可能性も考えられる。

ここで関元帥の法術に、「地祇法」と「酆都法」の両者が存在することは、恐らく両者がほとんど同類の系統に属するものであることを示唆するものと考えられる。そもそも、地祇温元帥・地祇張元帥・酆都関元帥が続いて配されること自体が、その近似性を示していよう。そもそも酆都系の神は冥界の神であり、「鬼」としての性格が強い。恐らくは民間出自の法だと思われ、また白玉蟾が「いにしえは無し」と称したように、神霄や天心系に比べて、やや新しい層に属する法術だと思われる。

これに続いて巻二百六十一「酆都車夏二帥秘法」も酆都系の法術となっている。ここで中心になる神将は車・夏の二元帥である。主法は北陰酆都玄天

大帝である。これは北極紫微大帝と同一視されている。車・夏元帥の配下の将としては、石使者・劉使者・鮑使者などがある。またこの法に続いて付される「酆都内台考召秘旨」では、孟元帥が中心となっている。

注意すべきは、『道法会元』では「北帝」といった場合、法術によって比定される神格が変わることである。それは「北帝煞鬼之法」の旧来の「北帝」である場合もあれば、北陰酆都大帝を指すか、また北極紫微大帝か、玄天上帝であることもある。しかもこれらは截然と分けることが難しく、この場合のように神格の概念が重なり合うことの方が多い。また、その冥界の主宰神としての特色は、時に東嶽大帝や十殿閻王とも重なることがある。

『道法会元』巻二百六十二から巻二百六十三までの「酆都考召大法」と、巻二百六十四「北陰酆都太玄制魔黒律収摂邪巫法」、それに巻二百六十五から巻二百六十六までの「北陰酆都太玄制魔黒律霊書」、及び巻二百六十七から二百六十八までの「泰玄酆都黒律儀格」は、すべて酆都系の法術で占められている。巻二百六十八は同時に『道法会元』の最後の巻でもある。

「酆都考召大法」においては、「北帝煞鬼之法」以来の酆都の六宮が示される。次に戴・韓・焦・馬・宗・関・烏・屠・車・夏などの神将が記されるが、いずれも冥界の将という形である。「酆都八将」はここにおいても強調されている。関元帥や馬元帥の地位はここではかなり低いようである。白玉蟾の言などから推察するに、どうもこの「酆都考召大法」の方が、酆都法のやや古い姿を伝えているように思える。

「北陰酆都太玄制魔黒律収摂邪巫法」は、盧埜の編、徐必大の注とされている。盧埜は先にも見た通り、劉玉の師であり、幾つかの法術の伝授に関わっている[104]。ここではむしろ天蓬元帥が主となる。ここでは陀羅尼系の呪文がほとんど見られず、酆都法のより古い姿を保持しているものと思われる。「北陰酆都太玄制魔黒律霊書」は、「魏伯賢修、鄭知微序次」とされる。またさらに盧埜によって書かれている箇所がある。ここでは、新旧の要素が混じっており、そこでは若干神格の性格に相違が見られると考えられる。ただ中心になるのは、やはり北帝と北極四聖、それに八将などの些か古い層に属すと思われる神格である。

11.『法海遺珠』に見える元帥神

『法海遺珠』[105]は、『道法会元』とほぼ同じ性格を持つ、様々な派の雷法を集大成した経典である。ただ全てで四十六巻と、『道法会元』に比してその分量は少ない。とはいえ、道教経典としてはかなり大部の経典に属する。

以下に、全四十六巻の各編と収録される法術について記す。

巻数	編名
1	神霄十字天経
2	洞玄秘旨
3/4	太乙火府秘法
5	太乙火府秘旨
6	三宮内旨
7/8	九天雷晶使者梵炁隠書機法
9	太極雷隠秘法
10	神霄上道
11	雷機玄秘
12	璇璣建壇祈告次序
13	玄霊黙告秘文
14	告斗求長生法
15	奏伝混錬法式
16	雷霆諸帥秘要
17	南院火獄大法
18	九天魁罡雲路追捉三陣大法
19	九天魁罡黄龍奪命秘法
20	召紫姑仙法
21	混合五雷内修
22	五雷総摂
23	鄧帥大神九変欵火符法
24	大洞飛捷五雷大法
25	五雷迭運妙法
26	策役社令玄秘

27	金闕先生家書秘文
28	総召蛮霊符秘
29	上元重明九斗陽茫火鈴符法
30	太歳秘法
31	九陽上将劉天君秘法
32	北帝四聖伏魔秘法
33	北帝御前小四聖秘法
34	紫微玉音召雷大法
34	雷門左右伐魔使苟畢二元帥法
35	太歳武春雷法
35	斗口魁神霊官秘法
35	十七字霊官秘法
36	神霄都督金輪執法趙元帥秘法
36	三天風火独雷大法
36	雷電地祇秘法
37	紫霄護法五雷黒虎劉大神法
37	青玄地雷主令温元帥変用秘法
37	斬勒飛捷火雷使者大法
38	雷霆辛都督秘法
38	天罡統首逐凶退土符法
39	酆都西台朗霊馘魔関元帥秘法
40	六一飛捷秘法
40	先天一炁火雷使者秘法
41	無上混沌一炁天書
42	太上穣告心奏秘文
42	司命祈禳大法
43	太玄煞鬼関帥大法
43	地祇温帥大法
44	糾察地司殷帥大法
44	雷箭大法
45/46	紫宸玄書

その正確な編纂の時期は不明であるが、巻四十五の章舜烈の序には元至正年間の年号があり、恐らくはそれ以降、元末明初の成立であるとされる[106]。『法海遺珠』は『道法会元』と似た内容を持つものの、若干異なる部分もある。例えば巻十四では、法を司る師として、鍾離権や呂洞賓、それに白玉蟾などの名を挙げる。ここでは所謂南宗系の祖師たちと、雷法の神将が併置されている。恐らく『法海遺珠』ではかなり白玉蟾の法系を重んじているものと推察される。

以下では、『法海遺珠』の各法について、元帥神を中心として見てみたい。

まず『法海遺珠』の巻一「神霄十字天経」では、主として白玉蟾を挙げ、その神将には、劉天君を中心に、閻元帥・張天君・竇元帥・任元帥などがある。これは『道法会元』の巻七十五「天書雷篆下」に挙げられた人員とよく似ている。

巻三から巻五には「太乙火府秘法」「太乙火府秘旨」があり、すなわち「太乙火府」雷法の系統の法術となっている。主としては道徳天尊・陳希夷・劉通玄などの真人が挙げられる。その神将は次の通り。

太乙火府主法都総管　李元君
主法太乙都総　祝元君
主将　丘青　副将　王成之
雷神　陳一言　青雷　李徳周
馘伐　孔明輝　火雷　崔実
（略）

すなわち『道法会元』の巻百八十八から巻百九十四までの「太乙雷法」系統のものと、ほぼ同じ神将が見られる。

巻六の「三宮内旨」では、天蓬元帥と天罡大聖、そして辛天君が重視されている。巻七と巻八の「九天雷晶使者梵炁隠書機法」は祈雨の法を中心とする。巻九の「太極雷隠秘法」も同じような性格を持つ。ここでは普化天尊や張使者の名が見える。巻十「神霄上道」から巻十三「玄霊黙告秘文」までは

かなりオーソドックスな符呪の法が見える。

巻十四の「告斗求長生法」では、先にも少しふれたように、その師法として、「太極真人王行真・伝道真君鍾離権・内輔真人鄭思遠・霊宝真君呂巖・通玄真人張果・清定真人白玉蟾」の名が見える。『法海遺珠』の一部に全真系の影響があることは、ここから顕著に見て取れる。

巻十五の「奏伝混錬法式」では、奏文の中に多くの元帥神の名が見える。まず鄧天君・辛天君、それに謝天君などである。そして馬元帥・温元帥・趙元帥など、数多くの元帥の名を連ねる。ここでも、北極駆邪院と南極天枢院は対置されて置かれているものと考えられているようだ。

巻十七は「南院火嶽大法」は、宋元帥を主とする法である。

主将　宋元帥無忌（略）
副将　許元帥汲
五方追捉大将　趙元帥公明（略）
弁邪大将　陳将軍
焼鬼大将　劉将軍
斬頭瀝血大将　龔将軍

すなわち、『道法会元』巻百二十一の「南宮火府」系統の神将と近い。

『法海遺珠』巻十八「九天魁罡雲路追捉三陣大法」では、「徐守忠·江巨源·翟世寧・趙子玉・朱雲・朱青」などの神将が見える。また巻十九「九天魁罡黄龍奪命秘法」では、「金子珏・宋無忌」などを主とする。巻二十は「召紫姑仙法」である。

巻二十三「鄧帥大神九変欶火符法」、巻二十四「大洞飛捷五雷大法」及び巻二十五「五雷迭運妙法」では、鄧天君・辛天君・劉天君と、それに五雷使者を重視する。主に雷部の天君が中心となるものである。

巻二十六「策役社令玄秘」では、次のように、雷部の天君と温元帥・関元帥などを併置する。

主壇八十一天欶火律令大神　鄧伯温
監壇太一捷疾直符使者　張元伯
監壇太一捷疾直符使者　許先定
総轄三界九州社令雷神主者　蒋沢
主帥九天雷声普化大神　宋光沢
副将東嶽主令司駆陰雷大将　関羽
九州社令雷神
揚州社令　鄒混
掌駆悪伐大将　温瓊

この法は、中に「九州社令」という記述が見えることからも分かるように、「九州社令」系の法術である。よって『道法会元』巻百二十五から巻百二十八の、一連の「九州社令」系の神体系と酷似する。

『法海遺珠』巻二十七の「金闕先生家書秘文」は、北極四聖を重視する。しかし前半では、玄天上帝を強調する記載が目立つ。恐らく、元来は四聖中心の法術であったものが、後に玄帝の部分がクローズアップされるに至ったものであろう。ここではまた、唐・周・葛の三将軍も重視されている。

巻二十八「総召万霊符秘」に見えている「崔子文・史珪璋・羅輝・景耀」のうち、崔・史の両神将については、王氏『上清霊宝大法』の巻三十九に記載がある。この「総召万霊符秘」には辛天君や蒋使者の名も見える。『法海遺珠』巻二十九の「上元重明九斗陽茫火鈐符法」は、鄧天君を中心とする法である。

『法海遺珠』巻三十「太歳秘法」では、太歳殷元帥を重視する。巻三十一の「九陽上将劉天君秘法」では、劉天君を主帥に、閻・張・寥・任の四大天君を副将に配する。

巻三十二は「北帝四聖伏魔秘法」で、天蓬・天猷・黒煞・玄武を主とする。元代の資料であるためか、「真武」ではなく、「玄武」と書かれることが多い。内容的には『道法会元』巻百六十九・百七十の「混元飛捉四聖伏魔大法」と共通する部分も多い。

『法海遺珠』巻三十三「北帝御前小四聖秘法」では、神将として、「無面目大将軍陳勝・瀝血大将軍呉広・擲撲大将軍炅容・元神大将軍耿温」の四将が重視されている。すなわち、秦末の陳勝・呉広が神将とされており、北極紫微大帝の配下となっている。巻三十二の後半では、朱元帥や秦元帥といった神将の名が見える。

巻三十四は「紫微玉音召雷大法」と「雷門左右伐魔使苟畢二元帥法」からなる。前半の「召雷大法」の主法は次の通りである。

主法
祖師西河救苦妙道一元無上薩君真人
将班
雷霆欶火律令大神　鄧天君　名燮
雷霆猛吏都督大神　辛天君　名志
副帥南方火鈴大将　宋元帥　名無忌
副帥北帝曠野大神　竇元帥　名勝

すなわち、薩真人を中心に、鄧・辛・宋・竇の雷部元帥が神将となる。また後半部では、同じく雷部の苟・畢の二元帥が中心となっている。『道法会元』の「雷霆大法」などの系列に近いものか。

『法海遺珠』巻三十五は、「太歳武春雷法」「斗口魁神霊官秘法」「十七字霊官秘法」からなる。前半の「太歳武春雷法」は太歳殷元帥を主とし、「斗口魁神霊官秘法」「十七字霊官秘法」では馬元帥を中心とする。巻三十六は「神霄都督金輪執法趙元帥秘法」「雷電地祇秘法」からなり、それぞれ趙元帥・温元帥を主とする。

巻三十七は「紫霄護法五雷黒虎劉大神法」「青玄地雷主令温元帥変用秘法」「斬勘承旨飛捷火雷使者大法」からなる。それぞれ劉元帥・温元帥・張使者を主とする。「紫霄護法五雷黒虎劉大神法」主法としては玄天上帝が当てられている。またここでの温元帥は鞭を手に執る。巻三十八は、「雷霆辛都督秘法」「天罡統首遂凶退土符法」からなる。前半では辛天君が、後半では趙元帥が主となっている。

『法海遺珠』巻三十九「酆都西台朗霊鹹魔関元帥秘法」では、関元帥が法術の中心となる。配下の将としては、「魏・焦・魯・曾・馬」の諸将と「韋・劉・王・孟・車・夏・劣・桑」の八煞大将の名が見える。『道法会元』巻二百五十九「地祇鹹魔関元帥秘法」と巻二百六十「酆都朗霊関元帥秘法」などと共通する面は多い。いずれにせよ、地祇酆都系の法術であると考えられる。

『法海遺珠』巻四十は「六一飛捷秘法」であり、張天君と六丁使者を中心とする。ここでは九天玄女神が重視されている。

巻四十一「無上混沌一炁天書」と巻四十二「太上穢告心奏秘文」では、これまでとやや毛色の異なる、雷法と内丹・符呪を融合させた法術が展開されている。

巻四十三の前半は、「太玄煞鬼関帥秘法」であり、酆都鹹魔関元帥を中心とする。後半は「地祇温帥秘法」で、地祇温元帥を神将とする。ここでは、天師張虚靖を師とする。ここで温元帥の部下とされている将は、「鉄・畢・黒・方・劉・張・趙・史・周」の各元帥で、所謂十太保とは若干人員が異なっている。巻四十四「糾察地司殷帥大法」では、太歳殷元帥を主とし、その配下としては、「蒋使者・盧明・李仲文・関隆・陳橐畿・宮文王・張宗義・西門豹・呉正文・劉忠・宋文行・韓宝」などの将が挙げられている。

『法海遺珠』巻四十五・巻四十六の「紫宸玄書」では、恐らく章舜烈の派独自の法術が展開されていると思われ、ここに見える神将は些か『道法会元』に見えるものとは、体系が異なっている。法系として、「祖師董飛霞・一代方真人・二代厳道隆・三代郭応岐・四代章元長・五代章舜烈」という系譜が示され、神将としては、「趙光淵・毛尾・童立羊・熊世勝・鄧行文・李史近」などの元帥が挙げられている。

総じて『法海遺珠』の法術は、『道法会元』に比して記載が簡略な傾向がある。またその神体系は、重なる部分も多い一方、雷部の元帥や地祇酆都系の神が強くなっているように思われる。また一部に全真系の神体系が取り入れられている点は注意すべき点であろう。

12. その他の元帥に関わる経典について

『道法会元』や『法海遺珠』以外にも、元帥神に関連する経典は『道蔵』の中に幾つか存在する。

まず、洞真部に収録する『太乙火府奏告祈祷儀』[107]及び『清微玄枢奏告儀』[108]である。『太乙火府奏告祈祷儀』は北極四将を中心にしたややオーソドックスなものであるが、『清微玄枢奏告儀』には王元帥・龔元帥・劉元帥・楊使者・耿使者などの神将の名が見える。

正一部『鄧天君玄霊八門応報内旨』[109]は、鄧天君に関連するものであるが、書中で温元帥に言及する。洞神部の『地祇上将温太保伝』[110]は、温元帥の伝である。これは黄公瑾の撰になるもので、また『温太保伝補遺』が含まれる。

『道法会元』に類すると思われるものの、やや毛色の異なる経典に『貫斗忠孝五雷武侯秘法』[111]がある。ここは諸葛孔明を主法とし、関羽・張飛・馬超・黄忠・趙雲といった三国物語で著名な武将たちを神将として扱う。しかしその中身はほとんど雷法の記述で占められている。恐らく元代に発展した三国物語の影響のもとに作られたものであろう。

13. 道教における元帥神信仰の発展

以上、『三教捜神大全』に記載のある元帥神を中心に、『道法会元』やその他の経典の内容について、やや詳しく検討した。南宋から元において発展してきた道教の神将については、様々な流派において造作された結果、その数は膨大なものとなり、『三教捜神大全』に反映されているものはそのごく一部に過ぎないと理解すべきであろう。そして、神霄派など、初期の雷法においては、必ずしもすべての元帥神が重視されているとは言えず、特に温元帥や関元帥などは、やや遅れて元帥神の列に参入したものであると考えられる。ただ、現在の道教の儀礼文書や、民間の法術儀礼においては、冒頭に見たようにかなりの数の元帥の名が見える。現在使用されている儀礼書の多くは、『道法会元』以後の流れを引き継ぐものであることは、まず間違いないであろう。

これは、『道法会元』と『法海遺珠』とを、両部の『上清霊宝大法』や、『霊宝玉鑑』[112]などの南宋の儀礼文献と比較すれば、その神体系の違いはより明確になるであろう。例えば『霊宝玉鑑』などは、その法術や霊符における記述は『道法会元』『法海遺珠』と著しく似た面があり、明らかに雷法の影響を受けている。しかし、そこに見える神将に注意してみると、それは五道大神であったり、六甲六丁神であったり、唐・葛・周の三将軍であったりする。そもそも「元帥」という称号を持つ神自体が少ない。但し趙元帥の名は見えている。

南宋期の道教の主流派においては、恐らく元帥神はまだあまり受け入れられていないものと考えられる。だが、白玉蟾が言及しているように、南宋においては様々な道派によって考え出された神将が、道教の神列に参入していく過程が進行中でもあった。

また『道法会元』の地祇法や酆都法にしばしば南宋咸淳年間との記載があるのは、捏造とは考えられず、当時の記録をそのまま採録したものであろう。よってこの時期には、多くの雷法を継ぐ道士たちによって元帥神が造作されていたものと推察される。ただ咸淳といえば、すでに南宋も末であり、ほとんど元の世祖の治世と重なる時期であることは注意すべきであろう。

その『道法会元』も、成立時期を異にする資料が混在しており、下手をすると同じ巻の中でも矛盾する神体系が示される。ただ元帥神は多くの法術で、すでに中心的な存在となっている。

あえて『道法会元』における元帥神などを、極めて単純化してその傾向を示すならば、次の通りになると思われる。

まず「上清天蓬伏魔大法」や「混元飛捉四聖伏魔大法」などでは北極駆邪院の四聖と天罡大聖などを中心とした体系となっている。これは恐らく、天心系統の法術の古い姿を残すものと考えられる。唐・葛・周の三将や、崔・盧・鄧・竇の四将などを重視する。

次に「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」などを代表とする神霄系の法術がある。これらでは鄧・辛・張・苟・畢などの雷部の諸天君が中心となる。但し神霄系の法術は様々なバリエーションがあり、八卦洞神雷法の系統では龐・劉・

陶の諸天君を、南宮火府の系統では呉・宋・劉・楊元帥を、太乙雷法系統では丘・王・孔・林・謝などの諸元帥を、金火天丁系統では張天君を重んじるなど、単純ではない。一方で九州社令系統のように、幾つかの諸天君を組み合わせる場合も多い。

また酆都系統や地祇系統では、温・関・張・趙などの諸元帥を重視する。馬霊官や王霊官、また殷元帥などもこれに近いが、やや別の系統にあると思われる。これらの元帥はどちらかというと冥界の「鬼官」といった印象が強い。関羽や張巡など、忠義を尽くして陣亡した実在の人物が多いのも、これらの法術の元帥神の特色である。

『道法会元』の前半の多くを占める清微系統の法術では、恐らくこれらの出自を異にする天君や元帥を可能な限り取り込もうとしているようである。また清微派においては、これらの元帥神を、伝統的な三清や四御の神と並べることによって、より伝統的な枠組みへの体系化を図ろうとしているようだ。

そして『法海遺珠』と『道法会元』とを比較した場合、両者は類似の性格を持つものの、ややその編纂の態度の相違が目に付く。『法海遺珠』においては、太乙雷法系統や南宮火府系統の雷法が非常に強調されている。また「清微」を冠した法術は一つも見えない。中に見られる神は、丘・王・宋などの古くよりの諸法の元帥がある一方で、温・関・張・趙・殷・鄧・辛・張・苟・畢などの元帥も強い。集大成的な性格を持つ『道法会元』に比べて、『法海遺珠』は特定の法術に偏っている向きがある。

さらに『道法会元』には、古い法術も新しい法術も包含されているが、『法海遺珠』の方の法術は、やや時期が限られるものが多いと推察される。「清微」系の法術名が見えないのは、恐らく流派を異にするというより、清微派が雷法を統合する前に編纂されたことを示すものではないか。その中の元帥神についても、これだけ火府系の神々を重視するのにもかかわらず、王霊官の名が明示されないという特色がある。

さて、これらの元帥神がそもそも何処から流入したかについては、不明な点が多いと言わざるを得ない。むろん、ストリックマン氏や劉枝萬氏、またボルツ氏など多くの研究者が指摘しているように、これが民間の巫術の影響を受けたものであることは間違いないであろう。また南宋期においては、職業道士に限られず、一定の教団に属さない者たちが様々な法術を駆使していたことはすでに指摘されているし、またデイビス氏は『夷堅志』などの資料から、この時期の「法師」たちの活動の意義を強調する[113]。それにしても、そのすべてが民間信仰や法師たちに由来するものとは考えにくい。白玉蟾が『海瓊白真人語録』の中で言うような「神将を増やした」などという行為を行っているのは、恐らく道士階層に属する者たちであると思われる。

例えば酆都系の法術であるが、その元となるのは民間の巫系の呪術であったと思われる。ただそこで主法として強調されるのは張天師の張虚靖である。これは民間の術者たちが権威付けのために張虚靖の名を使った可能性が高い。しかし、南宋末期にその伝授に関わった者たちの多くは道士階層に属していたと考えられる。

さらに民間出自と言っても、様々な影響関係があると思われる。例えば関元帥の形象であるが、『道法会元』などに書かれるその姿は、先に見た通り「重棗色面、鳳眼、三牙鬚、髯一尺八寸」「大刀を持ち、赤兎馬に乗る」というものであった。しかし史書である『三国志』には関羽のこのような形象は見えない。この形象は、むしろ民間の語り物のテキストである『三国志平話』や、幾つかの三国雑劇などの姿に近い。これは明らかに、民間の通俗文芸の影響を受けたものであると考えられる。太歳殷元帥については、これも語り物のテキストである『武王伐紂平話』に同じような姿で登場する。恐らく他の元帥神にしても同様であろう。元帥神の多くが「狼牙棒」や「鉄鞭」などを手にするのは、民間の語り物に出てくる武将の姿を模したものであると推察される。

また趙元帥にしても、『道法会元』の「正一龍虎玄壇金輪執法如意秘法」ではまるで財神としての役割をそのまま担っている。駆邪の法が中心である『道法会元』の中ではこの部分はかなり違和感がある。これも民間における趙元帥の形象をそのまま反映したものであろう。

ただそれにしても、儀礼文書の中に見える元帥については、恐らく『道法

会元』や『法海遺珠』、さらに『無上黄籙大斎立成儀』に見られるような体系が、元から明の時期には確立していたものと考えられる。『三教捜神大全』或いはその基づいた類書の元帥神の記事は、そのような体系に依拠して書かれたものであろう。

注

1）『道法会元』（『正統道蔵』正一部S. N. 1220）
2）松本浩一「宋代の雷法」（『社会文化史学』17号・1979年）45頁。
3）劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』（風響社・1994年）68～69頁。
4）ミシェール・ストリックマン、安倍道子訳「宋代の雷儀――神霄運動と道家南宗についての略説――」（『東方宗教』第46号・1975年）21頁。
5）前掲ストリックマン「宋代の雷儀」23頁。
6）卿希泰主編『中国道教史』第三巻（四川人民出版社・1993年）105頁。
7）張宇初『道門十規』（『正統道蔵』正一部S. N. 1232）
8）張継先『明真破妄章頌』（『正統道蔵』洞神部S. N. 979）
9）原文：万法本来帰一処、何分正一与清微。
10）これについては、李豊楙『許遜与薩守堅――鄧志謨道教小説研究――』（台湾学生書局・1997年）の192～196頁を参照、また拙論「天師張虚靖のイメージについて」（『東洋大学中国学会会報』第７号・2000年）においても論じた。
11）『一百二十回的水滸』（商務印書館）886頁。
12）原文：話説當下羅真人道、弟子、你往日学的法術却与高廉一般。吾今伝授与汝五雷天心正法、依此而行。
13）拙論「蘇州玄妙観の十二天君像について」（『東洋大学中国哲学文学科紀要』第12号・2004年）147～158頁参照。
14）『無上九霄玉清大梵紫微玄都雷霆玉経』（『正統道蔵』洞真部S. N. 15）。
15）原文：北極紫微大帝統臨三界、掌握五雷。天蓬君、天猷君、翊聖君、玄武君分司領治。天罡神、河魁神是為召雷檄霆之司。九天流金火鈴大将軍、天丁力士、六丁玉女、六甲将軍、是為節度雷霆使。九天嘯命風雷使者、雷令使者、火令大仙火伯、風令火令風伯、四目皓翁、蒼牙霹靂大仙是為摂轄雷霆之神。火伯風霆君、風火元明君、雷光元聖君、雨師丈人仙君、是為雷霆風雨之主。中有三五邵陽雷公火車鉄面之神、中有負風猛吏銀牙耀目款火律令大神。狼牙猛吏大判官、五雷飛捷使者、五方雷公将軍、八方雲雷大将、五方蛮雷使者、三界蛮雷使者、九社蛮雷使者、実司其令、用賛其権。
16）『高上神霄玉清真王紫書大法』（『正統道蔵』正一部S. N. 1219）
17）前掲『道蔵提要』961頁。
18）『九天応元雷声普化天尊玉枢宝経』（『正統道蔵』洞真部S. N. 16）
19）『太上説朝天謝雷真経』（『正統道蔵』洞真部S. N. 17）
20）李遠国『神霄雷法』（四川人民出版社・2003年）10～15頁。
21）陶弘景編『真誥』（『正統道蔵』太玄部S. N. 1016）
22）原文：世人有知酆都六天宮門名、則百鬼不敢爲害。欲臥時、常先向北、祝之三過、微其音也。祝曰、吾是太上弟子、下統六天。六天之宮、是吾所部、不但所部、乃太上之所主。吾知六天門名、是故長生、敢有犯者、太上斬汝形。（略）此所謂北帝之神祝、煞鬼之良法。鬼三被此法、皆自死矣。
23）前掲劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』93頁。
24）前掲劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』99頁。
25）エドワード・デイビス「The Cult of Black Killer」（Edward L. Davis『*Society and the Supernatural in Song China*』University of Hawaii Press・2001年）67～86頁。なお黒煞神に関しては、これまでの拙論では多くの場合これと保生天尊趙玄朗の混同を行ってきたが、これは誤りであった。この点については改訂の機会があれば訂正を加えたい。
26）これについては拙論「玄天上帝の変容――数種の経典間の相互関係をめぐって――」（『東方宗教』第91号・1998年）を参照。
27）王光徳・楊立志『武当道教史略』（華文出版社・1993年）41～43頁。
28）唐代剣『宋代道教管理制度研究』（綫装書局・2003年）82～83頁。
29）『元始天尊説北方真武妙経』（『正統道蔵』洞真部S. N. 27）
30）『太上元始天尊説北帝伏魔神呪妙経』（『正統道蔵』正一部S. N. 1412）
31）無名氏『二郎神鎖斉天大聖』（『孤本元明雑劇』第十冊・台湾商務印書館・1977年）。
32）原文：駆邪院主云、（略）父乃浄楽国王、母乃善勝夫人。腹孕一十四月、則太上八十二化、産母左脅降生。（略）玉帝見貧道有功、勅封九天採訪遊奕使・北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝、正授北極駆邪院都教主。
33）原文：祖師九天尚父五方都総管北極左垣上将都統大元帥天蓬真君、姓卞名荘。三頭六手、執斧、索、弓箭、剣、戟六物。黒衣玄冠、領兵三十万衆、即北斗破軍星化身也。又為金眉老君後身。（略）三十万兵、三十六大天将。
34）前掲『絵図三教源流捜神大全』221頁。

35) 前掲『絵図三教源流捜神大全』233頁。
36) 松本浩一「道教呪術「天心法」の起源と性格:特に「雷法」との比較を通じて」(『図書館情報大学研究報告』20巻2号・2001年) 29頁。
37) ロバート・ハイムズ「The Rise of the Hua-kai Cult」(Robert Hymes『*Way and Byway*』University of California Press・2002年) 76～113頁。
38) 元妙宗編『太上助国救民総真秘要』(『正統道蔵』正一部S. N. 1227)
39) 鄧有功編『上清天心正法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 566)
40) 『上清北極天心正法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 567)
41) 路時中編『無上玄元三天玉堂大法』(『正統道蔵』洞真部S. N. 220)
42) 前掲『道蔵提要』968～969頁。また元妙宗については同書1195頁参照。
43) 原文:上帝奏請畢、即詣天枢院部領四天王、十二大神、八金剛、六丁六甲、天蓬、天猷元帥、火鈴大将軍、五雷風雨神、出天門。
44) 前掲『道蔵提要』157～158頁。
45) 前掲『道蔵提要』1247頁。
46) 『上清天枢院回車畢道正法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 549)
47) 『許真君受錬形神上清畢道法要節文』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 550)
48) 『天枢院都司須知令』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 551)
49) 『霊宝浄明天枢都司法院須知法文』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 553)
50) 『霊宝浄明黄素書釈義秘訣』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 556)
51) 『太上霊宝浄明入道品』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 557)
52) 『霊宝浄明院真師密誥』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 558)
53) 『太上霊宝浄明法印式』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 559)
54) 『霊宝浄明大法万道玉章秘訣』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 560)
55) 『太上霊宝浄明秘法篇』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 561)
56) 『霊宝浄明新修九老神印伏魔秘法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 562)
57) 黄小石「浄明道神系的演変及其構成」(『浄明道研究』巴蜀書社・1999年) 68～79頁。なお六真とは、浄明天尊太陽上帝・浄明黄素天尊太陰元君・経師仙王諶母・経師御史呉猛・度師真君許遜・監度師張蘊を指す。
58) 姚福均『鋳鼎余聞』(前掲『中国民間信仰資料彙編第一輯』) 18頁。
59) 原文:国朝陸鳳藻小知録云、三天門下泰元都省、張天師居之。天枢省、許真君居之。天機省、葛仙翁居之。
60) 王契真編『上清霊宝大法』(『正統道蔵』正一部S. N. 1221)
61) 金允中編『上清霊宝大法』(『正統道蔵』正一部S. N. 1223)

62) 丸山宏「金允中の道教儀礼学について」(『道教文化への展望』平河出版社・1994年) 50～79頁。
63) 林霊真編『霊宝領教済度金書』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 465)
64) 前掲『道蔵提要』346～348頁。
65) 『無上黄籙大斎立成儀』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 508)
66) 前掲『道蔵提要』371～373頁。
67) 『海瓊白真人語録』(『正統道蔵』正一部S. N. 1307)。なお、白玉蟾と諸派の関わりについては、横手裕「白玉蟾と南宋江南道教」(『東方学報』京都第68冊・1996年) 123～172頁において詳しい考察がなされている。
68) 原文:真師曰、北極駆邪院本只有崔盧鄧竇四将、今却増四名。梅仙考召院本只有潘耿盧査四将、今亦増四名、皆後人所増。即非本法所有。
69) 原文:真師曰、古法官、有用黄劉二将者、又高丁二将者、復有用焦曽二将者、用桑何二将、許謝二将者。在其所受於師、用無不霊験。
70) 原文:真師曰、古無酆都法。唐末有大円呉先生始伝此法於世、以考召鬼神。其法中只有法有八将三符四呪法、及有酆都総録院印。後人増益、不勝繁絮似此之類、安有正法。
71) 原文:真師曰、法中明言北極駆邪院、蓋云天機院。是故南極有天枢院、如天上左有天枢省、右有天機省。縁天機是北極之内院、駆邪院則外院也。彼天枢亦南極之内院而南極又有進奏院在外。
72) 前掲『一百二十回的水滸』886頁。
73) 原文:祖師曰、予習聞之旧矣。漢陸賈、為玉清元始法師総仙上真領黄籙院事、又辛漢臣、今為雷霆都司狼牙猛吏。晋陶弘景、今為蓬萊都水司監。唐褚遂良、今為五雷使者。顔真卿、今為北極駆邪院左判官。李陽冰、今為北極駆邪院右判官。李白、今為東華上清監清逸真人。白楽天、今為蓬萊長仙主。又如晋女仙魏華存、今為紫虚元君領秩仙公。唐女仙謝自然、今為東極真人。
74) 原文:三帥者、鄧辛張是也。心為鄧帥、肝為辛帥、脾為使者。意誠則使者至肝、怒則辛帥臨心。火奮則欻火降。此三帥化形也。
75) 『清微仙譜』(『正統道蔵』洞真部S. N. 171)
76) 前掲『中国道教史』第三巻139頁参照。
77) 『清微元降大法』(『正統道蔵』洞真部S. N. 223)
78) 『清微神裂秘法』(『正統道蔵』洞真部S. N. 222)
79) 前掲『道蔵提要』159～160頁。
80) 前掲『道蔵提要』961～962頁。また、以下『道法会元』に所収の法術の系統など

については、胡孚琛主編『中華道教大辞典』（中国社会科学出版社・1995年）の619～630頁を適宜参照しており、さらにまた、ジュディ・ボルツ「Revelation and Ritual」（Judith M. Boltz『*A Survey of Taoist Literature: Tenth to Seventeenth Centuries*』University of California Inst of East・1987年）23～51頁からの示唆も多い。

81）前掲李遠国『神霄雷法』264～267頁。

82）前掲ストリックマン「宋代の雷儀」20頁、また前掲李遠国『神霄雷法』96頁。

83）前掲李遠国『神霄雷法』94～95頁。

84）前掲李遠国『神霄雷法』102～103頁。

85）これについては、拙論「張虚靖と鄧都地祇法」（『関西大学文学論集』第54巻3号・2005年）217～230頁において考察した。

86）原文：地祇一司之法、実起教於虚靖天師、次顕化於天宝洞主王宗敬真官、青城呉道顕真官、青州柳伯奇仙官、果州威恵鐘明真人、相継而為宗師。其後如江浙閩蜀湖広嗣法者、何限姓名昭福寧幾人。其書始則有石碑本、継則有鉄林府地祇、原公夫人廟地祇、五雷地祇、五虎地祇、索子地祇、十字地祇、四凶地祇、聖府地祇。後則有蘇道済派、温州正派、李蓬頭派、過曜卿派、玄霊続派。如此等類、数之不尽千蹊万径、源析支分。

87）これについては、前掲横手裕「白玉蟾と南宋江南道教」150～151頁の記述を参照。

88）前掲李遠国『神霄雷法』100～101頁。

89）前掲李遠国『神霄雷法』94～95頁。また前掲李豊楙『許遜与薩守堅――鄧志謨道教小説研究――』190頁、及び前掲『中国道教史』第三巻117頁参照。

90）前掲李遠国『神霄雷法』116～117頁。

91）前掲李遠国『神霄雷法』102～103頁。

92）前掲李遠国『神霄雷法』93～94頁。

93）前掲李遠国『神霄雷法』117～118頁。

94）前掲『中国道教史』第三巻137頁。

95）前掲『中国道教史』第三巻141頁。また前掲李遠国『神霄雷法』99～100頁。

96）前掲李遠国『神霄雷法』95～96頁。

97）前掲李遠国『神霄雷法』96頁。また前掲ボルツ『*A Survey of Taoist Literature*』30頁。ボルツはこれを林霊素の文とみなす。

98）張雨については、前掲『中国道教史』第三巻330頁参照。

99）斗母と摩利支天の共通点については、馬書田『中国道教諸神』（団結出版社・1996年）68～70頁参照。

100）前掲李遠国『神霄雷法』96～97頁。

101）前掲『中国道教史』第三巻142頁。

102）前掲李遠国『神霄雷法』97～98頁。またポール・カッツ（康豹Paul R. Katz）「道教与地方信仰：以温元帥為個例」（『台湾宗教研究通訊』蘭台出版社第四期・2002年）10～20頁参照。

103）劉大彬『茅山志』（『正統道蔵』洞真部S. N. 304）

104）前掲李遠国『神霄雷法』96～97頁。

105）『法海遺珠』（『正統道蔵』太平部S. N. 1166）

106）前掲『道蔵提要』921～922頁。

107）『太乙火府奏告祈祷儀』（『正統道蔵』洞真部S. N. 217）

108）『清微玄枢奏告儀』（『正統道蔵』洞真部S. N. 218）

109）『鄧天君玄霊八門応報内旨』（『正統道蔵』正一部S. N. 1266）

110）『地祇上将温太保伝』（『正統道蔵』洞神部S. N. 780）

111）『貫斗忠孝五雷武侯秘法』（『正統道蔵』洞玄部S. N. 585）

112）『霊宝玉鑑』（『正統道蔵』洞玄部S. N. 547）

113）前掲『中国道教史』第三巻141頁。また前掲デイビス『*Society and the Supernatural in Song China*』45～66頁。

第四章　元帥各神考

1．『三教捜神大全』の各神の項目

『三教捜神大全』に含まれる記事は、恐らく出自を異にするいろいろな文献に基づき、構成されたものであると考えられる。もちろん、前半部分の多くの記事は、『捜神広記』を踏襲したものであり、そこはまた編集の方針が異なっているものと思われる。

例えば、巻一の「玄天上帝」の項目の内容は、散逸した董素皇編の『玄帝実録』に基づくものが多い。この記事と、『玄帝実録』及び『玄天上帝啓聖録』[1]は、重なる部分も多いが、恐らくは『玄帝実録』の記事を、『捜神広記』と『玄天上帝啓聖録』とが、それぞれ独立に、他の資料も参考にしつつ引用を行っているものと考えられる[2]。また先に見たように、禅師の伝については、『神僧伝』から選択して引用されたものがほとんどである。『三教捜神大全』については、各神の項目の成立の背景をそれぞれ考える必要がある。しかし、すべての項目に対して詳細な吟味を加えるのは難しい面もあるため、ここでは前章までで考察した元帥神の項目を中心に、各神の特色について検討する。

2．関元帥と解州塩池故事

関元帥は、元代には義勇武安王、明代からは関聖帝君として盛んな信仰があり、観音菩薩と並んで中国のみならず、アジア一帯で最も広く信仰される神格となっている。そのため、関帝については夥しい数の研究が存在する[3]。ここではその全体像ではなく、『三教捜神大全』に見える故事を中心に考察してみたい。

まず『三教捜神大全』の巻三「義勇武安王」では、関元帥について次のように記す[4]。

義勇武安王は、姓を関、名を羽、字を雲長といい、蒲州解良の人である。時は漢の末にあたり、涿郡の張飛とともに、劉備を助けて義兵を起こした。後に劉備と共に南陽の臥龍岡に三たび茅廬を訪ね、諸葛孔明を聘した。劉備は諸葛亮の計略により国土を分割し、天下を三分して、国号をと蜀とした。劉備は関羽を荊州の牧に任じた。その後関羽は不幸にも呂蒙の計にかかったが、節に屈せずして亡くなった。大将軍を追贈され、玉泉山に葬られた。士人はその徳義に感じ、歳時にこれを祭るようになったのである。[5]

関元帥の生前の事績について具体的に『三教捜神大全』で述べられているのは、これだけであり極めて簡略である。他の資料の関帝に関する伝では、『三国志演義』に基づき様々な故事が語られるのが一般的である。有名なものだけでも、例えば「桃園の結義・温酒に華雄を斬る・寿亭侯に封ぜらる・顔良を斬る・五関を破る・華容に曹操を許す・単刀会に赴く」などの故事がすぐに想起されよう。もちろんその多くの部分は、史実に見られない故事が占めている。さらに後世の一部の関帝の伝には、これに加えて劉備と出会う

『三教捜神大全』義勇武安王　脇侍は関平・周倉

前の経緯や、祖父・両親・兄弟や一族に至るまで、系譜を詳細に述べるものもある。驚くべきことに関羽の亡命の原因となった、その誅した地元の土豪の名が「呂熊」ということすら広く認知されている。むろんこれらの故事の大半は史書には見えず、後世に作為せられたものである。

しかしこの『三教捜神大全』においては、そういった有名なはずの関帝の事績については全くと言ってよいほどふれられない。この記事が書かれたのは元代と思われ、既に『三国志平話』や戯曲に見られるような関羽物語が発達していたことから考えると、これほどの簡略さはかえって奇異な感もある。

実はこの記事で重要視されているのは、北宋代に張天師の命により、関羽が解州の塩池において祟りをなす蚩尤神を退治するという話である[6]。

宋の大中祥符七年（一〇一四）、解州の刺史が上奏文を奉って言う。
「解州の塩池は古来より塩を産出し、その収入に課税しておりました。しかし昨年以来、塩池の水は減じ、課税に事欠く有り様。これは必ずや災異にかかるものでございましょう。そのため敢えて奏上した次第でございます。」（略）
そこで真宗皇帝は呂夷簡に詔を持たせ、解州の塩池に赴かせ祈祷をさせた。その夜、夢に一神人が戎服に金甲といういでたちで現れ、剣を持ち怒って言う。
「わしは蚩尤神である。上帝の命を奉じて、この塩池に王として君臨しておる。（略）いま朝廷はもっぱら軒轅黄帝を崇び、廟を天下のあちこちに建てておるが、軒轅はわしとは一世の仇敵である。このような不公平に我慢できず、塩池の水を枯らしたのじゃ。」（略）
王欽若が奏して言う。
「蚩尤は邪神でございます。陛下は使者を信州の龍虎山に派遣し、詔して張天師をお召しになり、この邪神を退治なさるようお願いいたします。」
帝はその言葉に従い、使者を派遣して張天師を朝廷に招いた。（略）
張天師は言う。

「臣は最も英勇なる神将を推挙いたします。それは三国蜀の関将軍でございます。臣がこの神を召し、蚩尤を討たせれば、必ずや功を収めましょう。」
言い終わると、天師は関将軍を呼び出し、帝の前に姿を現させた。
(略)
このような悪天候が五日続くと、雲や霧も収まり、天気は晴朗となり、塩池の水も元のように戻った。これはみな関将軍の力である。(略) 帝は廟に「義勇」と書した額を賜り、四字の王に追封した。号して「武安王」という。宋の徽宗はその後尊号を加え「崇寧至道真君」とした。[7]

つまりこの記事では、この「関羽が蚩尤を破る」の部分が大半の部分を占めており、生前の事績の部分よりはるかに長い。

そもそも関羽に関しては、六朝の『真霊位業図』[8]にもその名が無く、また唐代においては「関三郎」神として、むしろ悪鬼として恐れられていたという記録があるだけで、神としての信仰はごく限られたものであった。唐代については恐らく諸葛亮を尊崇する傾向の方が強かったと思われる。そのため当初武廟に併祀されていたのも孔明であった[9]。しかし現在では、「武廟」と言えば関帝廟の代名詞となっている。

現在のような関帝信仰が隆盛になったきっかけは、この「破蚩尤」の故事が人口に膾炙したためであると考えられる。そのため、先に見たようにこの故事は、『道法会元』『宣和遺事』など、多くの資料に記されているのであると思われる。

ところで、この記事ではこの「破蚩尤」について、「大中祥符年間」のことであると記す。すなわち真宗の治世であり、王欽若・呂夷簡などの名も見える。また関将軍を派遣したのは、「張天師」であると記すのみで、第何代の誰であるとは言わない。

ところが『宣和遺事』では、この故事を徽宗皇帝の時代のこととし、第三十代天師の張虚靖が関元帥を派遣して蚩尤神を破ることになっている[10]。

『道法会元』巻二百五十九の「地祇馘魔関元帥秘法」の末尾に「事実」という記事が見えるが、そこではやはりこの故事を徽宗代のこととする。

昔、三十代天師の張虚靖真君は、崇寧年間に徽宗皇帝からの勅書を降された。その勅書に言う。
「万里の彼方に卿を召したのは、塩池にて蛟が害をなしておるためである。卿はよく朕のためにこれを図れ。」
そこで、虚靖真君は呪符を作り香をたく、たまたま東嶽殿の廊下に行き、関羽の像を見かけると、左右に向かって尋ねた。
「はて、この神はいったいどのような神であったか。」
弟子が答えて言う。
「これは蜀漢の将の関羽でございます。忠義の神であります。」(略)
張天師が符を投げ入れると、風雲が起こり、雷電が轟き、斬首された蛟の首が池の上に浮かんだ。[11]

この記事では、そもそも塩池に害をなしていたのは蚩尤ではなく、単に蛟龍であることになっている。しかも、張虚靖は関羽のことを全くといってよいほど知らず、弟子に名前を尋ねているのである。またさらに、この後関羽は徽宗皇帝の前で非礼な態度であり、そのために罰として酆都に降されたのであるとも記される。ただ内容から見るに、恐らくこの故事のかなり古い形は、むしろここに反映されているのであろう。

雑劇『関雲長大破蚩尤』は、この故事を劇に編纂したものである[12]。ここでは張天師は第二十五代の張乾曜であることになっている。

(張乾耀が登場して言う。)
貧道は姓を張、名を乾耀といい、道号は澄素先生である。わが祖は道法を伝え、戒律は精厳である。三十二代にわたり、代々道法を伝えて我に至る。[13]

ただここでは自ら「三十二代」「張乾耀」と称している。張乾曜を「二十五代」とするのは、後の『漢天師世家』などによるものであるが、どうもこういった張天師の系譜は後から作為されたもののようで、宋元の資料では時に異なる記録が見られる。またここでは関羽については、これをかなり下級の神としてこれを扱う。

（張乾耀が言う）
「大人、この神将は、姓を関、名を羽、字を雲長と申しまして、いまは玉泉山の土地神となっております。この神将を使えば、蚩尤神を破ることができましょう。[14]

すなわち、関帝はこの時点では、玉泉山の小土地神であるにすぎない。

この雑劇に登場するのは、張天師の他、范仲淹・呂夷簡・寇準などであり、また最後には、北極駆邪院主が現れて、関羽をこの功績により、武安王に封ずる。また崇寧真君ともするが、この称は崇寧以前の故事としては些か問題があろう。

このように、関羽が塩池を収めたという故事は、『道法会元』と『宣和遺事』ではこれを崇寧年間のこととし、『三教捜神大全』と『関雲長大破蚩尤』雑劇では大中祥符年間のこととする。また関羽によって退治された妖神は、あるものはこれを蛟龍とし、あるものは蚩尤とする。両者を組み合わせて、蚩尤が蛟と化したとする場合もある[15]。

この故事は、恐らく『道法会元』に見られる形が伝承としては古く、張虚靖の命により、関羽が蛟を退治する、というものであったろう。その後『宣和遺事』のような形に変わり、さらに改変を加えられ、大中祥符年間の故事とされたのではないかと推察する。沈徳符の『万暦野獲編』ではこの故事について次のように記す[16]。

宋の大中祥符の甲寅（一〇一四）に至り、塩池に被害があった。そこで関壮繆が陰兵をもって蚩尤と大いに戦い、これを破った。ここで始めこのために祠を作った。崇寧元年（一一〇二）に至り、関羽を追封して忠恵公とした。大観二年（一一〇八）、また武安王の号を加えた。[17]

これが明代における通説であったと思われる。何故これを大中祥符年間の故事としたのかについては不明であるが、『宋史』の「五行志」に「（大中祥符）三年八月、解州塩池紫泉場水次二十里許不種自生」という奇瑞があったと記すことから、或いはこの史実に合わせて故事を改変したものかとも考えられる。ただ『三教捜神大全』の記事は『捜神広記』にも見えることから、大中祥符年間のこととする見解が、元代には既に成立していたことは間違いないであろう。また関元帥は『道法会元』などでは「酆都馘魔」との号で呼ばれることが多い。どうもこの称号は、先に見た「事実」などの故事と密接に関わるものではないだろうか。

3．雷部諸天君の姓名

道教経典にしろ、通俗小説にしろ、元帥神の代表とされるのは、鄧天君・辛天君といった雷部の天君たちである。但し、温・関・馬・趙といった元帥神も時に雷部の神とされることもあり、これを截然と分けることは難しい。

儀礼においては、雷部の「天君」と上清の「元帥」を分ける考え方もある[18]。

先天雷部は、鄧・辛・張・龐・劉・苟・畢の七大天君からなり、上清は王・馬・趙・温・康・殷・岳・朱・周・方・田・楊・耿・崔・魯・陳・雍・高・謝・鄒の各大元帥からなる。

この中で「先天雷部」とされる鄧・辛・張・龐・劉・苟・畢の天君は、他の多くの資料においても代表的な雷部の神とされるものである。また例えば、蘇州玄妙観の三清殿に祭られる「十二天君」は、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢・岳・温・殷・朱の各元帥であった。ここには陶天君の名が見えるが、これも雷部の有力な神である。

『三教捜神大全』の項目では、「辛興苟元帥」「混炁龐元帥」「劉天君」「田華畢元帥」「張元帥」などの項目がこれらの天君に関わるものであると考えられる。しかし先にもふれたように、雷部の筆頭とされる鄧天君の伝は無い。しかし、これらの項目の記事の内容は、実は『道法会元』などの内容とも通ずるものが少なく、どういった資料に基づく記載なのか不明な点も多い。

例えば「田華畢元帥」の項目については次のような記載がある[19]。

> 東郷の間に、姓を田、名を華という者がいた。すなわち真東の方角の雷神である。（略）誕生するにあたり、白昼に霹靂が鳴り響き、火光が天を照らした。（略）長ずるに及んで、「田」に生まれたので「田」を姓とし、「華」を指して「畢」と称した。（略）時に女媧氏が五色の土をもって補天を行っていた。女媧は度々作業を行ったがうまくいかなかった。そこで畢元帥は木火の精を助け、霹靂でもって玄精の石髄を砕いた。（略）また後には五色の火雹風雷陣を作りだし、軒轅黄帝が蚩尤を打ち破るのを助けた。（略）様々な功績により、玉帝は雷門畢元帥の職に封じ、勅をもって十二雷霆を司らせた。また玄天上帝を補佐して、邪鬼を誅することとなった。[20]

『三教捜神大全』より田華畢元帥　恐らく火輪に乗る

これによれば、畢元帥は、名を田華といったことになっている。また、「辛興苟元帥」においては次のように記す[21]。

> 雍の民で姓を辛、名を興、字を震宇という者があった。母は張氏である。家は貧しく、薪を売って母を養ったが、生活は困窮を極めた。（略）天帝はその至孝の心に感じ、これを天に迎えて雷門苟元帥に封じた。畢元帥とともに五方の事を司らせ、天を往来させ、幽明の中の邪鬼を退治させた。[22]

『三教捜神大全』より辛興苟元帥　所謂「雷公」の典型的な姿

この記事の不可解な点は、この元帥の名は「辛興」といい、恐らく辛元帥のことについて述べたものであるにもかかわらず、最後にはこれを「苟元帥」に封じていることである。すなわち、この記事は、辛元帥と苟元帥をあたかも一つの神であるように扱っている。

また『道法会元』その他の資料では、幾つかのバリエーションがあるものの、雷部の天君らの名は、一般に鄧天君が「鄧伯温」、辛天君が「辛漢臣」、畢天君が「畢宗遠」、苟天君が「苟留吉」、張使者が「張元伯」であるとされる。

例えば、『道法会元』巻五十六では鄧天君について次のように記す。

> 雷部に欽火大神がある。姓は鄧、名は伯温という。昔黄帝が蚩尤を打ち破った時に、河南将軍に封ぜられた。大神は黄帝が天に登られたのを見て、将軍の位を棄てて武当山に入って百年にわたり修行を重ねた。（略）上帝はこれを律令大神に封じた。[23]

黄帝が蚩尤を征伐した時に助けた、という記載は、先に見た畢元帥の所にも見られた。恐らく元来は同源の故事であったと推察される。

さらに『道法会元』巻八十二においては、帝嚳の次子隆延が辛漢臣を生んだとする。また隆延の子に黒歴という者があり、これが張元伯の父であるとする。この系譜では、鄧天君も祝融氏の一族であるとし、鄧・辛・張の三天君が姻戚関係にあるとする。しかし、これは雷部の諸天君を、ことさらに黄帝などと関連づけようとした作為的な系譜であろう。この記事の末尾には白玉蟾の署名があるが、これも些か怪しい。何故なら、先に見たように、白玉蟾は『海瓊白真人語録』[24]の中で辛漢臣について言及しているが、そこでは明らかに辛天君を漢の時代の人としているからである。もっとも、この記載自体も、辛天君の「漢臣」という名からの類推によるものと考えられ、あまり信頼の置けるものではない。

呂宗力氏などの指摘によれば、そもそも雷公の伝承自体がかなり複雑で融合的な発展を遂げており、苟天君の名も、元はといえば『捜神後記』に見える苟章の故事に由来するものであるという[25]。

また先に見たように『西遊記』では、鄧天君の名前を「鄧化」とし、張天君の名を「張蕃」とする。これからするに、雷部の天君について、道教経典と通俗文学側の資料ではかなりの相違があるように思われる。『三教捜神大全』の諸天君の記事の内容が、『道法会元』などとかなり異なるのも、この事情を反映していよう。

同様のことは他の雷部の天君の記事にも言える。『三教捜神大全』の「混炁龐元帥」の記事では、龐天君については「帥姓龐、名喬」[26]すなわち、「龐

『三教捜神大全』より龐元帥

喬」という名であるとし、劉天君については「帥諱後、東晋人也」[27]、つまり東晋の人で、名を「劉後」であるとする。しかし『道法会元』に見える姓名は、それぞれ「龐霊」「劉通」である。これも一致しない。さらに『三教捜神大全』の「謝天君」では、天君の名を「謝仕栄」[28]とする。『道法会元』などでは、「謝仙火」と称することが多い[29]。また『三教捜神大全』の「張元帥」では「飛捷報応之職」[30]とあり、これは張使者のことであると思われるが、その姓名は「張純」である。

『封神演義』などでは、これら天君の名はまた大きく変化する。『北遊記』なども、『三教捜神大全』に依拠しているにもかかわらず、これら諸天君の姓名はかなり変わっている。

しかし、これを温・関・趙元帥の記事と比べた場合、その傾向が明確に看取できよう。すなわち、『道法会元』などの道教経典においても、『三教捜神大全』の記事においても、また多くの通俗文学の資料においても、これらの元帥神の名は「温瓊・関羽・趙公明」であり、混同されることはまず無い。恐らく、雷部の鄧・辛・張・龐・劉・苟・畢などの天君については、その姓と「雷部の神である」という性格が知られるのみで、その由来については後

世かなり曖昧になったものと推察される。そのため、姓名を含めてかなり故事の変容が起こりやすかったのではないか。そして『三教捜神大全』に記されているこれらの記事は、民間において発展した諸天君の説話の一過程を捉えたものであろう。しかしながら、同時にこれらの故事がその後発展することも無かった。そのため、雷部の天君の説話は、むしろ『封神演義』に載せられているものが標準的な地位を占めるようになってしまう。

なお、『三教捜神大全』の「風火院田元帥」[31]の項目には、田元帥の事績が書かれているが、これは雷部の神というより、音楽や戯劇に強く関連するもののようである。但し、そこで従神として列挙されている神には、「竇・郭・賀三太尉」「金花小姐」「梅花小娘」「都和合潘元帥」「天和合梓元帥」「地和合柳元帥」「斗中楊・耿二仙使者」などの名が見える。ただこれらの神の名の幾つかは、『道法会元』の清微系の法術の中にも見える。

4．殷元帥太子出身説話

太歳殷元帥は、元帥の中でもかなり特異な地位を占める神である[32]。

そもそも、太歳神の信仰は古くよりあり、歳星（木星）に反して地中を行くものとされた。古来太歳は凶神として恐れられ、王充がこれを『論衡』の中で非難している[33]。

太歳神が何時頃から「殷郊」という名になったかは不明である。ただこれは『道法会元』や『三教捜神大全』、また多くの通俗文学の資料において共通している。また殷元帥の由来についても、幾つかの資料の故事が一致しているものである。いま『三教捜神大全』の太歳殷元帥の箇所を見るに、次のような記載がある[34]。

> 殷元帥は殷の紂王の子である。その母は皇后の姜氏である。一日、皇后は宮園に遊び、地に巨人の足跡があるのを見つけた。皇后がその足跡を踏みつけてみたところ、孕んでおり、殷元帥が生まれた。生まれたときに肉の球に包まれていた。
> 時に紂王の寵愛を受けていたのは妲己であり、王に申し上げて言った。
> 「皇后は奇怪なものを産みましてございます。」
> そこで紂王はこれを陋巷に棄てた。（略）たまたま金鼎の化身である申真人がそこを通りかかった。（略）真人が近づいてこれを視るに、肉の球であった。真人は言う。
> 「これは仙胎である。」
> そこで剣をもってこの肉球を割いたところ、中から一名の赤子を得た。（略）その郊外に棄てられたことにちなみ、幼名を殷郊といった。（略）ここにおいて殷元帥は武王が紂王を討伐したのに参戦した。牧野に至ったとき、雷震子などを率いて、先鋒となって戦った。商の兵と戦うと、軍の前方の兵士は戈を逆さにして後ろの軍に襲いかかり、血は流れて杵を漂わせた。（略）
> 玉帝は殷元帥の孝義に感じ、また斬妖の勇あるをもって、遂に召して地司九天游奕使、至徳太歳殺伐威権殷元帥に封じた。[35]

『三教捜神大全』より太歳殷元帥
ここでは髑髏を首から下げておらず、また童子形でもない

この話はそれまでに存在した幾つかの説話を統合したものとなっている。まず、巨人の足跡を踏んで妊娠したというのは、有名な后稷の説話をそのまま流用したものである。

また、肉球からの誕生というのは、太歳神の性格と関係が深いものである。唐代の太歳神の伝承によれば、家の太歳神を示す方角の地中に埋まっており、これを曝いた者には恐ろしい祟りがあるとするのが一般的であった[36]。

> 上元年間の末、また李氏の家では、太歳の祟りを信じなかった。そこで太歳の方角を掘ってみたところ、ひとかたまりの肉を得た。言い伝えによれば太歳を得た者は、数百回鞭打てば難を免れるとのことであった。そこで李氏が太歳を鞭打ってみたところ、九十回あまりにして、突然飛び上がり、見えなくなった。その後太歳の祟りがあり、李氏の一家七十二名は、そのほぼすべてが亡くなった。[37]

同じような話は『太平広記』の他の箇所にも数条見えている。すなわち太歳神は肉球の姿で顕現するものであった。殷元帥の出生説話はそのことを反映しているわけである。

また母の姜皇后は妲己に陥れられて殺され、殷元帥は棄てられたとある。その後申真人に拾われて養育された殷元帥は、年七歳にて数々の法術を身につけ、武王に味方して殷を討った。

これと同様の説話は、『武王伐紂平話』や『封神演義』にも見えるが、ただそこでは、殷郊は生まれた時すぐに棄てられたわけではなく、殷の太子として成長し、母の姜皇后が妲己のために害されるに及んで国を離れている。さらに『封神演義』の方は、殷郊が周側に加勢したとはせず、逆に殷のために殺されたことになっている。説話としては『武王伐紂平話』と『三教捜神大全』の方がより古いものを反映しているであろう。

しかし殷郊が殷の太子であったという説話は、『道法会元』巻二百四十六の「天心地司大法」や巻二百四十七「北帝地司殷元帥秘法」などではほとんど強調されることはない。これらの法術が記録されたのは、先にも見たように南宋の咸淳年間である。或いは「殷の太子」という説話はその後発展したものか。ただ、現存の『武王伐紂平話』が発行されたのは元代であることは間違いないが、その故事の成立については、それよりもやや早かったとも考えられる。そのためこの前後についてはにわかには判定できない。しかしそもそも「殷の王子で郊外に棄てられたから殷郊」などという説明は、あまりにも粗略であり、これは民間において発達した説話であると考えるべきであろう。なお、『三教捜神大全』共に登場する申真人は、つまり『道法会元』に見られる申霞であると考えられる。

さて『三教捜神大全』では、殷元帥の名を「唅哪吒」であるとする。つまり殷元帥は、哪吒太子と同名であることになる。

実際、この両神には共通する部分が多い。少年神であること、同じく肉球から生まれたという説話を持つこと、かたや李天王との争い、かたや伐紂王と、共に父子相克の物語を有することなどである。この両神が古くから類似する点を有していたのか、或いは元来殷元帥の説話であったものが、哪吒太子に転用されたものかは不明確だが、『封神演義』における哪吒故事は、明らかに殷元帥の説話を襲用したものであると考えられる[38]。

太歳殷元帥像（上海白雲観蔵）　ここでは髑髏を首から下げている

但し殷元帥自体、後世ではそれほど重要視されなくなる。またその故事も、もっぱら『封神演義』に描かれるものの方が知られるようになる。

なおまた、殷元帥の形象については、どうしても密教からの影響を考えざるを得ない。同じく星象に関係する神としては、斗母が有名であるが、斗母に関しては摩利支天の影響が強く感じられる[39]。殷元帥の場合、三頭六臂に変化すること、首から髑髏を瓔珞とするといった形象から想起されるのは、密教の明王との類似性である。そもそも『武王伐紂平話』に見える殷元帥の名は「景明王」であった[40]。

恐らく殷元帥の形象は、幾つかの明王の形象を部分的に反映したものと推察される。まずその髑髏を瓔珞とすることは、大威徳明王に似る。また童子形であるところは、不動明王に似る。そして鈴を持つところは、金剛夜叉明王に似る。またこれは憶測に過ぎないが、その太歳という名称は、大穢迹明王に似る[41]。哪吒太子とその兄の金吒は、それぞれ毘沙門天の第三子那吒と、軍荼利明王の変化したものであることについては別に考察した[42]。恐らくは殷元帥も同様に、これら明王の形象が、古来の太歳神と結びつけられたものであろう。もっとも、その理由付けについては不明な点が多い。一つには、太歳神の猛悪な様子が、金剛夜叉明王などの性格と同一視されたものか[43]。

5．馬元帥華光と五顕神

馬元帥華光は、元から明にかけて甚だ盛んな信仰を有した神であった。華光の由来については、黄兆漢氏の考察が最も詳しいが、その他にも幾つかの論考がある[44]。

この神はまた「華光大帝」「五顕大帝」などとも呼ばれる。そもそも華光や五顕神は馬元帥とは別個の神格であったが、後に結びつけられて一つの神格となったと考えられる。ただ関元帥などと違い、実在の人物ではないために、その由来についてはやや曖昧な部分もある。『三教捜神大全』の巻五「霊官馬元帥」の項は、華光について次のように記す[45]。

馬元帥の来歴を見るに、およそ三たび聖を顕わされた。もとは妙吉祥の化身であったが、妙吉祥が焦火鬼を焼き殺したために、釈迦如来は心を痛められ、妙吉祥を下界に降した。そこで五つの火光となって馬氏金母のもとへ投胎した。その面には三眼があり、よって三眼霊光と名付けられた。生まれて三日で戦うことができ、東海龍王を斬って水孽を除いた。継いで紫微大帝の金鎗を盗んだ。（略）
また金磚三角を授かり、これは変化無辺であった。そして玉帝の命を受けて風火の神を討伐し、これを部下の風輪火輪使とした。（略）
その母が亡くなったために地獄に入った。元帥は、海中を行き、天界を走り、酆都に進み、鬼洞に入り、哪吒と戦い、仙桃を盗んで、斉天大聖と敵対した。釈迦如来は元帥を和解させた。（略）
玉帝はその功績が天地に等しいものとみなし、勅して馬元帥を玄天上帝の部下としたのである。[46]

『三教捜神大全』より霊官馬元帥
三眼にて槍を持つが、有名な風火輪は見えない

これと同じ説話は、小説『南遊記』にも見えている。ただ『南遊記』の場合

はもっと物語が複雑に脚色されている。この物語は、恐らく雑劇『華光顕聖』に基づくものであると思われるが、現在『華光顕聖』劇は散逸しており、その詳細については分からない[47]。

『道法会元』などでは、馬元帥を温元帥・関元帥・趙元帥ともに四大元帥の一とする。これは『西遊記』などの通俗小説でも一貫してそうなっている。一方で『道法会元』巻二百二十六「正一霊官馬帥秘法」などでは、白蛇大将馬充や、温・王・席・黄の四将が馬元帥の配下とされるが、それらの神はこの『三教捜神大全』にはほとんど記載が無い。恐らく、先に見た鄧・辛・畢天君などの雷部の諸天君の姓名が変わってしまったのと同様に、馬元帥も本来の説話は知られなくなり、民間などにおいて独自に説話が発展したものであろう。『道法会元』巻二百二十四「金臂円光火犀大仙正一霊官馬元帥秘法」では、馬勝について「三頭九目六臂」とし、「金鎗金磚を持つ」とする。また「元帥もと姓無し」とし「午の方角に名を借りて姓を馬とした」という記述がある。だいたい、いずれの道教経典を見ても馬元帥の名は「馬勝」であると記されているにもかかわらず、『三教捜神大全』『南遊記』のどちらもそのことについては述べないのは不可解である。もっとも、先に見たように、

霊官馬元帥像（上海白雲観蔵）
手に槍を持つが、もう一方の手に持つのは恐らく書物

『水滸伝』においては、「一個是馬霊官白蛇托化」[48]と述べており、全く白蛇将などとの関連が知られていないということではない。

華光が「妙吉祥の化身」とするのも、『道法会元』などには見えないが、実際にこの神の由来の一端を示すものであると考えられる。密教経典に見える妙吉祥菩薩が華光の直接の来源ではないとしても、三眼であること、金磚という武器を有することなど、密教との深い関係を窺わせるものは多い[49]。

また華光神は、関帝や韋駄天尊と並んで、多くの寺院で伽藍の守護神とされていたようである。ただ現在寺院においては華光を伽藍神とするところは皆無に等しい。しかし明末の禅寺の様子を今に伝える黄檗山萬福寺では、伽藍堂に華光を「菩薩」として祭る[50]。恐らく、当時は広く華光を伽藍神として祭祀する習慣があったと思われる。ところが、その後華光神の信仰が衰亡したために、別の伽藍神に変えられていったのであろう。

『釈迦仏双林坐化』雑劇[51]は、華光が四天王やその他の神々を率い、如来入滅に際して邪魔をする悪鬼を退治するという話である。また明の楊景賢の『西遊記雑劇』の中でも、華光は十大保官の一人として観音菩薩から任命されている[52]。その中で華光が自分のことについて述べるくだりは、ほぼこの『三教捜神大全』に見える故事に近い。

『警世通言』の「仮神仙大鬧華光廟」は、呂洞賓と何仙姑の名をかたる妖怪が一書生にとりつき、華光がこれを退治するという物語である。この記述から察するに、恐らく当時の杭州一帯では、華光神の信仰が相当に盛んであったと思われる。その冒頭に言う[53]。

> さて、宋の頃に杭州の普済橋に宝山院という寺があった。すなわち嘉泰年間に建てられたものである。またの名を華光廟といい、五顕神を祭ったものであった。（略）この五顕とは、すなわち五行の佐にして、最も霊験あらたかなものである。或いは五顕神は五通神であるとも言われるが、これは間違いである。紹定年間のはじめ頃、丞相の鄭清之の重修により、楼や精舎などが増築され、その伽藍は非常に調うことになった。しかし元の時に兵火に遭い、道士や僧侶

はみな逃げてしまった。（略）時に民家として使われることもあり、甚だ凋落した有り様であったが、至正年間の始め、道士が資金を募って再び改築を行った。それからは祭祀も盛んになり、多くの参拝客が訪れるようになったことはさておく。[54]

この記載から見ても、華光廟は寺院と廟の性格を併せ持っていたようである。またこの「仮神仙大鬧華光廟」では、しばしば華光を「華光菩薩」と称す。

道教側の資料では、『道法会元』の他では『大恵静慈妙楽天尊説福徳五聖経』『太上洞玄霊宝五顕霊観華光本行妙経』[55]などの経典がある。『大恵静慈妙楽天尊説福徳五聖経』では華光を「火犀大仙」「霊観大聖五帝大元帥」と称し、『道法会元』に通ずる称号が見られる。ただここでは五名の神として扱われており、五顕神の方の印象が強い。『太上洞玄霊宝五顕霊観華光本行妙経』は万暦年間の『続道蔵』の編集において加えられたものである。こちらも内容に特筆すべきものも無いが、時に『道法会元』の馬元帥に類した記述が見える。

なお、華光と五顕神の関係は複雑であり、それは『三教捜神大全』の中に「霊官馬元帥」の項目と「五聖始末」[56]の項目が併存していることからも窺える。

まず『中国民間諸神』[57]において指摘されているように、「五顕」と「五通」「五聖」の区分はいま一つ判然としない。それによれば、五通神は邪神であり、「木下三郎」「木客」「独脚五通」「独脚五郎」とも呼ばれ、『夷堅志』などの記載によれば、婦女を拐かしたり、祟りをなしたりと、甚だ問題のある神格であった。『幽明録』[58]には「五通仙」が食を盗みに来たところを守護神に排される話が出ているが、これは神通力に通じた仙人ということであったと思われる。賈二強氏はさらに「五道将軍」と五通を関連づける[59]。むろん名称からの混同はありえようが、そこまでの影響関係を有するのかどうか、やや疑問ではある。五道将軍は、むしろ冥界の神としての性格が強い。なお五通は、単独の神であるとか、五人兄弟の神であるとか、また群妖の総称とも解される。五顕神の方は、『明史』の礼志にも見えるほど正統的な神と見なされる。しかしそれにしても五通神との関連が全く無いとは言えない。

『三教捜神大全』の「五聖始末」は、『捜神広記』の記載をそのまま引き継いだものである。ただ、その内容には若干不明確な点がある。まず、記事の中ほどに「癸巳紹定六年三月三日、宋承節郎即張大猷」の署名がある。その末尾には「宋迪公即国史実録遍校文字胡升」の名が見える。すなわちこの記事は、前半が張大猷、後半が胡升によって書かれたものである。『捜神広記』の記事の多くは、このような署名を有していない。ある意味ではこの記事は特異なものであると言える。恐らくはある特定の記事からの引用であると考えられるが、どのような経緯で引用されたのかは不明である。張大猷は「五顕始末」の前半部において、彼らの封号などをこう記す[60]。

『三教捜神大全』より五聖　中心にいる三眼の人物が華光に該当するか

五顕の神が降ってより後、国家に対して格別に功績があり、民に福祐があり、その霊験はいつもあらたかであった。これに先んじて、廟号は「五通」という名を止めることにし、大観年間には、始めて

廟に額を賜って「霊順」と称した。宣和年間には二字の封号の侯爵とされ、紹興年間には四字の侯爵とされた。また乾道年間には八字の侯爵となった。（略）淳熙年間には初めて封号二字の公爵となり、理宗は改めて八字の王に封じた。

第一位　顕聡昭応霊格広済王　顕慶協恵昭助夫人
第二位　顕明昭列霊護広祐王　顕恵協慶善助夫人
第三位　顕正昭順霊衛広恵王　顕済協佑正助夫人
第四位　顕直昭佑霊貺広沢王　顕佑協済喜助夫人
第五位　顕徳昭利霊助広成王　顕福協愛静助夫人
王祖父啓佑喜応敷沢侯　祖母衍慶助順慈貺夫人
王父広恵慈済方義侯　母崇福慈済慶善夫人
長妹喜応賛恵淑顕夫人　次妹懿順福淑靖顕夫人[61]

この記述では、恐らく民間で祭祀されていた五顕神が、朝廷に認められていった過程が反映されていると思われる。またこの記述のすぐ後には、五顕神の配下であった神の封号が記されている。

黄衣道士
紫衣員覚太師
輔霊翊善史侯
輔順翊恵卞侯
朝応助順周侯
令狐寺丞
王念二元帥
打拱高太保
打拱胡百二検察
都打拱胡靖一総管
打拱黄太保
打供王太保

金吾二太使
掌善罰悪判官

これらの配下の神がどのような神格かは不明であるが、その称号からは、罪人を捕らえたりする役割を担う者が多いと考えられる。

この「五聖始末」の記事からは、華光との関連性はほとんど感じられないのであるが、『南遊記』においても、華光が投胎する時に五人兄弟として生ずるという記載がある。さらに華光と五顕の関係の一端を示したのが『道蔵』に収録される『五顕霊観大帝灯儀』[62]であると思われる。

まず『五顕霊観大帝灯儀』の冒頭に挙げられている五顕神とその配下の神は、『三教捜神大全』の「五聖始末」とかなりの一致が見られる。

都天威猛大元帥顕聡昭応孚仁広済王
横天都部大元帥顕明昭烈孚義広佑王
通天金目大元帥顕正招順孚智広恵王
飛天風火大元帥顕直昭佑孚信広沢王
丹天降魔大元帥顕徳昭利孚愛広成王
助霊史相公
助順卞相公
翊応周将軍
王念二総管
黄王二太尉
令狐寺丞
善慶童子
土地真官

ただそのすべてが一致するわけではない。「王念二元帥」はここでは「王念二総管」になっているし、「史侯」「卞侯」「周侯」の三名は、「史相公」「卞相公」「周将軍」とされ、称号が若干異なっている。しかし、一致しないこ

とがすなわちこの両者が別系統の資料であることを示していよう。恐らく、五顕とその配下の神についても、それなりの伝承が当時はあったものと考えられる。

この『五顕霊観大帝灯儀』には、五顕神それぞれに対する賛などがあるが、その神としての職能は、微妙に差異があるように見える。すなわち、広済王については「賞罰が正しい」ことが述べられ、広佑王については「恩を広く及ぼす」ことが言われ、また広恵王については「公平に恵みを与える」ことが言われ、広沢王については「凶を滅する」ことが強調され、広成王については「物を利し民を愛す」ことが述べられる。むろん、それぞれ重なる部分があるが、五顕神に些かの個性の差はあったろう。或いは、後世の華光神が財神や武神などの幾つかの性格を併せ持つことは、この五顕の幾つかの面を兼ね備えた結果そうなったのかもしれない。

なお『五顕霊観大帝灯儀』では、財神としての効能をかなり強調したものとなっている。五顕に祷れば商賈の家が財をなすこと、福が得られることが何度も言われる。また注意すべきは、広成王の姿である。そこには「手に金磚を持ち、足に火輦を踏む」という記載がある。これからすれば、五顕の広成王がイコール華光であるとも言えなくはない。さらに、『太上助国救民総真秘要』[63]には「霊官五郎馬勝」という記載があった。これによれば、馬元帥と五郎という組み合わせは、それ以前にも存在したことが分かる。

四川省石門山の石窟に南宋期の「五通大帝」像がある[64]。この像は「独脚五通」とも呼ばれ、左足だけであり、風火輪の上に乗る。但し、この五通大帝は一神である。この像が当初から独脚であったかどうかは不明であるが、或いは「独脚五通」を反映したものであるかもしれない。賈二強氏の指摘によれば、この他にも五通には「独脚」の形象があったらしい。とはいえ賈氏も言うように、「独脚」はそもそも「独覚」の訛したものであり、一本足の意味では無かったと推察される[65]。独覚とは、一つには五神通を得た一角の仙人か、或いは声聞・縁覚を意味する独覚であったであろう。いずれにせよ、仏教に由来する名称であったと思われる。なお、『道法会元』中には、馬元帥に関連する法術中において、「華光五通」という表現はしばしば見えている。

五通や五顕、それに華光信仰の盛んであったところは、いずれも江南で微妙に重なり合う。元来は幾つかの信仰が併存していたところ、それが華光大帝に集約されていった面があると考えられる。

但し、かつては仏道双方から重視され、盛んな信仰を有した華光であったが、明末以降は急速にその信仰は衰えていく。広東では現在も戯神として重視されているようであるが、かつてその信仰の盛んであった江南でも、華光を祭った廟宇はほとんど無くなっている。

6．温元帥及び十太保

温元帥は東嶽大帝の配下の神将として有名な存在である。『三教捜神大全』巻五「孚祐温元帥」の項目には次のような記載がある[66]。

> 元帥の姓は温、名は瓊、字は子玉。後漢の東甌郡の人である。この地は今の浙江温州である。（略）幼くして神明であり、七歳にして天文を学び、十歳にして儒学の経伝に通じた。（略）しかし十九歳で科挙に応じたが合格せず、二十六歳に明経、射策の科に応じたがこれにも及第しなかった。（略）蒼龍が珠をその前に落としたので、臥して拾ってこれを口に含んだ。（略）突然身体が変化し、顔は青く、髪は赤くそして身は青くなり、獰猛な姿となった。（略）
> 泰山府君はその威猛なるを聴いて、召して佐岳の神とした。（略）玉帝の勅旨により、封じて亢金大神とした。またさらに封じて翼霊照武将軍兵馬都部署とし、玉環を賜った。（略）宋の熙寧年間に、第三十六代張天師の飛清真人が、始めて符召の法を用いて東嶽配下の神を使役した。そのときに十名の太保の位を定めた。その首となったのは温太保であった。[67]

『三教捜神大全』より温元帥
手に持つのは輪と剣のみ、腰に「無拘霄漢」の書を下げる

温元帥は関・馬・趙元帥とともに四大元帥の一角を占める。また温太保とも呼ばれ、その姿は狼牙棒と輪を持つことで知られている。この『三教捜神大全』の記事によれば、その輪は玉帝から賜ったものであった。もと読書人が神となった時、獰猛な姿に変身するというのは、多く見られる伝承であり、最も有名なものは鍾馗のそれであろう。温元帥のこの話も、恐らくそういった幾つかの故事からの借用であると考えられる。

なお、この記事でも張天師の代位については混乱が見られる。すなわち熙寧年間といえば北宋神宗の時代である。しかし『歴世真仙体道通鑑』『漢天師世家』[68]などによれば、徽宗の時の天師張虚靖が第三十代とされるのであるから、神宗時の天師が三十六代であるのはおかしいことになる。公式な記録によれば、当時の張天師は二十八代の張敦復であるはずである。三十六代目の天師と言えば、『漢天師世家』などでは元代の張宗演を指すことになる。

但し、先の張乾曜に関する記載もそうであるが、正一教の主張する張天師の系譜には作為的な面があり、その信憑性には問題もある。よってこの「第三十六代張飛清」については、単純に『三教捜神大全』の誤りであるとはいえない[69]。

温元帥像（上海白雲観蔵）　手には輪と狼牙棒を持つ

さて温太保を含む十太保については、『道法会元』に記載がある。すなわち、温・李・鉄・劉・楊・張・康・岳・孟・韋の各元帥である。そしてこれらの元帥は東嶽大帝と縁が深く、「地祇法」と密接な関連があるものである。ただ十太保の中心となるのは、温元帥ではなく、張元帥であることも多い。地祇法系の法術では、『道法会元』の巻二百五十七「東平張元帥秘法」では張元帥が、巻二百五十四「東嶽温太保考召秘法」では温元帥が主となっている。

張元帥も勇猛な神としてよく知られている。『三教捜神大全』の「斬鬼張真君」に見える張元帥の説話は、次の通りである[70]。

> 張元帥の姓は張、名は巡。（略）唐の玄宗時の進士出身である。睢陽の県令となったが、安禄山の乱に遭った。（略）元帥は孤塁となった城を守り、臨機応変にして古法に拘泥しない戦法により、前後三百余戦を戦い、百戦百勝であった。（略）真に古今において忠義を貫いた人物である。後に唐や宋の時に、宝山忠靖景佑福徳真君に封ぜられた。[71]

すなわち張元帥とは、安禄山の乱の時に忠義を貫いて奮戦したことで有名な張巡のことである。同様の事績を持つ許遠も、「副帥許元帥」として封じられている。

温元帥と張元帥の記事にはあまり関連性が無いようにも見えるが、ポール・カッツ氏の指摘によれば[72]、温瓊は『地祇上将温太保伝』[73]では、唐の将郭子儀の配下であったことになっている。これによればすなわち温元帥も、安禄山の乱の頃の武人ということになる。しかし『三教捜神大全』の記事では、温瓊は完全に「書生」出身ということになっており、全く異なる伝承となっているのはやや不可解である。ただ『地祇上将温太保伝』を校正し、その補遺を撰した黄公瑾は南宋の人であるとされ、武将であったという伝承の方が先に成立していたことは間違いない。というより、『三教捜神大全』の記事の方が不自然であり、作為的である。

この『地祇上将温太保伝』では、東嶽大帝の配下を太保と呼んだことや、また三十代天師の張虚靖が宣和年間に東嶽廟を訪れ、そこで温太保と会い、地祇法を広めたことなどが記される。この伝においては、また東嶽大帝の第三子炳霊公が大きな役割をはたしている。『道法会元』などの温元帥の記載も、恐らくはこの伝承に沿ったものと思われる。

なお張巡に関しては、范純武氏に詳しい論考がある[74]。それによれば、張巡・許遠などは元来厲鬼として信仰されたものが、徐々に性格を変じていったとされる。その姿も元来は「赤髪青面に牙出ず」という悪鬼の如きものであるのが普通であった。また張巡は後に「東平忠靖王」といった封号を与えられ、また三国の張飛が名を変えて転生したという伝承も語られるようになる。

このような張巡の性格は、関羽とよく似た面があろう。すなわち、いずれも忠義を尽くした後に非業の死を遂げており、そして厲鬼、すなわち怨霊系の神と見なされていた。『地祇上将温太保伝』に見える温元帥や孟元帥にしても、少なからずこういった性格があると思われる。恐らく、酆都・地祇法系の神とは、多かれ少なかれこういった厲鬼的な性質を持つものであり、それだからこそ強力な神将として扱われたのであろう。

また『地祇上将温太保伝』には、十太保の一員である孟元帥が「孟雲」、

韋元帥が「韋彦」という名で登場する。これによれば、孟元帥も韋元帥も温瓊と同時期の人ということになる。しかし孟元帥については、『三教捜神大全』の「孟元帥」の項に伝があるが[75]、その名は「孟山」となっており、「仁義孝慈」の人であることになっている。

> 元帥は姓を孟、名を山といい、仁義孝慈の人であった。その功績は万古に尽きない。今に至るも人の賞賛するところとなっている。孟元帥が獄官となっていた時に囚人を解き放ったその一事を見ても、その実情を窺うに足るのである。（略）元帥は年も押し詰まった頃、父母のことを案じていると、監獄の中から数百の泣き声が響いた。それはみな、切にその両親を思うものであった。元帥は言う。
> 「親が無いわけではないのだ。会える機会が無いだけなのだ。」
> そこで元帥は彼ら囚人を哀れみ、彼らを膝下に抱えて泣いて約すと、囚人もまた泣いて元帥に誓った。
> 「いま冬二十五日には解き放つので、正月五日に戻ってくるように。」
> これを実行したところ、果たしてその約束を違えた者は一人もいなかった。[76]

『三教捜神大全』より孟元帥

この『三教捜神大全』の記事によれば、孟山は獄吏であり、義によって囚徒を解き放ち、それによって罪に陥り死に至ったところ、玉帝の勅によって「酆都元帥」の位を与えられたとする。こちらも、温瓊の伝同様、『地祇上将温太保伝』におけるものとは全く異なっている。恐らく孟元帥にしても、本来の伝承とは別に説話を作為したものであろう。なお、この話はそのまま『北遊記』において転用されており、孟元帥は孟山といい、囚人を逃がした徳により元帥に封じられたとする[77]。

さらに『三教捜神大全』には十太保の一である康元帥、及び鉄元帥について記事があるものの、これらにはあまり事績らしい事績が見えない。鉄元帥については、『三教捜神大全』「鉄元帥」は次のように述べる[78]。

> 玄天上帝が坎離の二気となった亀蛇を討伐した時、ために雲が九天の下に裂けた。そして鉄元帥の勇力によって山海が押され、亀蛇が踏みつけられた。そこで元帥は歩虚をもって玄天上帝とともに天に昇り、「猛烈元帥」に封じられた。元帥は玄天上帝とともに、玄冥の守護の任に当たることとなった。[79]

『三教捜神大全』より鉄元帥

鉄元帥に関しては、このように武王伐紂の時に玄天上帝を助けたということで、玄帝との関係がむしろ強調される。

『三教捜神大全』より康元帥

また康元帥については、『三教捜神大全』には次のような記載がある[80]。

> 天帝はまた民が康元帥の徳を褒め称えるのを聴いて、これを封じて「仁聖元帥」とした。そして四方の社令の管理を司らせた。元帥は左手には金斧を執り、右手には瓜錘を執り玉璽と周旋させる。[81]

これらの太保神は、時に「十二太保」「十三太保」「十四太保」などとも呼ばれるが、東嶽大帝の部下である他に、太歳神の配下であることもある。太保神は、総じて「地祇」系の神であるが、「地司」である太歳神の部下であるとも考えられたためであろう。一般に冥界に関係する武神を指しているようである。むろん道教では、酆都・地祇系の神に対して使われる。

ただ十太保について各神の事績はいまひとつはっきりとは分からない。通俗文学作品においては、『水滸伝』の豪傑の一人戴宗が「神行太保」と呼ばれ、

また『残唐五代史演義伝』[82]などの五代史物語では、李晋王の義子たちが「十三太保」と称されている。一方で『北遊記』では、太歳殷元帥の部下として「十三太保」が登場する[83]。

なお、『道法会元』巻二百五十八の「東平張元帥専司考招秘法」によれば、十太保のそれぞれの名は以下の通りである。

温玉
李文真
鉄勝
劉仲
楊文貴
康応
張蘊
岳昊
孟雲
韋彦卿

また同じく『道法会元』巻百五十五の「混元六天妙道一炁如意大法」では、次の通りである。

温玉
李真
鉄勝
劉琦
姚正
張蘊
康応
岳勝
孟雲

韋彦

これら太保の名は『地祇上将温太保伝』に見えるものと共通する部分があるものの、『三教捜神大全』の記載とはほとんど一致しない。また『北遊記』に見えるものともかなり異なっている。

さて北京の東嶽廟においては、現在でもその贍岱門の殿に十太保を祀っている。その十太保とは、『道法会元』に見えるものとは少しく人員が異なっている。北京東嶽廟の十太保は次の通りである[84]。

翊霊昭武使　温元帥
順霊昭化使　李元帥
協霊昭済使　鉄元帥
鎮霊昭賛使　劉元帥
通霊昭佑使　楊元帥
宣霊昭慶使　張元帥
広霊昭恵使　康元帥
安霊昭応使　岳元帥
顕霊昭利使　孟元帥
永霊昭助使　韋元帥

すなわち、温・李・鉄・劉・楊・張・康・岳・孟・韋の各太保である。

ここでは、「太保」は「元帥」と呼ばれているが、実際にこういったケースは多い。ただ、「元帥」の中でも雷部の一部が特に「天君」と称されるように、「太保」の場合は特に冥界に関わる神を指すのが普通である。このうち、冥界の神としてはやはり楊太保の方が知られていると思われる。その楊元帥については、『三教捜神大全』に「楊元帥」という項目がある[85]。

元帥は時に漢の廷尉の長に任じられた。案件として、主の玩器を盗んだ者があった。時に皇帝は廷においてこれを殺すよう命じたが、

全く聞き入れなかった。また別の案件では、寵愛された者が官を侮辱するということがあり、笞殺の刑とした。皇帝は特赦を施して赦そうとしたが、これも聞き入れなかった。また別の案件では、三老の中に汚吏がいて捕まったが、朝廷の権官が圧力をかけて釈放しようとした。元帥はこれも聞き入れなかった。また別の案件で、友人であることを恃んで法を曲げようとした者があり、賄賂を元帥に送ったが、これに一瞥も与えなかった。[86]

『三教捜神大全』より楊元帥

楊元帥は生前剛直な官吏であったことから、その後冥界の神として封じられたとする。楊元帥は実在の人物で、『後漢書』に伝のある楊彪である。董卓の遷都の言に抗するなど、実際に直言で知られる人物であったことが伝に記されている。「先見の明」という言葉は、この故事に由来するものである[87]。しかし『道法会元』などに見える楊太保が、イコール漢の楊彪であるとは単純には思われない。『道法会元』の一部では、「姚正」すなわち姚太保と書かれることもある。恐らくこれも姓が楊である元帥神について、後から楊彪の故事が付会されたものであろう。

岳太保については、これも岳元帥とどのような関係にあるかは些か不明確である。

蘇州玄妙観の十二天君の中に岳天君が含まれ、また上海白雲観の像の中に岳元帥がおり、また四大元帥を温・岳・馬・趙の組み合わせとするなど、現在では岳元帥は祭祀の対象となることが多い元帥である。

岳元帥像（上海白雲観蔵）　この形象からも岳飛であると思われる

しかしこの岳元帥とは、南宋の武将である岳飛が神として祀られたものであると推察される。上海白雲観の岳元帥像などは、その称号を「盪虜鄂王」とし、槍を持った岳飛らしき像となっている。宋代に寧宗によって岳飛は「鄂王」に封じられていることから、この岳元帥の像が岳飛を指していることは明白であろう。神霄各派の法術の発展が南宋であったことからすると、その神格化について『道法会元』にあまり反映されていないのは当然とも言える。

もし『三教捜神大全』に岳元帥の記事があり、元帥は岳飛であると断じていれば問題は無かったのであるが、残念ながら『三教捜神大全』にそのような記載は無い。そもそも『道法会元』などによれば、岳太保の名は岳勝、或いは岳昊である。これをもって考えても、岳元帥である岳飛と岳太保とは関

連性が薄いことが看取できよう。

以上、十太保と幾つかの元帥の関係について見てみたが、『道法会元』『地祇上将温太保伝』に見える太保神と、『三教捜神大全』に見える温元帥・張元帥・康元帥・鉄元帥・孟元帥・楊元帥の各元帥は、その名も事跡がほとんど一致しないことが分かる。比較的著名な事跡がある温元帥や張元帥にしても、かなり資料によって差異がある。その他の元帥については、極端な話、同じであるのは姓のみと言ってもよい。恐らく『三教捜神大全』に見られる元帥神の説話は、後世民間などで別に発展したものであって、『道法会元』などとの道教経典との関連性は薄いのである。

なお、張巡・岳飛、それに先に見た関羽などの元帥が、いずれも忠義を尽くした末に鬼となったものであることは興味深い。酆都・地祇系の神は、温瓊を含めて、実在或いは実在と思われた人物が、死後怨霊となり、それが元帥神として採用されたものが多いのは偶然ではないだろう。そしてこのような神は比較的事跡や個性がはっきりしているところから、後世においても有力な元帥神として発展していったのであると思われる。それに比して、同じ酆都地祇系の神でも、鉄元帥や孟元帥や楊元帥、それに韋元帥などの神はやや個性に欠けており、そのために幾つかの資料で事跡をかなり恣意的に変えられていると思われる。またこれらの神の信仰は、民間では有力なものとはなりにくかったであろう。道教の儀礼においてその名がよく保存されている一方で、通俗文学の作品などにこれらの元帥がほとんど登場しないのは、こういった事情が反映しているものと推察される。

7．玄壇趙公明の記事について

趙元帥、すなわち玄壇元帥趙公明は、現在でも財神として知らぬ者とてない神である。その黒い顔に、虎に乗って鉄鞭を構える姿は、各地の財神廟に祀られている。何度かふれたように、温・関・馬・趙の四大元帥の一角を占める[88]。

『三教捜神大全』の「趙元帥」の項に見える趙公明の伝は、およそ次のようなものである[89]。

元帥の姓は趙、諱は公明であり、終南山の人である。秦時の暴政を避けて山中にこもり、至道に修養を重ね、功が成ったため、玉皇上帝の勅旨により召され、神霄副帥に封じられた。按ずるに、元帥は皓廷霄度天、彗覚昏梵気の化生であり、その位は乾の位置にある。すなわち金水合気の象である。その服色の頭に鉄冠を戴き、手に鉄鞭を執るのは、金が水気を遘する様を表す。顔の色が黒く鬍鬚があるのは、北方の気を象徴する。虎に跨るのは、金の象である。これにより、水気の中に金があるの義を表す。体はすなわち道となり、用はすなわち法となる。法はすなわち雷霆にあらざればもってその威を表すことができない。泰華西台にその府があり、すなわち、元帥の主掌である。また元帥は「金輪」をもって称せらる。これらもまた西方金の象徴である。元帥は、上は天門の令を奉り、三界を策役し、五方を巡察し、九州を提点し、直殿大将軍、北極侍御史に任じられている。

昔、漢の天師張道陵が仙丹を修練していた時、龍神は玉帝に威猛なる神に守護を行うように奏上した。これにより、趙元帥は玉帝の勅旨を受けて、正一玄壇元帥の位を授けられた。「正」とはすなわち万の邪気が干渉せぬよう守る意味であり、「一」とはすなわち純一にして不二の職であり、甚だ重い職責であることを表す。

天師が飛昇して後、元帥は永らく龍虎の名山を鎮護することになった。そして今三元開壇伝度の時に、善をなし功を建て、過を悔いる人は、頑迷固陋な者であっても、皆元帥がこれを掌るのである。ゆえに龍虎の玄壇とは、実に賞罰の唯一の官署である。部下に八王猛将があるのは、八卦に応じている。六毒大神があるのは、天煞・地煞・年煞・月煞・日煞・時煞に応じている。五方雷神・五方猖兵は、五行に応じている。二十八将は、二十八宿に応じている。天和・地合の二将は、天門・地戸の闔闢を象徴している。また水火の二営将は、春に生じ、秋に煞することの往来を示す。これにより雷電を使役し、雨や風を呼び、瘟疫を払い、病や災いを無くすことができる

のである。趙元帥の功績は莫大であり、訴訟で冤罪となった者などは、元帥に祈れば公平なる裁きを得ることができ、商売を行って財を得ようとする者も、元帥はそのために利を図ってくれるであろう。ただ公平なる事であれば、元帥に祈れば、意のごとくならざるはない。

故に上天の玉帝は元帥に聖号を与え、高上神霄玉府大都督、五方之巡察使、九州社令都大提点、直殿大将軍、主領雷霆副元帥、北極侍御史、三界大都督、応元昭烈侯、掌士定命設帳使、二十八宿都総管、上清正一玄壇飛虎金輪執法趙元帥に封じたのである。[90]

『三教捜神大全』より玄壇趙元帥　鞭を執り虎に跨る

趙公明自体は、非常に来歴の古い神である。呂宗力氏らの指摘するように、六朝期の『捜神記』や『真誥』にすでにその名は見えている[91]。その後は五名一組となった瘟神の一つとして知られている。『三教捜神大全』には、この瘟神についても「五瘟使者」として別に記録がある。それによれば、五瘟使者の名は以下の通りである[92]。

春瘟　張元伯
夏瘟　劉元達
秋瘟　趙公明
冬瘟　鍾仕貴
中瘟　史文業

趙元帥がこれらの瘟神から発展した神であることは間違いない。ただ、この瘟神としての趙公明と後の「趙元帥」とは、その性格において甚だ異なっており、「同名異神」と言えるほど違う性質を持つものとなっている。なお、これらの神は『武王伐紂平話』にも登場している。

なお先に見た雷部の張天君、すなわち張使者の名前は「張元伯」であったが、ここに見られる張元伯がその源流である可能性もある。また、これらの神の名の多くは恐らく、三国六朝期に活躍した人物の名前を変じて作られたものであると思われる。それは「鍾士季（鍾仕貴）」の名が、すなわち三国魏の武将である鍾会の姓と字そのままであることからも窺える。太歳殷元帥である殷郊も、或いはその淵源は六朝晋代の殷浩であるかもしれない。とはいえ、これらについてはあくまで憶測の範囲を出ない。

趙公明については、現在最も人口に膾炙しているのは『封神演義』の故事である。すなわち『封神演義』においては、趙公明は峨眉山の道士で、截教に味方するため姜子牙と敵対し、強大無比な力で周側を圧倒するが、呪殺され、最後に「金龍如意正一玄壇真君」に封じられる[93]。この封号については『三教捜神大全』などに見える伝統的なものを踏襲しているが、趙公明の故事については全く改変されてしまっている。しかし『封神演義』が語り物や芝居などを通じて広まった結果、趙公明の由来と言えば完全にこれを指すことになっている。そのため、趙公明自体も殷周期の人物と見なされるに至っている。これは二郎神にしろ哪吒太子にしろ、『封神演義』に登場する多くの神格に共通する事態である。

さらに瘟神についても、『封神演義』では呂岳などを瘟神として封じてしまったために、この説が広まり、これにより趙公明はほとんど瘟神としては

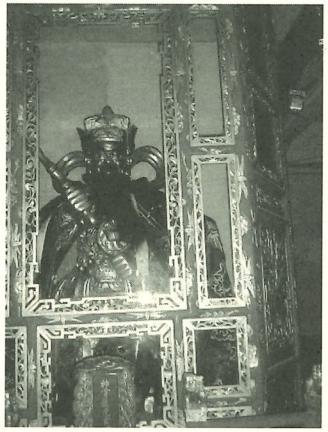
意識されなくなった。

澤田瑞穂氏の指摘によれば、趙公明はインドのマハーカーラ神、すなわち大黒天の変じたものであると言う[94]。なるほどその招財の機能や、黒色という点など、大黒天と趙公明は多くの共通点がある。影響関係が存在する可能性は高い。ただ、哪吒や馬元帥と違って、『道法会元』などの資料にその直接の関係を窺わせる材料には乏しい。むしろ大黒天に近い性格を持つとすれば、黒煞神、すなわち翊聖真君の方が近いと思われる。

さて『三教捜神大全』「趙元帥」の項目は、明らかに『道法会元』巻二百三十二「正一玄壇趙元帥秘法」の「趙元帥録」をほぼそのまま引き写したものである。ただ、冒頭の部分は若干異なっている。

> 元帥の姓は趙、名は朗、一に名を昶、字を公明と。終南山の人である。秦の時に暴政を避けて山中にこもり、至道に修養を重ね、功が成ったため、玉皇上帝の勅旨により召され、神霄副帥に封じられた(略)。[95]

趙元帥の名を記した箇所のみが異なるが、あとは以下全く同文と言ってよい



趙元帥像（上海白雲観蔵） 黒面に鞭を執る

文章が続く。恐らくこの文章は『道法会元』からの直接の引用ではなく、「趙元帥録」から、『道法会元』と、それに『三教捜神大全』の前身である『捜神広記』がそれぞれ別に引用したものであると推察される。

また『道法会元』巻二百三十六「正一龍虎玄壇大法序」にも、初代天師張道陵が丹を練っていた時に、それを守護した神が趙公明であったとの記載がある。『三教捜神大全』に見える「八王猛将」「二十八将」も、『道法会元』には詳しい記載がある。例えば八王猛将は、以下の八将である。

正一那吒王　呉宛　執鉄鎗
蛮雷尽命王　唐開　執鉄刀
持枷生殺王　譚超　執鉄叉
烜赫長生王　王賓　執鉄棒
掣電轟雷王　王雷　執鉄鎖
通天遍地王　龔猥　執鉄斧
江河淮済王　張彪　執剣
飜魂尽命王　何魁　執戟

さらに「四方猛将」には、劉元達・張元伯・鍾士季・史文業といった瘟神であった頃からの人員が並び、そして二十八将は、後漢の光武帝の配下で有名な、鄧禹・呉漢などの二十八将となっている。しかしこれらの神は、後世の趙公明の故事においては全くと言ってよいほど関わってこないため、その存在自体がほとんど意識されなくなる。現在では趙公明の配下といえば、招宝天尊・蕭昇と納珍天尊・曹宝であると見なされている。これはむろん、『封神演義』において結びつけられたもので、本来あまり意味は無い。

また、ここから明確になるのは、『捜神広記』と『三教捜神大全』との性格の差異である。

先に見たように、『三教捜神大全』の多くの元帥神の項目、雷部の諸天君、温元帥や馬元帥に関連する記事は、『道法会元』などの道教経典とはほとん

ど共通性が無かった。元帥の名も違っていれば、事跡も全く異なるのが一般的であった。

しかるに『捜神広記』から引き継いだ項目、趙元帥や関元帥、それに玄天上帝などの記事については、明らかに『道法会元』或いは他の道教経典からの影響が見られる。すなわち、『捜神広記』が元代に編纂された時は、道教関連の資料を襲用することが多いのに対し、明代において『三教捜神大全』を増補した時は、ほとんど道教経典を使用しておらず、民間の資料ばかりを多用しているのである。これには、例えば「玄天上帝」の項目の場合、引用元である『玄帝実録』は早い時期に散逸し、このような経典は利用しにくかったなどの面もあろう[96]。このように、『捜神広記』と『三教捜神大全』では、その編集姿勢に大きな差異があることが、この趙元帥の記事からも推察されるのである。だから同じ元帥神の項目とはいえ、例えば「趙元帥」「義勇武安王」などと「孚祐温元帥」「霊官馬元帥」などでは、記事の性格が大きく異なっているのである。これは注意すべき事柄であろう。

8．王霊官と薩真人の故事

王霊官は、非常によく知られた神である。今でも全真教の道観に行けば、必ず本殿の前方には「霊官殿」があって、王霊官が鞭を振り上げる姿を祀るのを見ることができるであろう。これはあたかも、仏寺の天王殿における四天王や韋駄天と同じ役割を担うものである。また、民間宗教においても、王霊官は「王恩主」として盛んな信仰を有している。

『三教捜神大全』の「王元帥」に見える王霊官の事跡は次の通りである[97]。

> 襄陽の洛里に、姓を王、名を悪、字を秉誠という者がいた。これが王元帥である。父の名は王臣、早くに亡くなった。母の邵氏は、遺腹である元帥を貞観丙申年七月庚申日申時に産んだ。元帥は幼くして孤であったが、読書はたしなまず、とにかく膂力があり、その性格は粗暴剛直で、曲がったことは受けつけなかった。市中に不平を抱く者があれば、行ってすぐにその憂いを分かち合った。また悪人がいれば、これに制裁を加えた。そのため人々はその公明正大な態度には敬意を払っていたが、しかし同時にその武勇を憚っていた。ただ固く自分の見解にこだわり、人の曲直について容れることができなかった。そのために王元帥に恩を感じて徳とする者がある一方で、これを仇敵視する者も後を絶たなかった。（略）
>
> 元帥が荊襄の間に至ると、ある古廟が妖怪のために占領されていた。その妖怪は数里四方に霊験を顕し、毎年六月六日になると祭祀を要求し、牛・羊・豚を各々十頭、酒十瓶を用意させて、瘟疫を免れさせていた。ところがこの貢ぎ物が無いと、妖怪は瘟疫を起こし、ために人や動物が血を流して倒れた。この祭祀の費用を捻出するために、貧窮する者は子供を売るほどであり、その怨嗟の声は一帯に満ちていた。元帥はこのような妖怪の行いを怒り、廟や像を焼き尽くした。すると怪風が吹き荒れた。たまたま薩守堅真人が、薬によって瘟疫を救うために来ており、法術でもって怪風を鎮めて妖怪を退治し、この一帯を安寧にさせた。（略）
>
> 玉帝は勅旨を下して元帥を豁洛王元帥に封じ、篆書で「赤心忠良」の四字がある金の印を賜り、天下の都社令を管理させる職とした。[98]

『三教捜神大全』より王霊官

この話は、王霊官の故事としてはそれなりにふさわしいものとなっている。生来剛直であった王悪という者が、仇をなす妖怪を薩真人と協力して退治したというものである。しかし実際には、この説話は甚だ作為的なものである。

王霊官と薩真人の話は、小説『呪棗記』などに見えるものの方が知られている。それによれば、薩真人と王霊官は共に北宋徽宗の頃の人であった。そして貢ぎ物を強要していたのは、他ならぬ王霊官であり、薩真人はその法力でもって廟を壊し、後にこれを服属させたのであると言われる。

不可解なことに、この話は『三教捜神大全』の「薩真人」の項目にも出ている。ある意味で互いに矛盾する話を載せていることになるが、これは様々な書物からの引用が中心である『三教捜神大全』の中ではありがちなことである。その薩真人の故事は次のようなものである[99]。

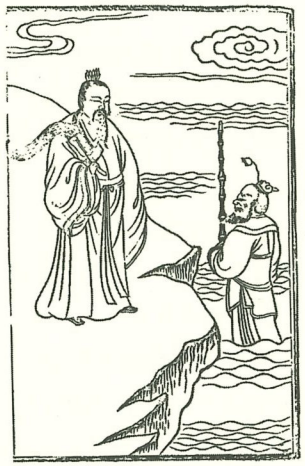
> 薩真人は、名を守堅といい、蜀の西河の人であった。若くして人を救い余に役立とうと思い、医学を学んだ。しかしある時誤って薬を間違えて人を殺めてしまったことから、医を捨てて、道に志した。
> 薩守堅は江南の第三十代天師の張虚靖先生と、林霊素・王文卿の二侍宸が道法に優れているという話を聞いていたので、赴いて弟子となろうとした。陝西地方に出たところで、路銀が尽きた。そこへとある三名の道士が通りかかり、薩守堅にどこへ行くのか問うた。薩真人は張・林・王の三真人を訪ねるためであると、その理由を告げた。一人目の道士が答えて言う。
> 「先の張虚靖天師はすでに亡く、羽化登仙された。」
> 薩守堅は続いて王侍宸について問うた。
> 「王侍宸も羽化された。」
> そして林霊素について尋ねると、「これもすでに亡くなった」と言う。
> 聴いて薩真人は残念がることしきり、みかねた道士が言う。
> 「今龍虎山におられる現在の天師の道法も高いとのこと。わしは今の天師と知り合いであるがゆえ、手紙を書いてあげよう。これを持って訪ねるがよい。またわしはある道術が使えるので、これをそなたに伝授しよう。この道法を使えば、毎日自給できるぞ。」
> そこで薩真人に呪棗の術を授けて言う。
> 「一つの棗を呪して出現させれば、七文の銭を得ることができる。一日に十棗を呪すれば、七十文の銭を得られる。これで一日の費用に充てることができよう。」
> また別の道士が言う。
> 「わしもまた別の道術を授けよう。すなわちそれは雷法じゃ。」
> 薩真人がこの術を受けて用いてみると霊験があった。その後、一たび呪すと百あまりの棗を得たが、ただ七十文を得るだけで、余った銭は貧者を救うために分け与えた。
> このようにして信州の龍虎山に至り、張天師に面会して道人から授けられた手紙を見せた。すると張天師の一族はみなそれを見て泣く。すなわちその書は虚靖天師の親筆であった。手紙に言う。
> 「われと王侍宸・林天師はこの薩君に遇い、各々一つの法術を伝授した。わが流派に加え、名を道録に載せるべきである。」
> 後に薩真人の法術はいよいよ霊験を顕すこととなった。(略)
> 薩真人は湘陰県の浮梁に来ると、そこでは童男童女を生け贄として廟の神を祀っていた。真人は言う。
> 「これは邪神である。すぐに焼かねばならぬ。」
> 言い終わると、雷火が空より起こり、廟はたちどころに灰となった。(略)その後薩真人が龍興府に至り、川べりで足を洗っていると、水の中に神の影が写った。四角い顔に黄色の巾、金の甲を着け、左手に袖をまくり、右手には鞭を執るという姿であった。薩真人は尋ねた。
> 「そなたはどのような神であるか。」
> その神人は答えて言う。
> 「それがしは湘陰の廟神で王善という者であります。真人が我が廟

を焼かれてから、いままで十二年の間従っております。真人に過ちがあれば、それに乗じて仇を報ずるつもりでありましたが、真人の行いは正しく、そのような機会はありませんでした。真人の道行は高く、きっと天界の重要な役職に封じられましょう。できればそれがしを配下の将として玉皇上帝にご推挙いただけませぬか。」

真人は答える。

「そなたは兇悪な神であり、わが法にあっては、必ずやその法を損なうことになろう。」

王善は即座に真人に向かい、違背せぬよう固く誓う。薩真人は玉帝に奏上し、王善を収めて部将とした。この後、王霊官は薩真人が命ずると、響くがごとく応対した。[100]



『三教捜神大全』より薩真人　水中に控えるのが、鞭を持った王霊官

すなわち、人身御供を要求していた邪神とは、実は王霊官自身のことであった。「王元帥」の項目では、これが別の神のことに改められているわけである。

この「薩真人」の項目は、もともと『捜神広記』にあったものが、『三教捜神大全』『捜神記大全』に採録されている。すなわち『三教捜神大全』の記事としては「薩真人」が先に書かれ、「王元帥」の方が後で追加されたことは明らかである。

但し李豊楙氏の指摘によれば、この「薩真人」の項目には、それぞれの資料で微妙に書き換えがなされており、注意が必要である[101]。例えば、薩真人が蜀の地を出て路銀が尽きた場所について、『捜神広記』では「峡」とし、『三教捜神大全』は「陝」とし、『捜神記大全』は「蜀中」とする[102]。

李豊楙氏によれば、この部分は『呪棗記』でまた改作がなされている。「峡」は峡口のこととされ、また訪ねようとした仙人も、「張虚靖・王方平・葛仙翁」になっている。しかし、張虚靖はともかく、王方平・葛仙翁の両名は薩真人からすれば、はるかに以前の人物であり、その弟子になろうというのはやや無理な感もある。李豊楙氏によれば、『呪棗記』の作者である鄧志謨は、特に神霄派について曖昧な知識しか持っておらず、それでこのような記載になったのであるとする。さらに、林霊素などについて世間は否定的な意見があることを顧慮したとする[103]。恐らくその通りであろう。

そもそも『呪棗記』の作者である鄧志謨は、その信仰心や小説執筆の意図とは裏腹に、道教史に対する理解が不十分であったようだ。例えば『三教捜神大全』にも見える、薩真人が張虚靖の手紙を龍虎山に持参する場面において、張天師に「これは父の親筆」と言わせている。しかし彼が当時参照できた資料を見たとしたら、公式的には三十一代の張天師は張虚靖の「子」ではないのが分かったはずである。このあたりに、鄧志謨の道教史に関する理解の浅さが露呈してしまっている[104]。

ところで、『三教捜神大全』が「峡」を「陝」に直してしまっているのは、李豊楙氏の指摘によれば、趙道一の『歴世真仙体道通鑑』[105]の記事を採用したためであるという。実際に、ここの一段については、『三教捜神大全』と『歴世真仙体道通鑑』の文句が酷似している[106]。

ここで注意すべきは、『三教捜神大全』は『捜神広記』の配列や記事内容をほぼ踏襲していながら、一方では別の資料に拠って書き改めていることが多いということである。これは『捜神記大全』にも言えることで、特にこの

薩真人の記事は、三種の資料で微妙に差がある。

『続道蔵』に収録される『太上元陽上帝無始天尊説火車王霊官真経』[107]では、薩真人と王霊官の故事について、これを「唐朝」のことであると記すなど、やや『三教捜神大全』「王元帥」に類似した記述が見える。恐らくこの時期には、王霊官について幾つかの異伝承があり、『三教捜神大全』はその一つについて、あまり資料間の矛盾を考慮せずに採録してしまったのであろう。

『道法会元』においては、巻二百四十一「雷霆三五火車霊官王元帥秘法」と巻二百四十二「豁落霊官秘法」、それに巻二百四十三「南極火雷霊官王元帥秘法」が王霊官に関連する法術となっている。いずれも、その主となっているのは薩真人であり、「祖師西河上宰汾陽救苦薩真人守堅」と書かれる。また王霊官の名は「王善」であるとされる。

王霊官は、金の甲を着け、鞭を持つという姿で、これは現在の廟に見られるものとそう変わりはない。ただ、その副将としては、「陳元帥威・丘元帥先」の二元帥がある。

実はこの「丘・陳・王」という元帥の組み合わせは、『道法会元』巻百八十八の「太乙火府五雷大法」などの太乙火府系統の法術にも見えるものである。但し、その場合の名は「丘青・陳一言・王成之」となっており、これとは異なっている。とはいえ、同じく火部の神将を使役するこれらの法術には、何らかの影響関係があると推測できる。

さらに、『道法会元』巻百二十一「南宮火府烏暘雷師秘法」から始まる一連の「火府」に関する法術も関連性が深いと思われる。特に巻百二十二の「太上三五邵陽鉄面火車五雷大法」は、その名称からも、「雷霆三五火車霊官王元帥秘法」との類似が感じられる。但し、これらの法術に関連する神将は、「呉元帥明遠・宋元帥無忌・劉元帥炎真・劉元帥択先・楊元帥昌辛」などであり、また「辛天君忠義・閻不漸・謝仙火・張可烈・陳如常」などの神である。

これらの諸法術は、どれも一定の神体系を持つものであったと思われる。「陳元帥・丘元帥・宋元帥・劉元帥」の名は他の法術にもしばしば見えるし、

また「謝天君」もそれほどではないが、やはり一部の法術に名が見える。一方で、王霊官すなわち王善の名は、こういった法術ではあまり目にすることが無い。これは恐らく、王霊官の信仰がやや遅れて発展し、雷法の諸法中に取り込まれた時期が遅いということを示すものであろう。また李豊楙氏が言われるように、王霊官は温・関・馬・趙などの諸元帥と比べて、さらに後に道教の神将の列に加わった可能性が高い[108]。

そして「火部の神」というと、かえって王霊官、或いは馬元帥の方が知られるようになってしまったため、本来火部の神将としての地位があった陳元帥や丘元帥などの神が知られなくなったものと思われる。『道法会元』においては、これらの神将の事跡が併存する形で残されているが、これら元帥の信仰の興隆と衰微には、一定の時間差が存在するはずである。

もっとも、だからといって火部の各元帥の信仰が一様に衰えたわけではない。例えば、『三教捜神大全』には「謝天君」の項目があるし、また『捜神記大全』には「火精」として宋無忌の伝が見えている。「謝天君」についての記事は次の通りである[109]。

> 天君の姓は謝、名は仕栄、字は雷行といった。貞観年間の始め、一輪の火光が闘うがごとく、まっすぐに山東火焔山の中に進んでいった。謝恩がその父であり、韓がその母である。元帥はその性は苛烈にして、容貌は醜悪であったが、権力を持つ者に屈せず、法に峻厳であった。（略）元帥は厳しい境遇に置かれるとますます雄弁となり、危機に陥るとますます功績をあげた。その忠心は確たるもので、天日にまで明らかであった。その功績は誠に玉帝の寵を受ける耳目の臣たるにふさわしい。そこで玉帝は元帥を火徳天君の職に封じ、金鞭を執り、火輪に乗り、頭に道冠を着け、もって亢陽の令を司らせた。[110]

『三教捜神大全』より謝天君　火輪に乗る

話としてはほとんど特徴的なものはないが、火府の元帥としての謝天君の性格の一端は示されている。さらに呂宗力氏らの考察によれば、元来火の神として有名であったのは、むしろこの謝仙火の方であった[111]。

同じことは、宋元帥に対しても言え、火の精として知られていたのは、この神であった。もともとは、秦代の方士であったと思われる。すなわち『史記』の「封禅書」には、次のような記載がある[112]。

> 斉の威王・宣王の時から、騶子の弟子たちは終始五徳の運に関する書物を著していた。秦の世になると斉の者たちがこれを奏上し、そのために始皇帝はこれを採用した。宋毋忌・正伯僑・充尚・羨門高・最後などはみな燕の出身で、方僊道を行った。[113]

そして『索隠』はさらに次のような注を付ける[114]。

> 『索隠』案ずるに、楽産は『老子戒経』を引いて云う、「月中仙人の宋無忌」と。『白沢図』に云う、「火の精を宋無忌という」と。けだしこの者は火仙であろう。[115]

この注において、すでに宋無忌が火神としての性格を有していることが分かる。『捜神記大全』における宋無忌の記事は、次のようなものである[116]。

> 神の姓は宋、名は無忌。漢時の人である。
> 生まれて神異あり、死してはすなわち火の精となる。唐の牛僧孺は廟を建ててこれを祭祀し、もって火災を防いだ。廟は武昌府の城の東七里にあった。（略）本朝で重建した廟は、俗に火星堂と呼ばれる。今、江東の各所で火星廟に祭神として祀られているのは、すなわちこの神である。[117]

さらに、民間信仰側の資料として、宋無忌は『南遊記』において「火部元帥」として、華光を捉える役目で登場する[118]。すなわち、火部の神将として民間にも知られていたわけである。

> 玉帝はその奏上を聴くと大変怒り、すぐに火部元帥の宋無忌を入朝させ、天兵三万を率い、速やかに中界に赴いて「華光を捉えよ」と命じた。宋無忌は勅旨を得て、直ちに南天の宝徳関を出て、天兵を集合させて隊伍を整え、中界に向かって出陣した。[119]

これらの記載から考えるに、本来は謝天君・宋元帥などの方が火神としての伝統を古くより有するものと考えられる。ただ火の属性を持つ神は多く、祝融に始まり、火徳真君や炳霊公などもある。さらに馬元帥や王霊官などの神も増え、こういった多くの火神の中で、謝天君や宋元帥はやや影が薄くなっていたのかと推察される。

またさらに、王霊官と馬元帥は、その職種や形象において類似するところが多い。例えば共に三眼であること、火神であること、「霊官」と称されること、火輪に乗ること、などである。清代においては馬霊官の信仰もやや衰

えていき、現在ではもっぱら王霊官だけが知られることになった。

なお、安徽省九華山は地蔵菩薩の聖地として知られるが、ここでは多くの寺院において、伽藍を守護する神として王霊官を配する。これが九華山における特有の現象なのか、或いはかつて寺院には普遍的に見られた現象であるのかは不明である。

王霊官像（安徽九華山地蔵禅寺蔵）

9．清源妙道真君について

現在でも最も著名な神の一つである二郎神は、また「清源妙道真君」という号を持つ。二郎神の由来については、蜀の李冰であるとか、その次男であるとか、或いは『封神演義』の楊戩であるとか、様々な説がある。宋から明にかけては、二郎神はもっぱら趙昱という名であると認識されていた。むろん二郎神については、これまで幾つかの優れた研究があり、その発展についてはかなり究明されているので、ここではあくまで、『三教搜神大全』及び『道法会元』に見える記載を中心に考察したい[120]。

さて『三教搜神大全』の「清源妙道真君」の記事の内容は、だいたい次のようなものである[121]。

清源妙道真君は、姓を趙、名を昱という。道士李珏に従って青城山に隠れた。隋の煬帝はその賢者であることを知り、嘉州太守とした。

郡の左には冷源二河があり、その領内の犍為に老蛟がいた。春夏になると水害を起こし、その水は一帯に溢れ出し、民に被害を与えていた。趙昱は大いに怒り、時に五月の間、船七百艘ほどを用意し、兵千余人を率い、民万余人をもって、江を挟んで声をあげさせる。その声は天地を震わすほどであった。趙昱は刀を持って江の中に飛び込む。しばらくすると、江の水が赤くなった。崖の石が崩れ落ち、雷のような咆吼が鳴り響いた。趙昱は右手に刀を執り、左手に蛟の首を持って、波より躍り出た。時に趙昱を助けて水に入った者が七人いた。これがすなわち七聖である。趙昱がこのように蛟を退治した時、まさに年二十六歳であった。

隋末に天下は大いに乱れ、趙昱は官位を捨てて隠居した。その後は終わるところを知らず。後に嘉州の江の水が溢れた時、蜀の者たちは青い霧の中に、白馬に乗り、数人を引き連れて鷹犬と弾弓を携えて猟をする者が、波間の上を通り過ぎるのを見た。すなわち趙昱であった。民はその徳に感じ入り、廟を灌江口に建てて奉祀することになった。俗に「灌口二郎」という。

唐の太宗はこれを「神勇大将軍」に封じた。唐の玄宗が蜀に行ったとき、「赤城王」に封じた。宋の真宗朝となり、益州に大乱が発生すると、真宗皇帝は張乖崖を蜀に派遣してこれを治めた。張乖崖は二郎神の廟に詣でて、神助を求めたところ、果たしてそのためによく克つことができた。そのため朝廷に奏上し、追尊してその聖号を「清源妙道真君」とした。[122]

『三教捜神大全』より清源妙道真君　二眼であり髯がある

この記事は、『捜神広記』と『捜神記大全』にも見えている。但し、『捜神記大全』の方は目録においても本文においても、これを「灌口二郎神」とする。二郎神を趙昱、すなわち趙二郎とするのは、元明の雑劇によく見られる。例えば『二郎神鎖斉天大聖』[123]雑劇では、二郎神が次のように自称する。

> われは二郎真君これなり。
> 俗姓は趙、名は煜。幼くして道士李班に従い、青城山に隠れた。隋の煬帝の時、煬帝はわれの大賢なるを知り、嘉州太守とした。郡には左に冷源二河があり、そこに健蛟が住みついており、春夏と害をなした。われは刀を持って水に入り、蛟を斬って躍り出た。後に官位を棄てて道に学び、白日昇天した。そして「清源妙道真君」の号を加封された。[124]

ほとんどこの故事は、『三教捜神大全』の記述と一致する。またこの故事自体を劇とした『灌口二郎斬健蛟』[125]も存在する。『二郎神酔射鎖魔鏡』[126]雑劇においても、二郎神は趙昱と名のり、またほぼ同じような話を述べる。

少なくとも元から明の間にかけては、二郎神は趙昱、或いは趙煜という名であり、また蛟を斬った故事を有し、さらに七聖という部下があったということが広く知られていたものと思われる。『三教捜神大全』の記事は、まさにこの事情を反映したものであろう。

しかし明末になると、『西遊記』に見られるような「楊二郎」、或いは『封神演義』の「楊戩」といった伝承が強くなり、二郎神の姓は楊であると見なされるようになる。「清源妙道真君」の号も、楊二郎に伴うものとされてしまう。

ところで『捜神広記』及び『三教捜神大全』においては、「義勇武安王」の次が「清源妙道真君」、すなわち関羽のすぐ後に二郎神が配されている。これは単なる偶然とは思えない。

『道法会元』においては、二郎神は関羽と共に登場することが多い。例えば『道法会元』二百五十九「地祇馘魔関元帥秘法」の「天師斬蛟」の符には、次のような文章が見える。

> 右の符は、清源妙道真君陳昱、崇寧真君関羽、禁将趙旻・関平などの神将を派遣し、急ぎその役に用いるためのものである。[127]

もっとも、ここでは「清源妙道真君」は、陳昱という名になっている。別に「禁将」趙旻という名も見える。さらに、巻二百六十「酆都朗霊関元帥秘法」では以下のような記載がある。

> 主法
> 祖師三十大天師　虚靖張真君
> 将班
> 主将酆都朗霊馘魔大将　関元帥諱羽
> 副将清源真君　趙旻

すなわち、酆都系の法術においては、清源妙道真君は関元帥の副将として

扱われていたのである。このように『捜神広記』において、関羽の後にすぐ二郎神が配されていることは、両者の密接な関係を物語るものと言えよう。

とはいえ、ここの「清源妙道真君」は恐らく趙昱とは関係があると推察されるものの、イコール二郎神を指すかどうかまでは断言できない。「趙昱」という名を分断して二つの神格にしたのか、或いは「趙旻」と「陳昱」を合わせて「趙昱」としたのかは判然としないが、『道法会元』の記載が、時に『捜神広記』よりも古い伝承を反映していることが多いことからすると、始めに「趙旻」「陳昱」の二神将があり、後に「趙昱」となったものか。

10. 呉客三真君と祠山張大帝

『捜神広記』『三教捜神大全』に見える神々には、後に信仰が衰えていき、明代の通俗文学などにおいて、やや影が薄くなったものが幾つかある。ここではその中で、『道法会元』にも名の見える葛・唐・周の三将軍と祠山張大帝などについて若干の考察をする。

さて『三教捜神大全』の巻二に収録される「呉客三真君」とは、すなわち葛・唐・周三将軍のことである[128]。

『三教捜神大全』より呉客三真君　すなわち唐・葛・周三将軍

昔、周の厲王には三名の諫官があった。これが唐・葛・周の三官である。（略）三官は諫めて言う。

「先王は仁義をもって国を守り、道徳をもって民を教化しました。」

（略）

このようにしばしば諫めたにもかかわらず、厲王は全く聞き入れない。そこで三官は職を棄て、南の呉の地へと向かった、呉王は彼らを迎えて大いに悦んだ。（略）後に厲王が薨じ、宣王が即位したと聞いて、三官は周国に戻った。（略）三官は功績により、封号を与えられることになった。

すなわち、唐宏、字文明は孚霊侯となり、葛雍、字文度は威霊侯となり、周斌、字文剛は浹霊侯となった。宋の大中祥符元年（一〇〇八）、真宗は泰山に封禅の儀を行った。泰山の天門に至ると、そこに三名の仙人が空より下ってきた。真宗皇帝が恭しくこれに問うたところ、三仙は、「天命を奉じて玉駕を護衛しております」と答えた。

真宗は彼ら三名を、それぞれ「上元道化真君・中元護正真君・下元定志真君」に封じた。[129]

すなわちこれによれば、「呉に客となった」から「呉客」と称していると考えられる。

先に見たように、この三将軍については、『道法会元』をはじめとする多くの道教経典に記載がある。例えば、『道法会元』巻百八十一「上清五元玉冊九霊飛歩章奏秘法」には、天門を守護する三将軍として、上元将軍唐宏・中元将軍葛雍・下元将軍周武の名が見えている。金允中の『上清霊宝大法』[130]には、北極四聖など一部を除いて、元帥神に関する記載がほとんど無い一方で、この「三元唐葛周三将軍」については記載がある。恐らく道教の神将としては、他の元帥神よりも来歴の古いものであり、オーソドックスな神将であると言える。

しかし呂宗力氏らの指摘によれば、この三将軍は、宋代において既にその

名は不明となっており、僅かに姓のみが知られるだけであった。そして元明の間に、周の厲王の臣下であるとの伝承が附会されたとする[131]。むろん『三教捜神大全』のこの記事は『捜神広記』を引き継いだだけのものであるから、その元代の故事が反映されているものと考えられる。また三将軍は数多くの廟宇があったとされるが、後の通俗文学などの作品にはほとんど登場しない。

なお、唐・葛・周三将軍は、現在ではむしろ儺戯において祭神とされるのが目立つ。廣田律子氏の指摘によれば、江西省萍郷市における追儺神の神体として、三将軍の仮面が祀られている[132]。

祠山張大帝も、著名な神であるものの、元明の通俗文学にはあまりその姿は見えないものである。ただ『三教捜神大全』に記事がある他、『道法会元』にも記載がある。『三教捜神大全』の「祠山張大帝」の故事は次のようなものである[133]。

> 祠山聖烈真君は、姓を張、名を渤、字を伯奇といい、武陵龍陽の人であった。父を龍陽君といい、母を張媼といった。その父の龍陽君と張媼が太湖の陂に遊んだ時、昼であるにもかかわらず日が見えなくなり、風雨が起こって闇となり、雲が上を覆った。また五つの瑞祥の青雲がわき、雷が鳴り響いた。そんな中、張媼の所在が不明となった。しばらくして空が晴れると、張媼の前に天女が現れて言う。「われは汝の祖である。そなたに金丹を授けよう。」
> その金丹を服すると、すでに妊娠していた。懐胎すること十四ヶ月、漢の神雀三年二月十一日夜半に張渤を生んだ。張渤は長じて雄偉な貌であり、寛仁大度にして、感情を表に出すことが少なかった。身長は七尺で、鼻が高く美髯あり、髪を垂らせば地に届いた。そして水火の術に通暁していた。ある時、張渤に向かって神が現れ、「この地は荒僻にして、家を建てるところではない。他の場所に行くように」と命じた。

> 時に神獣が前を導いたが、その形は白馬のようで、その声は牛のようであった。張渤は夫人李氏と共に東のかた呉の会稽に遊び、浙江を渡り、苕雲の白鶴山に至った。山には四つの河が流れ、その流れは山の下で会した。張渤公はそこに居住することにした。（略）
> 唐の天宝年間に、祈雨において霊験があり、始めて水部員外郎に任ぜられた。また「横山」を改めて「祠山」とした。唐の昭宗は司農少卿の位を贈り、金紫を賜った。唐の景宗は「広徳侯」に封じた。南唐においては、司徒とされ、「広徳公」に封じられた。後晋では「広徳王」とされた。宋の仁宗は「霊済王」に封じた。寧宗の代に至り、号を加えて八字の王とした。理宗の淳祐五年（一二四五）、改封して「正佑聖烈真君」とした。咸淳二年（一二六六）十二月十二日に至り、加封せられて「正佑聖烈昭徳昌福真君」となった。[134]

『三教捜神大全』より祠山張大帝

この説話自体にはほとんど特色が無いし、かなり作為的なものが感じられる。まず張大帝の生まれた「神雀」という年号は漢の時代には無い。もっと

も、『史記』の「暦書」には、「神雀」の年号があるが、これとの関連は薄いものと思われる。また張渤の姿は、『三国志平話』に見える劉備の容姿の形容と酷似する[135]。呂宗力氏らの考察によれば、張大帝の号の一つに「昭烈大帝」があることから[136]、「昭烈帝」劉備との混同があるものか。

その号に祠山とあることから、恐らくこの神は安徽の祠山一帯の地方神であったと考えられる。その性格は水神であったようで、二郎神と似た面がある。宋代にはかなり信仰が盛んであり、明代においても、関帝や華光と並び称せられたほどであった[137]。その信仰は特に江蘇・安徽一帯で著しかった。

その信仰を反映してか、『道法会元』にはこの張大帝を中心とした法術が採録されている。すなわち巻百三十の「北真水部飛火撃雷大法」と巻百三十一の「石匣水府起風雲致雨法」では、その法術の中心的な存在として張大帝が充てられている。特に「石匣水府起風雲致雨法」では、祈雨の法術であり、その神将として張大帝と配下の神が重視されていることが分かる。

帥将
祠山正佑聖烈真君　張渤
左衛大将軍　丁聖者曠
右衛大将軍　壬聖者游
先鋒報応大将軍　方通

張大帝は眷属が多く、『三教捜神大全』には、夫人李氏・九弟・五子・八孫の封号についていちいち記載があるが、最後に「佐神丁壬二聖者・打拱方使者」[138]の名が見える。すなわちこれが『道法会元』に見える「丁聖者・壬聖者・方使者」と対応しており、これらが張大帝の配下として広く知られていたことが判明する。

『道法会元』においては、張大帝は完全に水部の神として、玄天上帝の下に位置せられている。とはいえ、後の『北遊記』などの玄天上帝に関係する文献にはあまりその姿が見えない。これに限らず通俗文学においては、総じて張大帝の影は薄い。

なお、日本の禅宗寺院においては張大帝を伽藍神として祀る[139]。例えば鎌倉建長寺や、京都泉涌寺においてである。これはつまり、日本に禅宗が流入した時代に張大帝の信仰が盛んであり、伽藍神としてそのまま輸入したことを示すものであろう。

張大帝と同じく日本で伽藍の神とされるものに招宝七郎がある。これはまた大権修利菩薩とも称せられる。臨済宗及び曹洞宗の寺院で伽藍神として祀られるものである[140]。京都の相国寺などでは、法堂の右側にこの大権修利を祀る。現在の寧波市の東に招宝山があるが、ここを中心として浙江一帯で特に海神として盛んに信仰された神である。浙江の阿育王寺などでは仏舎利の守護神として祭祀されている。この神の姿は片手を上に差し上げて、遠望の勢を為すのが特徴的である。

大権修利招宝七郎（京都・相国寺法堂蔵）

『水滸伝』の第七十回に、没羽箭の張清という豪傑が石つぶてを投げる時に、「招宝七郎のような」動作を行ったという記載がある[141]。これについて『水滸伝』では何の説明も加えないが、すなわち七郎神の片手を差し上げるポーズのことを指しているのだと思われる。つまり、『水滸伝』の読者は何の説明も無しにこのポーズがどんなものであったかを理解したと解さねばな

らない。恐らく、この当時『水滸伝』が流行していた地区では、誰もが「招宝七郎」と聞けば直ちにその姿が想起できたのであろう。この時期、招宝七郎という神格が相当広く知られていたことが、これによって分かる。なお先にも少しふれた通り、『西遊記雑劇』においては「迴来大権修利」が第十の保官として見える[142]。すなわち招宝七郎は張大帝と同様に、かつては南中国においては盛大な信仰を有していたのであり、また両者ともに仏教信仰と深い関わりがあったものと推察されるのである。

11. 天妃に関する記事の特色

『三教捜神大全』の中でも、特異な地位を占めるのは、「天妃娘娘」、すなわち媽祖の記事である。これは元帥神ではないが、元帥神の発展とも近い状況があり、ここで少しふれておきたい。

媽祖については、これまでも数多くの研究があり[143]、特にこの『三教捜神大全』の項目については、李献璋氏による詳細な検討があるが、ここではそれを踏まえた上で幾つかの問題を検討することとする[144]。その「天妃娘娘」の記事の内容は、次の通りである[145]。

> 天妃の姓は林といい、もとは興化路寧海鎮に生まれた。すなわちその地は、莆田県の治八十里の浜で湄州の地である。母陳氏は、かつて夢に南海観音に優鉢花を与えられ、これを飲むと、すでに懐胎していた。（略）唐天宝元年（七四二）三月二十三日に誕生した。誕生の日には、異香が付近にただよい、十日を経ても香りが残っていた。（略）
> 天妃は五歳にして能く観音経を読んだ。（略）笄の年になっても、決して嫁がぬと誓う。父母も無理に他に嫁がそうとはしなかった。そのまま居ることいくばくもなく、儼然として端座したまま逝去した。（略）明の世祖永楽皇帝の七年（一四〇九）に、中貴人の鄭和が西南夷に向けて出航した際、天妃の廟において安全を祈祷した。（略）遂に勅封して「護国庇民妙霊昭応弘仁普済天妃」とした。[146]

『三教捜神大全』より天妃娘娘

媽祖の出生や事跡については、資料によって異なる伝承を採録している。しかし、李献璋氏の指摘によれば、この『三教捜神大全』の「天妃娘娘」の記載は、ほとんどそれまでの所伝と関連の無いもので、かなり恣意的に組み立てられたものであると言う[147]。

実際、媽祖の生きていた時代は、多くの資料が五代・宋とするのに対し、この『三教捜神大全』の記事のみは、古く唐の天宝年間とする。また母が観音菩薩から優鉢花を与えられ、これを懐胎したとするなど、確かに作為的な記述が目立つ[148]。

さて、先に見たとおり『三教捜神大全』はその多くの記事を、『捜神広記』から襲用している。そのため当然ながら、両者で共通する記事は多い。

一方で、『捜神記大全』も『捜神広記』から大半の記事をそのまま受け継いでいる。だから、『捜神広記』『三教捜神大全』『捜神記大全』の三者ではかなりの記事が一致する。

しかしさらに『捜神広記』に見えないにもかかわらず、『三教捜神大全』と『捜神記大全』に共通するという記事が幾つか存在する。これは『三教捜神大全』と『捜神記大全』が、『捜神広記』の後に発展した別の「捜神」類

書を共通の祖本としているためであるのは間違いない。ただ問題は、『三教捜神大全』と『捜神記大全』の両者に項目がありながら、中身の文章がかなり異なる記事が一部で存在するということである。例えば、「五方之神」などの項目は、両者が共に内容がほぼ一致するので、恐らくはその基づいた祖本が、元来その記事を有していたのだと分かる。しかし、例えば「観音菩薩」や「天妃娘娘」といった項目では、『三教捜神大全』と『捜神記大全』とでかなりその内容が異なっている。

『捜神記大全』の「天妃」の項目は、次のようなものである[149]。

> 天妃は莆の人であり、宋の都巡検林愿の娘であった。生れながらにして神霊であり、よく人の吉兆を言い当てることができた。その没後に郷里の人間が廟を湄州之嶼に建てた。（略）歴代累封して天妃の位に至った。[150]

この『捜神記大全』の記事は、『三教捜神大全』の記事に比べて非常に短く、簡略なものである。しかもその内容はほとんど一致しない。甚だしくは媽祖の生誕の年代すら異なる。

李献璋氏の指摘によれば、この『捜神記大全』の方の記事は、地方志に載っている媽祖の伝承の外に出るものではなく、そういった意味では非常にオーソドックスなものと考えてもよいであろう[151]。

『三教捜神大全』の方は、また鄭和についての記事を入れているのが特色である。さらにこの文の末尾には、この記事自体が費信采の碑記を取り込んで記したものであることが書かれている。李献璋氏によれば、その碑文は万暦二十六年（一五九八）に書かれたものであり、しかも万暦三十年（一六〇二）に著された『天妃娘媽伝』との影響が考えられるという[152]。そこまで断言できるかどうかはともかくとして、『捜神記大全』における羅懋登の序文が万暦二十一年（一五九三）に書かれていることを勘案すると、『三教捜神大全』の方が『捜神記大全』よりやや遅く現れ、天妃媽祖に関する記述も大幅に書き改められたと考えることは十分に可能であろう。

ところで『天妃娘媽伝』は、また『天妃林娘娘伝』とも呼ばれ、三十二回の長さを持つ通俗小説である。確かに、この小説には、冒頭に観音菩薩が登場したり、媽祖が元神を出して難破する船を救ったという話が載せられていたり、『三教捜神大全』の記事と共通する面がある[153]。先に見た馬元帥や殷元帥の項目がそうであったように、『三教捜神大全』には、民間の通俗文芸で発達した説話と関連性の深いものがよく見られる。恐らく、この「天妃娘娘」の部分においてもそういった性格が出ているものであろう。そしてその性格は、『捜神記大全』とは異なるものである。むろん『捜神記大全』も、民間信仰の実情をよく反映するものであるが、その記事の基づくところは、やはり史書や経典など、ややオーソドックスな文献である。

「天妃娘娘」と似たようなパターンは、『三教捜神大全』の「大奶夫人」[154]にも見られる。この項目は『捜神記大全』においては「順懿夫人」[155]となっている。すなわち現在では臨水陳夫人、或いは三奶夫人の一として知られる神である[156]。これも、「順懿夫人」の項目が非常に短く、かつ無味乾燥な記述なのに対し、「大奶夫人」の方は複雑で、かなり長い記事となっている。また李献璋氏によれば、この「大奶夫人」の記載も『三教捜神大全』の記事の他に見られぬものであると言う[157]。

『三教捜神大全』で、「天妃娘娘」「大奶夫人」の二神、すなわち福建で盛んな信仰があった媽祖と臨水夫人の項目だけが、異様とも言えるほど内容を書き換えられているのは、何かしらの理由があると思われる。『三教捜神大全』の書かれた地域について、李献璋氏は「五両」の語に注目して、次のように言う[158]。

> 天妃娘娘の説話に「五両」が出ているのは、記事の書かれた地域が鉛山の付近を起点とする銭塘江と、長江の鄱陽湖から下流との間であったことを暗示するとしなければならぬ。

ただ、この語をもってのみ断定できるかどうかは不明である。李氏はまた『三教捜神大全』の「九鯉湖仙」[159]の項目に手が加えられていることを指摘

するが、この神も福建の神である。これからすれば、むしろ『三教捜神大全』の編者は福建と関わりの深い人物で、それ故に「九鯉湖仙」「天妃娘娘」「大奶夫人」という、福建地方の三神の項目については、特別に注意を払って項目を書き換えたのではあるまいか。或いは『三教捜神大全』の福建版だけに改変がなされた可能性もある。

12. その他の元帥神について

ここでは『三教捜神大全』に記事があるものの、これまでに検討しなかった幾つかの元帥神についてまとめて見てみたい。

李元帥については、『三教捜神大全』の「李元帥」[160]ではこれを海神とする。その名は李封といい、南海の海賊であったとされる。この伝承の基づくところは不明であり、また『道法会元』などの経典においても、姓が李である神将は数多く存在するため、その比定が難しい。敢えて憶測すれば、巻百三十の「北真水部飛火撃雷大法」にみえる「水部駆龍大神・李順」が近いか。

『三教捜神大全』の「王高二元帥」[161]に見える王鉄・高銅の二元帥は、伝によれば戦国期に韓王に使えた者であるという。『道法会元』などには姓を王とする神将は甚だ多いが、この王・高二元帥に相当する者がどれに該当するかは分からない。

田呂元帥は、『三教捜神大全』「田呂元帥」[162]の項目にその伝が見える。蒼龍の子であるとされ、雷部の神としての性格が強い。姓が田であるのか、呂であるのか、やや不明確であるが、恐らく呂とすべきであろう。『道法会元』では、巻百二十五の「九州社令蛮雷大法」の一連の「九州社令」系統で中心となる神将に康・劉・呂の三元帥がある。この「九州社令撃剥使者呂魁」が該当するか。或いは、巻四十に見える「呂・丘・田・何・盧・路諸大功曹」のうち、田・呂の両使者の名が混じたものか。

党元帥は、『三教捜神大全』「党元帥」[163]に事跡が見える。名は党藉。この神は「元祐丁未」に生まれたとする。北宋元祐年間と思われるが、該当する年次は無し。また記事には、「晋の昭察使に任ぜられ」という記載もあるが、すると後晋代となるか。この神もその典拠がやや見いだしにくい。

『三教捜神大全』の「副応元帥」[164]については、姓は副とする。「乾符九年」に生まれたとするが、唐の乾符年間は六年で終わる。また「壬寅年」とするが、それも該当するものが無い。恐らく党元帥の記事同様、年代については怪しいものである。

高元帥については、これはむしろ医薬の神であるとする。『三教捜神大全』の「高元帥」[165]の記事によれば、元帥は姓を高、名を員といい、「薬師天尊」の徒弟であったという。この神については、現在の道教儀礼書にも「監生高元帥」[166]とあり、有力な元帥神の一つであるとは言えよう。また『道法会元』の中には高姓の元帥は多い。

朱元帥については、『三教捜神大全』「朱元帥」[167]では、名を朱彦矢といい、下界で悪事を行っていたのが、玄天上帝や謝天君に退治され、その後「不信道法」の者を処罰するよう、元帥に封じられたとの故事を載せる。この朱元帥は、すなわち『道法会元』の巻百五十四と百五十五の「混元六天妙道一炁如意大法」に記載のある「雷府管打不信道法大将軍・朱彦明」のことであろう。他の法術においても、朱将軍の名はたびたび見える。蘇州玄妙観の雷部十二天君の一人でもあり、雷部ではかなり有力な神とされる。

ただいずれにせよ、『三教捜神大全』における各元帥の形象や故事は、道教側の資料に見られるものとは相違しており、恐らく民間において発展したか、或いは別に作為せられたものであると考えられる。

なお、これらの元帥神のほとんどは、『北遊記』にも登場している。それは『北遊記』がこの『三教捜神大全』に基づいて小説を構成したことを示すものと思われる。しかし一方で、『三教捜神大全』と『北遊記』で、かなり故事の内容が変わっているものも存在する。例えば、高元帥は『北遊記』では北極紫微大帝の化身ということになっている。そういった改変は、『北遊記』の作者である余象斗によってなされたものか、民間にそのような説話があったのを取り入れたものかは判然としない。ただ、『三教捜神大全』と『北遊記』の刊行期は近いと思われ、余象斗の作為によるものと見なした方が妥当であろう。

13. 儺戯と元帥神

現在も中国の各地で行われている儺戯において、元帥神は様々な役割で登場している。

『福建寿寧四平傀儡戯華光伝』[168]には、福建地方の傀儡戯で演じられる「華光伝」が載せられている。これ自体は小説『南遊記』に基づくものである。ただ、衰えたはずの華光信仰が根強く残っていることの証左となる資料である。この劇には、また哪吒や楊二郎、温元帥・趙元帥・康元帥・韓元帥などの諸元帥が登場する。韓元帥が登場するのは、『南遊記』の影響を受けたもので、恐らくこの神の信仰が元からあったことを示すものではないと推察される。

『湖南省黔陽県湾渓郷的観音醮和辰河木偶戯香山』[169]は、湖南における「観音醮」と呼ばれる儀礼についての報告である。ここで祭祀の中心になるのは観音菩薩であるが、民間祭祀にふさわしく、多くの道仏の神が混在している。「三界牒」でふれられる神は、五嶽・諸菩薩といった神仏であるが、その中に「王・馬・殷・趙四大元帥」という元帥がある。すなわち、王霊官・馬元帥・殷元帥に趙元帥である。また「開壇」では王霊官が現れて中心的な役割を果たす。

『江西省南豊県三渓郷石郵村的飛儺』[170]は、江西省の儺戯についての報告である。ここに登場する神々も、儒仏道が混在したもので、夥しい数があるが、その中には「雷部打邪朱元帥・地司太歳殷将軍・正一霊官馬元帥・主将玄壇趙将軍」があり、朱・殷・馬・趙の四元帥の名が見えている。

『広西省環江県毛南族的還願儀式』[171]においては、広西省の毛南族の儺戯が紹介されているが、ここで登場する神将は、唐・葛・周の三将軍である。

『接龍喪戯』[172]には、四川において行われる道仏混淆の度合いが強い葬送儀礼について報告があるが、そこに登場する元帥神は「恩将玄壇趙元帥・五安法主関元帥・押瘟上将温元帥・地祇上将殷元帥・雷門飛天張使者・大法風火田元帥」である。ここでは関羽を元帥神として扱う。

『江蘇省通州市横港郷北店村胡氏上童子儀式』[173]では、巫医の行う儺についての報告があるが、「霊官会」や「元帥会」が儀式の一つとしてあった。

またその儺において言及される元帥神は、鄧天君・辛天君・張天君・劉天君・陶天君・王天君・馬天君・殷天君・鉄天君・朱天君・高天君・趙天君・温天君・周天君・関天君・陳天君・邱天君・鍾天君・白天君といったものである。ここではなお、陳・邱といった元帥の名が残されている。

『胥河両岸的跳五猖』[174]は安徽省と江蘇省の界に当たる地区の儀礼の報告である。この儀礼は、祠山張大帝を主とするものである。儀礼には、王霊官と馬元帥が登場する。張大帝は、この地域においてはいまでも強い信仰があると推察される。

『四川省江北県舒家郷上新村陶宅的漢族祭財神儀式』[175]の報告によれば、財神すなわち趙公明元帥を主神として祭祀が行われる。

田仲一成氏が『中国巫系演劇研究』[176]において指摘する所によれば、江西萍郷県では唐・葛・周三将軍・哪吒太子・関帝・趙公明などの神が儺戯に登場し、安徽貴池県では馬・趙・温・岳の四大元帥が登場する。これらの南方の儺戯が、三将軍などの古い枠組みをよく保存するのに対し、例えば北方の山西曲沃県の儺礼では、明らかに『封神演義』の影響を受けた神体系となっている。

このように、中国各地で行われている儀礼や儺戯において、元帥神は主要とは言えないまでも、重要な役割を果たす神格であることが多い。しかし、これらの各地方における儀式については、古い層を残すものがある一方で、清代の『封神演義』関連劇が発展した後の影響を明らかに蒙っているものもあり、簡単には論じられない。

注

1）『玄天上帝啓聖録』（『正統道蔵』洞神部S. N. 958）

2）これについては、拙稿「玄天上帝の変容――数種の経典間の相互関係をめぐって――」（『東方宗教』第91号・1998年）60～77頁参照。

3）例えば、黄華節『関公的人格与神格』（台湾商務印書館・1967年）、蔡東洲・文廷海『関羽崇拝研究』（巴蜀書社・2001年）、李福清（B. Riftin）『関公伝説与三国演義』（漢忠文化事業公司・1997年）、洪淑苓『関公民間造型之研究』（台湾大学出版委員会・

1995年)、顔清洋『関公全伝』(台湾学生書局・2002年)、盧暁衡主編『関羽・関公和関聖』(社会科学文献出版社・2002年)などがあり、様々な角度から総合的に論じられている。

4) 『絵図三教源流捜神大全(外二種)』(上海古籍出版社・1990年)109頁。

5) 原文:義勇武安王、姓関、名羽、字雲長。蒲州解良人也。当漢末、与涿郡張飛、佐劉先主起義兵。後於南陽臥龍岡三謁茅廬、聘諸葛孔明。宰割山河、三分天下、国号為蜀。先主命関公為荊州牧、不幸呂蒙設計、公乃不屈節而亡。追贈大将軍、葬於玉泉山。士人感其徳義、歳時奉祀焉。

6) 前掲『絵図三教源流捜神大全』109~111頁。

7) 原文:至祥符七年、解州刺史表奏云、塩池自古生塩、収辦宣課。自去歳以来、塩池減水、有虧課程。此係灾変、敢不奏聞。(略)帝遣呂夷簡持詔就塩池祷之。是夜夢一神人戎服金甲、持剣怒而言曰、吾乃蚩尤神也。奉上帝命、王此塩池。(略)今朝廷崇以軒轅、立廟於天下、吾乃一世之仇也。此上不平、故竭塩池水。(略)王欽若奏曰、蚩尤、乃邪神也。陛下可遣使就信州龍虎山詔張天師、可収伏此怪。帝従之、乃遣使詔天師至闕下。(略)天師奏曰、臣挙一将最英勇者、蜀関将軍也。臣当召之、可討蚩尤、必成其功。言訖、師召関将軍至矣、現形于帝前。(略)如此五日、方且雲収霧散、天晴日朗、塩池水如故。皆関将軍力也。(略)賜廟額義勇、追封四字王、号曰武安王。宋徽宗加封尊号曰、崇寧至道真君。

8) 陶弘景『洞玄霊宝真霊位業図』(『正統道蔵』洞真部S. N. 167)

9) これについては、前掲顔清洋『関公全伝』126~142頁、また242~255頁を参照。

10) 『宋元平話集』(上海古籍出版社・1990年)282頁。

11) 原文:昔三十代天師、虚靖真君於崇寧年間奉詔旨云、万里召卿、因塩池被蛟作孽、卿能与朕図之乎。於是、真君即篆符文行香、至東嶽廊下、見関羽像、問左右。此是何神。弟子答曰、是漢将関羽、此神忠義之神。(略)即時風雲四起、雷電交轟、斬蛟首於池上。

12) 『孤本元明雑劇』(台湾商務印書館・1977年)第八冊。

13) 原文:貧道姓張、名乾耀、道号澄素。我祖伝道法、戒律精厳、三十二代、輩輩留伝。

14) 原文:大人、這一位神将、姓関名羽、字雲長。今為玉泉山都土地。則他便破的蚩尤。

15) これについては、李玫「明代産生及流行的関羽戯的特点」(前掲『関羽・関公和関聖』所収)227~229頁、及び前掲蔡東洲・文廷海『関羽崇拝研究』77~79頁参照。

16) 沈徳符『万暦野獲編』(文化芸術出版社・1998年)390頁。

17) 原文:至宋大中祥符之甲寅、塩池大壊。関壮繆以陰兵与蚩尤大戦而破之、始為之建祠。至崇寧元年、加封関為忠恵公。大観二年、又加武安王。

18) 胡天成・段明編『民間祭礼与儀式戯劇』(貴州民族出版社・1999年)108頁。

19) 前掲『絵図三教源流捜神大全』200頁。

20) 原文:東郷間、姓田名華者、乃正東二七神也。(略)誕時、白昼憑空霹靂、火光照天。(略)至長、遂因田為田、指華為畢。(略)時女媧氏五色土補天、百計不成、帥助木火之精、霹砕玄精之石髄。(略)又練五色火雹風雷陣、上助軒轅撃死蚩尤。(略)玉帝封以雷門畢元帥之職、勅掌十二雷霆、輔玄天上帝、誅瘟役鬼。

21) 前掲『絵図三教源流捜神大全』230~231頁。

22) 原文:雍民辛姓、名興者、字震宇。母張氏、家貧、売薪以養母、至殷苦。(略)天帝感其至孝也、迎而封之為雷門苟元帥。与畢帥共五方事、往来行天、剪幽明中邪魔悪。

23) 原文:雷部有欶火大神、姓鄧、名伯温。昔従黄帝戦敗蚩尤、封河南将軍。大神見黄帝登天、遂棄位、入武当山修行百載。(略)上帝封為律令大神。

24) 『海瓊白真人語録』(『正統道蔵』正一部S. N. 1307)

25) 呂宗力・欒保群『中国民間諸神』(河北人民出版社・2001年)113~128頁。

26) 前掲『絵図三教源流捜神大全』189頁。

27) 同前掲『絵図三教源流捜神大全』195頁。

28) 同前掲『絵図三教源流捜神大全』181頁。

29) 前掲呂宗力等『中国民間諸神』133~134頁の指摘によれば、雷部の神として「謝仙火」の伝承は古くから存在する。

30) 前掲『絵図三教源流捜神大全』228頁。

31) 同前掲『絵図三教源流捜神大全』242~243頁。

32) この部分の記載は、拙稿「太歳殷元帥考」(『論叢アジアの文化と思想』第3号・アジアの文化と思想の会・1994年)に基づいたものである。

33) 王充『論衡』(『諸子集成』第7巻・上海書店・1986年)240頁。

34) 前掲『絵図三教源流捜神大全』235~236頁。

35) 原文:帥者、紂王之子也。母皇后姜氏。一日后游宮園、見地巨人足迹、后以足践之而孕、降生帥也。肉毬包裹、其時生下、被王寵愛妃名妲己、冒奏王曰、正宮産怪。王命棄之狭巷。(略)適金鼎化身申真人経過。(略)真人近而視之、乃一肉毬、曰此仙胎也。将剣剖毬、得一嬰児。(略)又縁其棄郊之故、而乳名殷郊。(略)于是指帥助武王伐紂、至牧野、率雷震等前鋒顕威、殺商士、前徒倒戈自勠、血流漂杵。(略)玉帝聞有孝義之恩、又有斬妖之勇、遂召勅封地司九天游奕使至徳太歳殺伐威権殷元

帥。

36) 『太平広記』（中華書局・1981年）2878頁。

37) 原文：上元末、復有李氏家、不信太歳、掘之、得一塊肉。相伝云、得太歳者、鞭之数百、当免禍害。李氏鞭九十余、忽然騰上、因失所在。李氏七十二口、死亡略尽。

38) 哪吒太子説話については、拙稿「哪吒太子考」（『道教の歴史と文化』雄山閣出版・1998年）167～196頁参照。

39) 馬書田『中国道教諸神』（団結出版社・1996年）69～71頁。

40) 『宋元平話集』（上海古籍出版社・1990年）411頁。

41) 馬書田『中国仏教諸神』（団結出版社・1994年）213～218頁。

42) 前掲拙稿「哪吒太子考」181～184頁参照。

43) これについては彌永信美『大黒天変相』（法蔵館・2002年）248～251頁を参照。

44) 黄兆漢「粤劇戯神華光是何方神聖」（『中国神仙研究』台湾学生書局・2001年）49～87頁、また呂威『財神信仰』（学苑出版社・1994年）参照。拙稿では「霊官馬元帥華光続考」（『論叢アジアの文化と思想』第5号・1996年・1～16頁）がある。

45) 前掲『絵図三教源流捜神大全』220～221頁。

46) 原文：詳老帥之始終、凡三顕聖焉。原是至妙吉祥化身、如来以其滅焦火鬼墳有傷于慈也、而降之凡。遂以五団火光投胎于馬氏金母。面露三眼、因諱三眼霊光。生下三日能戦、斬東海龍王以除水孽。継以盗紫微大帝金鎗。（略）乃授以金磚三角、変化無辺。遂奉玉帝勅以服風火之神、而風輪火輪之使。（略）又以母故而入地獄、走海蔵、歩霊台、過酆都、入鬼洞、戦哪吒、窃仙桃、敵斉天大聖。釈仏為之解和。（略）玉帝以其功徳斉天地而勅元帥于玄帝部下。

47) 『華光顕聖』劇については、沈徳符が批判する形で言及している。前掲沈徳符『万暦野獲編』694頁参照。

48) 『容与堂本水滸伝』（上海古籍出版社・1988年）555頁。

49) 賈二強『唐宋民間信仰』（福建人民出版社・2003年）367頁。

50) 拙稿「萬福寺伽藍堂の華光菩薩像について」（『黄檗文華』第122号・黄檗山萬福寺文華殿黄檗文化研究所・2003年）120～124頁。

51) 『孤本元明雑劇』（台湾商務印書館・1977年）第九冊所収。

52) 『元曲選外編』（中華書局・1959年）652頁。

53) 馮夢龍『警世通言』（人民文学出版社・1956年）411頁。

54) 原文：話説故宋時杭州普済橋有個宝山院、乃嘉泰中所建、又名華光廟、以奉五顕之神。（略）此五顕、乃五行之佐、最有霊応。或言五顕即五通、此謬言也。紹定初年、丞相鄭清之重修、添造楼房精舎、極其華整。遭元時兵火、道侶流散。（略）左右民居、

亦皆凋落。至正初年、道士募縁修理、香火重興、不在話下。

55) 『大恵静慈妙楽天尊説福徳五聖経』（『正統道蔵』S. N. 1192）、『太上洞玄霊宝五顕霊観華光本行妙経』（『万暦続道蔵』S. N. 1448）

56) 前掲『絵図三教源流捜神大全』65～69頁。

57) 前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』536～561頁。

58) 『幽明録』（魯迅『古小説鉤沈』新芸出版社・1970年）239頁。

59) 前掲賈二強『唐宋民間信仰』339頁。

60) 前掲『絵図三教源流捜神大全』66頁。

61) 原文：自是神降、格有功於国、福祐斯民、無時不顕。先是、廟号止名五通。大観中、始賜廟額曰霊順。宣和年間封両字侯、紹興中加四字侯、乾道年加八字侯。（略）淳熙初封両字公。理宗改封八字王号。第一位顕聡昭応霊格広済王　顕慶協恵昭助夫人　第二位顕明昭列霊護広祐王　顕恵協慶善助夫人　第三位顕正昭順霊衛広恵王　顕済協佑正助夫人　第四位顕直昭佑霊昭広沢王　顕佑協済喜助夫人　第五位顕徳昭利霊助広成王　顕福協愛静助夫人　王祖父啓佑喜応敷沢侯　祖母衍慶助順慈昭夫人　王父広恵慈済方義侯　母崇福慈済慶善夫人　長妹喜応賛恵淑顕夫人　次妹懿順福淑靖顕夫人

62) 『五顕霊観大帝灯儀』（『正統道蔵』洞真部S. N. 206）

63) 元妙宗編『太上助国救民総真秘要』（『正統道蔵』正一部S. N. 1227）

64) 胡文和『四川道教仏教石窟芸術』（四川人民出版社・1994年）201頁。

65) 前掲賈二強『唐宋民間信仰』351頁。

66) 前掲『絵図三教源流捜神大全』223～224頁。

67) 原文：帥姓温、名瓊、字子玉。後漢東甌郡人、今浙江温州是也。（略）幼而神明、七歳学歩天星、十歳通儒経伝。（略）十九歳科第不中、二十六歳明経、射策不中。（略）蒼龍堕珠于前、臥拾而含之、（略）突然幻変、面青髪赤藍身猱猛、（略）泰山府君聞其威猛、召為佐岳之神。（略）受玉帝勅旨、封為亢金大神。又封為翼霊照武将軍兵馬都部署。賜以玉環一握。（略）巨宋熙寧年間、有嗣漢三十六代天師飛清真人張君、始持符召之法、役用岳神、而得位十太保之列、首温太保之名。

68) 趙道一『歴世真仙体道通鑑』（『正統道蔵』洞真部S. N. 296）、同『歴世真仙体道通鑑続編』（『正統道蔵』洞真部S. N. 297）、及び同『歴世真仙体道通鑑後集』（『正統道蔵』洞真部S. N. 298）、また『漢天師世家』（『万暦続道蔵』S. N. 1463）参照。

69) 張虚靖の代位を三十代とすることについては問題がある。詳しくは拙稿「天師張虚靖のイメージについて」（『東洋大学中国学会会報』第7号・2000年）1～12頁を参照。恐らく張乾曜を「三十二代」としたり、この神宗の頃の天師張飛清を「三十六

代」とするのは、本来は何らかの別の伝承に基づくものであったと考えられる。しかし後世、張虚靖を「三十代天師」と定めてしまったために、それらの系譜と齟齬をきたすことになったものであろう。なおこれについては、また別に論じたい。

70) 前掲『絵図三教源流捜神大全』238頁。なお「張元帥」の項目は別に存在するため、ここでは「張真君」という名称になっている。

71) 原文：公姓張、名巡。（略）唐玄宗時進士出身、官拝睢陽令、遭安禄之変。（略）公負孤城、臨機応変、不依古法、前後三百余戦、百戦百克。（略）真古天地一孤忠哉。後唐宋歴封為宝山忠靖景佑福徳真君。

72) ポール・カッツ（康豹Paul R. Katz）「道教与地方信仰：以温元帥為個例」（『台湾宗教研究通訊』蘭台出版社第四期・2002年）10～20頁。

73) 『地祇上将温太保伝』（『正統道蔵』洞神部S. N. 780）

74) 范純武「張純信仰的歴史・祀典封号及其影響」（『台湾宗教研究通訊』蘭台出版社第六期・2004年）229～259頁。

75) 前掲『絵図三教源流捜神大全』245～246頁。

76) 原文：帥有姓孟名山者、仁義孝慈、万古不磨。至今賞人心願者。観其為獄官釈囚一事、足卜其概。（略）帥以残冬思親、動閘門数百之泣。皆切慕親、曰、而独無母乎。無相見也。帥哀其懐膝下想、遂泣与囚約、囚亦泣与帥約、至今冬廿五日而釈、来正初五而還。果不爽一焉。

77) 『四遊記』（華夏出版社・1994年）225～226頁。

78) 前掲『絵図三教源流捜神大全』240頁。

79) 原文：玄帝以方坎離二業、故而辟雲於九天之下、正値帥之勇押山海、乃踏亀蛇、邀帥歩虚以同昇、封為猛烈元帥。分任玄冥之寄矣。

80) 前掲『絵図三教源流捜神大全』233頁。

81) 原文：天帝亦以民之所称者封之曰、仁聖元帥。以掌四方都社令焉。帥乃左執金斧、右執瓜錘、与玉璽相周旋。

82) 『残唐五代史演義伝』（宝文堂書店・1983年）36頁。

83) 前掲『四遊記』227頁。

84) 陳巴黎編著『東嶽廟』（中国書店出版・2002年）21頁。

85) 前掲『絵図三教源流捜神大全』214頁。

86) 原文：帥時任漢廷尉長、案盗主玩器者以臓究、帝欲廷殺之、不聴。案以妄俸侮官儀者以笞殺、帝以齎赦之而不聴。案三老中之臓吏者、台臣以勢請之而不顧。案故友以撓法罷者、賄以幹金而不瞬目。

87) 『後漢書』（中華書局版）1786～1787頁。

88) 趙元帥の由来などについては、呂威『財神信仰』（学苑出版社・1994年）の12～25頁において詳細に分析されており、また馬書田『中国民間諸神』（団結出版社・1997年）204～208においても検討されている。

89) 前掲『絵図三教源流捜神大全』142頁。

90) 原文：姓趙、諱公明、鐘南山人也。自秦時避世山中、精修至道、功行円成、欽奉玉帝旨召為神霄副帥。按元帥乃皓廷霄度天彗覚昏梵気化生、其位在乾、金水合気之象也。其服色、頭戴鉄冠、手執鉄鞭者、金遘水気也。面色黒而鬍鬚者、北気也。跨虎者、金象也。故此、水中金之義、体則為道、用則為法、法則非雷霆無以彰其威。泰華西台其府、乃、元帥之主掌、而帥以金輪称、亦西方金象也。元帥上奉天門之令、策役三界、巡察五方、提点九州、為直殿大将軍、為北極侍御史。昔漢祖天師修煉仙丹、龍神奏帝、請威猛神吏為之守護、由是元帥上奉玉旨、授正一玄壇元帥。正則万邪不干、一則純一不二之職至重。天師飛昇之後、永鎮龍虎名山。厥今三元開壇伝度、其趨善建功謝過之人、頑冥不化者、皆元帥掌之。故有龍虎玄壇、実賞罰之一司。部下有八王猛将者、以応八卦也。有六毒大神者、以応天煞・地煞・年煞・月煞・日煞・時煞也。五方雷神・五方猖兵、以応五行。二十八将、以応二十八宿。天和地合二将、所以象天門地戸之闔闢。水火二営将、所以象春生秋煞之往来。駆雷役電、喚雨呼風、除瘟剪瘧、保病禳災。元帥之功莫大焉。至如訟冤伸抑、公能使之解釈公平、売買求財、公能使之宜利和合。但有公平之事、可以対神祷、無不如意。故上天聖号為高上神霄玉府大都督、五方之巡察使、九州社令都大提点、直殿大将軍、主領雷霆副元帥、北極侍御史、三界大都督、応元昭烈侯、掌士定命設帳使、二十八宿都総管、上清正一玄壇飛虎金輪執法趙元帥。

91) 前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』534～535頁。

92) 前掲『絵図三教源流捜神大全』157頁。

93) 前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』532～533頁。

94) 澤田瑞穂「黒神源流」（『中国の民間信仰』工作舎・1982年）104～116頁。

95) 原文：元帥姓趙、名朗、一名昶、字公明。終南山人。秦時避世山中、精修至道、功行円成、被玉帝旨召為神霄副帥。（以下はほとんど注90と同文）

96) 拙稿「玄天上帝の変容――数種の経典間の相互関係をめぐって――」60～77頁参照。

97) 前掲『絵図三教源流捜神大全』178～179頁。

98) 原文：襄陽洛里、姓王、名悪、字秉誠。父諱臣、早逝、母邵氏、遺胎而生帥于貞観時丙申年七月庚申日申時。帥幼孤不読、有膂力、性剛暴質直、市中有不平者、直与分憂。鋤硬撻横、国人服其公、且憚其武。第多執性、不容人分曲直、故含恩者衆、

而仇之不尽泯焉。（略）遂至荊襄間。有古廟為江怪所占、顕霊本方里、遞年六月六日会主備牛羊豬各十牽、酒十醸、免瘟。否則、人物流血而疫。遞会、貧苦者幾至鬻男女以徇之、悲声盈耳。帥悪而燒之、廟像両燼、怪風大作。適値薩真人托薬救瘟以来、遂作法反風而滅妖、境藉以安。（略）玉帝敕封豁洛王元帥、錫金印如内篆赤心忠良四字、管天下都社令。

99）前掲『絵図三教源流捜神大全』88～89頁。

100）原文：薩真人、名守堅、蜀西河人也。少有済人利物心、嘗学医、誤用薬殺人、遂棄医道。聞江南三十代天師虚静先生及林王二侍宸道法、歩往師之。至陝、行嚢已尽。見三道人来、問堅何所往。堅告以故。道人曰、天師羽化矣。複問王侍宸、曰亦化矣。再問林霊素、曰亦化矣。薩方悵恨、一道人曰、今天師道法亦高、吾与之有旧、当為作字、可往訪之。吾有一法相授、日間可以自給。遂授以咒棗之術。曰咒一棗、可取七文。一日但咒十棗、得七十文、則有一日之資矣。一道人曰、吾亦有一法相授、乃雷法也。真人受辞、用之皆験。一凡咒百余棗、止授七十文為日用、余者複以済貧。及到信州、見天師投信、挙家皆哭、乃虚靖天師親筆也。信中言、吾与王侍宸、林天師遇薩君、各賜一法授之矣。可為参録奏名。真人後法愈大顕。（略）継至湘陰県浮梁、見人用童男童女生祀本処廟神。真人曰、此等邪神、即焚其廟。言訖、雷火飛空、廟立焚矣。（略）真人至龍興府、江辺濯足、見水有神影、方面黄色巾金甲、左手拽袖、右手執鞭。真人曰、爾何神人也。答曰、吾乃湘陰廟神王善、被真人焚吾廟後、今相隨一十二載、只候有過、則複前仇。今真人功行已高、職隷天枢、望保奏以為部将。真人曰、汝兇悪之神、坐吾法中、必損吾法。其神即立誓不敢背盟。真人遂奏帝、収系為将、其応如響。

101）李豊楙『許遜与薩守堅――鄧志謨道教小説研究――』（台湾学生書局・1997年）208～213頁。

102）『捜神広記』が「峡」が峡州であるとすれば、恐らく湖北省宜昌であると思われる。『三教捜神大全』の「陝」は幾つか可能性があるが、河南省陝県、或いは陝西を指すか。しかし『捜神記大全』「蜀中」だとすれば、四川省を出ぬうちに路銀が尽きたことになる。龍虎山に向かったのであるとするなら、やはり『捜神広記』が「峡」とするのが正しいか。

103）前掲李豊楙『許遜与薩守堅』211頁及び216頁。

104）鄧志謨『呪棗記』（『明代小説輯刊』第一輯第四冊・巴蜀書社・1993年）618頁。

105）趙道一『歴世真仙体道通鑑』（『正統道蔵』洞真部S. N. 296）、同『歴世真仙体道通鑑続編』（『正統道蔵』洞真部S. N. 297）、及び同『歴世真仙体道通鑑後集』（『正統道蔵』洞真部S. N. 298）参照。薩真人の伝は『歴世真仙体道通鑑続編』に収録。

106）前掲李豊楙『許遜与薩守堅』212頁。

107）『太上元陽上帝無始天尊説火車王霊官真経』（『万暦続道蔵』S. N. 1443）

108）前掲李豊楙『許遜与薩守堅』223頁。

109）前掲『絵図三教源流捜神大全』181頁。

110）原文：天君姓謝、諱仕栄、字雷行。於貞観初、一輪火光如闘、直射入山東火焔山界。謝恩其父、韓其母也。帥性烈、貌悪、不屈於豪、亦不敗于法。（略）蓋役愈苦而才愈弁、事愈険而功愈奇、赤心烈節、炳于天日。誠不虚玉帝之寵於耳目臣也。宜受職於火徳天君、執金鞭、架火輪、頭頂道冠、以司亢陽之令。

111）前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』133～134頁。

112）『史記』（中華書局版）1368～1369頁。

113）原文：自斉威、宣之時、騶子之徒論著終始五徳之運、及秦帝而斉人奏之、故始皇采用之。而宋毋忌、正伯僑、充尚、羨門高最後皆燕人、為方僊道。

114）前掲『史記』1369頁。

115）原文：索隠案、楽産引老子戒経云、月中仙人宋無忌。白沢図云、火之精曰宋無忌。蓋其人火仙也。

116）前掲『絵図三教源流捜神大全』428頁。

117）原文：神姓宋、名無忌。漢時人也。生有神異、死而為火精。唐牛僧孺立廟祀之、以禳火災。廟在武昌府之城東七里。（略）本朝重建俗云火星堂。今江東各所之火星廟皆其神也。

118）前掲『四遊記』81頁。

119）原文：玉帝聞奏大怒、便差火部元帥宋無忌入朝、帯領天兵三万、火速前往中界収捉華光。宋無忌得旨、即出南天宝徳関、点斉天兵、殺至中界。

120）二郎神については、黄芝崗『中国的水神』（上海文芸出版社・1988年・原1934年発行）が詳しく、また前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』450～462頁において、諸家の説を検討する。

121）前掲『絵図三教源流捜神大全』113頁。

122）原文：清源妙道真君、姓趙、名昱、従道士李珏隠青城山。隋煬帝知其賢、起為嘉州太守。郡左有冷源二河、内有犍為老蛟、春夏為害、其水泛漲、漂淹傷民。昱大怒、時五月間、設舟船七百艘、率甲士千余人、民万余人、夾江鼓噪、声振天地、昱持刃入水。有頃、其水赤、石崖奔、吼如雷。昱右手持刃、左手持蛟首、奮波而出。時有佐昱入水者七人、即七聖是也。公斬蛟、時年二十六歳。隋末天下大乱、棄官隠去、不知所終。後因嘉州江水漲溢、蜀人見青霧中乗白馬引数人鷹犬弾弓猟者、波面而過、乃昱也。民感其徳、立廟於灌江口奉祀焉。俗曰灌口二郎。太宗封為神勇大将軍。明

皇幸蜀、加封赤城王。宋真宗朝、益州大乱、帝遣張乖崖入蜀治之。公詣祠下、求助於神、果克之。奏請於朝、追尊聖号曰清源妙道真君。

123）『孤本元明雑劇』（台湾商務印書館・1977年）第十冊所収。

124）原文：吾神二郎真君是也。俗姓趙、名煜。幼従道士李班、隠青城山、至隋煬帝、知吾神大賢、為嘉州太守。郡有左冷源二河、内有健蛟、春夏為害。吾神持刃入水、斬蛟而出。後棄官学道、白日衝昇。加吾神清源妙道真君。

125）前掲『孤本元明雑劇』第十冊所収。

126）『元曲選外編』（中華書局・1959年）961～970頁。

127）原文：右符、遣清源妙道真君陳昱、崇寧真君関羽、禁将趙旻・関平、如役緊用。

128）前掲『絵図三教源流捜神大全』103～104頁。

129）原文：昔周厲王有三諫官、唐・葛・周也。（略）三官諫曰、先王以仁義守国、以道徳化民。（略）屡諫弗聴、三官棄職、南游於呉、呉王大悦。（略）後知厲王薨、宣王立、復帰周国。（略）三官既昇加封侯号、唐宏、字文明、孚霊侯。葛雍、字文度、威霊侯。周斌、字文剛、浹霊侯。宋祥符元年、真宗東封岱嶽、至天門、忽見三仙自空下。帝敬問之、三仙曰、奏天命護衛玉駕。帝封三仙曰、上元道化真君、中元護正真君、下元定志真君。

130）金允中編『上清霊宝大法』（『正統道蔵』正一部S. N. 1223）

131）前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』689頁。

132）前掲『絵図三教源流捜神大全』118～121頁。

133）廣田律子「中国江西省萍郷市における追儺の仮面劇」（『東アジア比較文化研究』創刊号・2002年）100頁。

134）原文：祠山聖烈真君、姓張、諱渤、字伯奇、武陵龍陽人也。父曰龍陽君、母曰張媼。其父龍陽君与媼游於太湖之陂、正昼無見、風雨晦冥、雲蓋其上、五祥青雲、雷電並起、忽失媼処。俄頃開霽、媼言見天女、謂曰、吾汝祖也。賜以金丹。已而有娠、懐胎十四個月、当西漢神雀三年二月十一日夜半生。長而奇偉、寛仁大度、喜怒不形於色、身長七尺、隆準美髯、髪垂委地、深知水火之道。有神告以地荒僻、不足建家、命行。有神獣前導、形如白馬、其声如牛。遂与夫人李氏東游呉会稽、渡浙江、至苕雲三白鶴山。山有四水、会流其下、公止而居焉。（略）唐天宝中、祷雨感応、初贈水部員外郎、即横山改為祠山。昭宗贈司農少卿、賜金紫。景宗封広徳侯。南唐封為司徒、封広徳公。後晋封広徳王。宋仁宗封霊済王。至寧宗朝、累加至八字王。至理宗淳祐五年、改封正佑聖烈真君。至咸淳二年十二月十二日、準告加封正佑聖烈昭徳昌福真君。

135）前掲『宋元平話集』756頁。

136）前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』466頁。

137）例えば『明史』礼志（中華書局版）1304頁に、「初称十廟。北極真武以三月三日、九月九日、道林真覚普済禅師宝誌以三月十八日、都城隍以八月祭帝王後一日、祠山広恵張王渤以二月十八日、五顕霊順以四月八日、九月二十八日、皆南京太常寺官祭。漢秣陵尉蒋忠烈公子文、晋成陽卞忠貞公壼、宋済陽曹武恵王彬、南唐劉忠粛王仁贍、元国忠粛公福寿倶以四孟朔、歳除、応天府官祭。惟蒋廟又有四月二十六日之祭。功臣廟為十一。後復増四。関公廟、洪武二十七年建於雞籠山之陽、称漢前将軍寿亭侯。嘉靖十年訂其誤、改称漢前将軍漢寿亭侯。以四孟歳暮、応天府官祭、五月十三日、南京太常寺官祭。天妃、永楽七年封為護国庇民妙霊昭応弘仁普済天妃、以正月十五日、三月二十三日、南京太常寺官祭」とある。

138）前掲『絵図三教源流捜神大全』121頁。

139）田中知佐子「建長寺伽藍神像の源流について」（第五十六回日本道教学会大会・2005年・専修大学における発表）からの示唆による。

140）招宝七郎については、H・デュルト「日本禅宗の護法神：大権修利菩薩について」（『印度学仏教学研究』64号・1984年）128～129頁、また佐々木章格「日本曹洞宗と大権修理菩薩」（『曹洞宗宗学研究所紀要』創刊号・1988年）32～45頁、及び中世古祥道「招宝七郎大権修理菩薩について」（『宗学研究』35号・1993年）232～237頁などを参照。

141）前掲『容与堂本水滸伝』1030頁。

142）『元曲選外編』（中華書局・1959年）652頁。

143）天后媽祖については、朱天順『媽祖と中国の民間信仰』（平河出版社・1996年）、林美容『媽祖信仰与漢人社会』（黒龍江人民出版社・2003年）、李露露『媽祖信仰』（学苑出版社・1994年）、徐暁望・陳衍徳『澳門媽祖文化研究』（澳門基金会出版・1998年）など、数多くの研究業績がある。

144）李献璋『媽祖信仰の研究』（泰山文物社・1979年）57～92頁。

145）前掲『絵図三教源流捜神大全』186～187頁。

146）原文：妃姓林、旧在興化路寧海鎮、即莆田県治八十里浜海湄州地也。母陳氏、嘗夢南海観音与以優鉢花、呑之、已而孕。（略）以唐天宝元年三月二十三日誕、誕之日、異香聞里許、経旬不散。（略）五歳能誦観音経。（略）年及笄、誓不適人、即父母亦不敢強其醮。居無何、儼然端座而逝。（略）我国世祖文皇帝七年、中貴人鄭和通西南夷、祷妃廟。（略）遂勅封、護国庇民妙霊昭応弘仁普済天妃。

147）前掲李献璋『媽祖信仰の研究』60頁。

148）前掲朱天順『媽祖と中国の民間信仰』14～15頁。

149）前掲『絵図三教源流捜神大全』432頁。
150）原文：妃莆人、宋都巡検林愿之女。生而神霊、能言人禍福。没後郷人立廟于湄州之嶼。（略）歴代累封至天妃。
151）前掲李献璋『媽祖信仰の研究』66～67頁。
152）前掲李献璋『媽祖信仰の研究』69頁。
153）南州散人『天妃林娘娘伝』（『中国神怪小説体系・怪異巻四・天女地魅伝』遼沈書社等・1992年）5～96頁。
154）前掲『絵図三教源流捜神大全』183～184頁。
155）前掲『絵図三教源流捜神大全』435～436頁。
156）前掲呂宗力・欒保群『中国民間諸神』320～322頁。また林国平・彭文宇『福建民間信仰』（福建人民出版社・1993年）162～180頁など参照。
157）前掲李献璋『媽祖信仰の研究』67頁。
158）前掲李献璋『媽祖信仰の研究』71頁。なお、引用に際しては、旧漢字及び旧仮名遣いを改めている。
159）前掲『絵図三教源流捜神大全』318頁。
160）前掲『絵図三教源流捜神大全』192～193頁。
161）前掲『絵図三教源流捜神大全』197頁。
162）前掲『絵図三教源流捜神大全』202～203頁。
163）前掲『絵図三教源流捜神大全』206頁。
164）前掲『絵図三教源流捜神大全』209頁。
165）前掲『絵図三教源流捜神大全』217～218頁。
166）大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼――仏教・道教・民間信仰』（福武書店・1983年）248頁。
167）前掲『絵図三教源流捜神大全』226頁。
168）葉明生校訂呉乃宇記述『福建寿寧四平傀儡戯華光伝』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・2000年）
169）李懐蓀『湖南省黔陽県湾渓郷的観音醮和辰河木偶戯香山』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1996年）
170）余大喜・劉之凡『江西省南豊県三渓郷石郵村的飛儺』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1996年）
171）蒙国栄『広西省環江県毛南族的還願儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年）
172）胡天成『接龍喪戯――重慶市巴県接龍郷劉家山合作社楊貴馨五天仏教喪葬儀式之調査』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・2000年）
173）曹琳『江蘇省通州市横港郷北店村胡氏上童子儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1995年）
174）茆耕茹『胥河両岸的跳五猖』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1995年）
175）王躍『四川省江北県舒家郷上新村陶宅的漢族祭財神儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1993年）
176）田仲一成『中国巫系演劇研究』（東京大学出版会・1993年）

結語 ——元帥神の起源と変容——

これまで『三教搜神大全』[1]や『道法会元』[2]、また通俗文学の資料を中心に、元帥神について考察した。ここではそれに基づき、元帥神の由来と変容についてまとめてみたい。

まず、元帥神自体は五代から宋にかけて、神霄派や天心派などの発展とともに、道教に流入したものであることは間違いないと思われる。

それでは、こういった元帥という神は何処から来たものか。

六朝から唐代にかけてこれらの元帥神が存在しなかったと考えられることは、すでに見た通りである。元帥神は三目や九目、三頭六臂や四頭八臂といった姿を持つ。また憤怒相である者も多く、多種多彩な武具を携える。もともと中国の伝統的な神は、方相氏や蒼頡といった四目を持つものはあったが、三目のものはほとんど無かった。さらに『道法会元』などには、元帥神に付随するものとして、多量の陀羅尼系の呪文を記載する。

すなわちこれらから、元帥神がインド伝来の密教神の形象の影響を受けたものであることは容易に想像される。特にその形象は、明王や憤怒の菩薩の相の姿を模したものと推察される。しかし一方で、明らかに密教起源であると考えられる神は実は少ない。例えば、馬元帥がそうだと思われるが、この神も密教の影響を受けているだけであり、直接の密教神の流入といえば、むしろ哪吒太子が挙げられる。他の神々の起源は、もっと多様で複雑である。

例えば、鄧天君のような古来の雷神があれば、殷元帥のように星神であったものもあり、また宋元帥のように火の神であったものもある。また関元帥のように、史上の人物が厲鬼として恐れられていたものもあれば、趙元帥のように、六朝道教以来の瘟神が変化したものもある。これらの神々は、形象や性格については、互いに影響を与えながら発展していった。

一応は唐代の密教の流入が、中国の宗教文化に強く作用し、その結果として様々な元からあった信仰から作り出された神が元帥であるとは言えよう。何故元帥が唐代以後に発生したかは、これにより説明可能となる。

ただ、多くの元帥神は、恐らく民間の巫者において作為されたと考えられる。林靈素の時期にむしろ元帥らしき神が重要視されていないのは、すでに見た通りである。初期の天心派経典においても、それほど多くの元帥神は見えていない。

ストリックマン氏が白玉蟾の言を引いて論じているように、南宋における巫者層と道教の関係は一筋縄ではいかないものであったと思われる[3]。

> 巫者の法は、娑坦王に始まる。そしてこれが盤古王に伝わり、再び阿修羅王に伝わる。また維難陀始王・長沙王・頭陀王・閻山九郎・蒙山七郎・横山十郎・趙侯三郎・張趙二郎に伝わったが、この後どうなったかは分からない。むかし巫者の法術には、盤古法なるものがあり、また靈山法なるものがあり、さらに閻山法なるものがあった。しかしその実は一つの法術である。[4]

さらに白玉蟾は、このもっと後の文章において、「瑜珈とは何か」と聴かれて「釈教の遺教である」と答え、その護法の神として、「雄威·華光の二大聖」や「那义太子」「深沙神」などを挙げている。

白玉蟾の見ていた南宋期の宗教界は、恐らくこのような、仏教・道教や民間の巫者の法が様々に混同されて展開していたものであったろう。博学多識の白玉蟾ですら、なおこのような認識なのである。ましてや一般の巫者層にあっては、それが仏教起源であるか、民間信仰起源であるかはどうでもよく、とにかく効き目のありそうな法術を重視したのであろう。「関三郎」や「招宝七郎」にしても、このような民間層において作為せられた神であり、また元帥神も、同様に雑多な要素を組み合わせて作られていったことが推察される。

但し、元帥神は道教に取り入れられた後も、あちこちの流派でまた作為され、いろいろな性格が与えられていったと思われる。白玉蟾が嘆いたように、各派においてはかなり恣意的に法術と神将を結びつけていく傾向があったようだ。この結果、『道法会元』や『法海遺珠』[5]に見えるような、夥しい数の元帥や、将軍·霊官·天君などといった神々が存在することとなった。

これらの元帥は、本来は特定の法術と密接な関係を持つものがほとんどであったが、徐々に主に清微派が中心となって行われた神体系の再構築の中に取り込まれていくことになった。『道法会元』には、その整理される前の体系と、整理された後のものが雑然と混在しているので、その動向を把握することは困難である。

しかし強いて言うなら、『道法会元』前半部においては清微派によってやや整理されたものが目立つ。『法海遺珠』にはそういった傾向が見えない。それが整然と体系化されたものは、むしろ『無上黄籙大斎立成儀』[6]などに見えている。ここで整理された神体系は、今度は逆に道教や民間宗教の祭祀儀礼に大きな影響を与えていったものと考えられる。

現在の台湾で行われている儀礼書に、鄧天君·劉天君·趙元帥·馬元帥·殷元帥などの名が見え、一方で唐·葛·周三将軍や崔·盧·鄧·竇元帥などの名も見えているのは、このことを示すものと考えられる[7]。また四川の道壇の儀礼文書に見える元帥神が、ほぼこれらと一致するのも、実にこの体系がある種の標準になったことを示してもいよう[8]。また民間祭祀の儀礼書にも、これらの元帥神の名は必ずといってよいほど登場する。

そして元から明にかけて、元帥神はまた民間において別途に発展を遂げた。そして、鄧天君や殷元帥や温元帥や馬元帥などには、独自の故事が付加されていくことになった。

『捜神広記』に含まれる関元帥·趙元帥·二郎神の説話がかなり道教の経典類に近いのに対し、『三教捜神大全』で新たに増やされた温元帥·殷元帥·王霊官などの多くの元帥に関する故事は、ほとんど道教経典との関連性が薄い。例えば温元帥の故事が、『地祇上将温太保伝』[9]と『三教捜神大全』では全く異なったものとなっているのは、このような傾向を示すものである。このように新旧の要素が混在しているのが、また『三教捜神大全』の特色である。

さらに『西遊記』や『封神演義』といった通俗文学においては、民間で発展した元帥神の諸相が強く反映されている。例えば、道教経典においては

鄧・張の二元帥は、それぞれ鄧伯温・張元伯という名であるが、『西遊記』では鄧化・張蕃となっている。その故事も、恐らくは民間において独自に発展したものがあったと思われ、多くの戯曲や小説に見える元帥神の故事は、また『三教捜神大全』に見えるものとも異なっている。

また、『道法会元』において非常に多くの元帥神が存在したが、その多くは通俗文学作品においては姿を見せることなく、ごく一部の神格がクローズアップされることになった。すなわち、温・関・馬・趙四大元帥や陶・張・辛・鄧・苟・畢・龐・劉の各天君、さらに王霊官や殷元帥などである。現在多くの道観や廟に祀られる元帥神は、ほとんどはこれらの著名な神格が元になっている。これらの神の幾つかは、関元帥が関聖帝君となり、趙公明がもっぱら財神として扱われるようになるなど、それ以降も変化を遂げていき、民間信仰における主要な神格となった。一方で馬元帥のようにやや信仰の衰えたものもある。

このように、元帥神は元明の道教儀礼文書において固定された体系があり、それが後の儀礼に大きな影響を与えた一方で、民間に独自に発展した体系と、それに付随する故事があり、変容し発展していった。『三教捜神大全』には、ちょうどその変容の中間の過程が反映しており、幾つかの由来不明な元帥神も存在する。

とはいえ、これは極めて単純化して考えたものであり、実際には元帥神の神体系は、もっと複雑な変容と過程を経ている。例えば衰えたはずの元帥神でも、儺戯に見られるように、現在でも一部の地域で信仰が残されているものがある。

そして現在盛んな信仰がある関帝や趙公明や王霊官といった神々は、このような過程を経なければ、いま祀られていることは無かったであろうと推察されるのである。これらの神々が発展したそもそものきっかけは、元帥神として道教で重んじられたことにあった。『道法会元』に見られるように、張虚靖は始め関羽の名を知らなかったのである。それほど無名であった。趙公明にしても、六朝の道教経典に名が見えるものの、元帥神とならなかったら、その存在を知られることは無かったであろう。むろん、一方で元帥神の

大半が、そのように信仰が発展することも無く、廃れていった。元帥神に限らず、現在の道教や民間信仰の神々の多くは、皆そのような変容を経て現在の姿になっていることを常に考えておく必要がある。

注

1）『道法会元』（『正統道蔵』正一部S. N. 1220）
2）『絵図三教源流捜神大全（外二種）』（上海古籍出版社・1990年）
3）ミシェール・ストリックマン、安倍道子訳「宋代の雷儀——神霄運動と道家南宗についての略説——」（『東方宗教』第46号・1975年）22頁、また『海瓊白真人語録』（『正統道蔵』正一部S. N. 1307）による。なお、ストリックマン氏は「娑坦」を「サタン」とする。
4）原文：巫者之法、始於娑坦王、伝之盤古王。再伝於阿修羅王、復伝於維難陀始王・長沙王・頭陀王・閻山九郎・蒙山七郎・横山十郎・趙侯三郎・張趙二郎。此後不知其幾。昔者巫人之法有曰盤古法者、又有曰霊山法者、復有閻山法者。其実一巫法也。
5）『法海遺珠』（『正統道蔵』太平部S. N. 1166）
6）『無上黄籙大斎立成儀』（『正統道蔵』洞玄部S. N. 508）
7）大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼——仏教・道教・民間信仰』（福武書店・1983年）247～248頁。
8）段明編著『四川省江津市李市鎮神霄派壇口科儀本（上）』（『中国伝統科儀本彙編3』新文豊出版公司・1999年）231～232頁。
9）『地祇上将温太保伝』（『正統道蔵』洞神部S. N. 780）

後　記

「現在、また過去において中国において祭祀される神々は、
何処から来たのか」

近年、自分が取り組んでいるテーマを記すと、このようになるのかもしれない。しかし、これは実はとんでもない問題で、調べれば調べるほど分からなくなると言ってよい。

実のところ、いまだに関帝や媽祖の信仰が、何故これだけ特別に発展したか、それすらも分からない。そもそもこれほどメジャーな神々であるにもかかわらず、その起源は曖昧模糊としている。ましてや他の神々については、手探りで調べていくのが精一杯という現状である。いまさらながら、無謀なことをやっている感がある。

ただちょっと弁明をさせてもらうなら、とにかく資料面の困難があることは間違いない。民間の神々については、それを信仰する民衆自体が記録するということはまず無い。いずれにせよ一応文字の書ける者が記録するわけである。しかし識字層の多くは、民間信仰などという低俗なものにはあまり注意しない。このために民間の神々については、まずそもそも資料自体が存在しないという問題がある。

これに比して、道教経典に記される神仙はまだしもであるが、逆にこちらは夥しい記載がありすぎて混乱する。『道法会元』など、いまもって、全くどう扱ってよいか分からない経典である。さらにそういった神々については、時代的・地域的に截然と区別がされているわけでも無い。また現在信仰される神々は、民間出自のものが大半を占めているため、難しい経典にはあまり記載が無い。むしろ白話小説や戯曲といった資料に豊富な記載があるのだ。

幾つかの神々について、『三教捜神大全』などの民間信仰側の資料、また『西遊記』『封神演義』などの通俗文学作品を使って総合的に検討してみようという試み自体は、すでに『中国民間諸神』などでも行われている。小著ではさらに加えて『道法会元』などの道教文献を使用し、元帥神の分析を行っ

た。しかし資料の扱いの困難さと能力の非力さゆえに、十分なものとはなり得なかった。反省材料は多々あるが、一方で、これまで検討されてこなかった幾つかの問題に、幾許かの方向を示せたという点はあると思う。ただ、あくまでその程度であるのは慚愧に耐えない。

またここで些か個人的な事情を記すことをお許しいただきたい。自分は東洋大学の文学部を卒業し、早稲田大学の院を出てより、仙台の東北大学、水戸の茨城大学と職場が異動した。もともと院に入る前も、会社員・プログラマなどをやっており、数年ごとに所属と居住地を変えてきた。経歴からしても、研究者という位置づけというより、ある意味好事家と言った方がよいかもしれない。そのためか、この間一般書の執筆は幾つかあったものの、学術関連の業績はあまり無かった。それまでの職場では雑事及び教育の仕事が中心であり、あまり研究に重きが置かれなかったということもある。

2004年に関西大に移り、近畿大阪に移り住んだ。そして東西学術研究所の研究員に加えて頂き、ようやく研究関連に力を入れてもそれほど怒られない環境となった。それまでに業務の間を縫って、玄天上帝や哪吒太子といった神々を論じた小文を発表してきたが、小著では同様の手法を使って、馬元帥・趙元帥・殷元帥といった元帥という神の信仰について検討してみた。ただそれまでの幾つか発表していた論文についてはほとんど使わず、書き下ろしの形に近い。これをまず東洋大学に学位請求論文として提出した。しかしこの論文においては基本的な説明を欠くことが多く、どこが核心となる部分か、やや分かりにくかった。その後東西学術研究所の、またアジア文化交流研究センター（CSAC）の研究員となり、中国南方の廟を見る機会が増え、さらに京都などの近畿の寺院を見ることも多くなった。馬元帥華光が宇治の萬福寺に存在することを教えて頂いたり、望外の運にも恵まれた。こういった経験を踏まえて、大幅に加筆及び訂正を加え、構成も変えて、「元帥神」を中心として新たに組み立てたのがこの小著である。なお第一章については、ほぼ同内容のものを中国語に訳した上で、2004年に台湾台北の中央研究院において開催された「聖伝与詩禅・学術研討会」で発表している。

小著は一応学術書に類するものと思われるが、学術書らしき体裁については、なるべくこれを避けたつもりである。実は海外を訪問するたびに、日本の学術書のあまりの高額さに、そもそも購入を控えてしまうという話をたびたび耳にする。そのため、小著ではなるべく安価たることを目指した。索引が無いことについてはお詫びせねばならないが、これは固有名詞だけでも膨大な量になるためである。ただこれについては、なるべく早い時期にダウンロード可能な電子的なツールを作成して代替するつもりである。

また引用文献はほぼすべて拙い訳を載せた。これは一般読者の方にもなるべく理解していただくためである。そもそも小著は、現在の学界ではあまり役に立たぬものであり、好事家の方が参考にすることが多いと予想する。むろん原文は注に載せているので、そちらを参考にしていただけばありがたい。

小著が成るまでには、関西大学文学部中国語中国学専修の吾妻重二先生をはじめとする先生方、また東西学術研究所CSACセンター長の松浦章先生をはじめとする先生方には、多くのご迷惑をおかけし、ご助力を賜った。特に東西学術研究所長の橋本征治先生には序文を賜ることになり、感謝の至りである。さらに前所長の藤善眞澄先生から、七郎神についての貴重な示唆を頂いた。また研究所事務室の田中文子氏、遊文舎の西澤直哉氏には多大なるご協力を頂いた。なお、小著中にすべては引用できなかったが、多くの方にいつも暖かいご指導を頂いていることを改めて感謝したい。特に道教文化研究会の先生方、真言宗豊山派現代教化研究所の田中文雄先生、東京成徳大学の増尾伸一郎先生、元皇學館大学の故前田繁樹先生、筑波大学の丸山宏先生、筑波大学の松本浩一先生、國學院大学の浅野春二先生、専修大学の土屋昌明先生、茨城キリスト教大学の志賀市子先生、東京大学の横手裕先生、早稲田大学の森由利亜先生などの長年にわたるご指導に感謝したい。また、中国古典小説研究会の先生方、京都大学人文科学研究所の金文京先生、埼玉大学の大塚秀高先生、神奈川大学の鈴木陽一先生、早稲田大学の岡崎由美先生に感謝したい。さらに大学院にてご指導いただいた早稲田大学の福井文雅先生、小林正美先生、学位論文を審査いただいた東洋大学の吉田公平先生、山田利明先生、竹内清己先生、台湾留学中にお世話になった台湾中央研究院の李豊楙先生、玄奘大学の王秋桂先生、成功大学の丁煌先生、清華大学の胡萬川先

生、輔仁大学の鄭志明先生、ご著書を快くお譲りくださった李遠国先生、萬福寺に華光が存在することを教えてくださった黄檗宗の田中智誠先生などの諸先生方にも、この場を借りてお礼を申し上げたい。

関西大学文学部にて、二階堂 善弘　2006年７月

関西大学東西学術研究所研究叢刊27

道教・民間信仰における元帥神の変容

平成18年10月１日　発行

著　者　関西大学東西学術研究所研究員
二階堂　善弘

発行者　関西大学東西学術研究所
〒564-8680
吹田市山手町３丁目３番35号

発行所　関西大学出版部
〒564-8680
吹田市山手町３丁目３番35号

印刷所　株式会社　遊文舎
〒532-0012
大阪市淀川区木川東４丁目17番31号

©2006　NIKAIDO Yoshihiro　Printed in Japan

ISBN4-87354-435-1 C3014

落丁・乱丁はお取替えいたします